

平成22年度文部科学省・独立行政法人国際協力機構(JICA)・国立大学法人筑波大学

# 平成22年度青年海外協力隊等派遣現職教員 特別研修・帰国報告会

## 報告書

共催  
文部科学省・  
独立行政法人国際協力機構(JICA)・  
国立大学法人筑波大学

平成22年12月26日-27日  
JICA研究所

平成23年3月

筑波大学教育開発国際協力研究センター (CRICED)

平成 22 年度青年海外協力隊等派遣現職教員

特別研修・帰国報告会

－国際協力と帰国後の社会貢献－

報告書

共催

文部科学省・

独立行政法人国際協力機構(JICA)

国立大学法人筑波大学

平成 22 年 12 月 26 日－27 日

JICA 研究所

平成 23 年 3 月

筑波大学教育開発国際協力研究センター (CRICED)

# 平成 22 年度青年海外協力隊等派遣現職教員特別研修・帰国報告会報告書

## 目次

### 平成 22 年度青年海外協力隊派遣現職教員帰国報告会

#### 主催者挨拶

##### 開会挨拶

佐藤真理子（筑波大学 教育開発国際協力研究センター センター長）…………… 3

##### 文部科学省挨拶

高木義明（文部科学大臣）…………… 5

##### 現職教員に期待すること

伊藤隆文（JICA 青年海外協力隊事務局長）…………… 7

#### プログラム 1

##### 国際理解教育～ヒト・モノ・コトを通じた国際理解と交流～

手嶋将博（文教大学 教育学部 准教授）…………… 11

#### プログラム 3

##### 海外ボランティア経験教員の還元・貢献～その取組と可能性

佐藤真久（東京都市大学 環境情報学部 准教授）…………… 23

#### プログラム 4 : 帰国報告

##### ニカラグアから学んだこと

有村健二（平成 20 年度 1 次隊 小学校教諭 ニカラグア）…………… 31

##### 友情の架け橋 ～情操教育を通して～

高橋由美（平成 20 年度 1 次隊 小学校教諭 ベリーズ）…………… 43

##### ストーンマナーの島で

山川和宏（平成 20 年度 1 次隊 小学校教諭 ミクロネシア）…………… 53

##### 地域と世界をつなぐ～七夕をもっと広めよう～

清水大格（平成 15 年度 1 次隊 小学校教諭 ベトナム）…………… 71

##### 算数プロジェクト「GUATEMATICA（グアテマティカ）」

野口美紀子（平成 20 年度 1 次隊 小学校教諭 グアテマラ）…………… 95

##### 東アフリカの特別支援学級での実践 ～環境条件に応じた支援を探して～

阪本真樹子（平成 20 年度 1 次隊 養護 ケニア）…………… 111

##### 実験を取り入れた授業の工夫

金林安恵（平成 20 年度 1 次隊 理数科教師 インドネシア）…………… 125

##### 「グローバル社会で生きていく“日本人”の育成」

清野真輝（平成 18 年度 1 次隊 小学校教諭 ドミニカ共和国）…………… 139

プロジェクト X ～ケニヤン生徒と泣き虫ケニヤイチロー先生～	
黒明堅一郎（平成 20 年度 1 次隊 青少年活動 ケニア）	…………… 147
ベナンの風に吹かれて	
山崎有美（平成 20 年度 1 次隊 青少年活動 ベナン）	…………… 161
南の島の養護学校	
村松渚（平成 20 年度 1 次隊 養護 フィジー）	…………… 175
派遣経験を教育現場や地域にどういかすのか	
生田佳澄（平成 14 年度 1 次隊 小学校教諭 ホンジュラス）	…………… 201
国立公園と市民をつないだ 2 年間	
建元喜寿（平成 20 年度 1 次隊 環境教育 インドネシア）	…………… 215
エチオピアで学んだこと	
坂下幹弘（平成 20 年度 1 次隊 PC インストラクター エチオピア）	…………… 233
エルサルバドルにおける「ものづくり」教育の現状	
中村晋太郎（平成 20 年度 1 次隊 コンピューター技術 エルサルバドル）	…………… 247
協力隊経験を生かした国際理解教育実践例	
小澤明子（平成 15 年度 1 次隊 音楽 パラグアイ）	…………… 257
<b>平成 22 年度青年海外協力隊等派遣現職教員特別研修</b>	
プログラム 6	
JICA の教育協力と JOCV の現地活動の連携	
佐久間潤（JICA 人間開発部次長兼基礎教育グループ長）	…………… 269
プログラム 7	
派遣現職教員支援事業の活動事例・国際協力イニシアティブアーカイブス	
磯田正美（筑波大学 教育開発国際協力研究センター 准教授）	…………… 277
プログラム 8	
ユネスコスクール・持続可能な発展のための教育(ESD)について	
浅井孝司（文部科学省 大臣官房国際課 国際協力政策室長）	…………… 285
プログラム 9	
派遣は 2 年。教師は一生。帰国後いかに活かすか	
丸山一則（豊岡市立港中学校 校長）	…………… 293
閉会挨拶	
磯田正美（筑波大学 教育開発国際協力研究センター 准教授）	…………… 307

## 12月26日(日)平成22年度青年海外協力隊派遣現職教員帰国報告会

	11:30~12:00	受付			
	12:00~12:05 会場 (国際会議場)	開会挨拶 (筑波大学 教育開発国際協力研究センター センター長 佐藤 真理子)			
	12:05~12:15 会場 (国際会議場)	現職教員特別参加制度の意義 (文部科学大臣 高木 義明)			
	12:15~12:25 会場 (国際会議場)	現職教員に期待すること (JICA 青年海外協力隊事務局長 伊藤 隆文)			
	12:25~12:35 会場 (国際会議場)	筑波大学による派遣現職教員のサポート(含むサポートホームページ紹介) (筑波大学 教育開発国際協力研究センター 技術職員 一瀬 小夜)			
	12:35~12:45 会場 (国際会議場)	研修プログラムの説明 (筑波大学 教育開発国際協力研究センター 技術職員 一瀬 小夜)			
プログラム1	12:45~13:30 会場 (国際会議場)	「国際理解教育～ヒト・モノ・コトを通じた国際理解と交流～」 (文教大学 教育学部 准教授 手嶋 将博)			
プログラム2	13:30~13:40 会場 (国際会議場)	DVD上映 「世界に飛び出すみんなの先生」			
プログラム3	13:40~14:10 会場 (国際会議場)	「海外ボランティア経験教員の還元・貢献～その取組と可能性」 (東京都市大学 環境情報学部 准教授 佐藤 真久)			
プログラム4	帰国報告	分科会1 会場 (国際会議場)	分科会2 会場 (201AB)	分科会3 会場 (202AB)	分科会4 会場 (大会議室)
	14:20 ~14:45	有村 健二 平成20年度1次隊 小学校教諭 ニカラグア	野口 美紀子 平成20年度1次隊 小学校教諭 グアテマラ	黒明 堅一郎 平成20年度1次隊 青少年活動 ケニア	建元 喜寿 平成20年度1次隊 環境教育 インドネシア
	14:45 ~14:50	Q&A			
	14:55~15:20	高橋 由美 平成20年度1次隊 小学校教諭 ベリーズ	阪本 真樹子 平成20年度1次隊 養護 ケニア	山崎 有美 平成20年度1次隊 青少年活動 ベナン	坂下 幹弘 平成20年度1次隊 PCインストラクター エチオピア
	15:20~15:25	Q&A			
	15:30~15:55	山川 和宏 平成20年度1次隊 小学校教諭 ミクロネシア	金林 安恵 平成20年度1次隊 理科教師 インドネシア	村松 渚 平成20年度1次隊 養護 フィジー	中村 晋太郎 平成20年度1次隊 コンピューター技術 エルサルバドル
	15:55~16:00	Q&A			
	16:05~16:30	清水 大格 平成15年度1次隊 小学校教諭 ベトナム	清野 真輝 平成18年度1次隊 小学校教諭 ドミニカ共和国	生田 佳澄 平成14年度1次隊 小学校教諭 ホンジュラス	小澤 明子 平成15年度1次隊 音楽 パラグアイ
	16:30~16:35	Q&A			
プログラム5	16:40~17:40 会場 (各分科会会場)	派遣前教員と帰国教員の座談会(4グループ×4部屋)			
	17:45~17:55 会場 (国際会議場)	集合写真撮影			
	18:00~19:00 会場 (600号研修室)	懇親会			

## 12月27日(月)平成22年度青年海外協力隊等派遣現職教員特別研修

	09:00~09:30	受付			
プログラム6	9:30~10:00 会場 (国際会議場)	JICAの教育協力とJOCVの現地活動の連携 (JICA人間開発部次長兼基礎教育グループ長 佐久間 潤)			
プログラム7	10:20~11:05 会場 (国際会議場)	派遣現職教員支援事業の活動事例(インターネットライブ授業、マーシャルでの授業研究) 国際協力イニシアティブアーカイブス:派遣中に役立つコンテンツの紹介 (筑波大学 教育開発国際協力研究センター 准教授 磯田 正美・技術職員 一瀬 小夜)			
プログラム8	11:05~11:25 会場 (国際会議場)	情報提供(ユネスコスクール・持続可能な発展のための教育(ESD)について) (文部科学省 大臣官房国際課 国際協力政策室長 浅井 孝司)			
プログラム9	11:25~11:55 会場 (国際会議場)	「派遣は2年。教師は一生。帰国後いかに活かすか」 (豊岡市立港中学校 校長 丸山一則)			
	11:55~12:00 会場 (国際会議場)	閉会挨拶 (筑波大学 教育開発国際協力研究センター 准教授 磯田 正美)			

開 會 挨 拶

## 開会挨拶

佐藤真理子

(筑波大学 教育開発国際協力研究センター センター長)

---

本日はお忙しい中、文部科学省、国際協力機構、それから筑波大学主催の平成 22 年度青年海外協力隊派遣現職教員帰国報告会にご参加いただきまして、大変有難うございました。ただいま紹介に与かりました、筑波大学教育開発国際協力研究センターのセンター長、佐藤真理子でございます。

わたくしごとではありますけれども、私の研究テーマは、開発途上国に対する教育開発援助でございまして、これまで調査研究にインドネシア・フィリピン・バングラデシュ・エチオピア等、様々な国に行つてまいりました。それぞれの国に、現職派遣の先生方ではないんですけれども、青年海外協力隊の隊員の方々に会いまして、彼らが困難な生活環境・まったく異なる文化・異なる言語の中でたくましくボランティア活動を行っていることに大変感銘を受けてまいりました。

先進国の青年が途上国に行つてボランティア活動を行うという制度は、1960 年にアメリカでケネディ大統領が始めた「平和部隊」に遡ることが出来ます。この制度に範をとつて、ドイツ・フランス・イギリス・それからスウェーデンと、様々な先進国で実施され、多くの先進国の青年が途上国で活発にボランティア活動しております。日本の青年海外協力隊も、昭和 45 年に発足し、平成 21 年度までに約 33000 名の隊員が派遣され、日本国内・国際的に高く評価されています。その中でも、高い専門性を持つ現職の先生方が派遣される現職教員派遣制度は、どの先進国にもない日本独自の制度です。この制度は平成 13 年度に制定され、平成 21 年度まで、約 400 名の現職教員の先生方が派遣されております。本報告会にご参加の方々は、アフリカ・太平洋諸国・中南米・南アジアと多彩な国で御活躍された先生方の活動、それを支える大学のサポート活動、帰国隊員の還元活動等を発表、それから講演を通して派遣現職教員制度の全体像を実感することとなると思います。現職教員派遣制度は、途上国の教員に限らず、その背景となる文化・社会・経済・言語といった環境を通して教育への理解・洞察のみならず、自己啓発につながる貴重な機会を現職教員の先生方に与えている、ということを確認しております。現職の先生方は、帰国後に国際交流会の講師をなさったり、学校学級で壁新聞を作成したり、途上国の衣装・食事などの展示会をしたり、また日本の児童と途上国の児童生徒との文通を始めたりと、さまざまに活動していらっしゃいます。そして国際的センスを持った人材活動に、日本の教育現場に還元なさっております。

今日、日本では内向きの子どもたちが増えているという中、先生方の活動が道を開くと確認しております。今後とも、できるだけ多くの現職の先生方がこの制度を利用して活躍し、日本と途上国のかけ橋、ひいては日本の子ども達・途上国の子ども達との懸け橋とな

ることを願っております。

短い挨拶ではございますが、以上をもちまして開会の挨拶とさせていただきます。



## 文部科学省挨拶

高木義明  
(文部科学大臣)

---

平成 22 年度青年海外協力隊等派遣現職教員特別研修・帰国報告会の開会にあたり、文部科学省を代表してご挨拶を申し上げます。

青年海外協力隊は見ず知らずの土地で、見ず知らずの人達と生活を共にし、その国の人々のために国際協力活動に従事する、「顔の見える支援」として高く評価されています。国とは人であり、個々人の活動の総体が国の勢いを表すことから、この国を元気にしていくために、一人でも多くの方々に世界に飛び出して行って頂きたいと思います。

私も、『日本の国際協力―特に青年海外協力隊の活動―を支援する国会議員の会』の会長として、青年海外協力隊に注目しており、最近、若者の内向き志向が指摘される中で、こうした現状を変えていくための素晴らしい仕組みとして、推進に努めております。

本年 6 月には、『内閣総理大臣主催 青年海外協力隊帰国隊員による報告会』が、総理官邸で開催されました。菅総理大臣、仙谷官房長官、岡田外務大臣に私も参加して、帰国された隊員約 150 名の方々から体験談をお聞きしました。

報告会では、モザンビークに赴任された教員の方から、「理数科教師として派遣されたが、物がなくて苦勞した。しかし、ペットボトルや空き瓶など身近にあるもので工夫しながら活動を軌道にのせていった」と報告があり、言葉だけでなく、文化や風習も違う厳しい環境の中で様々な苦勞をされた様子が伺えました。同時に、話し方や表情から、自ら困難の中に飛び込み、それらを乗り越えてきた達成感と自信が感じられ、大変頼もしく、また嬉しい思いでお話を伺いました。

文部科学省と致しましては、青年海外協力隊の中でもとりわけ現職教員特別参加制度に期待を込めております。

教員の方々が開発途上国において、現地の方々と生活を共にしながら様々な障壁を克服することを通じて、問題への対処能力や指導力など教員としての資質能力を向上させることにつながるものと期待しています。教員の方々は、帰国後子ども達を教育する立場に戻られます。開発途上国での異文化体験、外国語能力を日本の教育現場で活用することで、一人の経験が何十倍にも、何百倍にも広がっていくことが期待できるからです。

これから派遣される皆様におかれましては、本日披露される先輩方の取組事例や活動経験、組織的支援体制についてご理解頂き、これらを活用して各国の現場で積極的に活動して頂き、大きな成果を上げて頂くことを期待しております。

また、帰国された皆様におかれましては、開発途上国での活動の成果を教育現場で一層ご活用頂くとともに、ご自身の貴重な経験を一人でも多くの子ども達に伝えて頂くことを期待しております。

現在、文部科学省では、JICA・各都道府県教育委員会・大学などと協力して、教員の開発途上国での経験を日本の教育現場で一層活用していくための組織的支援体制の充実に努めているところです。今後も、情報提供やネットワークづくりにご協力を頂きますようよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、本会の実施に当たり多大なご支援を頂きました独立行政法人国際協力機構、開催にご尽力を頂いた国立大学法人筑波大学の方々に対して、深く感謝申し上げます。ここにお集まりの皆さま方のますますのご健勝とご活躍を祈念致しまして、私の挨拶とさせていただきます。

(文部科学省 大臣官房国際課長 池原充洋 代読)

## 現職教員に期待すること

伊藤隆文

(JICA 青年海外協力隊事務局長)

---

みなさんこんにちは。今ご紹介いただきました、JICAの青年海外協力隊事務局長をしております、伊藤でございます。本日ここにお集まりの平成23年度派遣青年海外協力隊78名、それから日系社会青年ボランティア6名、合計84名のみなさん。来年の4月上旬から、駒ヶ根・二本松の両訓練所、それから横浜国際センターにおいての派遣前の訓練・研修を受けていただくわけですが、それに先立ちまして、この特別研修の場を設定していただきました。この会合の設定にご尽力いただきました、文部科学省、それから筑波大学の方々に心から感謝を申し上げたいと思います。今年は、前回、非常に好評でありましたので、平成20年度1次隊で派遣されまして、今年の3月末に帰国された先輩の隊員のみなさまを中心としました報告会を同時に開催することにいたしました。これによって、先輩の経験が後輩の皆さまにきちんと受け継がれていくことを期待している次第であります。

先ほど筑波大学の佐藤先生からもお話をいただきましたけれど、青年海外協力隊は、1965年（昭和40年）に始まりまして、これまでに現在派遣中の数を含めると、35000人を超える隊員を派遣してきました。そして、現時点でも、約2600名の隊員が75カ国で活躍中であります。一方、日系社会青年ボランティアは、南米の日本人移住地を支援します、海外開発青年という制度を移しまして、1985年（昭和60年）に発足した制度でございます。その後、1996年（平成8年）のころに名称と内容を現在のものに変更致しまして、実施し続けております。

これまでに約1000名を派遣いたしまして、現時点では6つの国に79名を派遣中でございます。JICAのボランティア事業には、これ以外にシニア海外ボランティア、それから日系社会シニアボランティアがございまして、4つの制度を合わせると現時点で3400人を超える方々が世界77カ国で活躍をしておられます。現職教員の特別参加制度は2002年から開始されまして、この制度が始まる以前にも650名を超える現職教員の方が青年海外協力隊に参加された実績がございまして、けれども協力隊の場合、訓練も含めて2年3カ月という参加期間がありまして、学校の先生の場合には学年の変わり目に日本に非常重要なことであるという事で、この2年3カ月にすると現職での参加が難しいとのことで、派遣期間を1年9カ月ということにいたしまして、トータルで2年間の制度としたものでございます。この制度を作りまして以降、この9年間に約600名以上の教員の方々が派遣され、現在152名が50カ国で活躍中でございます。一昨年度からは、日系社会青年ボランティアの方にもこの現職教員の特別参加制度が拡充されまして、現在18名のボランティア

の方が、ブラジルを中心として、小学校教員として派遣中でございます。

JICA のボランティア事業には3つの目的がございます。1つは、開発途上国の経済・社会の発展に貢献するという目的でございます。それから2つ目は、開発途上国と日本との友好親善と相互理解を促進すること。それから3つ目が、ボランティアの経験を日本の社会に還元すること。この3つ目の、日本社会への還元。これが非常に重要な部分で、国の事業として国民の税金で賄われている理由がそこにあるといっても過言ではないと思います。教員のみなさんは、この社会還元という面でとても有利な立場にあると思います。つまり、帰国後再び教壇に立って子どもたちに自らの経験を語ることによって、日々の仕事の中で社会還元をすることになります。これは、ほかの職業にない大きなメリットだと思います。

我々JICA としましては、もっとたくさんの学校の先生方に、JICA のボランティアとして海外に出ていただきたいと考えています。また近年、日本の社会も変化致しまして、多くの外国人労働者が日本の経済を支える構造になってきております。その数は200万人とも言われております。そして、その子どもたちである外国籍の児童、これが7万人も、日本の公立の学校に就学しているとのこと。おそらく、ここにおられるみなさんが教壇に立っておられる学校でも、外国籍の子ども達が多かれ少なかれ在籍するのではないかと思います。まさに、日本の社会が異文化と共生する社会になってきたというふうに言えるかと思えます。

こういう状況において、豊富な海外経験を持ち、また異文化に対する深い理解を持ち、言葉を含めたコミュニケーション能力に長けた人材、こういうものを教育現場が必要としているのではないかと考えております。ここにおられるみなさんが、訓練も含めて2年間、協力隊員、あるいは日系青年ボランティアとしてチャレンジされれば、必ずこうした期待される人材になるものというふうに確信します。

これから出発されるみなさんには、どうか頑張っていたきたいと思えますし、昨年帰ってこられたみなさんは、すでにこうした人材として教育現場で活躍されているものと考えております。また、JICA としまして、「日本を元気にする JICA 海外ボランティア」というふうに銘打ちまして、日本の社会の中でボランティアの経験を生かして、地域の活性化や町おこし、村おこしに取り組んでいる協力隊の OB、OG、あるいはみなさんのように実際の教育現場で頑張っている協力隊の OB、OG を、積極的に取り上げて、「世の中にこういうふうに頑張っている人がいます」と発信することに取り組んでいます。帰国されたみなさんには、ご自身も含めて頑張っている仲間の情報を、JICA に提供していただきたいと思えます。

この特別研修の目的のひとつは、これから派遣されるみなさんに対する、支援のプログラムを紹介することです。筑波大学をはじめとする多くの大学による充実した支援体制が組まれております。協力隊のほかの職種では、これほど充実した支援の体制は見られないと言ってもいいと思えます。どうかこの厚い支援の体制を活用していただきたいと

いうふうに思います。JICA のボランティア事業は、ボランティア本人が主体であって、我々 JICA はこれをサポートさせていただくものであります。現地の活動の場面では、日本では想像できないような困難や苦労があるかもしれませんが、迷ったらぜひハードルの高い方にチャレンジするという精神で、頑張ってくださいと思います。

今日明日の二日間のこの研修が、みなさんにとって有意義なものになることを期待して、私からの御挨拶にさせていただきますと思います。有難うございました。

# プログラム 1

## 国際理解教育

～ヒト・モノ・コトを通じた国際理解と交流～

手嶋將博

(文教大学 教育学部 准教授)

平成22年12月26日 青年海外協力隊等  
派遣現職教員特別研修・帰国報告会

## 国際理解教育概論

～ヒト・モノ・コトを通じた国際理解と交流～

手嶋 将博  
(文教大学教育学部)

1

## I. 共に生きる教育

2

### I. 「共に生きる教育」とは？

#### 1. 「共に生きること」の意味

「共生」とは？・・・人間同士のかかわり、人間の生き方、あるいは人間と環境のあるべき姿を示す言葉。

例:「障がい者と健常者」「民族共生」「男女」「若年者と高齢者」など。

現実の力関係をそのままにして、「ただ仲良くすること」だけを強調すると、結果的に差別を助長したり、人権侵害を隠蔽したりするといった問題を孕んでいる。

⇒対等な立場の「共生」ではなく、単なる「受容」(強者が弱者に「手を差し伸べている」状態)に陥りやすい。

3

#### 1. 「共に生きること」の意味

- 「共生」の基本・・・「自己を知ることから始まり、自己と他者の関係を築くという対話的課程」  
(ユネスコ21世紀教育国際委員会『学習:秘められた宝』より)
- 共生を実現するための二つの提案
  - ①「他者を発見すること」(自己を知り、他者を知る  
⇒他者との共感性の発達)
  - ②「共通目標のための共同作業」(スポーツ、文化活動、地域活動、奉仕活動など)
- 日常的な教育活動において、共同で課題を解決していくことで実現化。

4

### 2. 「共生」を柱にした教育とは？

(1)「共生」の3つの柱

- ①「自分との共生」...個性を含めた、あるがままの自分を受け入れること(自己肯定感)。
- ②「他者との共生」...自分と他者のつながりを作ること(身近なレベルで異なった背景を持つ人々との交流によって可能)。
- ③「環境との共生」...さまざまな「違い」を超えた相互理解によって、新しい価値を基盤にした生活環境を作り上げていくこと(自然との「共生」も含む)。

5

### 2. 「共生」を柱にした教育とは？

\*「共生を柱にした教育」=自己との共生を基盤にして、他者と関わりつつ、自分の生活を認め、より良い環境を共に作り上げていくこと。

↓  
その具体的な手法として

1. 自分と向き合う
  2. 他者への共感的理解
  3. 生活を振り返る
- といった学習が求められる。

6



### 3. 「共生する力」をどう育てるか？

\* 単なる「スキル(技能)の習得」では育たない。

- ① 批判的思考力
- ② 知を構成する力
- ③ 人とかかわる力
- ④ 違いを認め、受容する力
- ⑤ 他者への想いと想像力

7

### 4. 「共生」のための実践の視点

\* 教師の実践への振り返り…既成の枠組みの中で子どもたちをとらえてしまうことへの疑問。

↓

- ① 「人とかかわり」…地域の人々、身近な友達、障害者などとの関係を中心にすえる。
- ② 「違い」をきちんと説明できるように新たな単元や教材を開発。
- ③ 外国籍の子ども一人ひとりの背景を生かす。  
☆教師同士の協働…個々の力ではなく、地域の教員同士、ボランティアなどの協力体制での実践。

8

## Ⅱ. 国際理解教育の概要

9

国際連合教育科学文化機関(ユネスコ)  
(United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization)

- 教育や文化の振興を通じて、戦争の悲劇を繰り返さないとの理念から、設立を定めた  
ユネスコ憲章の前文には、  
「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」  
との文言があり、ユネスコ設立の目的とその精神を顕著に表している。

10

### ユネスコ・1974年第18回総会

「国際理解、国際協力及び国際平和のための教育、並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告」

の採択。7項目の指導原則を提示。

11

### 指導原則・7項目の内容

1. 国際的側面と世界的視点に立つ教育。
2. 全ての民族、文化、文明、価値及び生活様式(多文化教育)に対する理解と尊重。
3. 諸民族及び諸国民の間に世界的な相互依存関係が増大していることへの理解。
4. 他の人々と交信する能力(特に情報発信能力)。
5. 権利と相互に負うべき義務が、個人、社会集団、国家それぞれにあることへの認識。
6. 国際的な連帯と協力についての理解。
7. 一人ひとりが自分の属する社会、国家および世界全体の諸問題の解決に参加する用意を持つこと。

12

## 国際理解教育の主な内容

(The main contents of international understanding education)

1. 異文化理解 (Inter-cultural understanding)
2. 自文化理解 (Self-culture understanding)
3. コミュニケーション能力 (Communication ability)
4. 国際交流・協調  
(International exchange and cooperation)
5. グローバル教育 (Global education)
6. 人権教育 (Human-rights education)

13

## 1. 異文化理解 (Inter-cultural understanding)

■国際理解教育の代表的な「3F」(文化的特徴が表れやすいため、現場での実践が多い学習)。

◎Fashion(衣)・Food(食)・Festival(祭祀)

■「自分たちと異なるもの(文化／宗教／習慣など)」に対する正しい理解と寛容(tolerance)の態度／実践を身に付ける。

■日本のように「食文化」に関わらせる異文化理解学習ができることは、非常に貴重な体験学習である。

■ステレオタイプな知識の詰め込みになり易いので、気をつける必要がある。

14

## 2. 自文化理解 (Self-culture understanding)

- 自分たちの国や郷土／地域の文化的特徴について正しく理解する。
- 体験的学習などを通して、その知識／情報を、正しく伝えられるようになる。
- 広くとらえれば、現代社会の中で起きる様々な出来事全てを題材にできる。→広く社会を見る視点や思考力を養うことができる。
- エスノセントリズム(ethnocentrism:自民族中心主義)に陥らないよう注意する必要がある。

15

## 3. コミュニケーション能力 (Communication ability)

- 自分の考えをまとめ、的確に相手に伝えることができる能力。
- 言語活動が含まれるため、国際理解＝英語教育や外国語教育そのものと混同されやすい(目的と方法の混同)。
- 読解力、論述力、表現力などに関する能力が大きな位置を占める(その育成には、国語、算数、実技教科などが全て関係)。

16

## 4. 国際交流・協調 (International exchange and cooperation)

- 短期／長期の留学や国際的な学校間の交流、あるいは同じ地域に住む外国人との交流などを通して異文化を体験、交流をして行く実践(前記1～3の能力が全て含まれる総合的実践ともいえる)。
- ネット社会の進歩で海外など遠い国や地域との交流も容易になって来ている。
- 世界で起きている様々なことを学び、「共生」の思想、相互依存、国際協力、国際援助などについて正しく知り、考え、行動できる力を身につける(環境教育、情報教育、健康・福祉教育、平和教育、人権教育等とも関連付けられる)。

17

## 5. グローバル教育 (Global education)

- いわゆる「地球市民(global citizen)」としての素養／意識を高めるための学習。
- 異文化を理解・尊重し、共生できるための知識、技能・能力、価値観、態度を持ち、現代社会の諸問題(環境・人権・平和・開発など)を平和的・民主的に解決できる人間の育成(平田(大分大学):2004年「21世紀を生き抜く市民性教育」の定義より)。
- 地域(local)、国家(national)、地球(global)などといった各レベルで意思決定し行動できる人間の育成。
- 前出1～4. をさらに知識／実践レベルで深め、推し進めて行くことで学習を進められる。

18

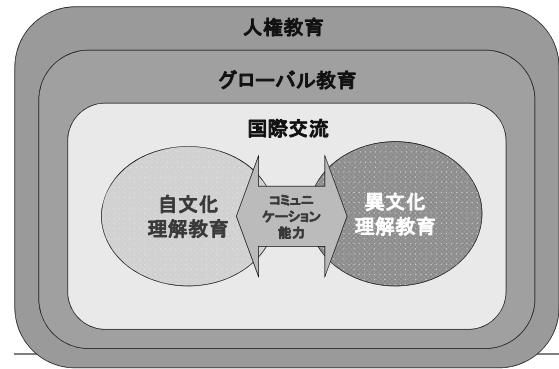
## 6. 人権教育

### (Human-rights education)

- 「人権」に関わる正しい理解と実践の学習。
- 国際レベルでの学習はもちろん、国内、あるいは日常的なレベルでも関わりが深い。
- 扱いに十分な配慮が必要な場合も多く、学校現場で学習するには難しいケースもあるため、これまで国際理解教育の中で扱われることが少なかった分野のひとつ。
- いじめ問題や差別、青少年犯罪などとの関わりもある分野なので、まず身近なレベルから始め、国際／国内等各レベルとのバランスを保ちながら進めることが期待される。

19

## 国際理解教育の構造



20

## まとめ：国際理解教育の課題

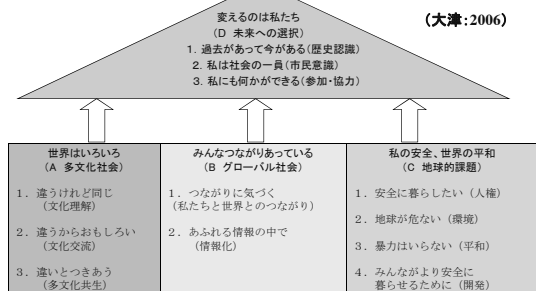
- ① 異文化に対するステレオタイプではない認識をどのように持たせるのか。
- ② 自文化への興味／関心と正しい知識の育成。
- ③ 英語教育≠国際理解教育という観点に立った方法論としての英語（言語）教育の見直し。
- ④ 市民レベルでの国際交流／協調の推進。
- ⑤ 「地球市民」を目指したグローバル教育の推進。
- ⑥ 広い意味での人権教育のさらなる推進。

21

## Ⅲ. 国際理解教育の カリキュラム開発

22

### 3-1. 国際理解教育のカリキュラム開発 —学習領域の構造—



23

### 3-2. 国際理解教育のカリキュラム開発 —実践的枠組— (大津:2006)

学習領域 \ キーワード	1	2	3	4
A 多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	—
B グローバル社会	相互依存	情報化	—	—
C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	—

24

平成22年12月26日 青年海外協力隊等  
派遣現職教員特別研修・帰国報告会

## 国際理解教育の事例

～ヒト・モノ・コトを通じた国際理解～

手嶋 将博  
(文教大学教育学部)

## 国際理解の3つのパターン

- ヒト(人)を通じた国際理解…留学生や地域の外国人等との交流などを通して
- モノ(物)を通じた国際理解…日用品や道具などの「五感」を通して触れるモノを通して
- コト(事柄)を通じた国際理解…祭祀や習慣、行事、行動に伴う考え方等の「文化的な異同」を通して

## 国際理解教育実践における課題

- ヒト(人)を通じた国際理解…一緒に何をしたらいいのか、あるいは何を質問していいのかわからない(表面的・形式的になりがち)。
- モノ(物)／コト(事柄)を通じた国際理解…文化や習慣の「違い」の強調のみになりがち。「つながり」の実感が乏しいまま、そのとき限りのイベントで終了しやすい。
- いずれにしても、継続性や学びの深まりに欠け、手間の割に成果が見えない場合が多い。

## 国際理解教育の実践における留意点

- \* 「国際理解」の究極の目的＝「共生」
  - \* 基本は「人間理解」→学校で普段から行われていること(自分を大切にする、お互いを尊重し、認め合う)の延長線上にある
  - \* 新しい価値を基盤にした生活環境(＝「公平」な生活環境)の意識の涵養
- といったことをねらいにした「継続的」で「学びあい」に繋がる実践。

## 実践事例：

### 博物館アウトリーチ教材の開発

～マレーシアでの実践を通して～

木村 慶太	立命館守山中学校
山田 幸生	鎌田小学校
中島 大輔	鎌田小学校
手嶋 将博	文教大学
クマラグル ラマヤ	マレーシア工科大学
今田 晃一	文教大学

## 実践の流れ

2003年 博学連携について学習指導要領に明記

国立民族学博物館と連携した国際理解教育

年度	香芝西中学校	鎌田小学校
2005	ミニ博物館づくり	ミニ博物館づくり
2006	ミニ博物館づくり	ミニ博物館づくり
2007	日本版みんぱっくの製作 マレーシアへの送付と実践 マルチメディア解説	日本版みんぱっくの製作
2008		マレーシアへの送付と実践
2009 ～	マレーシアの学校での 「マレーシア版みんぱっく」製作・実践→進行中	

## レインツリー 雨の木



レインツリーは、文字通り雨の音がする楽器です。枯れたサボテンの幹とトゲと砂漠の小石を使い作られます。小石がゆっくり落ち、トゲにあたる音が、雨の音に聞こえるのです。カトカマ砂漠では現在も雨乞いの儀式的道具として使われています。

### <感想>

初めてレインツリーを見たとき、ただの木の棒だと思ったけど、音を聞いてすごい綺麗だと思った。調べてみて、サボテンから出来ている、という事にまた驚きました。これだけ、雨の音に似ているのだから、雨乞いにも効果がありそうだと思います。皆さんも、是非レインツリーを傾けてみて下さい。綺麗な音に、感動すること間違い無しです!!!

### <引用・参考アドレス>

<http://beniimu.blog72.fc2.com/blog-entry-434.html>  
<http://www.african.jp/tingatinga/shop/ethnic.html>  
<http://www.tikins.jp/milky/gakki/rainstick.html>

## 本実践研究の目的

- 「日本文化」の再発見
- 異なる文化を持つ他者への日本文化の発信
- マレーシアへの送付及び現地での評価を通して両国の「日本文化」に対する認識の違いを比較検証する
- 本実践を通じた中での両国の児童・生徒の意識変容に関して考察を行う

## 本実践研究のプロセス

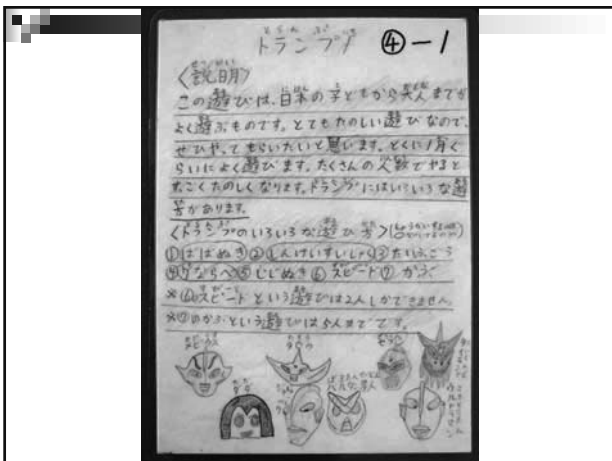
- 民博を訪問後、民族学的資料及び解説ラベルを調査
- 「みんぱっく」を活用した授業の展開
- 「日本文化」を紹介するアウトリーチ教材の生徒自身による選定
- 日本の中学生による「日本版みんぱっく」の作成
- マレーシアへ送付。現地の中学生に「日本版みんぱっく」の評価をもらう。  
(タマン・デサ・スクダイ国民中学校)





### <児童が選んだ資料>

学校で使用するモノ	ランドセル、文房具類、絵の具 習字道具
生活に使用するモノ	扇子、うちわ、はし、花の便箋、風鈴
遊びに使用するモノ	こま、べったん、めんこ、万華鏡、折り紙、 千代紙、なわとび、連だこ、だるま落とし、 けん玉、ゲイラカイト、とび出す絵本、ト ランプ、ベーゴマ、野球道具、福笑い、 かるた
その他のモノ	千羽鶴





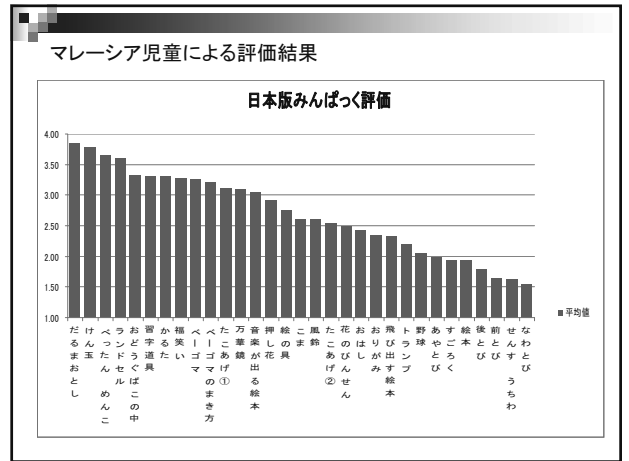
### 実践の結果

- 「マレーシアで、自分たちが作った教材が実際に使用される」という学習状況の設定が児童の主体的な学びを導く。
- 身近な中学生が作成した「みんぱっく」がより良い見本となり、小学生の学びに刺激を与えた。
- 小学生の資料選定の基準は「生活や遊びに根ざしたもの」が中心であった。
- 中学生版を使ったときのマレーシアの子どもたちの反応では、「日本文化を感じさせるモノ」は、「季節」に関するモノや、日本のマンガ、アニメから得た情報に関するモノであった。

### 今後の展開

- マレーシア留学生らとの協力を得て、解説ラベルをマレー語に翻訳。
- H20年8月に、小学生版日本文化を紹介するアウトリーチ教材をマレーシアの小学校において実践。
- H21年、マレーシアの小学生から得た評価をもとに、さらにBRUSH UPLした、アウトリーチ教材を製作することで児童の学びをより深めた。
- H22年度以降、マレーシアの小学生が製作したマレーシア版アウトリーチ教材(マレー版みんぱっく)を日本で実践し、交流の予定。





### 実践のまとめ(1)

- 独楽、凧、箸、扇子、風鈴等(日本にもマレーシアにも存在するもの)・・・形状や使い方(遊び方)の「違い」が分かると関心が高くなる(異文化の認知・理解による関心度の上昇)。
- お道具箱とその中身(3.33)、ランドセル(3.60)、習字道具(3.31)、絵の具セット(2.75)などの学用品や、音楽の出る絵本(3.06)などは、マレーシアの児童がそれを選択した理由として、コンパクトに収納できたり、いろいろ便利な機能が付いていたりしているという点で日本らしいと感じたという意見が多かった(日本の技術面・器用さへの評価)。

### 実践のまとめ(2)

- 剣玉(3.78)、だるま落とし(3.86)などの初めて見る遊び道具、特に木でできたモノに強い関心が見られた。他にも、めんこ(3.65)やかるた(3.30)、福笑い(3.27)、ベーゴマ(3.27)などの日本にあってマレーシアにはない遊びへの関心も相対的に強い(木でできたモノへの関心・初めて見るモノへの関心)。
- 万華鏡(3.10)、押し花(2.92)などの「繊細さ」に日本らしさを感じる傾向が見られた(繊細さ・技術への評価)。



### 実践のまとめ(3)

- 野球道具等(マレーシアでは行われないスポーツ用具)・・・非常に関心が強いが、「日本文化」であるという意識は低い。
- 児童が日本に紹介したいマレーシアの遊び・・・“チョンカ”(伝統的ボードゲーム)や、“マレー風(ワウ)”, セパタクローなど多数が挙げられた。
- 一方, サッカー, TV・パソコンでのゲームなどもあり, 日本の児童との共通項も多く見られた(グローバリゼーションの影響?)。

### 実践による日本の児童・生徒の変化

- 「自作アウトリーチ教材を外国で使ってもらおう」という学習目標により, 児童・生徒に「自分たちが日本の代表として自国の文化を紹介するのだ」という自覚と意欲を喚起させた。
- 双方の児童・生徒にとって, 異文化についての学びを通して自分自身の意識を知り, 自文化に「見つめ直し(再考察)」や, なぜそのような意識が形成されたのか, という考察を深めた。
- 自作アウトリーチ教材が実際にマレーシアで活用される映像・写真を見ることで, 児童・生徒は達成感と, 一層の興味・関心を得た。→学習の継続/発展

### 実践によるマレーシア側の評価

マレーシアにおいてもこの実践によって, 日本の同世代の子どもたちの日常を知るだけでなく, 自国の子どもたちの「日本文化」に対して抱いている意識を知ることが可能となる取り組みである, と(現地の教員にも)大変好評であった。→「マレーシア版みんなぱっく」を作りたい, というマレーシアの小学生の意欲を喚起した。

### 実践後の児童の学習の発展(1)

- マレーシアから得た小学生版「日本版みんなぱっく」に対する評価をもとに, 鎌田小学校の児童たち(5年生に進級)は, 現担任の中島大輔教諭のもとで, ブラッシュアップしたアウトリーチ教材を製作するために, 以下の3つの視点・・・  
①木材で出来たもの, ②日本の技術を感じられるもの, ③冬を感じさせるものを自ら考え出した。

### 実践後の児童の学習の発展(2)

- 日本版みんなぱっく改良の過程で, 今まで自分たちが使っていた「木のおもちゃ」の原材料の木材が, 実はマレーシアなどの海外から大量に輸入されていたことに気づき, 地球環境に関する関心も深まるなど, 児童の「学び」をより深める結果となった。





## 今後の展開

- 本研究の結果、マレーシアの子どもたちは「遊び」を通して日本の文化を知り、日本の子どもたちはアウトリーチ教材の製作を通して、異文化である「世界」を意識する一方、自文化としての「日本」への見定めなおしが行われた。
- 今回の成果を生かして、来年度以降、マレーシアの小学生が製作したマレーシア版アウトリーチ教材「マレー版みんなぱっく」を用いた実践研究を日本で実践して、教材の内容や、児童による評価結果を比較していく予定である。

# プログラム 3

海外ボランティア経験教員の還元・貢献  
～その取組と可能性

佐藤真久

(東京都市大学 環境情報学部 准教授)

## 海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献

### —実施動向・取組事例と今後の可能性

2010年1月9-10日  
青年海外協力隊等派遣現職教員特別研修・  
帰国報告会@筑波大学東京キャンパス

佐藤真久<sup>1</sup>  
<sup>1</sup> 東京都市大学 環境情報学部 (m-sato@tcu.ac.jp)

※1: 西尾直美(ドミニカ:小学校教諭), 2: 向嶋壽子(ブータン:体育教師), 3: 清水大雅(ベトナム:小学校教諭), 4: 小倉孝恵(フィリピン:小学校教諭), 5: 生田佳彦(ホンジュラス:小学校教諭)

◎ 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

## 海外ボランティア経験教員の還元・貢献

### 調査研究の概要

◎ 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

## 調査研究の概要

### —その背景と研究目的

海外ボランティア<sup>※1</sup>経験教員の還元<sup>※2</sup>・貢献活動の動向や具体的な活動事例に関する情報を、経験教員、所属学校長、教育委員会・自治体から収集し分析

- 現況把握(実施動向と事例の把握)
- 海外ボランティア経験教員が国内外の社会に還元・貢献できる潜在性・可能性の把握
- 「現職教員特別参加制度」や組織的取組みの推進にむけた課題を整理

※1: 本調査研究では、国際協力機構の実施する青年海外協力隊派遣事業をさす  
※2: 「還元」とは、海外での経験を日本のさまざまな活動に活かすことを意味する

◎ 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

## 調査研究の概要

### —全体の構成

(1) 教育委員会・自治体による制度活用に向けた取組みの動向調査 (調査票調査) (インタビュー調査)

(2) 経験教員と学校による取組みの動向調査 (調査票調査)

(3) 経験教員による取組みの事例調査 (インタビュー調査)

- 現況把握(実施動向と事例の把握)
- 海外ボランティア経験教員が国内外の社会に還元・貢献できる潜在性・可能性の把握
- 「現職教員特別参加制度」や組織的取組みの推進にむけた課題を整理

※1: 高橋奈穂(シンハブエ:体育教師)

◎ 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

## 調査研究の概要

### —各調査の主目的

(1) 教育委員会・自治体による制度活用に向けた取組みの動向調査 (調査票調査・インタビュー調査)

「現職教員特別参加制度」の活用において、47全国都道府県と17政令指定都市を対象に、調査票による動向調査を実施

- 調査実施期間: 2009年10月-11月末、回収率: 10割
- 調査票調査内容: (a) 帰国後の還元・貢献活動に関する意義、(b) 組織的対応、(c) 取組み事例、(d) 効果的に推進できる仕組み、(e) 還元・貢献活動領域の潜在性・可能性、(f) 各組織の機能・役割、(g) 能力向上・評価・人事

→ 一部の教育委員会・自治体に対するインタビュー調査(補足調査)が予定(調査予定期間: 2010年1月-2月)

◎ 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

## 調査研究の概要

### —各調査の主目的

(2) 海外ボランティア経験教員と学校による取組みの動向調査 (調査票調査)

「現職教員特別参加制度」を活用した現職経験教員とその所属学校長を対象に、調査票調査を実施 (実施期間: 2009年10月-11月末、回収率: 2割程度)

- 調査票調査内容(経験教員所属学校長): (a) 制度の認知度、(b) 帰国後の還元・貢献、(c) 派遣活動中における日本の教育への還元
- 調査票調査内容(経験教員): (a) 参加動機、(b) 制度認識と対応、(c) 派遣中の活動内容と還元・貢献活動、(d) 派遣による自身の変化、(e) 派遣後の還元・貢献活動(学校における授業内外の取組み事例、学校外との取組み事例)、(f) 還元・貢献活動の阻害・貢献要因、(g) 提案、(h) 国際教育協力のイメージ

◎ 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

### 調査研究の概要 —各調査の主目的

#### (3)海外ボランティア経験教員による 取組みの事例調査(インタビュー調査)

「現職教員特別参加制度」を活用し、派遣中・派遣後の還元・貢献活動で多様な成果を上げている現職教員を主に選び、所属学校において詳細なインタビュー調査(2時間程度)を実施  
(実施期間：2009年11月～2010年1月)

- 調査対象：20名程度
- 調査対象の選定：調査票調査(2)の結果と関係機関(JICAや文部科学省)の既存情報に基づき、多様な還元・貢献活動(開発教育プログラムの実施や教科教育、学級運営、授業外活動、キャリア指導、外国人児童生徒への対応、帰国隊員ネットワーク、ボランティア活動など)を事例研究できるように配慮

※1:生田佳道(ホンジュラス:小学校教諭)、2:向雄輔(プータン:体育教師)

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

### 調査研究①: JOCV経験教員の還元・貢献を支援・促進する 教育委員会・自治体の取組み (アンケート調査報告暫定版)

47全国都道府県 + 17政令指定都市  
回答組織数:64組織

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

### 教育委員会・自治体による還元・貢献の支援・促進事例 [アンケート調査報告暫定版(抜粋)]

#### 【帰国後の還元・貢献】

■問1: 青年海外協力隊及び日系社会青年ボランティア(以下、「青年海外協力隊等」)現職教員特別参加制度参加希望教員のとりまとめに関して、貴教育委員会としての何らかの意義を感じておられますか。(複数選択可)

■問2: 貴教育委員会が中心となって、青年海外協力隊等を経験した教員が、帰国後にその経験や成果を見直し、他の教職員、その他の方々に還元するような機会作りを組織的に取り組まれていますか。(複数選択可)

■問3: 取り組んでいる場合、それはどのようなものですか。(複数選択可)

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

### 教育委員会・自治体による還元・貢献の支援・促進事例 [アンケート調査報告暫定版(抜粋)]

#### 【帰国後の還元・貢献】

■問4: 上記3.の回答の内容を具体的に記してください。

■資源ネットワークの構築と協同実施  
(情報・機会・人的資源の共有、協同実施)  
・人材バンク(愛媛県)  
・児童生徒向け国際協力イベント(岡山県・広島県)  
・次世代派遣教員の発掘と支援  
・帰国報告会(秋田市・神戸市)  
■教員の資質・能力の向上  
・教員研修(青森県、さいたま市、京都市、愛媛県、徳島県、岡山県)  
■人事選抜措置  
(優先的教員採用施策、管理職登用ルートなど)  
・静岡県・神戸市  
■関連施策とのリンク  
・岐阜県・京都市・岡山県・広島県  
■実践と理論の反復  
(高等教育機関における学術研究、研究会組織の発足)  
■その他  
・JICAとの人事交流(埼玉県)  
・派遣中の給与とJICAからの補填額以下に抑えて派遣枠を廃した例(北海道)

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

### 教育委員会・自治体による還元・貢献の支援・促進事例 [アンケート調査報告暫定版(抜粋)]

#### 【帰国後の還元・貢献】

■問10: 青年海外協力隊等を経験した教員は、日本の学校教育のどの分野において経験の還元・貢献が期待できると考えていますか。(複数選択可)

■問10 教育活動

■問10 その他の活動や校務

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

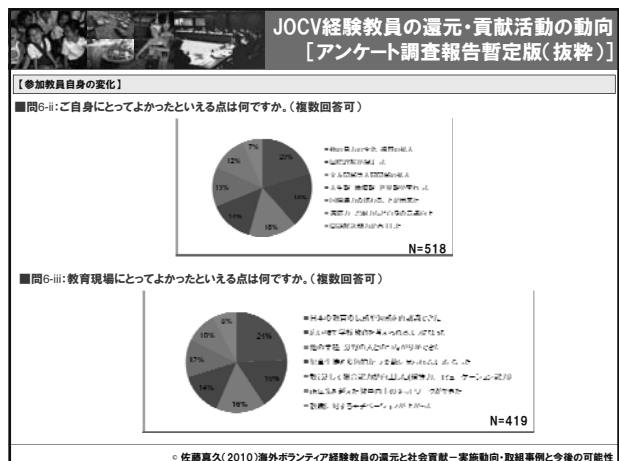
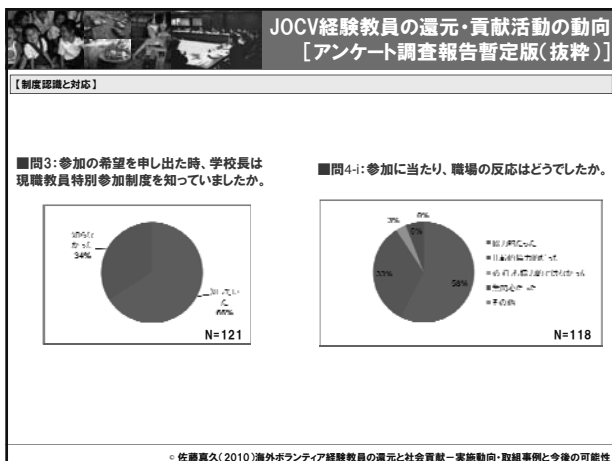
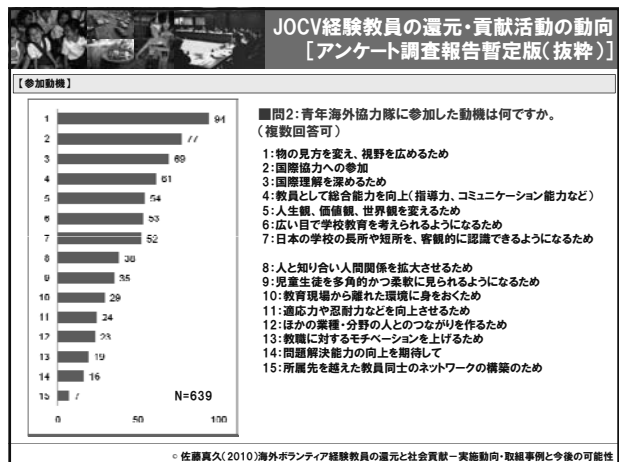
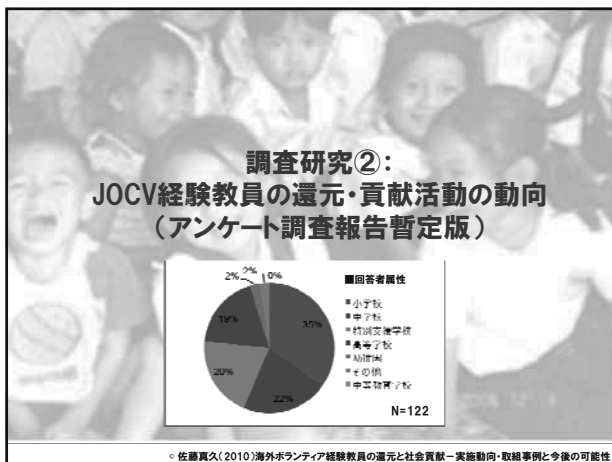
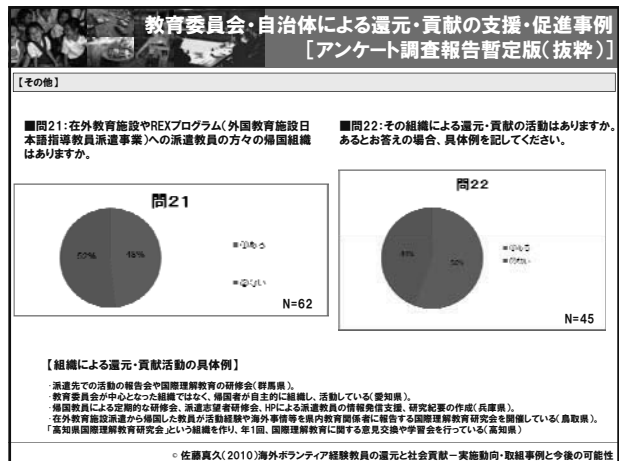
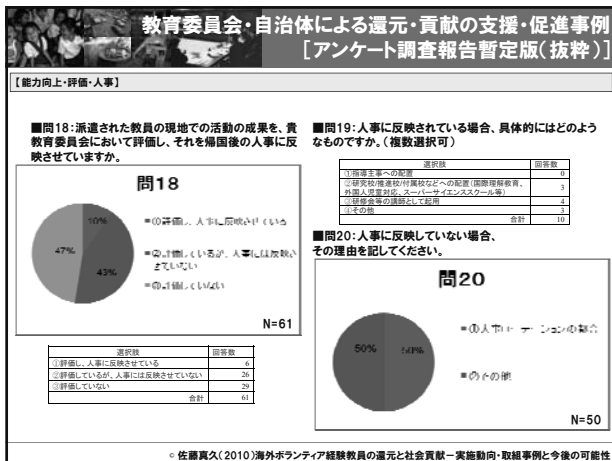
### 教育委員会・自治体による還元・貢献の支援・促進事例 [アンケート調査報告暫定版(抜粋)]

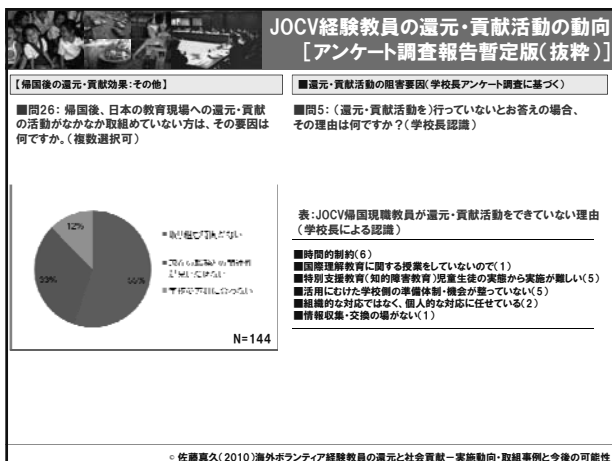
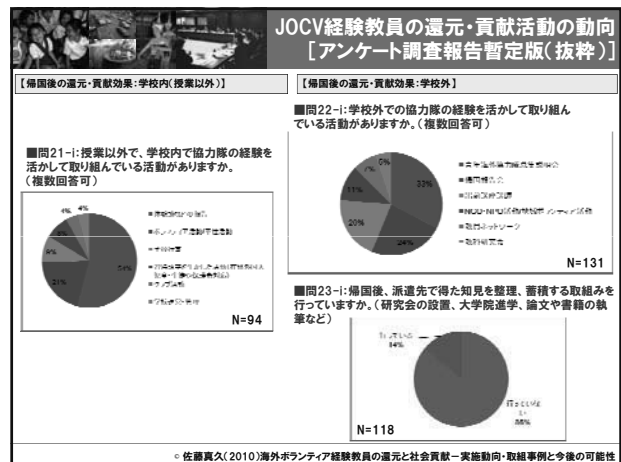
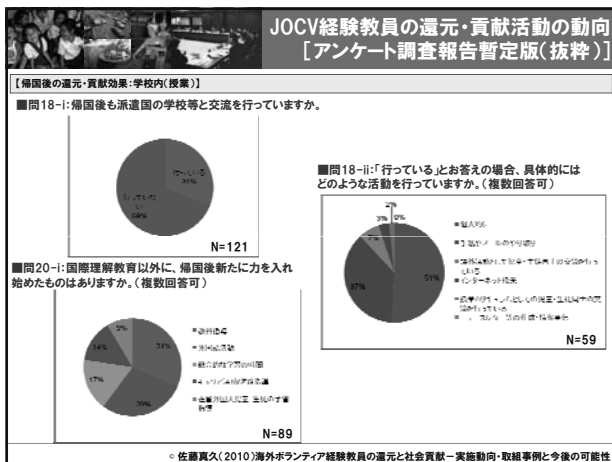
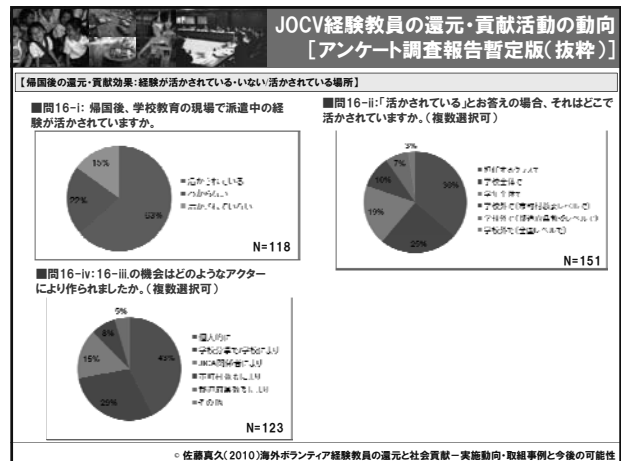
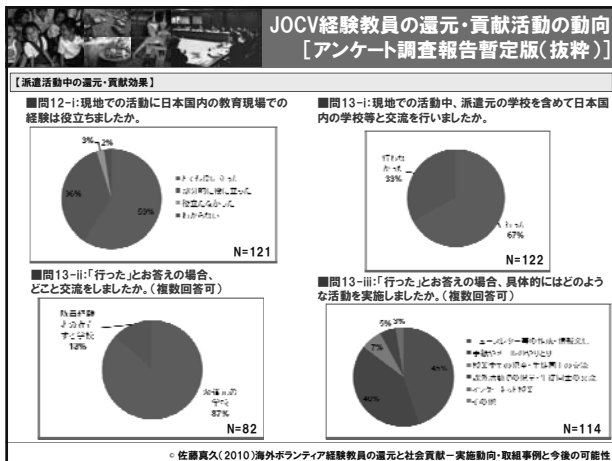
#### 【能力向上・評価・人事】

■問15: 現職教員が国際協力を実践することにより、教員自身の能力開発と共に、日本の教育現場に与える効果として、次の5つの効果が想定されていますが、特にどの効果が期待されていますか。(複数選択可)

■問17: 青年海外協力隊等に教員を派遣した場合、帰国後に貴教育委員会がその成果を把握するための機会を設けていますか。(複数選択可)

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性







JOCV経験教員の還元・貢献事例(1)  
**向畑馨子教諭**  
 (ブータン・小学校教諭・国際理解教育/開発教育・人権教育)

【派遣中】



写真:派遣中に派遣前学校に送付したブータン壁新聞

【派遣後】



写真:「地球市民入門」の授業での生徒の調べ学習の発表(フェアトレード教育など)

■経験教員:向畑馨子教諭(神奈川県横浜須賀野市)  
 ■派遣国:ブータン(H12派遣)  
 ■職種:小学校教諭

■還元活動キーワード:派遣中の情報発信・コミュニケーション、派遣後の国際理解教育/開発教育や文化祭、教科教育(保健)、人権教育

■教育経験キーワード:コミュニケーションの質的変化(表現を見ながらのコミュニケーション)、「常識」概念の変化、「豊かさ」概念の変化

■備考:制度以前に参加

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

JOCV経験教員の還元・貢献事例(2)  
**生田佳澄教諭**  
 (ホンジュラス・小学校教諭・在留外国人児童生徒対応・国際理解教育/開発教育)

【派遣後】




写真:TANOSHIKAメンバーの指導による西語・英語を活用した週末学習支援(東地区センター)




写真:特別支援学校にて算数の授業実施風景。ペルー教育者のメンバーとも一緒に取り組んだ地方の算数基礎学力向上のためのプロジェクト

■経験教員:生田佳澄教諭(静岡県沼津市)  
 ■派遣国:ホンジュラス(H14派遣)  
 ■職種:小学校教諭

■還元活動キーワード:在留外国人児童生徒対応、国際理解教育/開発教育、西語・英語を活用した週末学習支援、ペルー大使館連携の算数教材開発

■教育経験キーワード:コミュニケーションの質的変化、「常識」概念の変化、安全・危機管理能力の向上、マイノリティの経験を生かした指導

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

JOCV経験教員の還元・貢献事例(3)  
**西尾直美教諭**  
 (ドミニカ・小学校教諭・キャリア教育・生徒指導・国際理解教育/開発教育)

【派遣後】




写真:小学校への出前出張講座(国際理解教育/開発教育)




写真:えんぴつつきの寄付にむけたPTAを巻き込んだ国際活動

■経験教員:西尾直美教諭(茨城県守谷市)  
 ■派遣国:ドミニカ(H16派遣)  
 ■職種:小学校教諭

■還元活動キーワード:生徒指導、キャリア教育、学校行事(バザー)、寄付活動、後輩教員(隊員派遣)との連携による国際理解教育/開発教育

■教育経験キーワード:経験に基づく言葉の説得力、広い視野と動じない態度、児童生徒の個別指導

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

JOCV経験教員の還元・貢献事例(4)  
**河地洋明教諭**  
 (ウガンダ・小学校教諭・国際理解/開発教育・地域連携)

【派遣後】



写真:クラス通信におけるウガンダ関連の生徒会活動の紹介



写真:別所教諭と同僚教諭(常盤小学校)との連携によるウガンダとの交流プロジェクトの展開

■経験教員:河地洋明教諭(埼玉県さいたま市)  
 ■派遣国:ウガンダ(H19派遣)  
 ■職種:小学校教諭

■還元活動キーワード:派遣中の参加型学年通信(常盤小学校との連携)

※常盤小学校の教員による国際理解教育/開発教育、起業家教育、PTA・地域住民を巻き込んだバザーの開催とフェアトレード

■教育経験キーワード:「異文化理解」概念の変化、日本の教育力、派遣前・派遣中の還元の可能性、近隣小学校との連携による教育実践

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

JOCV経験教員の還元・貢献事例(5)  
**清水大格教諭**  
 (ベトナム・小学校教諭・国際理解/開発教育・生徒指導)

【派遣後】



写真:ベトナムの小学校への折り紙のアレセントとホリアの子どもたち



写真:ベトナムの小学校とのインターネット交流と習字の紹介

■経験教員:清水大格教諭(神奈川県平塚市)  
 ■派遣国:ベトナム(H18派遣)  
 ■職種:小学校教諭

■還元活動キーワード:国際理解教育/開発教育、総合的学習の時間、学級運営、経験を応用したホリアとの連携プログラム、教育委員会との連携した国際教育プログラム

■教育経験キーワード:教育観の変化(伝える・教えるから繋がる・引き出すへ)、価値観の尊重、直接指導から間接指導へ、「言葉の力」の再認識、日々の教育活動への織り込み、「表現できる子」を育てる、子ども同士の対話能力

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

JOCV経験教員の還元・貢献事例(6)  
**小倉琴恵教諭**  
 (フィリピン・小学校教諭・国際理解教育/開発教育・教材開発・外国語教育)

【派遣後】



写真:国際理解のための校内展示ブース



写真:経験を生かした紙芝居づくりと朗読活動

■経験教員:小倉琴恵教諭(宮城県仙台市)  
 ■派遣国:フィリピン  
 ■職種:小学校教諭

■還元活動キーワード:総合的学習の時間、外国語教育、国際理解教育/開発教育、経験を生かした紙芝居づくりと朗読活動

■教育経験キーワード:日本の教育教材の質の高さ、教材開発の質的改善、教育実践の質的改善、同僚との連携による教育実践

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

JOCV経験教員の還元・貢献事例(7)  
**高橋奈緒教諭**  
(ジンバブエ・小学校教諭・環境教育・生徒指導)

【派遣後】

■経験教員:高橋奈緒教諭(宮城県仙台市)  
■派遣国:ジンバブエ  
■職種:小学校教諭

■還元活動キーワード:水の大切さを伝える環境教育実践、募金活動、生徒指導、学級運営

■教育経験キーワード:派遣隊員どうしの学び合い、万国共通の子どもの笑顔、日本の常識・世界の非常識、コミュニケーション手段としての英語、安全管理・危機管理能力の向上、チャレンジ精神、現実と理想を教える役割(教育者果たす役割の認識変化)、経験を通じた外国籍児童生徒への配慮、子ども達との信頼の構築

■備考:派遣後に教員へ



写真:派遣隊の写真を活用した「水の大切さ」を伝える環境教育教材

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

JOCV経験教員の還元・貢献事例(8)  
**吉岡康裕教諭**  
(タンザニア・小学校教諭・帰国教員ネットワーク・国際理解教育/開発教育)

【派遣後】

■経験教員:吉岡康裕教諭(東京都町田市)  
■派遣国:タンザニア  
■職種:理科教師

■還元活動キーワード:派遣中隊員との学び合い(タンザニア教育研究会)、活動情報の発信、米平和部隊との連携、国際理解教育/開発教育、総合的学習の時間、道徳教育との関連性、ICT活用の国際教育、関東教育支援ネットワーク

■教育経験キーワード:行動力の向上、地球人としての世界観の醸成、ICT活用がもたらす国際理解、経験隊員のネットワーク構築と教育実践研究

■備考:制度以前の参加



写真:開発教育協会(OEAR)と派遣隊員(タンザニア派遣)との連携による開発教育プログラム(貿易ゲーム)の実施



写真:帰国教員ネットワーク(関東教育支援ネットワーク)の形成と派遣後の実践事例の共有と議論

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

JOCV経験教員の還元・貢献事例(9)  
**佃直美教諭**  
(ジンバブエ・養護教諭・食育・給食指導)

【派遣後】

■経験教員:佃直美教諭(神奈川県逗子市)  
■派遣国:ジンバブエ(H13派遣)  
■職種:養護教諭

■還元活動キーワード:食育、給食指導、保護者参加型の授業実践、総合的学習の時間、学級間の交換授業

■教育経験キーワード:児童生徒の個々に向き合う指導の重要性、一日一日の時間の大切さ、日々の教育活動に対する振り返りの重要性

■備考:帰国後教員に




写真:給食指導による食育実践【帰国後の還元活動】




写真:総合的学習の時間における「食」に関する作文【帰国後の還元活動】

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

JOCV経験教員の還元・貢献事例(10)  
**堀口かえで教諭**  
(ルーマニア・ソーシャルワーカー・地域連携・国際理解教育/開発教育)

【派遣中】

■経験教員:堀口かえで教諭(大阪府大東市)  
■派遣国:ルーマニア(H15派遣)  
■職種:ソーシャルワーカー

■還元活動キーワード:国際理解教育/開発教育、保健所とのボランティア活動(大東市たばこゼロプロジェクト)、社会教育活動(ルーマニアからのほほえみ)、日常会話、総合的学習の時間

■教育経験キーワード:仲間意識の醸成、日本の教育制度の素晴らしさ、経験に基づく言葉の重さ、生きる力、「あたりまえ」の概念、あいさつと日常会話の重要性、学び合い、総合力を持った教員の育成、地域連携のプロセス



写真:クロスロード特報「日本の生徒たちへの手紙」において、ストリート・チャットレンとの出会いに関する記事の発信



写真:遷移小学校の全校平等集会「ルーマニアのこともたらしかかわく」での経験報告

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

JOCV経験教員の還元・貢献事例(11)  
**丸山一則教頭**  
(ホンジュラス・技術科教師・帰国教員ネットワーク・国際理解教育/開発教育・環境教育)

【派遣後】

■経験教員:丸山一則教頭(兵庫県大東市)  
■派遣国:ホンジュラス(S63派遣)  
■職種:技術科教師

■還元活動キーワード:教科教育(技術)、ふるさと学習、自然体験を通じた感動体験、ICTを活用した国際理解・開発教育、「幸せ」に関する道徳教育、教育指導力向上研究会、教育支援ネットワーク、学校運営、JOCVクリスマスカードから始めるJOCV派遣教員と地元学校との交流プログラム

■教育経験キーワード:ふるさと教育、教育の国際化、「豊かさ」の概念、生きる力、日本の子どもが世界の子どもも驚かす意味、感動体験、自分で気づく力を養う

■備考:制度以前参加



写真:現地小学校6年総合的な学習の時間「D」とUDと世界の友だち」での、ホンジュラスと日本のテレビ会議交流



写真:帰国教員ネットワーク(兵庫県教育研究会)の設立と帰国後の実践事例の共有と議論

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

JOCV経験教員の還元・貢献事例(12)  
**門脇順子教諭**  
(ベトナム・SE・持続発展教育・人権教育)

【派遣後】

■経験教員:門脇順子教諭(大阪府豊中市)  
■派遣国:ベトナム  
■職種:SE

■還元活動キーワード:派遣中における日本の高校との連携による国際理解教育/開発教育プログラム(Meet the GLOBEプロジェクト)、総合的学習の時間、人権教育(バリアフリー、私たちの幸せ)、NGO連携の教材支援活動、持続発展教育

■教育経験キーワード:人のつながりの大切さ、人権教育・国際教育を通じた価値教育、既存の教育実践との関連づけ(つながり・かかわり・ふかまり・ひろがり)、「幸せ」の概念

■備考:帰国後教員へ




写真:豊中市立上野小学校の国際教育「国際社会に活用する学力を求めて広い視野と主体的行動力の育成」




写真:授業発表を行ったおかげでベトナムに帰国後活動(豊中市立上野小学校)

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

### JOCV経験教員の還元・貢献事例(13) 清野真輝教諭 (ドミニカ・小学校教諭・外国語教育)

【派遣後】

写真1: 小学校5・6年対象の外国語活動の実践  
写真2: 北京師範大学実験小学校との結核連携による児童生徒との交流活動

■経験教員: 清野真輝教諭(新潟県)  
■派遣国: ドミニカ(H18派遣)  
■職種: 小学校教諭

■還元活動キーワード: 外国語教育、国際理解教育/開発教育、北京師範大学実験小学校との連携プログラム、総合的学習の時間

■教育経験キーワード: コミュニケーション手段としての英語、日本語教育の重要性、日本文化の尊重、世界に対する好奇心の醸成

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

### JOCV経験教員の還元・貢献活動の可能性 —インタビュー調査を通して(暫定版)

【派遣前】

- 児童生徒との派遣前心境の共有
- 派遣前における派遣国に関連する開発教育・国際理解教育プログラムの展開、など

【派遣中】

- 所属学校・周辺学校・自治体への活動報告を通じた情報発信
- 所属学校・周辺学校の児童生徒との手紙のやり取りや継続的コミュニケーション(JCT利用)
- 所属学校・周辺学校との連携による開発教育・国際理解教育プログラムの実施
- 地域・PTAを巻き込んだ所属学校・周辺学校との連携による地域実践プログラムの展開(文化祭やバザー、支援物資の回収と送付)、など

【派遣後】

- 授業における活動(教科教育への織り込み、総合的学習の時間における学年教員・外部組織との連携によるプログラム実践)、など
- 授業外における活動(外国人児童生徒対応、文化祭や生徒活動の一環、学級運営、生徒指導、キャリア教育、児童会プログラム)、など
- 学校外における活動(PTAや保健所、社会教育施設、他学校との連携による教育プログラムの展開)、など

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

### JOCV経験教員の還元・貢献活動 —理想と現実のはざままで—

本調査研究に基づく、(1)還元・貢献活動の難しさ  
(2)還元・貢献の潜在性・可能性

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

### JOCV経験教員の還元・貢献活動 ◎還元・貢献活動の難しさ(暫定版)

■JOCV帰国現職教員が還元活動をできる機会づくり  
(教育委員会・自治体に対するアンケート調査—問2より)

■JOCV帰国現職教員が還元活動をできていない理由  
(JOCV経験教員に対するアンケート調査—問26より)

■表: JOCV帰国現職教員が還元活動をできていない理由  
(所属中学校長に対するアンケート調査—問5より)

- 時間的制約(6)
- 国際理解教育に関する授業をしていないので(1)
- 特別支援教育(知的障害教育)児童生徒の実態から実施が難しい(5)
- 活用しむけた学校側の準備体制・機会が整っていない(5)
- 制度的な対応ではなく、個人的な対応に任せている(2)
- 情報収集、交換の場がない(1)

※1: 生田佳澄(ホンジュラス・小学校教諭)

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

### JOCV経験教員の還元・貢献活動 ◎還元・貢献の潜在性と可能性(暫定版)

■国際教育協力の経験から学ぶ

- 地球人として生きる: 日本の常識/世界の非常識、多様な文化・価値観の尊重、グローバル化の下でのつながり・かかわり・ひろがりの認識
- 日本の良さを知る: 日本の良さ、地域の強みを知る
- 力を合わせる国際協力: 技術移転の国際協力の発想から脱却
- 人と人との直接的つながり: かわいそうな途上国という発想からの脱却
- コミュニケーション: 価値観の尊重、言葉の重さ、個としての対応
- 豊かさの概念: 人間開発アプローチへの移行、心の豊かさ
- 変容を促す教育実践: 新規派遣教員・JOCV隊員・同僚教員・地域との連携を生かした日本の学校内外での教育活動

■教員個人の能力向上/組織能力の向上—その潜在性・可能性

- 生きる力: 確かな学力、豊かな人間性、健康と体力、との深い接点
- 持続発展教育(ESD): 質の高い基礎教育の充実、MDGsとの整合性、道徳教育、つながり・かかわり・深まり・広がり、参加型・対話型学習と教授、互いが学び合い、変容を促す教育の実践、文化の尊重と地域学習、平和教育・環境教育・人権教育・国際理解教育・開発教育、など
- 教員の資質向上: グローバルな視野をもち、地域で活躍できる教員の育成
- 組織能力の向上: 学級運営、校内分掌活動、安全管理・危機管理、地域連携のプロジェクト、学級教員との連携、部活動、生徒指導、総合的学習の時間、教科間連携、学校行事、キャリア指導、外国籍児童生徒対応、給食指導、など
- 国際教育協力に関する学びのサイクル: 日本・地域全体での知見蓄積・共有

※1: 清野真輝(ドミニカ・小学校教諭)、※2: 河地洋明(ウガンダ・小学校教諭)

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

### JOCV経験教員の帰国後の還元 —その潜在性と可能性

●●●: JOCV還元・社会貢献方策

【派遣前】 JOCV選考、JOCV候補生、学校(日本)

【派遣中】 JOCV活動報告書(第一号~第五号)、JOCV技術補完研修・協力活動手法研修・現職教員特別研修、JOCV隊員

【派遣中・後】 シミュレーション教材開発、次世代学生を巻き込んだ活動報告書の分析

【派遣後】 JOCV活動報告書(第一号~第五号)、JOCV任務完了、JOCV隊員、帰国報告会

【帰国後】 経験に基づく普及・啓発活動、学校現場での実務貢献(学校内)、経験に基づく教育・社会活動(学校外)

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

# プログラム 4

## ニカラグアから学んだこと

有村健二

(平成 20 年度 1 次隊 小学校教諭 ニカラグア)

皆さんこんにちは。現在奈良県御所市立御所小学校で教員をやっております有村健二と申します。20 年度 1 次隊でニカラグアという中米の国に行っていました。皆さんそれぞれ行かれる国は別々で、いろんなことを体験すると思うんですが一つの例として聞いていただけたらなと思います。

まず皆様それぞれいろんなバックグラウンドがあっいろんな思いで今ここに来られると思うんですが、自分の自己紹介としてなぜ協力隊として途上国に行こうと思ったのかということをお話します。大学生の頃に教員も目指していたんですがそれと同じように海外で教師として働くこと、特に途上国の子供、日本ではない日本とは違った子供に関わることに軽いあこがれを持っていました。あと、働き始めてからなんですがこの特別現職教員の制度を知って、選択肢として海外で働くには日本人学校とこの協力隊という選択肢が、もしかしたら皆さんの中にもあったかもしれないんですが、自分の場合は日本人学校ではなく現地の子供たちと、現地の先生たちとともに現地にとけ込んで働きたいなという思いがあったので、日本人学校ではなく協力隊としてここと決めました。

簡単になんですがニカラグアという国の紹介でということで、資料を見ていただいたらわかると思います。特に話されていた言葉はスペイン語でした。生活の言葉もすべてスペイン語で、皆さんもスペイン語ご存知かはわからないんですがセニョールセニョリータ、アミーゴという感じのスペイン語でした。

国としては人口 150 万人ほどで、ニヒティー、白人とインディアンとの混血がほとんどでした。識字率 76.7 パーセントと書いているんですが実際みていたらそれより低いらしいと感じるくらい、大人の方で文字が書けない読めない方もいらっしゃいましたし、子供でも学校に行っていない、読めない、書けない子供というのがたくさんいたように思います。

この国、ちょうど中米の真ん中あたり、コスタリカの上、ホンジュラスの下っていうあたりなんですが、国としてはこんな形で主に皆さん西側、太平洋側にすんでいらっしゃって、僕がいたのはちょっと田舎のあたりで、山のあたりに住んでいて比較的涼しい環境で生活をしていました。

人はとても優しく、ラテンののりという感じでとても明るい。音楽があれば踊り出さってという明るいラテンの国で一つエピソードがありまして。働いていたところは教員養成学校だったんですが一応算数の教師とともに指導、名目としては算数の教師に対する指導方法を教えるということと、生徒の学力向上という要請内容で働かせてもらったんですが、

ある日授業が 11 時からあったんですね。それで僕午前中ちょっと疲れていて職員室で寝ていたんです。それでパッと起きたら 11 時 15 分か 11 時半くらいで過ぎてしまっていたんです。普通日本だったらそんなことあり得ないですし、実際に僕は授業してなくて授業を見に行くっていう立場だったんですが、起きて焦って教室にいかなあかんで思って教室に行ったら、そのときに一緒に働いていたカウンターパートの先生が「ケンジ」って「おはよう、ぐっすり寝てただろ、ケンジを起こさないようにこの授業の時間だけならさなかつたから」っていわれて、それぐらい仕事に対する気持ちとか、寝てたことは悪かったんですが、それぐらい明るいのんびりした感じで働かせてもらってました。

皆さんもうすぐ 3 学期始まって、授業が終わって派遣されるということなんですけど、僕も行く前にいろんなイメージしていた活動があって、まず日本で培った経験を活かして教育技術を伝えるということで、日本で 4 年しか働いてなかったんですが、この日本の教育のよさや技術を伝えるんだという思い、そして日本の教育の現状、文化を伝えて相手の人たちにわかってもらって、日本のいいところを受け入れてもらって、それを自分たちの教育技術に生かしてもらったらなっていうのがありました。

3 つ目として日本の学校、これまで大学の先生たちが話されていたんですが、日本の学校と連携して現地の学校とつなぐということを考えていました。

援助する側される側というのはあるかもしれませんが、このとき僕が思ったのは行って、僕が主に教えてこんなことやってもらうんだとすごく思っていました。

しかし実際はというと、まず教育技術を伝える経験を活かすというのがあったのですが、やはり自分の持っている物をすべて教えるんだと行っても、やはりむこうの方はそれに納得しなかったり、それがむこうの現状にあっていなかったりもする訳です。

それから 2 つ目日本の教育、文化を伝える。僕は行く前に自分の授業、自分の学校の全部の授業をビデオに撮っていったんです。算数、国語、理科、社会、習字とかこういうもの紹介できたらいいなと思ったんですが、実際紹介したことは一度もありませんでした。なぜかというと、あまりに違いすぎてもしかしたら役に立つかも、使い方もしれないんですが見せて何の意味があるんだろう、この人たちにこれを見て何か自分の学校のこれをかえようという思いにはいたらなかったんです。だからちょっとそれはできませんでした。

3 つ目、日本の学校と連携して現地の学校とをつなぐ。先ほど大学の先生がいろんなすばらしい事例をおっしゃっていたので非常に申し訳ないんですが、僕の場合その当時の学校が荒れてまして、やったことはレポートを送ることのみでした。

本当にやりたかったのはインターネットを使って現地の人たちとむこうの学校をつないだりとか、手紙のやり取りをしたりということができたならよかったのかなと思うのですが、やはり学校の現状として勝手にできないからお前は向こうで何かやっつけみたいなの、学校

は学校で自分がいない間にはちゃんと回っているんだ、現地の自分の学校は自分の学校でそのときの状況に合わせてカリキュラムもあったりして、とてもじゃないけど僕の活動に対して理解をしたり、何かできたりということはあまり考えられなかったので、とりあえずレポートを通信という形で毎月1回学校に送る、それすら学校が荒れてしまっていて申し訳ないくらい、すごいみんな戦っているのにひとり平気なこんなことして楽しいんだみたいな、そんな文章を送っていたので学校としてはどういう風に思っていたのかなというのはあります。

実際に僕がやった活動なのですが、教員養成ということで授業の計画実施、教材作成ということで大事なのは現地教員とともにということなのですが、前に立つことはありませんでした。常に現地の先生が教えていてそのサポートという形で関わっていました。皆さんそれぞれいろんな形があると思うんですが、隊員には2つの形があると持っていて、1つがその場所に行けば何らかの活動ができる、例えば学校隊員とか、学校だったら行ったら子供がいますよね。何かできますよね。でも、もう1つの形として例えば村落の方とか、行ってもその人たちがいないとか対象がいなくて何もできないというような状況があると思うんです。皆さん学校に行かれたときにも例えば自分が教えるのか、教員のサポートをするのかでも全然違うと思うんですけど、僕の場合は行ったら現地の先生がいましたのでそれをサポートする、自分はいくまで陰で相手をサポートするという形で進めることができました。

あと現地の先生が公開授業、日本で言う授業公開、研究授業にすごく興味を持っていたので、その実施、小学校教員に向けた算数の授業紹介、後は日本文化紹介というのをしていました。

実際にやって思ったことはあくまで現地の人为主役だということ。自分がやろうと思ういろんなことがすごくできたと思うんです。ただそれが本当に現地の人が必要としているものなのかとか、現地の人にとって意味のあるものなのかということをもっと考えていて、現地の人から教えていたのでその教をサポートする、その指導をサポートすることを通して、また一緒に授業を作る上で感じるものがあれば、彼らが必要性を理解して主体的に学ぶこと、主体的に自分たちで考えることができるのではないかなと思っていました。

後は写真が続くんですが、これが一緒に働いていたカウンターパートです。主に彼が授業をして僕がサポートをする。授業をみてわからない子供をサポートしたりとか、終わった後に反省をしたりとかをしていました。

彼らがんばっていたことが3つありまして、まず算数の授業として1つは教具を使う、具体物を使うということです。教員養成学校の指導法の勉強なんですけど小学校で1、2、3

とか教えるときに具体物を使って教えたらいんじゃないかということ。2つめは個別指導をする。向こうの学校は基本的に前で先生がしゃべって、日本でいう大学の講義みたいな形でしたのでそうではなくて、ちゃんと一人ずつの子供をみて指導をするということをはんばっていました。3つめは基本的には教え込みの授業でしたので、生徒に聞くことが何もなかったんですね、生徒がわからない場面が一つもなかったもので、例えば生徒に聞いたりとか、生徒に書かせてその間違いから授業を作っていくっていったことを、すごくこの人たちはがんばっていました。

自分としては、教員養成学校は日本でいうと大学くらいなんですけど、計算の力が全然なかったのここは2桁足す3桁の計算とか、それを少し授業の時間をいただいてやっていたりしていました。基本的にはこんな形で授業中、問題といているときなどにわからない子供のところに行って教えたりしていました。

これは現地でやった公開授業の様子なんですけど、このカウンターパートが日本のプロジェクトの研修を受けまして、公開授業にすごく興味を持ちまして、これやりたいていだったのでそのサポートをしました。

それは現地の小学校1年生の教室なんですけど、1年生がいて周りでみているのが教員養成学校の生徒です。教員養成学校の生徒に対して先生が小学校の授業を見せて、こんな風に自分たちが興味のある授業をすることができるんだよっていうのを見せていました。後は授業前に一緒に教材を作ったりしていました。

ということで少しビデオを見ていただきたいんですが。

まずひとつ、つい先日自分のクラスで話をさせていただきまして、そのときにこんなあったらいいんじゃないかなということで、一つ自分が着いた当初に作ったビデオがありまして、スペイン語で挨拶、ブエノスディアスというんですがそのブエノスディアスを子供たちに覚えてもらおうということで朝の様子です。

すごい典型的な海外のビデオみたいな感じなんですけど、これいいです、という感じで、何かで使えたらなと思って無理矢理いわせてみました。

あとはこれ実際に先ほどみていただいた公開授業の様子なんですけど、彼がいろんな公開授業の形をしまして、これは1年生を呼んで回りに教員養成学校の生徒全員を集めてこういう授業を見せるっていうかたちをとりました。具体物を使ったり、子供を前に出したり、子供の意見を尊重したりというのを気にして彼は授業をしていました。日本のやり方は日本のやり方なんですけど前に立っているのは現地の人ということで、このときこういう形の公開授業が6、7回目でしたのでもう彼は自分で授業をたてて教具も自分で作ってもう僕は何もしない。もうこのときに僕がしていた仕事はこのビデオを撮ることだけでした。

一応自分も少しだけ現地の先生たちに話をすることがあって、このビデオも子供に見せ



たんですが先生、めっちゃスペイン語しゃべれるんだって自慢していました。笑いを取る場面がありまして、スペイン語でも先生笑いとれるんだっていったみんなに自慢していました。

ただこれ現地の先生の研修なんですけどやっている内容は最小公倍数、最大公約数のところで、それすらもやり方すらわからないというところで、指導法というよりは本当に子供に教える、知識を教えるっていうかたちの研修会でした。めったに前に立つことはなかったのですが、たまにああいう風にやらせてもらいました。

ということで2年間働かせてもらって、日本では経験できないいろんなことをできたんですが、その中でも特にいろいろ考えていたことがありまして、全活動を通して考えていたこととはということで、まず一つは果たして自分の活動が独りよがりの自己満足になっていないかというところがありまして、派遣前の現職教員の研修で知り合いになった先生が、「結局最後は自己満足だ」といっていたことがすごく心に残っていて、確かに自己満足で終わる活動もあったらやっぱり自己満足で終わらせちゃいけない、現地で何か残してほしいなというのがありまして、そこの葛藤はすごくありました。また現地の人にとって意味のあるものなのか、それもし意味があると現地の人が思えば自主的に、主体的にそれを受け入れてそれに取り組んでいるのかなと思いました。このことはよく自分で思っていたんですが、技術を移転するってよく目標としてあると思うんですが、技術を移転するんだっていう風に自分で言い聞かせているんですけど、それは実際価値観を、自分の日本で持っている自分の価値観を押し付けているだけなんじゃないかなというところもすごく思っていました。

さてここで質問です。ここからは日本へ帰ってきてから思ったんですが、もしアメリカ人が日本の学校現場にみんなの自分の持っているクラスにやってこられて、「あんたがやっているやり方あかんで、もうちょっとこういう風に教えるべきじゃないの」って片言の日本語でいわれたらどうしますか。素直に聞けるでしょうか。僕多分1年目でも日本人がいうこともあまり聞いていなかったんですが、もし自分のクラスにしかも片言の日本語でいわれたら聞けるかっていわれると、実際に皆さんどうなのかなって思うところがあって、実際に自分たち、皆さんがやるにあたってやはりそういう面があると思うんですよ。行って、全然知らない先生がやってきて、そこの現地の言葉も文化も知らないのに受け入れてもらえるのかって、普通に自分の立場で考えたらそれは聞いてもらえなくて当然ですよ。そういうところ。だからまずははじめは相手を理解する、必要性であったりとか、大切さと言うところはすごく感じさせてもらいました。

その一つに文化の違いもあると思うんですが、日本だと放課後も子供たちを残して勉強をちょっと教えたりだとか、休み時間の間に教えたりだとか、授業外で教えることもあると思うんです。それも現地で僕もちょっとやっていたんです、それもいいなあといって

いたんですけど、カウンターパートや同僚の先生にそういうのどうなの？って聞いたら「えっ誰がお金を払ってくれるの？その間の時間の」っていう返事だったんです。まあそれは現地の人、教師の仕事が授業をすることであって、わからなかったら子供の責任、なので授業外は仕事外なんですね。お金をもらっているのは授業の間だけでそれ以外はお金をもらえていない、だから私は働きません。っていうような考え方で、となるとやはりそういう活動は現地の人には受け入れてもらえない、じゃあ別の方法か考えなきゃいけないよねっていうようなことがいろいろありました。

また道行く人に馬鹿にされたことがありますか。日本に住んでて日本の道でボケ、アホとかいわれることはないですよ、滅多にね。ただ向こうにいと中米だったんですが「チンチョンチャン」っていわれるんですね。目が細い、アジア人っぽい人を見かけると、中国人がしゃべっている中国語のように「チンチョンチャン」って、歩いているだけでそこらかしこからそういう声が聞こえてくるんです。あとほかにもスペイン語でいろいろそういう言葉があるんですが、全然知らないのに道を去り際に「チンチョンチャン」っていわれたり、何でそんなこといわれなきゃいけないのかなって思うことがあったり、また、自分の家から学校まで行く途中の道があるんですが、そこらへんのところ歩いていたら突然後ろから石投げられまして、何やと思ったら、小さい子供が投げている、それまでスペイン語で怒っていたんですが、そのときだけはコラーって言って日本語が出るくらいブチ切れることがあったりとか。でも現地の人にはあまり何も思っていないし基本的にそういうことがあったので、一人にいても他の人がたくさんいてくるという状況があって、これは日本ではなかなか経験できないなっていうのがありました。

そうかと思えば、”*Aqui es su casa*”スペイン語でここはあなたの家だよっていうんですが、初対面の人、友達になって初対面で家に遊びにおいでよっていわれて、家に遊びにいったらもうしょっぱないうことがこういうことだったんですね。ここはあなたの家だから自由にしてくれていいよっていうような。それぐらい一面ではそういう差別があったりもう一面ではこうやってすぐに受け入れる、すぐにフレンドリーになれるっていうのがありまして、いろいろ考えさせられました。

日本の国鳥は何でしょう、話は変わりますが、先ほど大学の先生がおっしゃられていたのが、日本のことについてよく考えてねということでしたよね。日本についての質問をたくさんされますし、ということで日本の国鳥は何だろうと思ったときに僕完全に鶴だと思ったんですね。でもそうじゃないってことに気づいて、全く知らないということ、いろんなご存知の方もいると思うんですけど、実は鶴ではないんですよ。そういうことを知りました。

最後なのですが、長期で生活したから感じられたということでやはり日本では考えない、

相手の文化を理解して、その言葉を知ってその人の輪の中にとけ込んでいくというのはすごく面白いんだなという、相手に対する好奇心ということですかね、なんでこういうときにこういう言葉を使うんだろうとか、なんでこの人たちこんな祝日があるんだろとか、なんでこんなこと祝うんだとか、なんでこの人はこんな考え方するんだろというような、人に対する好奇心、もの、文化に対する好奇心というのがすごく身に付いたと思っています。

ありがとうございました。

#### 【質疑応答】

質問：帰国して日本のことで逆に驚いたことはありますか。

先生：日本は忙しいなってすごく思いました。現職教員ですので帰ってきて次の日に自分の学校に挨拶に行って、向こうでは午前中しか学校がなくて7時くらいに学校に行って12時くらいに終わるという形で、昼からビール飲んだりとか、友達と遊びにいたりとかっていう生活に比べて、日本に帰ってきて1週間後に7時から仕事で夜9時くらいにやっと終わって、帰りの車の中でも明日の授業のこと考えなきゃ行けないっていう忙しさはとても感じました。

## ニカラグアから 学んだこと

青年海外協力隊  
平成20年度1次隊  
小学校教諭 有村 健二  
(現: 奈良県御所市立  
御所小学校 教諭)



## なぜ、青年海外協力隊として発展 途上国に行こうと思ったのか？

- ・海外で教師として働くことに軽いあこがれを持っていた。
- ・日本人学校ではなく、日本とは全く異なる文化に身をおいて、視野を広げたかった。

## NICARAGUA (ニカラグア)

- ・人口: 550万人ほど
- ・メスティーソ69% 白人17% 黒人9% インディヘナ諸民族5%
- ・面積: 日本の5分の1ほど
- ・成人識字率: 76.7%  
(国連開発計画『人間開発報告07/08』)
- ・公用語: スペイン語(カリブ海側は英語が話される)
- ・1821年スペインから独立
- ・1979年から1990年まで内戦があった



## イメージしていた活動は？

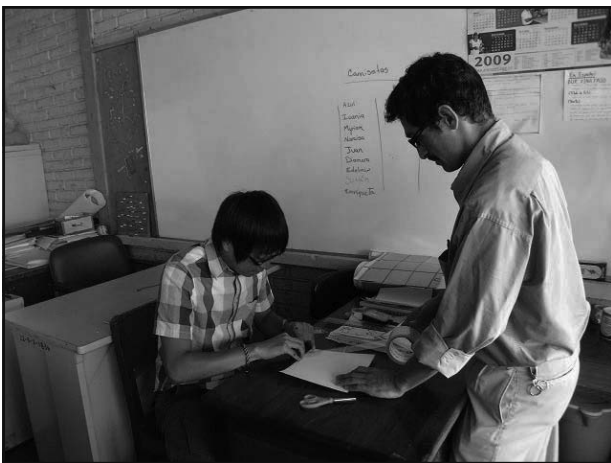
- ・日本で培った経験を活かして教育技術を伝える。
- ・日本の教育、文化を伝える。
- ・日本の学校と連携し、現地の学校とつなぐ。

色々教えに行くんだ！！

## 実際におこなった活動は？

- ・教員養成学校で算数の教諭として現地教諭と共に、授業の計画、実施、反省や教材作成
- ・公開授業実施の補助
- ・小学校教員に向けた算数講習会
- ・日本文化紹介

あくまで現地の人为主役



全活動を通して、考えていたことは、

果たして、自分の活動が  
一人よがりの  
**自己満足**になっていないか？

現地の人にとって、  
**意味のあるもの**なのか？

「**技術**を移転する」  
と言って、  
「**価値観**を押し付けていないか」

さて、ここで質問です。

もしアメリカ人がやってきて、  
こうやって教えるべきだと、  
カタコトの日本語で教えて  
きたらどうしますか？  
素直に聞けるでしょうか？

## 長期で生活したからこそ 感じられたこと

□ 相手を理解する必要性、大切さ

「だれがお金を払うんだ！！」

「知らないから教えられない。」

道行く人に馬鹿にされた  
ことがありますか？

## 長期で生活したからこそ 感じられたこと

□ 日本人(アジア人)に対するイメージ

「チンチョンチャン、馬鹿にする人々」


「Aqui es su casa  
(ここはもうあなたの家だよ)」

日本の国鳥は何でしょう？

## 長期で生活したからこそ 感じられたこと

□ なんて、面白いんだろう

「言葉を知り、文化を知り、人を知り、  
そこに溶け込むというのは。」



ご清聴ありがとうございました。

## 友情の架け橋～情操教育を通して～

高橋由美

(平成 20 年度 1 次隊 小学校教諭 ベリーズ)

---

みなさんこんにちは。私千葉県の大網白里町小学校教員をしている高橋由美と申します。派遣はベリーズという国で小学校教諭として派遣されていました。

ところで皆さんベリーズという国がどこにあるかご存知ですか。正直に教えてください。知っているという方すごい！有村さんは知っていますよね。ほとんどの方が知らないかと思うんですけど、実は私も合格通知をいただいてから「ベリーズ？アフリカ？」って思ってアフリカをまず先に探しました。でアフリカにない、どこということインターネットでベリーズで検索したら一番始めに出てくるのはベリーズ工房でした。アイドルの名前でした。結局ベリーズは見つけれなくて、よくみると中米のメキシコの近くにある国です。ではまずベリーズがいったいどんな国なのかということで皆さんにご紹介したいと思います。

まず国旗、実はこれすごくレアで世界の中で唯一国旗の中に人が入っています。これも売りにしています。これがメキシコのちょうど下の、縦長でだいたい四国ぐらいの大きさの小さな国です。

1981年にイギリスから独立をしまして、それまでは英領ホンジュラスって言う国でした。中米はスペイン語圏なんですけども、なぜかベリーズだけイギリスに統治されていたので英語でした。私はスペイン語を勉強できるのかなと思って楽しみにしていたら英語で、よかったですけど、すごく不思議な感じで、生活はスペイン語、学校は英語という変な環境で2年間過ごしてきました。頭の中はパニックです。学校は英語、家に帰るとスペイン語っていう2つ、みんないいじゃんっていうんですけど私は英語で精一杯でした。

人口は約31万人ということでこれは未登録の人もいるらしく、本当の数はよくわかってないそうです。

首都はエルボパンといいまして、ここ世界一牧歌的な首都といわれていまして何にもないです。ここ首都なの？というところで、ここ実はハリケーンがきて本当の首都は海沿いにあったんですけども、それを山側に移したということで本当に何もないような首都です。ぜひ一度行ってみてください。いや行かないと思います。

他民族国家ということでいろいろな人種、メスチソ、クレオールコ、黒人系ですね、マヤの人たち、あとはアリグラという民族、あとは中国人とかメローネというドイツ人系の変った方々も住んでいました。

みなさんこれ最近みたことないですか？世界の果てまで行って Q で最近ベリーズが特集されていたりするんですが、なんと世界第2位の珊瑚礁がベリーズにはありまして、これ



ブルーオールといいます。最近これが売りで、ダイバーにはすごく魅力のダイビングスポットだそうです。ちなみに一位はオーストラリアのグレートバリアリーフ、その次がベリーズなんです、実は。

これはマヤナ遺跡ですね。マヤナ遺跡という遺跡があります。こんなすてきなカリブ海で私は2年間活動してきました。

実際どんな活動をしてきたかといいますと、私が配属された小学校は複式学級で、日本という幼稚園生から高校生、中学生くらいまでの4歳から15歳までで80人しかいない小さな小学校、これ全校生徒です。この中に私もいるんですけど、あまりに同化しすぎてわからないかな。小さな小学校でやってきました。

スタッフは6人で女校長が25歳ということですからすごく実はやりやすかったです。どうかというと、初めての校長先生ということで私わからないという中で一緒に、私は実はちょっと年がいていて、じゃあ一緒に考えようということで、環境にはすごく恵まれていたなと思います。

あと本当の要請は算数とコンピュータという風に伺っていたんですけども、なぜか行ってみたら「ユミは先生やっていたんだよね、日本で。じゃあ体育と音楽と図工よろしく」って。まあやってはいたけど何の準備もなく行ったので、何にもそんなの持ってきてないんですけどというのが最初のスタートでした。でもあちらの先生方も算数はずっとやってきているし、実は教科としてなかったんですね、体育＝「ピー、遊んでおいで、カンカンカンおしまーい」っていうのが現実でした。音楽と図工も名前だけで音楽は毎朝歌を歌うだけ、図工もやったりやらなかったりまあほとんどやっていませんでした。ということでぜひ勉強したいということで担当しました。

あとは空いている時間に学校保険、この報告会、実は私たちのときには4月の駒ヶ根の訓練所に入る2日前にあったんですね。そのときの講師の方が冊子をくださって、こういう風に学校保険やってみるといいですよってことで、本当に2日前なんですけどなるほどじゃあやってみようかなと思ってテキストを持っていきました。やっぱり行ったところは学校保険が本当に行われていなかったの、そこにちょっと力を入れようと2年間がんばってみました。

あとは購買のおばちゃん。実は1年目これをやっているときに、私何しにきているんだろうって正直思っていました。お金を数えて子供たちが時間になると「ユミおかし出して、売って」と。小さな小学校なのでほかの先生に本当は担当が決まっているんですけど、もうユミ＝購買のおばちゃん、早くおかし出してということで、何かというと外国、中米、たぶん他の国もあると思うんですけど、業間休みにお菓子を売ります。でお腹がすいている子はお菓子を食べてそれでちょっと腹ごしらえをしてからあとの授業に臨みますけど、それが学校の収益につながっていて、お菓子を買うことによって紙を買うとかインクを買ったりとかそういうことにつながっています。日本じゃ考えられないんですけど、外国で

はこの時間をすごく楽しみにしていますし、学校側にしても利益になっていてよかったようです。

体育 PE、主な活動内容は、1年目は私が授業をやっていました。やったことないからやってみせてよということやらせてもらったんですけど、正直1年間は現地の先生は一切きてくれませんでした。日本でいう空きコマができたという感じですね、ユミがやってくれている間に丸付けしようとか。見てほしいんだけどな授業を、と思ったんですけど自分自身語学が精一杯だったのと、何をやっていいのかわからないどうしようって思っていたのがあって、ちょっと呼んでこういう風にやったらいいよねっていう話まではじめの半年ぐらいはいきませんでした。

でも1年目のときにこれはまずいな、私帰るしと思ひまして、2年目からは現地教員の授業サポート、やはり語学がどうしてもできなかったので、現地の先生について私の代わりにしゃべってくれませんか、こういうこといいんだけど、っていうと大人同士は私の英語がわかるんです、何をいいたいかは何となく。子供はやはり私のいいたいことがよくわからなくて、まず大人にいったから先生に子供にいったらう。2年目は子供も私の英語がだんだんわかってきて、何となくこういうことっているんだらうなってことを理解してくれるようになりました。でもこれが功を奏しまして授業にきてくださって、実際に自分が授業をやってくれるようになったんですね。

あちらの先生方は本当に働くことが面倒くさいとかそういう気持ちが強いので、日陰でみると体操着に着替えないとか、本当に体育は全くやりたくない、南国で暑いので気持ちもわかるんですけども、とにかく体育はやりたくないというのが正直な気持ちです。そんな先生方でワークショップ、体育隊員が結構いましたのでこういうふうにと体育面白くできるよって紹介したり、先輩隊員が PE ハンドブックという体育の教科書を一から作っていました。それを全部印刷したものを、自分の小学校や近隣の小学校にこういう風に使うといいよねって紹介もしました。

あとは体力テスト、これは私が行ってから一緒にやったんですけども、実際自分もすごく興味がありまして、やはりカリブ海の人たちだから身体能力がすごく高いんじゃないって思って、日本と比べてみたかったんでね。実際1年目やってみたんですけど、反復横跳びとかやったことがないので動けないんですよ。まず反復横跳びを教えるだけで1時間、こういう風にえっどうやって動くの？という感じで、日本の子供なんか5年生くらいならずっとやってきているのですぐ数値とかとれるんですけど、どんな大人の子でも最初から反復横跳びを教えなきゃいけなかったっていうんで、体力テストを実施するのに3ヶ月かかりました。毎週体育1時間でやっと終わったのが3ヶ月後くらいでした。ハンドボール投げなどをやった結果、どうやら日本の子供の方が体力はあるなというのを感じました。というより子供たちが本気を出していないというのもあったかもしれないんですけど、ちょっと面白かったです。

成果としては現地教員が授業を教えられるようになったというのと、子供が体育が教科だこの2年間で感じてくれるようになりました。昔は体育＝遊びの時間だったんです。これが今になっては体育だからちゃんと整列。実は前ならえがいいかどうかというのは自分には疑問なんです。行ったときは前ならえさせていたんですけど、前ならえができません。で出席を、身長順に並ぶとかそういうことが全くないので集合っていうとぐちゃって集まってしまって。ここの体系作りやるので一年かかりましたね。「なんで背の順に並ぶの？早く来た順に並ぶのでいいに決まってるじゃん」、「でも前の子が見えなくなっちゃうし」とか説明してやっところこういう風に並ぶようになって、あと体操服、運動して大汗をかくので、頼むからTシャツと短パンを持ってきてっていても、見ていただくとわかるように制服であったり運動靴であったりヒールのあるサンダルを履いてきたり、やっところ1年かけて体育っていうのが体育の運動服を着てやるものなんだなっていうところまで行きました。準備運動、準備運動もやってなかったの、子供たちで体育委員をつかって準備運動したりとかしました。

PEハンドブックっていうのが日本でいう文部科学省に認められて、小さい国ですけど全員の先生に手渡すようにということでJICAと一緒に資金援助をしながらやりました。授業や体力テスト、これ課題ですね。実際私が帰ったあとにやるの？ってちょっと心配です。今こっそり見に行きたいですけど、「やるよ、ユミありがとう、いろいろ教わったからがんばるね」っていったけれども。あと体力テストも2年間だけやって、比較をとったんですが握力計がベリーズで1台しかないとか、そういう関係上ちょっと厳しいのかなって思っています。じつはベリーズは体育に力を入れていまして、体育隊員はすごくいたんですけども、その体育隊員が一気に帰ってしまったことにより、ここまで一生懸命やってきたものが次に引き継がれるのかなっていう心配があります。

ほかに音楽ですね。これ実は大学の先生がおっしゃっていた物がない、体育はそれでもボールとか結構あるんですよ、売っているんです。リコーダーは手に入ったんですが、ピアノとか音を出す楽器はほとんど手に入りませんでした。これも音楽、現地の先生が小さい音楽の授業を受けていなかったということもあって、もうドレミファソラシドも知りませんし、ここピースコーっていうアメリカの協力隊のようなものも入っていて、その人たちはABCで教えていたんです。で私たちはドレミで教えてしまったので、ベリーズの人たちはすごく頭が混乱してしまって「前はABCで習ったのにドレミって何？どっち？」っていわれてこれは問題なのかなって思いました。実際に音楽っていう教科がないので、ボランティアがきて教えてることがすごく多いんです。これはベリーズの教育省が音楽っていう教科書、授業を確立することが必要なのかなってすごく思いました。私は音楽が専門ではないので、音楽隊員さんがたまたまいたので訪問して一緒に授業をやらうこともしました。あとは簡単なリコーダーですね。リコーダーは日本から送ってもら

いました。

あとは成果としては同じように音楽の時間が一週間に一時間できるようになりました。子供たちが演奏する。今まで演奏したことがないので、とにかく触ったり、叩いたり、音を出したり、ってすることの楽しさに触れることができたのかなって思いました。課題としては現地教員は音楽というものを知らないんです。音楽は基礎知識が全くなく、本屋さんもないので勉強したくてもよくわからない、ただ最近インターネットがあるので、意欲的な人は調べて音楽を教えるってこともできますが、教える先生がない、あとは本当に道具の不足ですね

図工なんですけど、主な活動としては1年目2年目ともボランティアが、私が授業をしました。簡単なテキストブックを作って、こんなのあるといいんじゃないっていうことで教科書みたいなものも作っていきました。でも一回やっちゃうと、それ去年やったよねっていうことで新しいものを考えていかなきゃ行けないので、それは本当に現地の先生がやはり自分で考えていくっていう大切さも感じました。

あと夏休みの特別講習ということで壁画をやったり、絵画の工作教室なんかも開きました。でも実際にきたのは7、8人です。夏休みにやるからきてねって80人にいったのにみんな忘れていたり、行くよなんていいながら遊んでいたりということで、日本でも一緒なんですけど意欲的な子だけがきました。それでも何かを伝えられたかなと思います。これも図工っていう教科としてではなくて、今まではカードを作るとかそういうので終わってたんですけど、子供たちが絵を描くとか、小麦粘土をやったんですけど、小麦粉を水で溶いて、コネコネって触って、粘土の感触とかそういうのもできたのかな、感じられたのかなって思っています。あとは実際に物がなくて現地の教員の人にこのシーズンなんかいいものないかなっていうと「あ、あの木にこんな実みたいのが今なって、あれに色塗ったら授業になるんじゃない？」とか、そういう風に一緒に考えていきました。

課題、材料不足です。ほとんどといっていいくらい私のポケットマネーで紙を買ったりしていました。JICAに申請をするっていうこともできたんですけども、ちょっとした簡単な紙とかは私が近くの文房具屋さんで買ってしまっということが多かったです。実際にこれでよかったのかなっていう反省はしています。なぜなら私が帰ったあとはじゃあそれは誰がやるのってことになるので、本当はお家の方とか、こういう資金をどこから持ってくるのかとか、学校で考えなきゃいけないのかなって感じています。ただこの2年間で図工をやる、結局どこにも資金がない、テストをやる紙もインクもないのになんで図工なんかやんなきゃいけないのっていうのが実情でした。だからせめて私がいる間だけでも感じられればということで、こういうやり方があるよっていう風にみせるだけでした。

あとは学校保健ということでこの絵に出ますけども、実際に活動の前に保健の先生か

ら染めだし液をもらっていてそれでやりました。健康診断をやりました。身長体重視力と、これもよかったです。

衛生指導ということで村の近くに日本人の NGO の人がたまたまきていて、村と一緒に貧困層の家庭訪問とかをして活動しました。保健室がなかったので、もの、救急セットとか具合が悪くなったら保健室にくるとか、そういう機能もありました。歯磨き指導。

あとは危険物マップということでこれもいただいた大妻女子の先生のテキストに載っていたんですけど、どこに危険なものがあるかということを探しました。

成果として子供たちの発育状況を理解することができた、あとはいろんな安全とかの意識も高まりました。

課題はやはり医療品の補充で、これは JICA からいただいたり自分のものだったり、本当は赤十字に行ってもらおうという形だったんですが、2 年間では継続的な活動ということで医療品をもらえるところまでは行きませんでした。

ということでその他の活動ということで、各分科会、自分は算数隊員だと思っていったので算数分科会に入って算数ドリルと升目ノートを作りました。あとは日本紹介や独立記念のパレードに参加したり、現地の人と交流して料理を作ったり伝統衣装も作って持って帰ってきて、今はそれを学校ですごく重宝しています。

日本の教育活動にどう活かしていくかということで、派遣中は異文化交流ということで作品、鯉のぼり等、日本で作ってもらって4年生、自分のクラスと一緒に交換をしました。こちらではしおりを作って送りました。あとは寄付の協力ということで学校の方に声をかけて頂いて、いろんなもの、鍵盤ハーモニカ、サッカーボール、リコーダーだとかを学校で集めて頂きました。それをうちの弟や母がきたときに持ってきてもらいました。なぜかって輸送代が高かったのです。

帰国後ということでクラスで授業をやりました。あとは教員間でこの間は出前授業ということで教員の先生にベリーズのことを知ってもらったり、異文化交流ということで先生たちにお伝えしました。日常生活の中でということで、先ほどいった外国籍の子たちがクラスにいますので、普段のときからその子たちを取り上げてその国のこと知りたいということで活かすようにしています。

最後に一番目、派遣前に何か持っていけるものを表にして集めた方が絶対にいいです。現職教員である強みをフルに活用ということで、私なんかは算数の大きい三角形の三角定規を持っていったりとか。あとで個人的に聞いてください。いろいろ持っていったんです。

二番目は派遣中はネタ集めということで、写真とかも普段の活動のイエーイとかっていうのじゃなくて、この写真必要かもというような、例えば食べ物の写真とか、あとこの場

所日本にはないかもとか文化とか食べ物とかがわかるもの授業に使えるものを集めて、で派遣中に準備した方がいいです。日本に帰ってきたら忙しくて、スライドつくって子供にこういうことをしようっていう時間がないので、時間がたっぷりある派遣中最後3ヶ月くらいに頭を日本国モードにかえて、自分のこういう授業をやろうとか、そういうことを考えておくといいのかなって思いました。自分も実際そうしようと思ったんですができませんでしたね。

最後に教員生活にとって絶対にプラスになります。何かつらいことがあっても最近ベリーズのことを思い出すとがんばろうと思いますいろいろなことに使えます。本当に人間としての深みが出ると思いますのでぜひ楽しんで2年間健康に気をつけてがんばってきてください。ご清聴ありがとうございました。

#### 【質疑応答】

質問：いちばん持っておけばよかったと思ったものは

先生：日本のものを持っていっているつもりだったんですが、お箸とか、でも雑誌とかすごい興味があるんですよ、日本の子たちってどんな服着てるの？とか、子供たちの興味関心を引くこともできるので、日本の文化のものは意外と前の隊員さんが持ってきたものは結構あるんですよ。ドミトリーに剣玉があったりして、そういうものは結構そろっていたりするんですけど、高校生が読むような雑誌があるとよかったかなって思います。あとはスライムを作るもとをこっそり持って行って最後の授業でやったら、「何これ！楽しい」って感じになったのでまあ一発で終わっちゃうんですけど、何か日本でできるような科学とかそういう工夫、こういうものもあるんだっていうものも持っていくといいかなって思いました。

質問：もう一度、任地国に行くとしたらどんなことを準備していくかなとそこをぜひ聞きたいと思いました。

先生：もう一回行くとしたら、やはり日本の教科書とかも持っていったんですけど、英語で書いてあるものとかそういうのもっと下調べしておけばよかったなあというのがありました。日本のもの教科、お勉強、学習に関係するもので、たとえば何で行かれますか？

質問：小学校教員、理数系です。

先生：理数系だとしたら日本で行われている実験とか、あとは具体物が使われているものの事例集とかそういうものを持っていくとすごくいいと思います。

# 平成22年度帰国報告

## 国際協力と帰国後の社会貢献

20年度1次隊 ベリーズ 小学校教諭  
高橋 由美

## Welcome to BELIZE !!



## ベリーズってどんな国??



- 1981年 イギリスより独立
- 人口 約31万人
- 首都 ベルモパン
- 多民族国家

メスチソ	48%
クレオール	25%
マヤ	11%
ガリフナ	6%



**ブルーホール**  
(世界第2位のサンゴ礁)

**ラマナイ遺跡**

## ベリーズでの主な活動

**配属先:コンパッションスクール (ヨーククリーク村)**


- 全校生徒 約80名 (4歳から15歳)  
スタッフ 6名 (女校長25歳)
- 体育, 音楽, 図工を担当
- 学校保健, 安全管理の充実
- 購買のおばちゃん



## 体育 (P. E.)

**【主な活動内容】**

- 1年目→ボランティアによる授業 2年目→現地教員の授業サポート
- ワークショップの開催
- P. E. ハンドブック (体育の教科書) の普及
- 体力テストの実施



**【成果】**

- 現地教員が授業を教えられるようになった。
- 子どもたちが、体育を教科として認識するようになった。  
(準備運動, 体育のできる服装, スキルの向上目的)
- P. E. ハンドブックが教育省に認められ, 現地教員に配布された。

**【課題】**

- 授業や体力テストを現地教員が実際に行うか。
- 体育隊員の減少による, 活動衰退。

## 音楽 (Music)

### 【主な活動内容】

- ・1年目, 2年目→ボランティアによる授業
- ・音楽隊員による訪問授業
- ・リコーダー指導



### 【成果】

- ・“音楽”の時間が確保されるようになった。
- ・子どもたちが、演奏する楽しさに触れることができた。

### 【課題】

- ・現地教員の音楽に対する知識の低さ。
- ・楽器, 楽譜などの道具の不足。

## 図工 (Arts & Craft)

### 【主な活動内容】

- ・1年目, 2年目→ボランティアによる授業(2年目現地教員と授業案作成)
- ・簡単なテキストブックの作成
- ・夏休み特別講習(壁画指導, 絵画・工作教室)



### 【成果】

- ・子どもたちが作る楽しさを味わうことができた。
- ・現地教員が、その季節や地域の特色を生かした授業案を考えるようになった。

### 【課題】

- ・材料, 道具不足



## 学校保健・安全管理の充実

### 【主な活動内容】

- ・健康診断の実施(身長, 体重, 視力, 聴力測定など)
- ・栄養・衛生指導(NGOと連携・・・貧困層の家庭訪問)
- ・保健室機能の充実
- ・歯みがき指導
- ・危険物マップの作成



### 【成果】

- ・子どもたちの発育状況を把握することができた。
- ・健康や安全に対する意識が高まった。

### 【課題】

- ・医療品の補充・・・資金不足
- ・継続的な活動

## その他

### 【主な活動内容】

- ・各分科会(体育, 算数)への参加
- ・算数ドリル, マス目ノートの作成
- ・JAPAN DAY(日本紹介イベント)の開催
- ・独立記念パレードへの参加
- ・現地の人との交流(料理作り, 伝統衣装作成など)



### 【成果】

- ・分科会を開くことで、隊員同士の情報交換や資料を共有することができ、活動に生かされた。
- ・現地の人に『日本』について知ってもらうことができた。
- ・現地の人との交流をとおり、異文化理解につながった。

### 【課題】

- ・隊員不足による活動の小規模化

## 日本の教育活動にどう生かしていくか

### 【派遣中】

- ・異文化交流  
(伝統的な作品, 絵などの交換)
- ・寄付の協力  
(学校, 個人で使わなくなったもの)
- ・ベリーズ通信



### 【帰国後】

- ・異文化体験授業  
(総合的な学習の時間, 外国語活動など)
- ・教職員間で共有  
(研修会など)
- ・日常生活の中で





## 最後に・・・

- ①派遣前にアイテム集め！  
(現職教員である強みをフルに活用)
  - ②派遣中は、ネタ集め！  
(帰国後、授業に必要な材料の収集)
  - ③派遣中に準備を！  
(帰国後は目が回るほど忙しいので、余裕のある時にプレゼンや授業の準備)
- ☆教員生活にとって必ずプラスになるので、楽しみながらがんばってください！！

ご清聴ありがとうございました！



質問等ありましたら、ご連絡ください。

高橋 由美  
yumipopari@yahoo.co.jp

## ストーンマナーの島で

山川和宏

(平成 20 年度 1 次隊 小学校教諭 ミクロネシア)

---

平成 20 年度 1 次隊でミクロネシア連邦のヤップ島コロニアミドルスクールに派遣されました山川和宏と申します。今は兵庫県の尼崎市で小学校の教員をしています。

はじめに自分が協力隊に参加した動機なんですけど、協力隊に参加するまで一度も海外に出たことがなくて、自分の殻を破りたいな、自分が変化したいなと思って志望しました。それともう一つ、もう 10 年以上前になるんですが、北海道の富良野塾というところで 2 年間勉強していたんですけど、2 年間一つのことを打ち込んだ生活が忘れられなくて、それと似たにおいを協力隊に感じて志望、参加させて頂いたんです。実際、自分が変わったかどうかは最後にお話しするんですが、多分協力隊に参加する前の自分だったらこうやって人前でお話する側に進んで出ようは思わなかったのも、そういった面ではちょっと変わったのかなということも思います。

僕が行ったミクロネシア連邦というのは、日本からずっと南に行った北半球なんですけど、矢印のところらへんにあって 607 の島があります。ほとんど無人島なんですけれど。公用語は英語それに現地語です。

これがミクロネシア連邦の大まかな地図なんですけど、4 つの州にわかれているそれぞれの州で言葉も違うし文化も違います。例えばコスラエの方だと敬虔なカトリックの島でも田舎です。ポンペイの方は首都があって一番栄えています。チュークは人口が一番多いんですけどインフラが全然整備されていない。ヤップは一つだけぽつんと離れておりまして古くからの伝統をととても重んじているそういう島です。

これがヤップ島です。車で一時間あれば回れるような小さい島です。人口 8 0 0 0 人くらいでここも英語が使われているんですが、日常生活はほとんどヤップ語が使われていません。

これはヤップで 1 番重い石のお金です、今も実際に使われています。例えば不動産、土地のやり取りだとか結婚するために持っていったりだとか、重くて持っていけないんですけど、使っています。この価値っていうのは大きさを比べている訳ではなくて、お隣のパラオという島からこの石を運んでくるんですけど、そのときにどれだけ大変だったかということで価値が決まります。例えば嵐の中必死で持ってきたりとかということで価値が決まるので、しかもそれを話す人のプレゼンのうまさでも価値が決まるのでまあ話し上手な人の石は価値が高い、そういうお金です。それを運んできたカヌーが下の方なんですけど、これにも時々自分も乗らせてもらいました。

あとヤップというのは男と女がなかなか一緒にいられないというか、そういう島です。

ここはメンズハウスというんですが女性は決して立ち入れない建物です。逆に女性しか入れない建物もあります。

向こうの方では基本的に伝統的な衣装を着ています。21世紀というか今世紀に入ってだんだんTシャツとかきるようになったので基本今はTシャツを着て、伝統的なラバラバというんですけどスカートをはいたりしています。自分はホームステイをしていました。

最初にホームステイを半年ほどしてそれからアパートに移ったんですが、最初にホームステイしたところでいろんなしきたりであるとか価値観というものを教えてもらってとてもよかったと思っています。ここに住んでいた家です。

食事ですね、みての通りですねあまりおいしくないです。これはごちそうです。前の日にパーティーがあってホームステイ先で出してもらったごちそうです。バナナとか芋とかココナツとかキュウリとかシーチキンとか、そういったものがけっこう出てきます。

あと給食がなかったので学校ではこうやってラーメンの袋にお湯入れたり、そのままチキンラーメンみたいにぼりぼり食べたりします。これが主食のタロイモです。かなりでかいです。

ご飯はこうやって色塗るんです。オレンジ色とか青とかピンクとか、ちょっとこういう色塗られると食欲が無くなるなと思っています。

これもそうです。左下がウミガメ、右がわかりにくいんですがコウモリです。もうよっぽどのときにしかでないごちそうです。

自分が犬を飼ってたこともあって食べてはいないんですけど、たとえば昨日までかわいがっていた飼い犬が次の日に食事に出てきたりとか結構あったみたいです。あとうなぎというのは食べちゃいけないものなんです。向こうではうなぎというのは身分の低い人が食べるものということで決して食べてはいけないものといわれています。お隣の島なんかは逆に神様の使いだから食べてはいけないとかという事になっています。で試しに自分はうなぎパイを向こうの人に食べてもらったんですけど「うまいうまい」って言って食べていました。ただそれ何でできているの？と聞かれて、うなぎが入っているっていったらペって吐き出していました。それほど食べてはいけないものみたいです。

あともうひとつこれは結構ヤップというかミクロネシアで有名なんですけど、ビートナツって言ってピンロウ樹という木の実に、白いのは石灰です。石灰をまぶして噛むととても気分が良くなるということで、向こうの人は四六時中食べてます。で食べると唾液が赤くなって血みたいになるんですけど、それは飲み込んだらいけないのでみんな吐き出しに、例えば授業をしていても子供が噛んでたら授業中唾を吐きに外でたり、先生が外に出たり、これはかなり悩まされました。ただこうやってビートナツをわくわくしてみんな噛むのが向こうのコミュニケーションというか話の場、団らんの場合だったので自分も食べるというか噛んで、参加させてもらったりしたんですけど、これをかむと石灰なので歯が解けていくんですよ、だから向こうの40代30代ぐらいの人はもうほとんど歯がなかったりします。それでもやめられないみたいです。

あと左側のはサタオといって太平洋の島では結構飲まれているものですが、衛生的でないのでこれをのんでたとえば赤痢になったりとか、そういったことも起こってるので飲むときは重々注意して飲んだ方がいいと思います。右側はココナツで造ったお酒です。かなりおいしいです。自分はお酒を飲めないのほとんど飲まなかったんですけど、ほんのり甘いおいしいお酒です。

戦跡、これ日本軍のものなんですけど、アジアの島々ですと日本が否応なくその土地の人たちを巻き込んだんだなということを実感させられます。基本的に自分が暮らしていたヤップの島の人たちは日本人のことをとてもよく思ってくれていて、大好きって言うてくれるんですけど、戦争の話になるとやはりいろいろと言われたりということもありました。

狭い島なので余暇がやはり限られていて、これはダイビングと釣りの絵なんですけど、やはり毎週末できる訳じゃないので休みのときの時間のつぶし方というか過ごし方はかなり悩まされました。

あとこれが伝統的なダンスの写真です。ヤップダンスと言って。自分が一番後悔しているのはこういうダンスとか向こうの伝統的な技能をもっともっと学んできて、こっちに帰ってきたときに、例えばちょっと踊りを教えてみたり踊れてみたりできたらよかったですけど、いつでもできると思っているうちに隊員生活が終わってしまって、それを今でも後悔しております。

以上が日常生活というか向こうの暮らしのことでした。まあ食事に苦勞したり余暇の時間に苦勞したり、あとヤップっていうのは首都とめっちゃめっちゃ離れていまして、飛行機を乗り継がないと行けないんですけど、首都にあがるのに地理的にもそうなんですけど金銭的な苦勞、10万円くらいかかるのでなかなかプライベートで首都にあがってほかの隊員と情報交換するというのができなくて、苦勞させられました。あととにかく暑いです。毎日30度以上です。あとヤップ時間というか、向こうの人たちの時間の感覚が結構やはりゆったりとしていて、例えば12時に待ち合わせしたら夕方にきたりだとか夕方に待ち合わせしたらもう夜中にきたりとか、そういう時間の流れです。軽いホームシックもあったんですけど、基本なれました。自分もルーズになったし人ってなれるもんだなあってことを学びました。

ここから活動の話なんですけど、自分が活動していたコロニアミドルスクールというのは1クラス40人くらいの、向こうでいう中学校です。

時間は毎日同じでこういう校舎、ここにあるのがチャイムです。こういう棒でガンガンでならしてチャイムにしていました。その反面結構コンピュータが入っていたり、トイレは小さくて、向こうの人ってトイレをほとんど使わなくて草むらでしてました。

休み時間なんかは縄跳びしたり石をつかって遊んだり、日本の遊びも結構残っているの、花札したりボール遊びしたりお手玉したりフットボールしたりキャッチボール、これ

すごいなと思ってるんですけど、お手製のグローブを作ってキャッチボールしたり遊んでました。あとこれはペットボトルを瓶にしたりとかアイデアがすごいなあと思いました。このナイフ、何かというと鉛筆削りです。これで鉛筆削っているんです。でも誰も怪我しないし日本でこんなんで鉛筆削ってたらしばかれますけど、すごいなと思いました。

この二人は何かというと同級生です。向こうでは留年があるので10歳の子と17歳の子が一つの教室で学んでいたりとかしていました。こういう形なんですけどこれはちょっと飛ばします。

日本の学校との違いなんですけど、生徒指導というのは担任はしなくて、例えば何か問題が起こったらその子を校長室に行かせて校長に指導してもらいます。あと留年と退学がありますので、何か問題を起こした子はもうやめさせるっていうこと、夏休みは長いです。3ヶ月休んで教えたことはみんな忘れてます。あとスパイラル方式のカリキュラムというのは、休んで教えられたこと忘れるからまた同じことを繰り返すという、そういう意味です。向こうは日本でいうハネるが○なんです。だから○をつけるとこれはバツなのっていわれて、どっちがマルだかバツだかわからなくなることもありました。

ちょっとまじめな話をここからするんですけど、ヤップでどういう活動をしていたかという主に算数のことをやってきました。算数の授業改善ということで直接生徒に教える、あと担当教師への教え、1年目は主に自分が教える形にして、2年目は主にサポートに回るようなそういう感じで活動していました。あと算数学力テストというのは、自分が初代の隊員だったので、向こうの配属先の人が僕が何しにきた人なのか全然わからなかったんで、とりあえず1ヶ月で結果を出そうと思って、1ヶ月必死で教えて学力テストをやりました。1ヶ月前と1ヶ月後のテストをやってこんなに上がったろって言って、一緒にこうなるようにがんばろうっていうのを話したりしました。あとは教員向けの指導力向上のワークショップをしたり、あと体育、体育がなかったんですよ。

なので向こうの人はかなり運動不足で体も固いし体も肥満というか大きい人が多かったんで、少しでも運動できるように、ただ毎日30度超える炎天下なので1時間体育やるっていうのはかなり大変で、ちょっとずつちょっとずつ始めていって、2年かけてようやく小さな運動会ができたというそういう状況です。

あと放課後学習をやりました。これが一日のタイムスケジュール、びっしり埋まっているように見えますが、例えば雨が降ったら体育がなかったり、午前中の授業も自分が全部教える訳ではないので、そこまで慌ただしいという訳ではなかったです。

算数で何が問題になっていたかという、いろいろあるんですが一番は基礎的な計算力が身に付いていないということです。中学2年生になっても九九ができない、っていうことがありました。なのでいろんなことに手を出していったんですけど、まずは基礎的な計算力を身につけなきゃいけないということで、低学年だったらもっと違うことがあったかもしれないんですけど、高学年になってそこまで戻れなかったんで、まず基礎計算力を身

につけるということでドリル学習をしました。計算タイムといって算数の授業の最初の 5 分間とにかく計算問題をやるっていう時間を取りました。その中で取り組んだ一つがこれ、九九の表なんですけど、これを書かせる。まず 6 年生の子にやらせたんですけど最初は全然できずに、回数を重ねていって、それを記録に書かせていくうちに最初は 36 人中 3 人しか 3 分以内に九九の表を埋めれなかったんですけど、10 回繰り返したら 32 人埋めれるようになりました。10 回目からは 3 分というのを 2 分に縮めて、10 回やらせたら 27 人の人が 2 分以内にできるようになったので、やってなかっただけでやればできるんだなということがわかりました。

そうやって基礎の計算力が身に付いたところで、また学力テストをやりました。問題は学年によってかえてまいす。5 年生の問題は日本でいう小学校 2 年生レベル、6 年生は 3 年生レベル、7 年生は 4 年生レベル、8 年生は 5 年生レベル、で九九の特訓をしたのは 6 年生なんですけど、6 年生はやはり伸びたので基礎の計算力が身に付けばだいぶ変わっていくんだなということを感じました。

その成果というかノウハウというのをワークショップでヤップ島内でまずやって、それから 2500 キロ離れたコスラエっていう島から呼んでもらったので、そっちに行ってヤップでこんな実践していますっていうのを発表したりしていました。そうしたらヤップよりもコスラエの人たちの方が興味を持ってくれて、計算タイムという言葉が定着していて今も実践、続けてくれているみたいです。

直面した課題は先生のやる気がないということ。やる気が無いのは教員は、ま日本もだんだんそうなりつつありますが、社会的にあまり認められていないというのがあります。子供に夢を聞くと先生になりたいっていう人はいないんです。スーパーの店員になりたいとかそういう夢を語ってくれるんですが、先生になりたいという人はいないです。だからどんどんどんどん辞めていきます。自分がこの人にくっついてよっていわれたカウンターパートはもう定年間際でした。2 年後やめるってわかっていました。なのでどうしようっていうのがあったんですけど、そのカウンターパートがとってもいい人で自分の好きにやらせてくれたので、その先生のクラスでまずいろんなことを試みさせてもらって、うまくいったことをほかの先生に伝えていくというような形でやらせてもらいました。

失敗なんですけどまずこれ 1 こめの失敗です。何かというと自分で教えすぎました。結局自分が帰ってから何が残るかということなんですけど、自分ばかりやっちゃうと先生たちにそれが残っていかないということですね。協力隊という言葉はほんとだなと思ったんですけど、協力、お互いが協力し合うことが大事なんだなと思いました。もう一点は初めからいろいろ試みすぎない、じつはさっきの写真はよその学校で教えていたんですけど、よその学校に行ったりあるいは大学に行って、今度先生になる人に教えたりっていうことを最初からやってるうちに手が回らなくなりました。はじめはやはり自分がその島、あるいはその任地の生活に慣れていくということも大事なので、最初から飛ばしすぎるとけっこう大変だと思います。

あと失敗その2、これは日本から取り寄せたものでそろばんと顕微鏡です。顕微鏡は役に立ったんですけど、物品の援助は計画的にやった方がいいなと思いました。結局ものもらうということに対してもらったらもちろんうれしいんですけど、何でもものに頼るようになったり、前の写真で段ボールを使ってキャッチボールをしてるっていうそういう写真を見ていただいたんですが、そういう向こうにあるものでもなんぼでも工夫すれば利用できる。例えば体育にしてもペットボトルでジャグリングやったりボーリングやったりできる。そういったことがあったので、何でもものに頼るのはどうかなと反省しました。あとそろばんなんかもやっているときは良かったんですけど、じゃあ自分がいざ帰ってそのあと現地の人だけで管理運営できているのかっていったら実はできていなくて、それも自分の失敗だと思っています。

失敗その3は、これはコスラエのワークショップの別の島でやったワークショップのことなんですが、実はそこに至るまで紆余曲折がありまして、かなり初期の段階でやりたかったんですけど、事務所のボランティア調整員の方となかなか人間関係うまく築けなくて、その方がいるときはうまくいろんなことをお願いできなくて、その方が移ってようやく実現できたということがありました。もちろんお互い人間なのでお互いに至らない点があったんですけど、人間関係がうまく行っていた方が活動はスムーズに行きます。それは現地の人もそうだし隊員同士もそうだと思います。

自分の中の成長としてはまず語学コミュニケーション能力の向上、まず帰ってきて向こうではずっと英語だったのでまずTOEICの試験受けました。リスニングは100点以上あがっていましたが、逆に文法の方は下がってしまいました。でも向上したんだなと思います。あと一人では何にもできないので、何でも一人でやろうとしなくなった。で日本の良さがよくわかりました。日本の食事はおいしいです。ただ根本的には変わってないのかなぁと思います。そんなに、自分の中のこういった部分は大きくなったああいった部分は大きくなったというのはありますけど、結局自分という人間は変わらなかったなと思います。これからなんですけど、これはおすすめなんですけど帰国後の職場復帰については自分から伝えた方がいい、もとの所属先に戻るのか別の学校に移るのかというのは、自分から伝えておいた方がいいと思います。自分は元の配属先に戻ったんですけど、また1年で別の学校に出なきゃいけないということが事前に決まっていたらしくて、それを知らなくてまた1年で移らなあかんということでちょっと苦労しました。

あと協力隊の体験をどうやっていかしていくかは自分次第。周りこそそこまで期待してないです。自分がやればできるし、自分がやらなければ何も出来ない、自分はどうしてもやりたかったんで日本の小学校の先生たちに自分の活動を話したりっていう機会を持ったんですけど、それも自分が言い出さなければできなかったんで、結局自分次第だなぁと思います。あと向こうで活動しているうちから買っておくと、使えそうな物品を身につけておくということですね。

これは向こうでただで飲めたヤシの実が新宿で 700 円で売ってました。びっくりしました。ご清聴ありがとうございました。

#### 【質疑応答】

質問：報告とは関係ないのかもしれないのですが、資料の最後の表はなんでしょう。

先生：これが学力テストの結果で、一部ちょっと消えちゃってるんですけど、どういう問題をどれくらいの子ができたかということで、例えば算数 A ってやつは足し算引き算かけ算割り算、そういった問題をどの学年の子がどれくらいできてるかということなんです。やはりかけ算割り算が入ると急にできなくなる。足し算引き算はまだできるんだけどかけ算が入るとできなくなる、割り算が入るとできなくなるということで、まず九九をやる、どこが弱点か、どこをまずやってかなきゃいけないのかということを見つけるのに参考にしました。だんだん複雑な問題になっていくと全然できないので、下の方はかなり点数悪いんですが、見てなかなかわかりやすすくないと思うんですけど、学年があがったからできるというもんでもなかったんです。できないところは学年があがっていてもずっと課題になっているということが発見で、早いうちに例えば九九であるとかかけ算であるとか、そういったところを押さえなあかんということを確認するのにも役立ちました。

質問：活動が波に乗ったというか、これに集中していこうと思った時期について

先生：向こうは夏休みで年度が替わるんですよ、9月から、どこもだいたい日本以外はそうなのかもしれないんですけど1年目終わって、3ヶ月の夏休みの間、何も子供たちに直接教えるっていうことができなくてその間に次こうしてやろう、ああしてやろうっていう準備を比較的ゆっくりできたこと、やはり毎日毎日だといろんなことに追い立てられて、立ち止まって考えることがなかなかできなかったのも、そうやって立ち止まって考える時間を持てたことが一つ自分の中では大きな変化になったと思います。



## ヤップ島の教育現場より

青年海外協力隊  
平成20年度1次隊  
山川 和宏

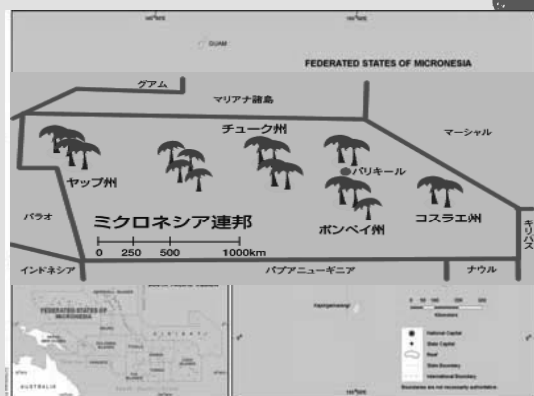


## ミクロネシア連邦



## ミクロネシア連邦

- ◆ 面積 700 km<sup>2</sup> (奄美大島とほぼ同じ)
- ◆ 人口 11万人
- ◆ 東西約2500kmにわたって点在する607の島と環礁から成り、ヤップ・チューク・ポンペイ・コスラエの4つの州に分かれている。
- ◆ 公用語は英語。それ以外に、8つの現地語がある。
- ◆ 通貨 米ドル
- ◆ 宗教 キリスト教(プロテスタント・カソリック)
- ◆ 紀元前4000年から2000年頃に、現在のフィリピンやインドネシアから渡ってきた定住者がいたと考えられている。
- ◆ 16世紀終わり以降、スペイン→ドイツ→日本→アメリカの統治を受ける。1986年に独立。



## ヤップ島の基礎データ

- ◆ 面積 100平方キロメートル
- ◆ 人口 約8000人
- ◆ ヤップ州には、東西1200kmの海域に138の島(うち22が有人島)が点在している。ヤップ本島と離島では、言語や文化・習俗が大きく異なる。
- ◆ 公用語は英語。日常生活では、ほとんどヤップ語が使われている(※学校では英語を使うようになってきている)
- ◆ 通貨 米ドル・石貨
- ◆ 宗教 キリスト教(プロテスタント・カソリック)。モルモン教。
- ◆ 紀元前2000~1500年頃にインドネシアやフィリピンから移住してきたと言われている(ヤップ人の神話では、インドから移住したことになる)。

## ストーンマナー



## 伝統カヌー



## メンスハウス



## ラバラバ



## 家族



## 自宅



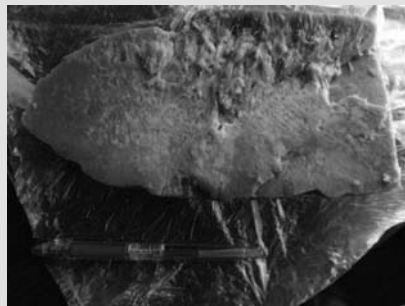
## ラーメン



# 食 事



# 主食・タロイモ



# ごはん



# ごちそう

ウミガメ



コウモリ

# ごちそう

かに



イヌ

# うなぎ



## ビールナッツ



## 伝統的な飲み物



## 戦跡

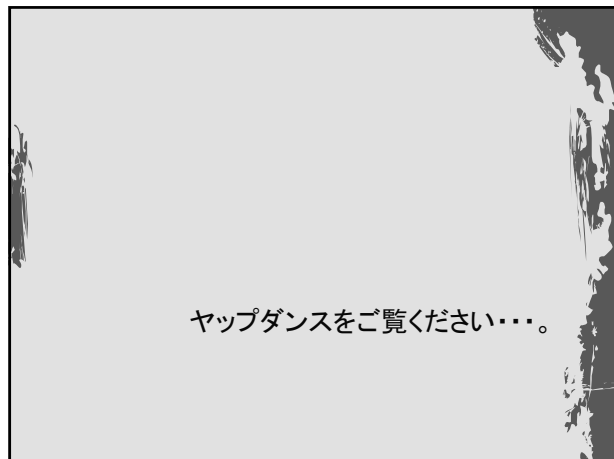


## 観光資源



## ヤップダンス





## コロニアミドルスクール

- ① 5年生から8年生の150人程度の生徒が通う。1学年1クラス(1クラス約40人)。
- ② 2人担任制。教える教科が決まっている。
- ③ 時間割は毎日同じ。
- ④ カルチャーの授業は、男女分かれて、専科担当の先生が教える。
- ⑤ 8:30～14:10まで



## コンピュータ室



## トイレ



# 小石を使って...



# 花札



# ボール遊び



# ブロック



# お手玉

# アメフト



# キャッチボール



## ボーリング



## 同級生

## カルチャー



## 日本の学校との違い

- ① 生徒指導は、校長・副校長の担当。
- ② 留年がある。
- ③ 退学がある。
- ④ 3ヶ月以上の長い夏休み。
- ⑤ スパイラル方式のカリキュラム。
- ⑥ ○ は 不正解？！

## ヤップでの活動

課題 「ヤップの子どもたちの算数学力向上」

- ① 算数の授業改善  
直接生徒を教える／担当教師への支援
- ② 算数学力テストの実施
- ③ 教員向け指導力向上ワークショップの開催
- ④ その他、体育科の立ち上げ・放課後指導の実施・教具の提供など

## 1日のタイムスケジュール

7:00	起床・朝食	14:30～16:00	放課後学習指導
8:30～9:20	5年生の算数	17:00	買い物して帰宅
9:20～10:10	6年生の算数	17:00～18:30	バドミントン/ソフトボール
10:20～11:05	7年生の算数	19:00	シャワー・夕食準備
11:05～11:50	8年生の算数	20:00	夕食
11:50～12:30	昼休み(昼食)	21:00～	通信・授業準備など
12:30～13:15	6年生の体育	23:00	就寝
13:25～14:10	5年生の体育		

## 直面した課題

- ① 教員の指導力  
教卓に座りっぱなし・解説なしにひたすら問題を解かせる・いきあたりぱったり
- ② 教員の勤労意欲が低い。  
(低い給与。低い社会的地位・・・)
- ③ 言葉の問題。  
(離島出身者にはヤップ語が通じない)

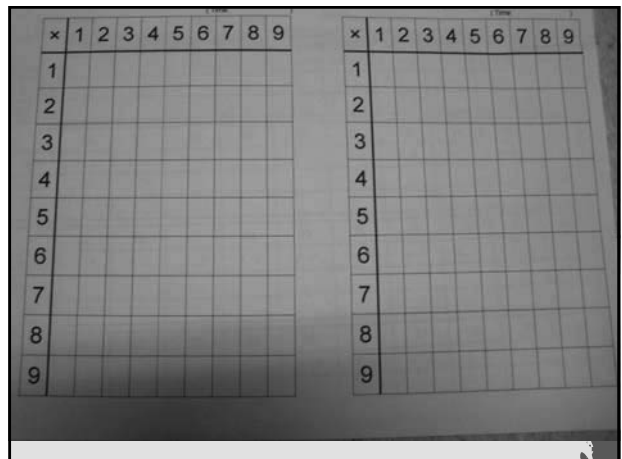
## 悩み・失敗

- ① 技術移転をどうするか？  
定年間際のカウンターパート  
転職したい教師たち  
クビ切り
- ② 物品援助は慎重に。

## 算数

- ① 低学年における数量感覚の欠如。
- ② 高学年になっても、基礎計算ができない。
- ③ アメリカの教科書を使用(英語で習う)。
- ④ 無理のあるカリキュラム。
- ⑤ 板書に計画性がない。
- ⑥ 算数専用のノートがない。
- ⑦ 具体物・半具体物を使わない。

## 計算タイム





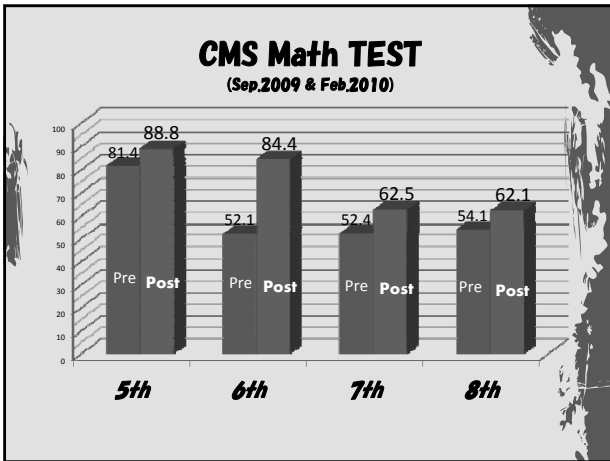
Record Card		Name: <i>Asami Kurosawa</i>									
Date		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
Correct	45	42	31	39	63	65	67	79	70	79	
Time	3:00	3:00	2:53	2:00	3:00	3:00	2:07	3:00	3:00	3:00	
11-20		11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
Correct	57	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11
Time	3:00										
21-30		21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
Correct	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11
Time											
31-40		31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
Correct	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11
Time											

## Improvement

1<sup>st</sup> time  
**3 out of 36**  
 students finished within 3min and got 100%.

10<sup>th</sup> time  
**32 out of 36**  
 students finished within 3min and got 100%.

20<sup>th</sup> time  
**27 out of 36**  
 students finished within 2 min and got 100%.



- ## 自分が学んだこと
- ① 一人では、何もできないし、何も残らない。
  - ② 語学力よりも、コミュニケーション力。
  - ③ 何を基準にするのか？
  - ④ 日本の教育は、素晴らしい。
  - ⑤ 最後に判断するのは、自分。





*F i n*

## 地域と世界をつなぐ～七夕をもっと広めよう～

清水大格

(平成 15 年度 1 次隊 小学校教諭 ベトナム)

よろしくお祈いします。15年度1次隊の清水と申します。今平塚の松原小学校で小学校教員をやっています。今日の夜はベトナムの隊員の飲み会があるということで、これから行かれる方はぜひそんなすてきな出合いを大切にしてくださいと思います。

帰国してですね、協力隊時代に抱いた思いとか願いというのをどのように具体化していくかをそれなりに考えてやってきたつもりなんですけども、どうしても距離感というか学びの深まりというところで、こっちがベトナムのこと伝えたいとかこういう交流させたいというのが強すぎるとそれがうまい方向にいかないということで、どういう手だてあるのかなと思って、今年は地域素材というのを切り口にして国際化で広げてみたんですね。ちょっとみて頂ければと思います。

七夕祭りという平塚のお祭りをやったんですけど、ちょっと地元の方で評判になりましたですね、6月にケーブルテレビ局がきてですね、総合的な学習の時間に常に張り付いてカメラまわして編集してそれを番組してくれるっていうのがあったんです。いろいろあるんですけどこれが一番活動を紹介するのにまとまっているかなと思いますので、その映像を今からながらせて頂きたいと思います。

(映像のナレーション) 続いて特集です。平塚市立松原小学校の4年生が、総合学習の一環として七夕祭りを盛り上げようとこんな取り組みをしました。ご覧ください。

皆さんご存知のインターネットの YOUTUBE、ある日このサイトから世界に向けて七夕の願い事を書いた短冊の募集が行われ始めました。これは平塚市立松原小学校の4年1組の子供たちが展開したものです。4年1組は今年、湘南平塚七夕祭りが50回を迎えることを機に、最近小さくなったと感じる七夕祭りを盛り上げようと考えました。そこで総合学習の時間を中心に話し合いをしました。その中で出てきたのが、世界から願い事の短冊を集めるということ、そして七夕祭りの名物といえる商品の販売でした。そこでグループを作り、短冊、商品企画、PRの3つの班にわけつつ全員でそれぞれに取り組みました。YOUTUBEで呼びかけた短冊は12カ国から届けられたほか、自分たちの足で集めた短冊の中には、子供たちが自らお願いをして湘南ヴェルマーレの選手たちから集めた物もありました。担任の清水先生は子供たち主体で行おうと決めたものの、予想以上の子供たちの行動力に驚いたと言います。先生方や周囲の大人が応援したくなるほど、子供たちは本気なのです。七夕祭りまで2週間ほどであるこの日、午後には紅谷町の広場で飾り付けを行いました。実際に竹飾りとなって掲げられた短冊を見つめる子供たちの笑顔は町の人々に

もうれしく映ります。全面協力いただいたのが地元の

弘栄堂の三富さんです。こどもたちが考えた、たなばた一焼き。何度も改良が重ねられ、この日は最終段階とっていい試食会でした。ベースとなっているのはバタークリーム、その中にレーズンが入っています。これを七夕期間中3日間で実際に販売するのですから真剣です。さっそく子供たちは気づいた事をメモしそれぞれ意見を言う事にしました。

感心し、決定を持ち越し期日ギリギリまで話し合う事にしました。さて子供たちの七夕焼きはどんな形になって七夕祭りに登場されるのでしょうか。そんな松原小学校4年1組からテレビの前の皆さんにお知らせです。

このお話をさせて頂きますと、地域と世界をつなぐ授業を目指したということで、先ほどの距離感というのを埋めるには地域というのを切り口にするのがいいんじゃないかと、そういう仮説でやったということです。あと思いの部分というのは資料でお配りしている内容をご覧いただいた方がいいのかなと思います。

今からお話するのは単元のざっとした流れですね。授業実践例ということで、1番最初は4月9日の校内全体研究でやらせて頂きました。なぜ4月9日の第1週にやるのかというと、もうそのゴテゴテと模造紙とか画用紙とかを張り飾って普段してない研究授業をやめにしませんかという意味です。まだ完成していない段階、チョーク一本でやっていく、これからクラスで作っていくんだよ、という段階の授業をお互いにやっていく、そこから子供の姿をみとっていき学びをしていこうと、そういう声かけで最初私がやらせて頂いたということです。

で平塚といえはなんですかということをお子に聞きました。最初に書かせてあとは班で話し合わせて3つにしばらせて、1番多いものの未来を予想するという流れでやったんですけど、相模湾とかあとは幼稚園とか保育園とか何々幼稚園とか自分の出身のところですね、そういうところがあがったんですけど、1番多かったのが七夕祭りだったんですね。

じゃあ30年後の七夕は良くなっているのですか、悪くなっているのですかという投げかけをしました。でそのとき書いた子供の感想なんですけど、右の子はですね、ダメになると、悪くなるという予想をしているんです。でも悪くなると答えたからといって別になくればいいとは思ってない、という思いがあるんですね。で、ほとんどがこの左のこのようにやはりどんどん良くなっていくと、こんな楽しいお祭りがなくなるはずがないとそういうことを主張する訳です。

そこで僕が揺さぶったのは来場者数が最盛期に比べて100万人減っているんですよ、去年は事件があって、地元の商工会ではもう続けていくことが困難じゃないかと、掃除も大変だしやめたらどうかという実態があったんですね、そういうことを言うわけですね。実はこういう背景があると、やめようという話もある、君らこれを放っておいていいのか、みたいな投げかけをしたら、やろうという風になっていったのが、まずご当地商品ですね。

ご当地グッズを作ろうということでそういう投げかけをしたら、家でまんじゅうとか作ってきたり、これを七夕で販売したらいいんじゃないかっていう子がいたってということで。あといろんなレシピ、右の子は蒸しパンを考えたり左の子はどら焼きを串刺しにして販売したら、それ見たことないから面白いんじゃないかとみたいなことをいう訳です。

で最終的に弘栄堂さんっていう地域の和菓子屋さんがあるんですけど、地域の子が結構知り合いなもので、そこに僕たちこんなに頑張っているんだから弘栄堂さんも何かしてよっていう、ぞんざいな口の聞き方で直接交渉にいくとかそういうことがあったんですね。そしたら弘栄堂さん学校に来てくださって、じゃあ君たちの思いを聞こうということになってったんですけど、おっしゃっていたのは保健所の絡みがあって君たちがいくら試作したところで販売は出来ないんだと。ただ君たちの思いを受けておじさんが作ってやることは出来るということで、特産物を一緒に作ろうとなったということです。これは完全に地域ですね。で子供たちがこの中でですね、三富さんっていう方なんですけどこの弘栄堂さんにけっこう厳しいことをいう訳ですね。一番右の子はバターが少し多いとかくどいみたいなことを言うわけです。真ん中の子はこのお店はどら焼きがお得意だということで、どら焼きのちょっと改良したものを販売しようと言うことだったんですけど、あんこはやめた方がいいというどら焼きを根底から覆すようなことを言うわけですね。で三富さんはそれでも最終的にあんこをなくすという最終形をしてくれてですね、子供たちの意見を見事に取り入れて新製品を開発してくださったということです。この笑顔の姿はですね、子供が三富さんこれ最高です、うまいですっていうことを思わず伝えにいった姿なんです。で三富さんが笑うということがあった訳です。仲間と共同して学ぶということと地域の人と共同して学ぶということが、一つ総合学習の中でいわれてますけども、それが大事なのかなという事ですね。

あとここにスーツの方いますけども、このかたは市役所の方で商業観光課の方ですね、でこのどら焼きを作ることになったんですけども、販売する場所が無いという事に気づいてですね、市役所とどっか貸してくださいっていう交渉をプレゼンでやっているところです。最終的にはうまくいったんですけどヒヤヒヤでしたね。

共同で学ぶということが今出ましたけども、これ最初に担当の子供が作った包装紙なんですけど、子供たちからいろいろ意見が出て、これは白でシンプルだからとかあとこの七夕の文字をかえた方がいいとか聞いてかえた姿ですね。

あとこれ短冊の流れなんです、ここはちょっと国際を意識させたかったところです。板書はもう本当に雑なんですけど。この板書をきれいにするとかなんか掲示物をきれいにするというのは、この程度しかやってません。まあもうちょっとやれよという意見もありますけど。

で最初ですね、短冊を地域の人たちに配って参加を呼びかけたら盛り上がるんじゃないかって言う話があったわけですね。でそこは常に総合学習では国際を意識させたいと思っ

ていたので、君たちが生まれてきた地域というのは確かに大事だよと、でも地域の人って既に行っているんじゃない、参加しているんじゃないっていうことを投げかけた訳ですね。じゃあ平塚市全域に声かけようと。で小さいなあと、じゃあ神奈川県だ、じゃあ日本だという風になってきて、地球儀で見たら日本だってこんなもんだし神奈川県なんて見えもしないみたいな挑発をした訳ですね。じゃあ外国？外国行っちゃうっていうことをいうんですけど、じゃあ外国っていう事を引き出して、あとからアイデアを考えようということになっていって、インターネットっていうメディアの可能性が一つ出てきたんですね、それが YOUTUBE だったんですけどね。

YOUTUBE で訴えつつ、なおかつ青年海外協力隊の OB の連絡網も使ってちょっとお願いをしたんですね。で活動中の隊員ですとか、あと専門家の方とかいろいろな方が協力をしてくださって、結果的に 11 カ国から 2200 通の短冊が送られてきたということです。でその飾りを使ってですね、竹飾りというのを作ったんですけど、PTA さんと協力して 2 階 3 階ぐらいででかい竹に飾り付けをするんですね。そこで世界から送られてきた短冊を飾ったということです。

ただ当然地域も大事にしたいんですけど、これは地域に配りにいったところですね。お世話になった喫茶店ですね、最初ここで販売させてもらえるという話があったのでいいかなと思っていたんですけど、それが無理になっちゃって、セブンイレブンさんとかね幼稚園とかそういうところですね、いろいろな関わりも地域で生まれたということです。そして我らが湘南ヴェルマーレの方もですね、びっくりしたのはですね、持っていったら J1 で普通にやっている選手たちがみんな書いてくれて、なんか僕たちが J1 残れますようにということを書いてくれたんですね、ヴェルマーレすごいというので、本当 4 年 1 組大盛り上がりでした。

右がとても好きな写真なんですけど、このへんになると授業を超えて、完全に担当の子供たちが勝手に行って勝手に集めてきてという展開なんですけど、その中でもこうやって保育園の子供たちとのつながりが生まれているということですね、自分の出身の保育園ですけどね。

送られてきたのはですね、僕たち何にも知らなかったんですけど屋外に掲示をするんですね、ですから紙が送られてくると濡れちゃう訳ですよ。まずいどうするっていう話になってラミネートっていうのが学校にあるのでそれをやろうっていうことを、去年うちのクラスで下敷き作りをやってた子たちが言い出して、それで作業してるところです、みんな。こんなデザインがいいんじゃないかっていうのをみんな考えて、廊下に出して検討しあったということです。

これはいよいよ提出しなきゃいけない前日のことなんですけど、子供たちが図書室から世界の人たちのことを調べてきて、それで服とかを書いてこれもラミネートして飾り付け

をするということをしていました。そしたらあるグループから国旗も飾ったらいいんじゃないということで、スイス公文学園さんの所とかが送ってきてくれたので、そのスイスの国旗とかをつくっているところですね。

この活動の中で、ベトナムの協力隊員がこの短冊募集というのを一つのきっかけにして七夕の授業をベトナムでやってくれたんですね。みんなで竹をとってきて、竹飾りをつくって、短冊も書いて日本に送ってきてくれたと。こっちはキルギスですね。教員養成系の大学なんですけど、やはり日本文化と一緒に学習するのと、一緒にこうやって書いてきてくれたということです。

で、協力隊の OB がですね、武蔵野大学という薬学系の大学で教員をされてたんですけど、その方がで国際協力サークルの顧問もされていたということで、こういう何か所か紹介して下さったということですね。いろいろなつながりが出来たということです。

子供の実際の学びなんですけど、左側を見ると私は短冊に世界中の人たちの願いが書かれていたので、大切に丁寧に飾ったと協力し合わなきゃ出来ないことだということと、協力をすれば何でも出来るんだということを右の子は書いている訳ですね。あと願いがあれば何でも出来るとか、感謝の気持ちでいっぱいですとか、これはとりもなおさず総合的な学習でいうところの自己の生き方を見つめる、生活に生かすという力の育成につながったんじゃないかなと思っています。

あと宣伝ですね。こういうことを宣伝ではしました。最初の良くなるか悪くなるかの予想なんですけど、テレビで宣伝したり新聞会社にお問い合わせしたらいいんじゃないかってことをこの子は最初からいっていて、その子を中心にして結実していったということです。みんなでチラシの検討をしているところですね。結構子供同士のアドバイスっていうのを聞いてですね、チラシで自分ではヘタだといってるけど、カッコ字の書き過ぎっていうのがあるんですね。で結構指摘されて、次書いてきたときに字の大きさ、大きく見やすくなるように変わってるんだということです。これは神奈川新聞さんに取り上げられたりとか、タウンニュースさんに取り上げられたということがありました。

これは当日の実際の様子です。短冊をお店で竹飾りに飾ったりとか、あと七夕焼きを売る会場にですね、世界の国旗を飾ってやったりとかそういうことがありましたね。

これは子供の意見なんですけど、「この活動をやって、普段役に立たないことでも役に立つことがあるんだなと思いました。イエーイ超いい気分」ということを書いてる子供がいたと。あと「僕は買ってくれた人に必ずありがとうございましたということを心がけた。なぜ心がけたかというと、感謝の気持ちを伝えるためだ」ということを言っていたと、あ

と大きな声を出すのが苦手な子なんですけども「このときは大きな声を出して宣伝をしたりして頑張りました。なぜそれが苦手かという私は発表するのが苦手だから」ということですね。自分なりの課題を持って生き方を考えて活動する姿だったかなと僕は評価をしました。

親御さんも結構前向きにとらえてくださっていて、「景品作りを夜遅くまでやっていた。ペンの色を使ったり、もらった人の気持ちを考えて作っていました。」「よくそういうことをお願いに行けたな」とこれは市役所の子供なんですけど、私はついていなくて子供たちが行きたい人行ってらっしゃいという、そういういい方をしたのでそういうことなんですけどもね。で「普段熱心さが足りないと思っていた私は、この子は静かに燃えていたんだと反省した」とかね。学校だけで完結するのが学びではない、では学び続けるために何が必要なんだろうというのは、やはり自ら学ぶ姿勢を待ち続けるための揺さぶり、平塚七夕祭りが無くなるかもしれないよって言う揺さぶりが効果的だったかなと思います。親御さんとの関わりが非常にある中で、やはり保護者の子供への期待と意を知ることがかなりできたというのが私自身も良かったかなと思います。何かそういえば私自身もこうやって進めていたか思い出し、自ら動けるようになっていたのかもしれない。これも親の一つの願いなのかなと思っています。

そのあとなんですが、感謝の形ということで最初は七夕参加認定証を配るという話だったんですが、いつしか子供たちの間から感謝状というかたちで配ろうということで、ありがとうということを世界の11カ国に送ろうという話です。これは写真ですね、ちゃんと届きましたよっていう写真をくれたという事です。でこれ最近なんですけど、クリスマスパーティーに感謝になった人を呼ぼうということで、招待状を送ったんですね。そしたら本当に和菓子屋さんの三富さんとか、あとは市の方もいらして逆に君たちの頑張りありがとう、来年もぜひやってということと言われたということです。

ここで国際の授業をしてくださってるのは、スイスで協力してくださった協力隊 OB の方です。

それから、感謝状を受けて、私たちの短冊はどこに飾られてるのっていうことと、七夕はいったいなんですかっていう質問があったんです。それを冊子にして子供たちがまとめて送ったら、逆に手紙をまた書いて子供たちに送ってくれるというような、そんなつながりになっています。

特に二つの力の育成を目指したという事です。一つは共同しながら課題解決をしようとする自ら探求する力を育てようと、この探求させるために今回は揺さぶるということを意識したという事です。



もう一つは表現するということですね、そして行動するということです、これはおそらく生活に生かす力、自己の生き方を考えるということにつながっていくのかなと思っていますということなんです。

先ほどのお話でひと、もの、ことという話があったんですけど、とくに人にこだわりたいなと思って教材開発をしました。ていうのもやはり都市部ではなかなか人というのは出てこないんですよね、物とか事はいくらでも子供から出てくるんですけど、平塚といえど何々さんとか松原小学校といえど誰それさんとかそういうのがなかなか出てこないのが一般的な都市部だし、それを教材の中で解決していくというのが一つ課題なのかなと思っています。私の課題もあったんですけどそれは資料に書いてある通りです。ご清聴ありがとうございました。

#### 【質疑応答】

質問：ベトナムに派遣されていたという事なんですけど、ベトナムでの活動と今回の発表いただいた七夕の活動で、ベトナムでの活動がどういう風に今回の活動に生きたのかというところをお聞かせください。

先生：皆さんも言われていると思うんですけど、結局、青年海外協力隊に僕が行って大きく変わったと思うのは、行動力であったり人とのつながる力だと思うんですけど、今になって地域の人とつながるといえるのは、それが生かされてるのかなと思います。協力隊の同期がこういう事をベトナムに赴任したときにいったんですね。地の民、風の民と言う二種類の民がいるとすると、僕たち協力隊っていうのは2年で帰らなきゃ行けないとするならば風の民だと、そこに住む人たちというのは地の民だと。地の民と風の民が関わる事で何か新しい事が出来たらすてきな事だよねという事を言っていたんですけど、それは教員も一緒かなと思って、教員というのは異動というのが現実としてありますから、ずっとその地域で暮らしていく事というのは出来ないんですよね。そういうなかでクリスマスパーティーに市の方がいらしたとか、地元の和菓子屋さんが仕事があるのにそれをなげうってきてくれたというのは、やはり地域を大事にしていく学校を大事にしていくという思いなのかなと思うんです。だとすれば地域の地の民の方々と風の民である僕が関わることで、何か新しいものが作り出せてそれを提案できたらいいねという事を思っていたんですけど、その原点はベトナムかなと思っていたところです。

これから行かれる方は是非一緒に、また来年何か実践させて頂けたらと思いますのでよろしくお願ひいたします。

## 地域と世界をつなぐ授業を目指した総合的な学習の時間

～平塚七夕祭りへの探究的活動と関わり～

平塚市立松原小学校 清水大格

### 1. 授業実践のねらいと工夫

本授業は次の6つの課題解決及び授業改善を意識して行った。

- ① 今までの自分が実践してきた国際教育で感じた「距離感」を埋める手法を模索した。それが、地域を切り口とした国際教育であり、地域素材を生かした国際教育ではないかということである。
- ② 横断的総合的課題（国際、情報、福祉、環境）、児童の興味関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題という3つの課題が新指導要領に示されている。特に「児童の興味関心、発想で実践をやりぬきたい」と考え、実践を試みた。直感的価値判断をゆさぶり、それを探究活動の原動力へ生かす。学校内で完結する学びではなく、学校外でも学び続ける姿を期待した
- ③ 【整理分析】【まとめ表現】の場面において国語で培った「書く力」や討論での「話す力・聞く力」を活用する。普段の授業を大切にしていこうという基本を確認したかった。
- ④ think globally act locally を総合的な学習の時間で実現する。七夕祭りへの参加だけにとどまらず、どこかで世界を感じるような実践にしたかったということである。
- ⑤ 学び合いの学習集団づくりを総合的な学習の時間に生かす。

上記課題に迫るために工夫した点を述べていきたい。

#### ～①に迫るために～

例えば外国の児童とのテレビ会議であったり、手紙交換であったりというのは外国を身近に感じるきっかけになりうる。そういったきっかけをさらに発展させ、学習として深めていくときに必要になってくるのが、関わりを深めようとする児童の思いであり願いである。地域素材を生かしたことで、②で述べるように世界に短冊による参加を呼びかけるという思いと七夕をもっと広めようという願いが明確化され、学びの発展に伴い国際を意識した活動になっていった。

国際に限らず、現代的な課題を取り上げるときにややもすると陥りがちなのが、「やらされる総合」になってしまうということではないだろうか。教師の思いが強すぎたり、決められた学習をするという意識が総合の特色とは相反する結果を招くというのは自分自身経験したし、ありうることだろう。

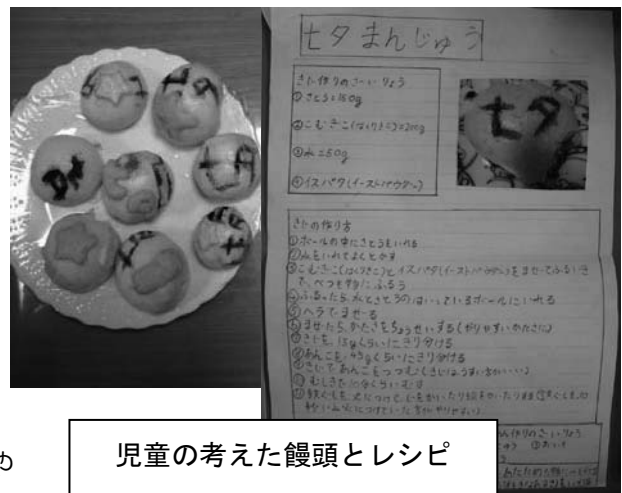
先生から与えられた課題という意識にしないために、身近な七夕祭りから世界へという学びの過程を辿った。

## ～②に迫るために～

学校外でも学習課題を探究しつづけるような学びの姿を期待した。地域素材にはそれを可能にする教材力がある。児童にとって身近で、放課後なども関わりが持ちやすいということが大きい。本実践の雑ぱくとした流れは「平塚と言えば何ですか」「七夕祭り！」「30年後の七夕は良くなっているのですか、悪くなっているのですか」という発問だった。

そこで多くの児童は自分たちにとってこんなに楽しい祭りが悪くなるはずがないと予想するわけだが、現実には来場者数は減り、竹飾りも減少傾向にあるということを知った。それを知ったときに児童は「このままではいけない。良くするために自分たちでできることは何だろうか」と考え始めたのである。この場合、直観的価値判断は言うまでもなく「七夕は良くなる」という予想であり、ゆさぶりは「来場者数や竹飾りの数の減少」という事実だった。

自ら特産物のレシピを考え弘栄堂さんに相談に行った児童。バス車中に広告を出すために交渉に行き自分たちのチラシを掲示して貰ったグループ。外国から届いた短冊を休み時間も使って読み上げ続けたグループ。世界の人たちを図書室で調べ、絵にして竹飾りやお店に掲示したグループ。枚挙に暇がない、これらの活動の姿はいずれも全く自分たちの発想で「やりたい人がやる、やれる人がやる」という姿だった。子どもたちの自由で探究的な学びがオープンエンドに広がり続け、それが地域や保護者に受け止めフォローされたということである。



児童の考えた饅頭とレシピ

## ～③に迫るために～

いつもは作らないような特別な掲示物を作ったり、誰もが驚くカラフルな板書をしてみたり、そういったいわば名人芸の授業ではなく、普通の教師の普通の授業術を基本に考えた。なるべく特別な板書はせず、なるべく特別なワークシートは使わず、そういったところに労力を割くのは極力避けた。黒板やワークシートは、児童の成果物の1つとしてとらえ、交流の場として、お互いの考えを表現していく手段として活用した。

普通の国語の授業で培った A4 の 2 枚の作文ぐらいならばクラスの誰もがすぐに書ける文章力、課題に対してクラスの誰もが自分の考えを理由付けて発言し合える討論の力、それをそのまま総合的な学習の時間に援用した。

印象的だったのは、最後の「たなバター焼き」の試食のときの討論である。弘栄堂さん、地元テレビ局の SCN さんのカメラの回る中、最後に「たなバター焼き」への感想や感謝の一言が出るのかと思いきや、「甘いのでカフェを併設したらどうだろうか」という発言を皮切りに、「カフェをやる」「や



児童主体の話し合い。黒板を開放する。

らない」という議論をストップかけるまで 20 分近く議論をしていた。私たち大人の思い描いた議論ではなかったのだが、そこがまた自分たちの思いをのびのびと表現できる、もっともこの子たちらしさと普段の力が表れた時間だったと感じた。

#### ～④に迫るために～

単元名「みんなに届けよう平塚七夕祭り～もっと広めて もっと楽しく～」の単元での子どもたちの活動の柱は以下の3つである。

##### i 短冊を通して広く参加を呼びかける

平塚駅前に大きな竹飾りを掲出。PTA と協力しながら世界各国の短冊 2200 通と飾りづけを行った。

##### ii 誰もが来たくなる楽しくなる特産品をつくる

地域の老舗和菓子屋弘栄堂さんと「たなバター焼き」をつくる。市役所と交渉し売り場を借りて七夕期間中に販売。

##### iii 広く宣伝をする

地域の自治会、公民館、市中のバス会社、市役所、新聞社、放送局などと連携して七夕祭り自分たちの竹飾り、商品について宣伝。



ベトナムの小学校での竹飾り及び短冊づくり

i に関しては最初「地域の人に短冊を配って願いを集めよう」という意見が出ていた。そこで、「地域の人はずでに七夕祭りに来ているんじゃない？」と聞いたら「市に広げよう」となり、「小さいな～」と返し「県に広げよう」となり、「県だって地図でみたらこんなだよ」と手で小さく形をつくり、「日本だ！」となれば「日本だけか～！」と挑発し、「じゃあ世界だ！」と引き出した。引き出す方法はいろいろあると思うが、授業者の問題意識をどこに置くかでだいぶ変わってくるのではないだろうか。

結局、「普段接する人やお世話になった人、そして世界中の人に短冊での参加を呼びかける」ということになった。

普段接する人やお世話になった人という児童の思いを土台しつつ、世界へとふくらませていった。全 11 カ国から約 2200 通もの短冊が届いたが、「日本文化を紹介する良いきっかけになった」という声が聞かれ、子どもたちの自信にも繋がった。



キルギスの大学での短冊作り

iii の宣伝にしても、地元のラジオ局やテレビ局はもちろん、世界と繋がるメディアの活用を意識させた。今回はそれがインターネットだったということである。特別なものとして ICT を活用するのではなく、普段の「読み書き算」のような活用方法が求められていると思うが、1 つ可能性を見ることができたように感じる。

#### ～⑤に迫るために～

授業を作るにあたって、多くの授業の構成要素や学習形、場の変化などは3つぐらいに絞れるので

はないかと仮説し、意識して実践してみた。例えば、児童の発言は下記の3つに分けてとらえた。

- ノート発言
- 黒板発言
- 挙手発言

このうち、一般的に一番よく使われるのが挙手発言であろう。しかし、この方法はややもすると決まり切った児童とのやりとりに終始しやすい。そのためノート発言を活用し、この段階で友だち同士学び合う流れを大事にした。そして、全員が何らかの考えを持てるようにした。その後、班などで話し合い、班の意見をまとめて黒板に書かせたり、画用紙に書かせて貼らせたりした。そこでクラス全体で思考の共有化を図ったのである。そして最後に、黒板に書かれている中でどれが良いと思うのか、それとも良くないと思うのかなどシンプルな発問から児童の意見を引き出し、クラス全体で挙手発言で理由付けしながら発表させた。また、学習の形（机の形）は下記の3つを活用した。

- 一斉形式
- 班形式
- 話し合い形式（コの字）

個学でノート発言するときには一斉形式、班で考えを交流させたり班でまとめさせたりするときには班形式、黒板発言をクラス全体で検討するときには話し合い形式、といったように3つの形式を使い分けた。児童の学びの単位は以下の3つを意識した

- 個
- 班
- 全体

これらの類型は誰もがそのまま使える形式であり、目的が明確になりやすく学び合いの集団作り初期の段階としては妥当性があると考えられる。児童自身も理解しやすく、パターンも限られるからである。また、教師の働きかけとしてはよく言われるように下記の3つを意識した。

- 発問
- 指示
- 説明

このように考えていくと、授業とは実はシンプルなものだとなる。押さえるべき本質を見極めて授業作りをし、教師と児童の縦系の関係と児童と児童の横系の関係を構築していくことが総合的な学習の時間でも非常に要求されると感じた。もちろん、学習集団の成長と学習の進みによってこの限りではない場面も出てくる。しかし、基本となる形を踏まえ、具体的な手だてを多く持っておくことは有効ではないだろうか。

## 2. 児童につけたい2つの力と実際

- (1) 友だち、地域の人たちと協力し課題解決しようと探究する力
- (2) 考えや意見を表現し、行動する力

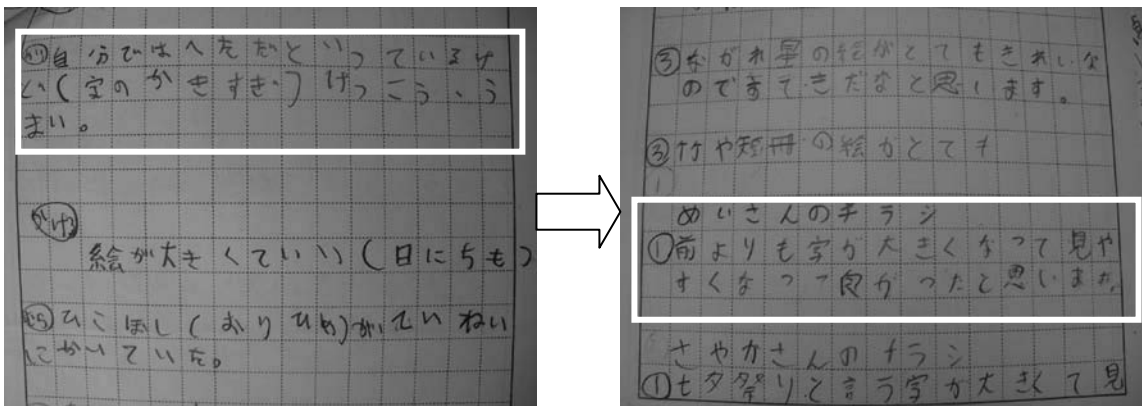
(1) 友だち、地域の人たちと協力しながら課題解決しようと自ら探究する力

【i】 教室にて～友だち～

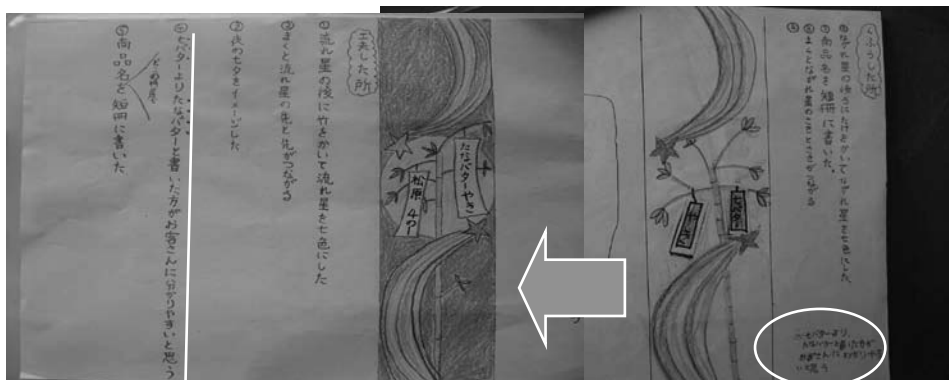
課題に対する討論で当初よく行ったのが下記の流れである。

自分の考えをまとめる→班で考えを交流させ、班の意見を出す→班の意見を黒板に書き、クラス全体で考えを交流させる

自分の考えを持つと言うこと、表現していくということは学級経営上欠かせないと感じている。授業で考えを持ち表現し交流する場を設ける。それによりその子なりの考えを持つ習慣づけをし、さらに表現していく耐性のようなものを身につけさせていった。換言するならば、きまりきった発問できまりきった数人の児童が答えるという授業にしない、考えがうかばないならば助け合い学び合う。そのようなお互いに関わる場面を設け、克服しあえるように意識したということである。



また、友だち同士の学び合いにより質的向上を期待した。例えばチラシづくりをめぐって「字の書きすぎ」という友だちの意見があり、それを受けて改善工夫し、「前よりも字が大きくなって見やすくなって良かったと思います」という友だちの評価が変わった。



また、包装紙づくりで「背景の色が欲しい」「七バター焼きよりたなバター焼きのほうがわかりやすい」という友だちからの指摘（〇かこみにメモ）を受け、みんなの意見を取り入れて包装を変えて提案するということがあった。家の方に聞くと、連日夜遅くまで検討し、家族も巻き込んでの包装紙づくりだったそうである。友だちと協力しながら自ら進んで課題解決する1つの姿が見られたように思う。

## 【ii】 校外にて～地域の人たち～

よく言われる総合的な学習での「ひと・もの・こと」の中で最も意識したかったのが「ひと」である。平塚を含むほとんどの都市部であてはまることだが、学習の中で「ひと」が児童から意識されることは少ないのではないと思う。「もの」であれば著名な建造物、例えば古い建物などが想起されるのだろう。「こと」であれば平塚七夕祭りや著名なイベントなどが想起される



味を絶賛し思わず感動を伝える

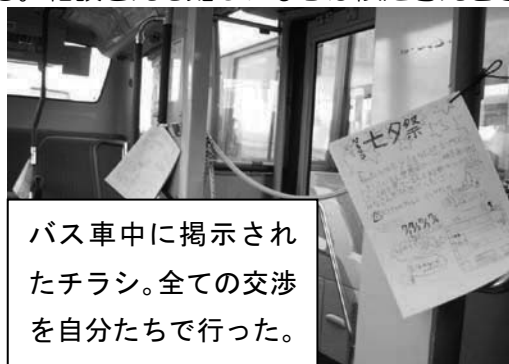
のだろう。しかし、都市部に育つ子どもたちにとって「平塚と聞いてなにがうかびますか」と聞かれて「ひと」がうかぶことはまず無いと言っている。これは子どもたちの地域の人との関わりが薄れてきている一つの表れだろうし、一般的な都市部にあってはありふれた傾向だと考える。だからこそ学校の学習で「ひと」に焦点をあて、地域の人と協同して学ぶという機会を意識的に設けることは意義あることだと考えた。自分の住んでいる地域にこんな仕事をしているこんな人がいる、こんな風に地域をよくしようと思っている人がいる、そんな気づきが学びの中で積み上げられることを願った。

## （2） 自らの考えや意見を自ら表現し、自分にできることは何かを考え自ら行動する力

### 【i】 自ら行動するという、交流の場を持つということ

課題と接したときに「書けない」「言えない」「考えられない」という児童がいるのは初期の学習集団としては当然のことである。そこで「歩いていい、相談していい、写していい」の3つのキーワードで児童の困り感を解消するようにした。何もしないことがいけない、自分と似た考えだったら写してさえもいいという価値観をクラス全体で共有することで全員が課題に対して何らかの考えを持てるように成長した。

分からなければ、歩いて友だちと相談すれば良いのである。相談さえも難しいならば似た考えを写し、自分の意見として発表して良いのである。オリジナルに拘るあまりに唸ってじっと座っているならば、拘りから離れ活動し手足を使って主体的に学ぼうということである。



バス車中に掲示されたチラシ。全ての交渉を自分たちで行った。

### 【ii】 探究すること

先生から言われた課題を学習するだけでなく、学びの

本質を見抜き自ら学ぶ姿勢を身につけてほしいと思った。学校の中だけで完結するような学びでなく、学校外でも主体的に調べたり学んだりする姿を期待した。それは前段でも記述したとおりである。

### 【iii】 児童の実際

「私は短冊に世界中の人たちの願いが書かれていたので、短冊を大切にしていねいにかざろうと思いました。そして学んだことは短冊を集めるのもかざるのもたなバター焼きを作るのも売るのもたくさんの人で協力してやらないとできないということです。」

「最初は現実的ではなかったけどやっているうちにカフェまでできたのでみんなで協力すればなんでもできるんだと思った。」

「願いがあれば何でもできると思いました。なぜかという、最初はできないと思ったのに本当に実現できたことがすごいと思いました。」

「竹飾りが無事に上がって良かった。地域や外国からも届いて感謝の気持ちでいっぱいです」

「ふだん役に立たない私でも役に立つことがあるんだな～と思いました :中略: イエーイ、ちょういい気分」

これらから読み取れるのは、「協力」「自己肯定感」「感謝」という言葉である。最初「できるのか?」と思っていたことができ、やればできるんだという思い、つまり自己肯定感に繋がったということ。そしてそれだけではなく、いろいろな人の協力があったからやれたのだという感謝の気持ち。最初「七夕祭りへの参加認定証を出そう」という話だったのが、いつしか「参加感謝状」へ変わったのはそんな気持ちの表れだったのだろう。直接意図したものでなかったが、児童の成果物からは2つのねらいだけでなく、ある意味それ以上の学びがあったことが確認できたと思っている。



短冊集め。多くの園児に囲まれて



みんなでまとめる



モンゴルから感謝状のお礼



竹飾り掲出の様子

:参考文献等:

- ①「ワークショップ型校内研修」で学校が変わる学校を変える 村川雅弘 教育開発研究所
- ②「リニューアル総合的な学習の時間」 田村学 北大路書房
- ③学習集団づくり及び学級経営については野中信行氏にご指導を頂いた
- ④学び合いについては西川純氏の一連の著作に学んだ
- ⑤実践全体を通して平塚市小学校教育研究会生活部会相談役の小山紳一氏に多くのご指導を頂いた
- ⑥「一斉授業の復権」 久保齋 子どもの未来社



【単元名】 「七夕をみんなに届けよう」もっと広めてもっと楽しく ～地域～

【育てたい力】 友だち、地域の人などと協力し課題解決しようと探究する力

考えや意見を表現し、行動する力

【指導計画】 35時間

【きっかけ】 平塚の未来を予想させ、現実を伝える。そのギャップで直観的価値判断をゆさぶる。

時数	学習活動	ねらい	指導事項	評価の観点
2	30年後の平塚はどうなっていますか。 ごみ、川、七夕、福祉、地域、課題を掘り下げる。今何が問題なのか。	地域の未来を予想し、自分が追求したい課題を見つけることができる	気づきを書く。 書いたことを発表し合う。まとめる。	課題を設定する力
4	私たちにできること ・来たいと思えるものをつくる ・世界のたんざく ・ここにしかないもの ・たなばたの宣伝広報	・自分の意見を分かりやすく伝えることができる	・友だちの意見を聞く中で、自分の内部情報を蓄積させる。 ・私たちができることはなんだろうという思いをもつ。	表現する力
2	グループ活動の成果の発信、整理。なぜ、それをするのかをグループごとにまとめ、クラスで意見を募る。 例、パンフ作り、特産づくり、地域交流、七夕かざり・短冊への参加呼びかけなどなど	調べ方、まとめ方、発表の仕方の具体的な方法を身につけ、問題解決の過程を追求している。	これまでしらべてきたことを整理して分かりやすくまとめられるようにし、学習発表会で成果を発表できるようにする。	課題を追求する力
1 1	弘栄堂の三富さんと協力しながら新製品の開発をする	調べたことや考えたことをもとに、自分でできることは何かを考え、行動することができる。	グループが中心になりながら、みんなの意見を集めるように指導する。	生活に生かす力
	世界や地域の人たちの願いを集め、七夕祭への参加者を増やす。		作業分担などやることが多いので自分たちが中心になってやることをみんなに伝えさせる。	
	自分たちの思いや願い、活動をわかりやすく多くの人に伝える		全体の活動をみながら、それをまとめ、チラシやCMを作る。その際、多くの意見を取り入れる。	
2	中間まとめ 各グループで足りないことや協力して欲しいことを伝える	追求の過程で人と関わり、自分の考えをみつけている。	自分たちでやりきれないことを振り分けさせ、協力してもらうように促す	課題を追求する力
3	七夕祭当日	自分でできることは何かを考え、行動することができる。	「やりたい人」「やれる人」になれるといい。	生活に生かす力
2	活動のまとめ(感謝、協力をキーワードとして) 〇〇年後の七夕祭をどうしたいのか。そのために私たちが今できること、すべきことは何か。活動写真を入れながら、お世話になった方や保護者の人へ、先生方へ	調べたことや気付いたことを自分なりにまとめ、分かりやすく伝えることができる。	自分たちが成長したと思えることも入れる。どうしてそう思ったのか、どうしてそうしようと思ったのかにこだわる。	表現する力

弘栄堂さん。ほま毎週来ていただいて、「たなばたー焼き」販売へ繋げてくださった JICA Uさん 各OV組織及び協力隊員への呼びかけ窓口  
市役所 商業観光課 Kさん。宣伝、周知をしてくださいました。まちづくり政策課 Fさん バス車中のチラシ設置窓口  
PTA イベント(6月上旬の竹飾りでご協力ください) 会長(お店の確保、テント搬入) 保護者・Fさん(青年会議所) テント搬入  
武蔵野大 Fさんと国際協力サークル 通訳及び香港、南ア等窓口 SCN(湘南ケーブル) Nさん Sさん

地域と世界をつなぐ授業を目指した  
総合的な学習の時間

～平塚七夕祭りへの探究的活動と関わり～

平塚市立松原小学校 清水大格

授業実践例

「七夕をみんなへ届けよう」

～もっと広めて、もっと楽しく～

導入学習活動①授業の様子

- ・平塚と言えば何ですか(個学、ブレスト)
- ・班で3つにしぼり、黒板に書かせる
- ・一番多い事柄の未来を予想する
- ・30年後の〇〇は良くなっているのですか、悪くなっているのですか。
- ・2010年4月9日(金)の校内全体研究。

導入学習活動①児童の発言

導入学習活動①

- ・もっと広めたい
- ・もっと楽しくしたい
- ・平塚と言えばこれ、というものをつくる(特産)
- ・短冊を通して参加者を呼びかける(短冊)
- ・宣伝をする(CM、チラシ)

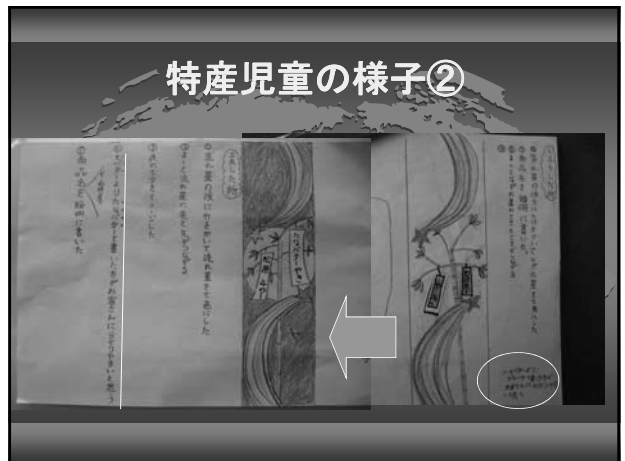
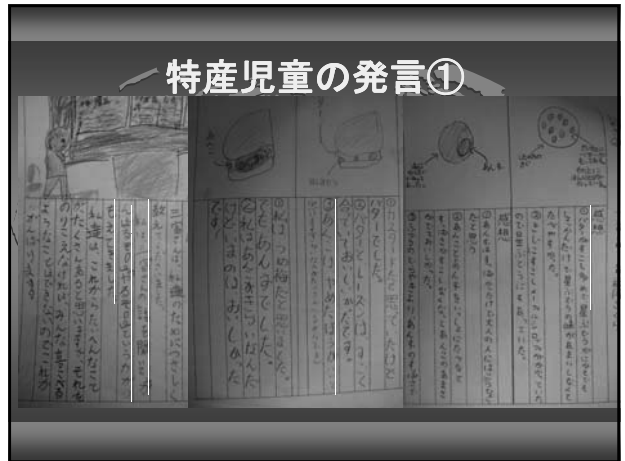
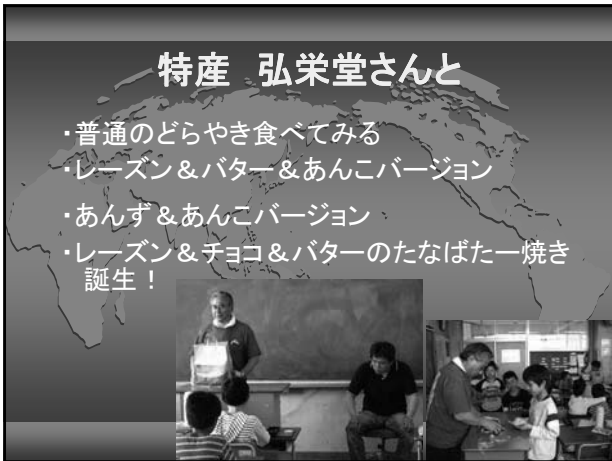
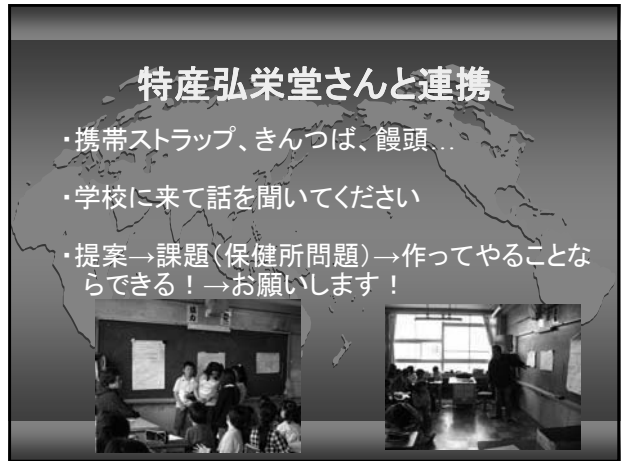
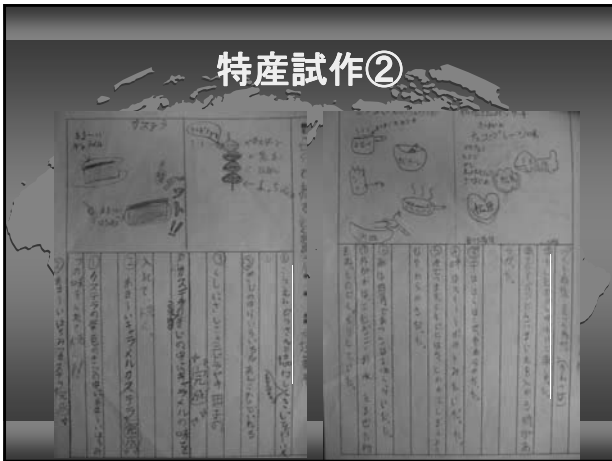
特産試作①

4/4 「七夕アイデア」

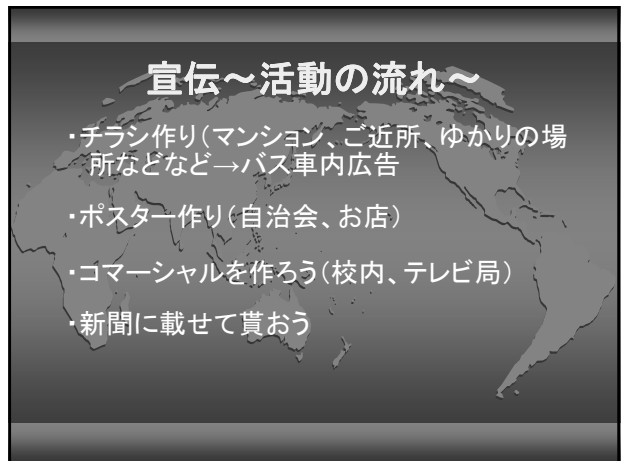
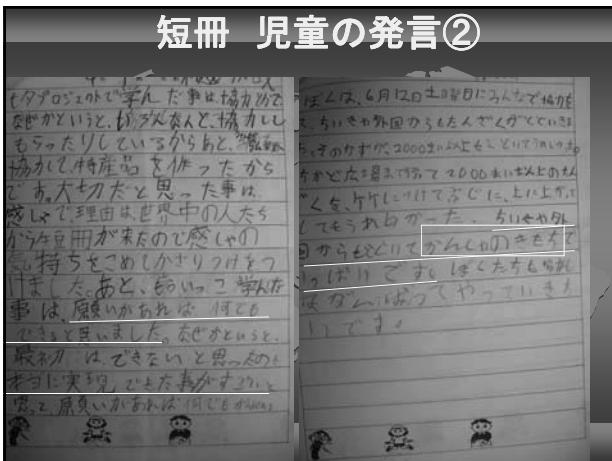
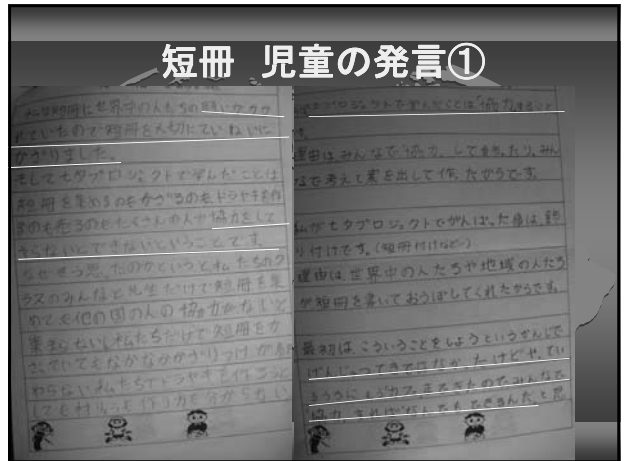
おひなめ、おひなはして下  
むらさき色を出す(おひな  
金魚、やまこ)

商品 ねたけやま、  
クワのふやす

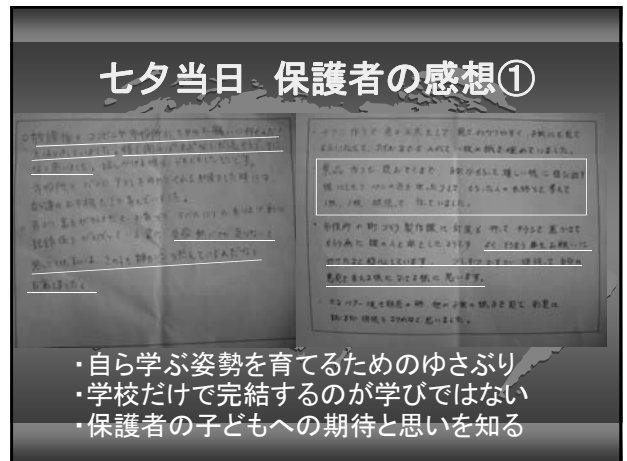
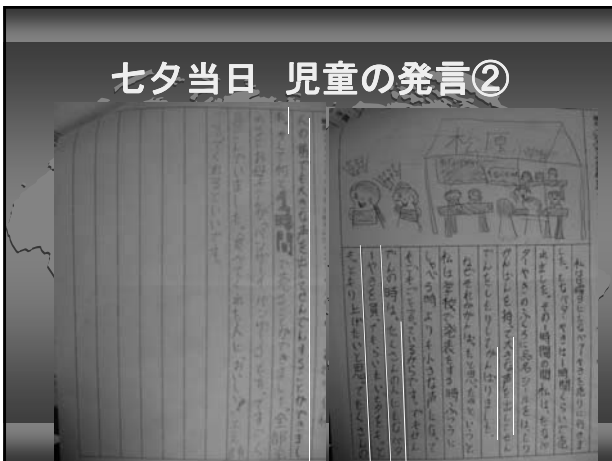
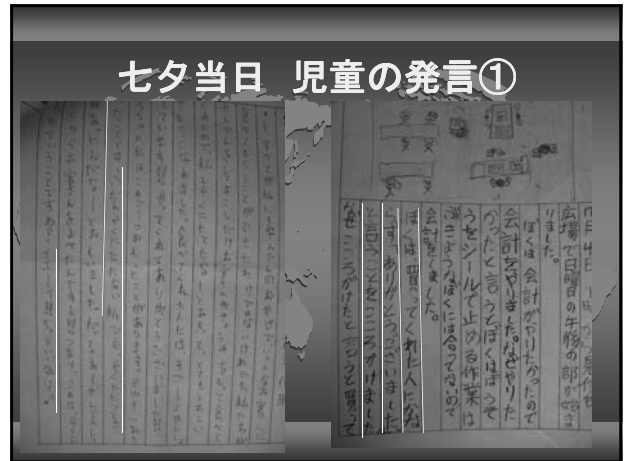
高名パン  
おまかせ











## 七夕当日 保護者の感想②

前回は七夕の飾りに関して、子どもたちの感想が中心でしたが、今回は保護者の感想に焦点を当てました。各校ではどのような感想が寄せられたのか、取材した保護者と交流しながら、七夕当日の感想を伺いました。

クラス毎に七夕の飾りや、親としては感じています。現在、我が子に七夕というイベントや行事が「ない」として、この七夕の飾りの中で、みんなと一緒に飾るという行為は、思いがけないことに感じています。この飾りに参加することで、子どもたちは「七夕の飾りに参加している」という感覚を味わうことができます。また、七夕の飾りに参加することで、子どもたちは「七夕の飾りに参加している」という感覚を味わうことができます。

このように、七夕の飾りを通じて、子どもたちの学びや成長を支援していきたいと考えています。また、保護者の協力も大切だと感じています。

## 七夕当日 保護者の感想③

当初、我が家の七夕の飾りについて、子どもたちは「七夕の飾りに参加している」という感覚を味わうことができました。また、保護者の協力も大切だと感じています。

七夕の飾りに参加することで、子どもたちは「七夕の飾りに参加している」という感覚を味わうことができます。また、保護者の協力も大切だと感じています。

七夕の飾りに参加することで、子どもたちは「七夕の飾りに参加している」という感覚を味わうことができます。また、保護者の協力も大切だと感じています。

## 感謝を形に



- ・世界と地域へ感謝状を自作して送付
- ・認定証から感謝状への変化

## その後の学びと関わり①



## その後の学びと関わり②



- ・交流、教師の思いと児童の思い

## 特に2つの力の育成を目指して

- ・友だち、地域の人などと協力しながら課題解決しようと自ら探求する力 (課題探求力)
- ・自らの考えや意見を自ら表現し、自分ができることは何かを考え自ら行動する力。 (生活に生かす力)

特に上記を意識して課題設定をした。



## 実践で工夫したこと

- ・地域素材、地域の「ひと」を意識した学習（七夕、福祉施設、相模川、保育園）
- ・直観的価値判断をゆさぶり、それを探究活動への原動力へ。言いたい、表現したいという成長段階の特性を踏まえる。

## 教師側の課題として

- ・各国交流の反省。距離の遠さからくる非現実をどう埋めるか。「地域や学校の特色に応じた課題」を足がかりに。
- ・やらされる総合からの脱却を目指して。「児童の興味関心に基づく課題」をやり抜く。
- ・国語の作文→討論の流れを【整理分析】【まとめ表現】の探究的な学習に生かす。
- ・think globally act locally.どこかで世界を感じて欲しい。

ありがとうございました。

## 算数プロジェクト「GUATEMATICA（グアテマティカ）」

野口美紀子

（平成 20 年度 1 次隊 小学校教諭 グアテマラ）

---

皆さんはじめまして、こんにちは。20 年度一次隊、野口美紀子と申します。私は現在茨城県守谷市立御所ヶ岡中学校に勤めております。担当教科は英語で、部活動の方は剣道部の顧問をしております。声なんですけれども、部活動で声を出し過ぎたのとちょっと年末で色々喉を使いすぎてしまい、この聞き苦しい声になっているんですけれども、どうかご了承ください。

本日は、活動を行ってきたこの算数プロジェクトについてお話しさせていただきたいと思います。グアテマティカというのは、グアテマラのスペイン語で算数をマセマティカというのですが、それを合わせてつけた名前です。グアテマラのマセマティカで、グアテマティカということだそうです。本日はその活動についてお話しさせていただきたいと思います。パワーポイントを操作しますので、座らしてお話しさせていただきます。失礼します。

本日の報告内容は以上の四点で進めていきたいと思います。まず初めに、グアテマラ共和国について。

グアテマラ共和国は、中米五カ国の最西端に位置し、メキシコの隣にあります。1821 年 9 月 15 日にスペインから独立しました。人口約 1,400 万人で、約過半数はマヤ系先住民、インディヘナになります。国土面積は、約 11 万平方キロメートルで、北海道より少し広いくらいかなと思います。スペイン語が公用語なんですけれども、地方には多くの少数民族が存在しており、22 のマヤ系の言語がありました。ここで有名なのは、まずコーヒー栽培です。缶コーヒーの BOSS が、このグアテマラの豆を使っているそうです。あとは、古代マヤ文明遺跡が数多く点在しています。そして、民族衣装。多くの少数民族がそれぞれの民族衣装を着ているんですけれども、すべて手織りになっています。中米の織物の約 8 割がグアテマラ産だそうです。

続いてグアテマラの教育事情について。教育制度は、小学校 6 年、中学校 3 年、高校 3 年と日本と同じです。義務教育は小学校の 6 年間なんですけれども、まだ完全実施には至っていません。就学率が 74%で、この就学できない理由は貧困のためです。国民の 57%が貧困層で、そのほとんどがマヤ民族になっています。小学校と高校から毎年進級試験があり、合格点に達しないと落第、2 年目には退学ということで、小学生のうちから留年があります。そのため、非識字率が 33%に及んでおり、教育レベルは相当低いと言えます。学校に行けない子どもたちは靴磨きをしてお金を稼いだり、農作業などの家の手伝いをしたり、あとは道端で果物や野菜などを売ったり、楽器などを演奏したりする仕事を家族と一緒に

行っています、こういう子どもたちが実際にいるという現場を目撃して、教育が受けられるというのは本当にありがたいことなんだなということを痛感させられました。

次に、算数プロジェクトで行っていた活動内容及び成果についてお話ししたいと思います。配属先は、グアテマラの最西端に位置するサンマルコス県の教育委員会で、教育開発局に所属していました。そこでの業務内容は、算数教育改革の推進、算数プロジェクト「GUATEMATICA」の県内学校への普及や拡大、あとは県内学校の教育管理や指導、指定されたパイロット4校を中心に巡回指導を行いました。

ここの職場では、私が日本人の4代目で、6年間のプロジェクトの経験があったことから、JICAや日本人に対する理解も大変あり、非常に恵まれた職場だったと思います。このプロジェクトの最終目標は、児童の算数理解力向上でした。その具体的目標としては、教員の算数理解力・指導力の向上、算数プロジェクトで製作した各算数教材の定着や普及拡大、6年間行ってきた算数プロジェクトの経緯や知識なども利用して、県内の普及拡大をメインに行っていこうと考えていたのですけれども、そのためにまずパイロット校の先生方そして児童に対してどれほどの知識や学力があるかということを確認するために、アンケート・実力テストを実施しました。児童に対しては学習している内容で、先生方に対しては小学校6年生と同じ問題を実施していました。

その結果、パイロット校教員の算数の理解力、そして意識が大変低いという事が判明しまして、教員の学力がそのまま児童の学力に比例していることがデータとして明らかになりました。なので、教員の学力や意識の不足が児童の学力・意識、そして学習環境、そして教材の不足につながっていることが明らかになり、これが大きな教育問題となっていることがわかりました。そのような結果の問題解決や目標達成に向けてまずはパイロット校教員の算数理解力と意識の向上をはかることが大切と考え、以上のような4つの活動を派遣中に行う事に決めました。

まず授業観察です。4校あるパイロット校を一日一校ずつ、月曜日が Rincon、火曜日が Chamac、水曜日が Castillo Armas、木曜日が Rodeo というように回らせていただき、一日一学年、2-3クラス、カウンターパートと一緒に参加させていただきました。その授業観察後には、先生と一緒に授業の感想などをお話ししたり、授業を行ったり、授業に対する相談を受けたり、また、実際に子どもたちを見ているので、その子どもたちに対しての指導はこうしたらいいというなどの個別指導を行いました。実際にそういったことを行ったことで先生方との関係もよくなったと思っています。

続いてパイロット校を中心に公開授業を行いました。そのあとに協議会や意見交換などを行ったのですけれども、グアテマラにはそういう授業参観をするという習慣がなかったので先生方はとても抵抗があったのですけれども、皆さんの授業を拝見したり授業にいい効果が出たという事で大変良い刺激になったようです。そういうのを積み重ねていくことで算数授業において先生方の手作り教材や掲示物を指導したり、そうした活動を行ったり

という工夫が見られるようになりました。その結果として、先生方の算数に対する意識が向上し、授業の方も改善が見られるようになってきました。

続いて、パイロット校の教員に対して、三段階の算数研修会を行いました。まず基礎コースとして、算数四領域別研修会を20時間行いました。算数の系統性を重視して、A、B、C、Dの四領域に分け、それぞれの領域ごとに最初のところを研修させていただきました。グループの構成はパイロット校の全教員を以前に行ったアンケート調査や学力テスト、授業参観などをもとにしながら学年学校を解体して4つのグループに分けました。各グループに各校の教員が数人ずつ入るようにバランス良く配置し、今後先生方が校内研修を行えることを期待してこのように編成しました。研修日程は毎週金曜日に、一グループずつ行いました。月に一回各4時間、計5回の研修を行いました。その研修の中で先生方がわからないところを教え合ったり、内容について議論したり、自分から進んで説明や発表などを行ってくれる姿が見られるようになり、教員として学び合う姿が見られるようになりました。その結果として、この研修後に行った第二回目のテストでは、算数の理解力の向上が確認されました。

続いて算数スペシャリストコースです。これは先ほどの基礎コースと並行して行いました。以前行われたアンケートや学力テスト、そういったものから既に理解力、指導力そしてやる気のある先生方を各校数名ずつ選抜し、その育成として公開授業や各研修会の講師を務めてもらいました。放課後や土日などを使ってその打ち合わせや事前準備などを合計20時間行いました。そういった研修会での教員への指導や公開授業、そして研修会の補助を務めることで実践や経験を多く積み、先生方は選抜教員としての意識が芽生えてきて指導力の方も向上してきました。結果として各グループの方から他の教員同士でもできる算数スペシャリストを24名育成することが出来ました。

続いて、算数指導者育成コースを先ほどのスペシャリストたちを中心に4日間の集中研修で20時間行いました。彼らが中心となって算数プロジェクトのグアテマティカを普及・拡大するために、指導法の確認や教材の作成、そして模擬授業などを実施しこれからの普及・拡大のほうに務めてもらうという研修をみんなで行いました。自分たちが思ったことを行ったという事で彼らは指導者としての自覚とか自信が芽生えてきました。そして、プロジェクトを普及・拡大させるための算数指導者チームというものを結成することが出来ました。パイロット校から選抜された先生方による算数指導者チーム、彼らが県の教育委員会の算数の担当者たちと毎月一回算数会議を行いながら県内の算数グアテマティカの普及・拡大を進めていくように算数システムの構築の方がなされてきました。

またサンマルコス県の29の市町村を10を北部、南部の合計4支部に分けて効率よく普及・拡大ができるように図らい、2010年の3月から実際にこの活動が起きだしました。私はこの活動までを見届けて帰国という事になったので、そのあとの活動に関してはメールのやり取りなどで報告を受けています。

最後に教材の作製を行いました。算数の学習においては、具体物などの操作活動が重要

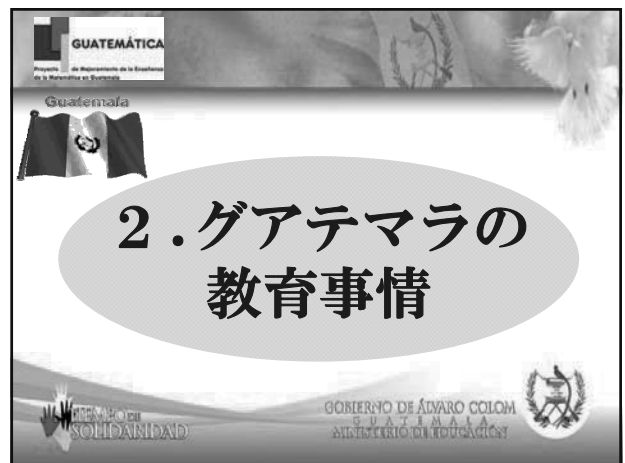
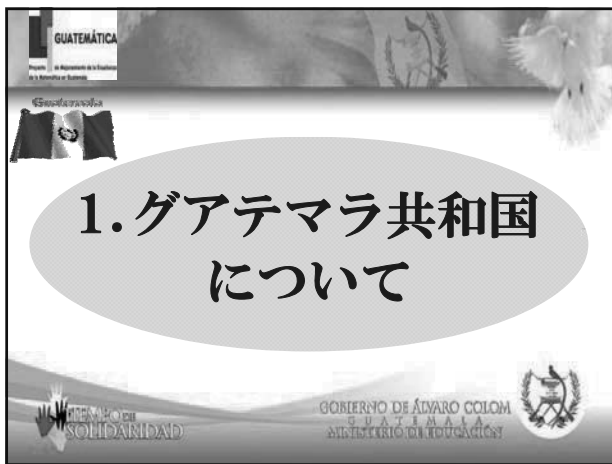
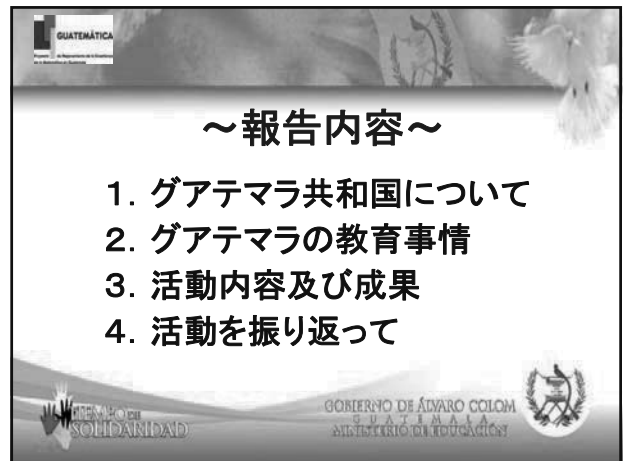
になってくるんですけども、実際にそういうことができる教材や道具などがなく、それを購入するための資金的余裕もありませんので、色んな廃材を利用しながら先生方と一緒に算数教材の方を作ってみました。まずは低学年の指导向けに、手作りの算数セットを用意しました。ビンの蓋ですとか、あとペットボトルのキャップなどをおはじきの代わりにして足し算や引き算などの計算学習に、マッチ箱を利用してそこに1や10や100などの固いカードを入れて位取りなどの学習に使いました。あとは定規などありませんので、厚紙などを利用して三角定規や分度器、そして計算のマスやそういったものを張り付けてセロハンテープとかで補強しながら長く使えるようにしました。また高学年の生徒たちには発泡スチロールなどをこう立方体にして積み木やこうブロックなどの代わりにして体積の学習に使ったり、あとは使い捨てのストローや楊枝などを使って図形などの学習に使ったり、ハンガーやコップなどで天秤を作って重さの測定に、セロハンテープの芯を拾ってわかにかにしたり、このペットボトルを使ってゲームなどをしながら割合や確率の学習などに使いました。

領域ごとに先生たちと一緒に作った教材ですとか掲示物などをちょっと紹介したいと思います。掛け算や分数そして形などの用途にも使いました。B領域においてはこういった具体物を使いながら量と測定について学習していきました。C領域の普及に関しては身近にあるもの、廃材などを利用しながら立体を作ったり操作活動をして図形の名前やそういったものを確認し合ったりしました。D領域の数量関係に関してはやはりグラスとかそういったものが目で見て分かるものを掲示したりして学習の方を進めてもらいました。このように算数の授業において具体物を操作したりゲーム的な活動や体験的な活動を取り入れることで子どもたちは学ぶ楽しさを実感できたようです。その結果、子どもたちは算数の学習が楽しいと興味や関心そして意欲の向上が見られるようになりました。こういった活動を継続することで子どもたちはおそらく算数に対するやる気ですとか学力の方も上がってくるのではないかという風に思っております。

最後になりますが、この活動を振り返ってまず強く感じたことはどの国の子どもたちも学ぶ機会ですとか環境、そして道具があれば学ぶ意欲も学習も向上するんだということ、そういった状況を作り出すのもそういう児童の能力を伸ばしてあげるのも、教員の重要な役割なんだということを考えさせられました。そして教員が変われば児童も変わるという事も目の当たりにし、私たちが児童に対して教えていくことの責任というかその重要性、重大性を痛感させられました。そして何よりも学校に行けないすべての子ども達が平等に教育を受けられるようになる日が来ることを心から祈っています。

2年間のボランティア活動を通して、現職教員として海外の学校のたくさん子どもたちや先生方と触れあえたこと、そういった出会いに本当に感謝しています。彼らから、私はたくさんのことを学ばせていただきました。そして2年間、いつも支えてくれた家族ですとか同僚、そしてJICA事務所の皆さんには本当に心から感謝しております。このような経

験を積ませていただいて、私自身本当にこの 2 年間で意識も大分変わってきました。この経験を生かして、今後の教育現場で子どもたちの学びの糧となるように精進していきたいと思えます。ご清聴いただきありがとうございました。



2. グアテマラ教育事情

- ・教育制度：6・3・3制
- ・義務教育：小学校6年間(就学年齢：満7歳)  
※完全実施には至っていない
- ・小学校就学率：95% (15歳未満の国民)
- ・留年率：10% (毎年試験があり、合格点に達しないと落第、2年度は退学)
- ・非識字率33%

**教育レベルは相当低い!**

GOBIERNO DE ADARDO COLIM GUATEMALA MINISTERIO DE EDUCACIÓN

2. グアテマラ教育事情

子どもたちは…

- 靴磨き
- 仕事
- 家の手伝い

GOBIERNO DE ADARDO COLIM GUATEMALA MINISTERIO DE EDUCACIÓN

3. 活動内容及び成果

GOBIERNO DE ADARDO COLIM GUATEMALA MINISTERIO DE EDUCACIÓN

3. 活動内容及び成果

【1】配属先  
サンマルコス県教育委員会(教育開発局所属)

【業務内容】

- ・算数教育改革の推進  
→算数プロジェクト「GUATEMATICA」の県内学校への普及・拡大
- ・県内学校の管理・指導  
→パイロット4校を中心に巡回指導

GOBIERNO DE ADARDO COLIM GUATEMALA MINISTERIO DE EDUCACIÓN

3. 活動内容及び成果

【2】活動最終目標  
児童の算数理解力向上

GOBIERNO DE ADARDO COLIM GUATEMALA MINISTERIO DE EDUCACIÓN

3. 活動内容及び成果

～児童の学力向上のために～

具体的目標  
①教員の算数理解力・指導力向上

GOBIERNO DE ADARDO COLIM GUATEMALA MINISTERIO DE EDUCACIÓN




GUATEMÁTICA

3. 活動内容及び成果

～児童の学力向上のために～

具体的目標

②算数教材の定着・普及拡大



GOBIERNO DE ALVARO COLOM  
GUATEMALA  
MINISTERIO DE EDUCACIÓN

GUATEMÁTICA

3. 活動内容及び成果

～教員・児童の学力、意識確認のために～

【3】アンケート・学力テスト実施  
(パイロット校全教員・児童対象)

▶結果は?!

GOBIERNO DE ALVARO COLOM  
GUATEMALA  
MINISTERIO DE EDUCACIÓN

GUATEMÁTICA

3. 活動内容及び成果

パイロット校教員

学力 意識

低い!!

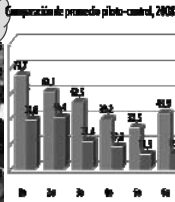
GOBIERNO DE ALVARO COLOM  
GUATEMALA  
MINISTERIO DE EDUCACIÓN

GUATEMÁTICA

3. 活動内容及び成果

教員の学力 → 児童の学力

Competencia de proceso piloto-control, 2008



GOBIERNO DE ALVARO COLOM  
GUATEMALA  
MINISTERIO DE EDUCACIÓN

GUATEMÁTICA

3. 活動内容及び成果

学力・意識 不足

環境不足 教材不足

問題!!

GOBIERNO DE ALVARO COLOM  
GUATEMALA  
MINISTERIO DE EDUCACIÓN

GUATEMÁTICA

3. 活動内容及び成果

～問題解決・目標達成のために～

【4】活動内容

- ①授業観察
- ②公開授業・意見交換会
- ③算数研修会
- ④教材作成

GOBIERNO DE ALVARO COLOM  
GUATEMALA  
MINISTERIO DE EDUCACIÓN

3. 活動内容及び成果

### ①授業観察

パイロット校

月 → Rincon

火 → Chamác

水 → Castillo Armas

木 → Rodeo

3. 活動内容及び成果

### 授業観察後

助言・相談 ←

→ 個別指導

3. 活動内容及び成果

### ②公開授業

パイロット校を中心に実施

協議会

意見交換会

3. 活動内容及び成果

### 算数授業

手作り教材

工夫・改善

掲示物

操作活動

3. 活動内容及び成果

### 成果

教員の意識向上  
及び授業改善!!

3. 活動内容及び成果

### ③算数研修会

- 1.基礎コース
- 2.算数スペシャリストコース
- 3.算数指導者育成コース

GUATEMÁTICA

3. 活動内容及び成果

1. 基礎コース

【算数4領域別研修会】: 全20時間

A領域	B領域	C領域	D領域
数と計算 たし算 ひき算 かけ算 わり算	量と測定 長さ 重さ 面積 体積	図形 角 線 平面図形 立体図形	数量関係 グラフ 割合 比 比例・反比例

GUATEMÁTICA

3. 活動内容及び成果

～グループ構成～

パイロット4校: 全教員

A領域グループ	B領域グループ	C領域グループ	D領域グループ

GUATEMÁTICA

3. 活動内容及び成果

基礎コース

～研修日程～

金曜日

1週目	A領域	各4時間 ×5回
2週目	B領域	
3週目	C領域	
4週目	D領域	

GUATEMÁTICA

3. 活動内容及び成果

教員同士

教え合い 学び合い 内容議論

説明・発表

GUATEMÁTICA

3. 活動内容及び成果

成果

Comparison of pre-test and post-test results, 2008

100  
80  
60  
40  
20  
0

Pre-test  
Post-test

教員の算数理解力向上!!

GUATEMÁTICA

3. 活動内容及び成果

2. 算数スペシャリストコース

【選抜教員育成研修会】: 全20時間

公開授業 発表者 5時間	算数研修会 「基礎コース」 講師 5時間	他市町村への 算数研修会 講師 5時間	学力試験対 策講習会 講師 5時間
--------------------	-------------------------------	------------------------------	----------------------------

3. 活動内容及び成果

**研修会・公開授業**

教員への指導  
 実践・経験  
 公開授業実施  
 研修会講師

3. 活動内容及び成果

**成果**

A  
B  
C  
D

**算数スペシャリスト  
24名育成!!**

3. 活動内容及び成果

**3.算数指導者育成コース**

**【指導者育成研修会】: 全20時間**

算数指導法  
目的・目標  
5時間  
 算数指導書  
算数教材  
使用及び作成法  
5時間  
 研修会講師  
模擬授業実戦  
10時間

3. 活動内容及び成果

**指導者として**

目標・目的  
確認  
 自信と自覚  
 模擬授業  
実践  
 算数教材  
作成

3. 活動内容及び成果

**成果**

**NOTICIAS DEPARTAMENTALES MINEDUC**

Taller para docentes especialistas en el Programa Guatemática

**算数指導者チーム結成!!**

Maestros y maestras capacitados en el Programa Guatemática

3. 活動内容及び成果

**1)算数システム構築**

県教育事務所  
 算数指導者チーム  
 パイロット校

**教育事務所との連携を!!**

3. 活動内容及び成果

2) 算数4支部  
サンマルコス県  
29市町村

北部支部  
10市町村

南部2支部  
7市町村

5市町村

全県への普及・拡大を!!

3. 活動内容及び成果

④教材作成  
～学習教材不足改善のため～

GOBIERNO DE ALVARO COLOM  
GUATEMALA  
MINISTERIO DE EDUCACIÓN

3. 活動内容及び成果

リサイクル教材!!

3. 活動内容及び成果

手作り算数セット

おはじき 定規セット 位取りカード

マス・計算表

3. 活動内容及び成果

学習教材

発泡スチロール 体積

ストロー&楊枝 図形

ハンガー&紙コップ 重さの測定

セロハン&ボトル 割合 確率

3. 活動内容及び成果

A領域  
数と計算

$\frac{3}{5} + \frac{1}{5} = \frac{4}{5}$

GUATEMÁTICA

3. 活動内容及び成果

B領域  
量と測定

GUATEMÁTICA

3. 活動内容及び成果

C領域  
図形

GUATEMÁTICA

3. 活動内容及び成果

D領域  
数量関係

GUATEMÁTICA

3. 活動内容及び成果

算数の授業

↑

学ぶ楽しさ

具体物操作      ゲーム的活動

体験的活動

GUATEMÁTICA

3. 活動内容及び成果

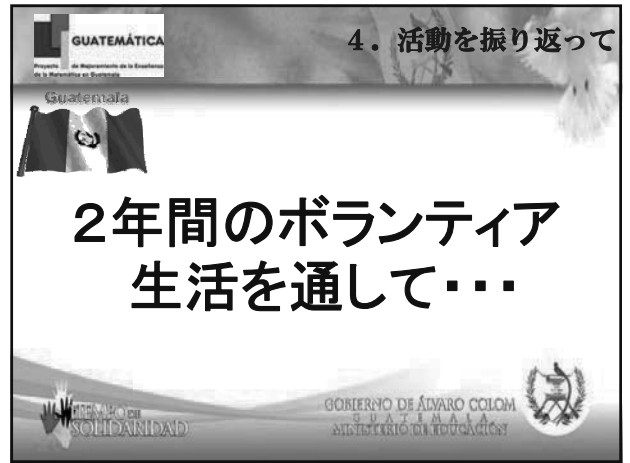
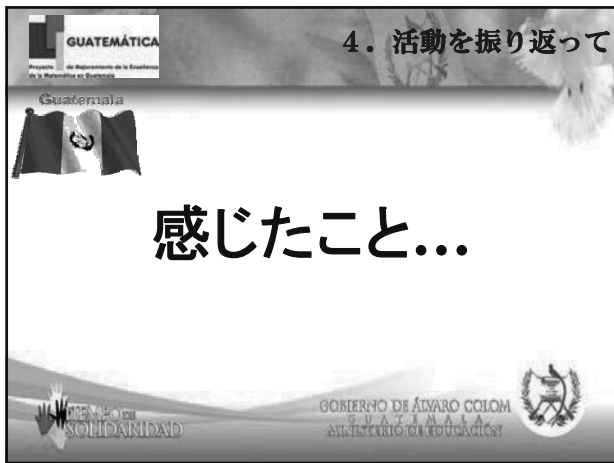
成果

児童の興味・関心、意欲向上!!

GUATEMÁTICA

4. 活動を振り返って

GOBIERNO DE ALVARO COLOM  
GUATEMALA  
MINISTERIO DE EDUCACIÓN







## 東アフリカの特別支援学級での実践～環境条件に応じた支援を探

して～

阪本真樹子

(平成 20 年度 1 次隊 養護 ケニア)

---

はじめまして、阪本真樹子と申します。20 年度一次隊としてケニアモンバサというところに派遣されていました。今日はその特別支援学級での取り組み、活動を紹介させていただきます。宜しくお願いします。

それでは今日なんですけれども、今日は発表概要ということでケニアの紹介、それから特別支援教育の紹介、私の配属先であるセントピーターズブロック校の紹介、そして私の苦闘ぶりを見ていただいて、最後に振り返りたいと思います。

ただ、せっかくなのでケニアを紹介する前にケニアの言語ということとスワヒリ語という言語ということになります。お決まりなんですけれども、せっかくなので挨拶だけは皆さんとスワヒリ語でできたらなと思っています。日本でだとなかなかこう声が小さくなったり、それかケニアでは握手もたくさんするんですけど、握手もちょっと照れ臭いなという思いがあると思うんですけれども、そこは是非元気に一緒に声を出していただけるとありがたいなと思います。ケニアでこう何か元気がない挨拶を返していると「真樹子どうしたんだ、体調が悪いのか、おなかが痛いのか、怒ってるのか」とよく言われていて、なので皆さんも是非大きな声で挨拶してください。今日は一つだけ、皆さん「ジャンボ」というのはよく聞くとするんですけれども、私が皆さんに問いかけるときは「ハムジャンボ」というので、「ハトゥジャンボ」と返して下さい。じゃあちょっと練習してみます。「ハムジャンボ！」ありがとうございます。そしてもう一つ、もう一つは ”How are you?” と “I’m fine”. に相当するもので、あのこの集団の場では私が「ハバリゼン」と言うので、「ズリ」という風に答えてください。じゃあハムジャンボから行きます。「ハムジャンボ」「ハバリゼン」ありがとうございます、アサンテサーナ。

それでは私の発表を始めさせていただきます。ケニアですが、皆さんケニアがどこにあるかご存知でしょうか。ケニアはアフリカ大陸の中の一つの国です。ケニアの中のじゃあどこに位置するのか、アフリカっていうと日本人にとって全部同じような、同じようになっていたら失礼ですけど、なんかアフリカっていうと暑いところっていう、一つ一つの国のイメージがなかなか持ちにくいんですけれども、ケニアは東アフリカに位置していて、あの紫がけの色のところがケニアなんですけれども、海も山もある国になっています。

ケニアというのはイギリスから独立した国で、東アフリカの経済の中心として、発展を遂げてきました。ナイロビという首都は、皆さん名前は聞いたことがあると思うんですけ

れども、東アフリカの中でもとても大きくて、高層ビルが建ち並ぶような都会です。一方でこれはマサイ族という有名な一族のお家なんですけれども、こういう土壁でそのまま暮らしているような色んな部族の暮らしが大切に護られ、混じり合いながら作られた国でもあります。部族は、全部で 47 部族ありまして、すべて違う言語をもっています。ものによっては文法も全然違いますので、家で話す言葉と学校で習う言葉が違ふとか、皆さん学校で習う言葉が英語で公用語はスワヒリ語なんです。なので、最低 2 ヶ国語以上はまあみんな話せて、基本 3 ヶ国語話せる、3 ヶ国語というか 3 つの言葉を話せるというのがよくあるパターンではありました。

ここはちょっとだけレジュメにない資料を加えさせてもらって、せっかくなので食べ物を紹介、えっと奥にあります白い塊のようなものがウガリとって、トウモロコシ粉で作った主食になります。これが一番一般的で、どこでも皆さん作っている、中華マンの外側をもうちょっとねっちょりしたようなパサパサしたみたいなの、何ていうか微妙なんですけどそれだけを固めたような食感のものです。それと手前にあるのはよくアジアでも食べられているチャパティもありますし、コースト、特にその海岸地区の方ではお米もたくさん食べます。一緒に合わせるものは色んな野菜だとかキャベツもあるんですけど、キャベツとかフクマオキというケープの一種のものを炒めたようなものをよく食べたりします。

ケニアといえば皆さんよく思い浮かべるのは動物王国だと思うんですけども、やっぱり動物王国は動物王国でした。ただ、道端にいるわけではないので、国立公園に行くと日本では見られない動物たちに出会えます。立場を利用させていただいて、遊びにも行きました。

さて、いいところも沢山ある国なんですけれども、すごく難しい問題もみんな抱えています。ここにあるのはナイロビのショッピングモールのようなところにあるお店で、とても綺麗で日本にもありそうなお店がある一方で、キレラと呼ばれたり、色んな名前のスラム街と呼ばれるところが共にある国でした。その貧富の差は想像を絶するもので、日本では想像できないようなものがありました。

例えば、まあまあいい職と言われているものに銀行員があるんですけども、銀行員の収入が 5-6 万シルで、大体日本にして 8 万円でしょうか。っていうのに対して、私の学校で働いていた寮母さんの収入は 2,500 シル、大体 3,000 円くらいでした、月に。その中から仕送りもして、部屋代も払って、さらに彼女たちはシングルマザーだったのでその中で暮らしているという現状があつてそれでもそのスラム街に住む人々よりも収入がある方で、そうでした。

さて、では私の暮らしたモンバサという土地をちょっとご紹介します。先ほどケニアの中には山の部分と海の部分があるといったんですが、私が住んでいたのは海の近くです。アフリカというと赤道に沿っているので暑いイメージがあるんですけども、首都ナイロビ

は夏の軽井沢と呼ばれています、別名。乾燥していて、とても涼しい都市なんですね。なので、雨季になるとちょっとジャケットとかフリースを着こんで朝晩は息が白くなるようなところですよ。

一方で私が住んだ海岸沿いってというのは一年中暑くて、ヤシの木もいっぱいあって、雨季にはずっとムシムシして暑いところでした。ちなみにこの写真は海岸側の、リゾート地なんですけれども、モンバサはヨーロッパのリゾート地で、でもそのリゾート地の一角にもそんなタイヤ浮き輪がいっぱいありました。これ、大人気です。ケニア人、あんまり泳げる方がいないので、これをタイヤ貸しの人にお金を払って借りて浅瀬の遠くまで続くような海なんですけれども、そこにこのタイヤの浮き輪を持って遊ぶのがすごく、海をあんまり見たことがない人たちにとっては、とてつもない楽しみなようです。

先ほどいったケニアのこの真ん中の方にあるのがナイロビ、首都で、その一方インド洋に接しているところにあるのがモンバサ、私が暮らした場所になります。海がきれいな場所で、色とりどりの魚が見られます。そんなリゾート地なんですけれども、一方そのリゾート地の隣にはもちろん庶民の暮らしがあります。これは私が仲良くしていた、リリアという八百屋さんなんですけれども、例えばナスもあるしキャベツもあるしホウレンソウもありました。トマトはみんな大好きで、よく色んなものに入っています。マンゴーもあって、マンゴーは 30 円くらいで買えます。季節にももちろんよるんですけれども、マンゴーとかはすごく手に入りやすい土地でした。近所の人にとっても優しくしてもらって、リリアは毎日の仕事の帰り、立ち寄っては話しこんで色んなケニアの事情を教えてくれる、そんな仲良くなったケニア人の女の子でした。

さて、ここからはケニアの特別支援の教育制度、特別支援について簡単に一つご説明します。一つは教育制度全体なんですけれども、アフリカっていうとやっぱりすごく貧困の問題が大きくて、教育制度とかまだまだ難しいのではないかと思われる方も沢山いらっしゃると思います。私もそう思っていましたし、そういう面があるのも確かなんですけれども、一方ケニアでは一年から八年生のプライマリーという小学校段階にあたるようなものが国の無償化が進んでいます。昨年度セカンダリーの無償化が謳われました。

まだまだ難しく、プライマリーでは爆発的な増加を経て就学率が随分上がったんですけれども、一年のときは結局就学用意をしていた 10 歳とか 12 歳の子が入ったために、一時期 105%とか一緒になった年があったりするほど一度爆発的な増加を経たんですけれども、教科書代がやっぱり払えないだとか人出が取られるっていう理由だったり、いろんな理由からその学校を続けることが難しいという皆さんや、今回セカンダリーの方が無償化の対象になろうとしているんですけれども、ケニアではみんな寄宿舎にセカンダリーでは入るんですね。その寄宿代が、べらぼうに高いので、そこですごく成績が優秀な子でも経済の理由からストップになってしまうということもまだ多々あるのはあります。

また、ケニア共通テストがありまして、八年生の時と三年生の時にあるそのテストの結

果で進学できる学校を許可制みたいな形で通知されるんですね。A~C のどれかにあなたは行くことができます、その中でお金を払える場所とかいろんな条件を加味して、自分が進学できるところを選ぶってような形になっています。先ほど言った貧富の差がとても大きくて、富裕層、富める者はより富んで貧しい者は永遠と貧しくて、っていう印象を本人ケニア人自身も持っているので、貧困のループから抜け出すためには学歴をつけることだ、優秀な成績を取めることがそこから抜け出す唯一の道だっていう風に思ってる方もたくさんいて、実際それ以外の人は難しいところがあるのがケニアなんです。

では特別支援分野ではどうかっていうと、特に農村部で強いんですけども、障害者は隠すべき存在という意識がとてもまだ強く残っています。ただ、聴覚障害の方と身体障害の方に対しては他の障害の種別に比べると理解はあって、マラリアですとか交通事故、ポリオなどの後遺症で身近にたくさんいたっていう理由があるかもしれませんし、他の歴史的な背景もあったんじゃないかといわれています。

例えばこれはある外国人の方がやっている施設の様子なんですけれども、左側にある写真の方は一名の方が聴覚にハンデを持っている方で、右側に位置しているのはこの地方で、ケニアでよく使われている一般のタイプの車いすになります。下半身のみの歩行が難しく、手は自由に動かせたりという方が多くいらっしゃるので、車いすを操作して色んなところに行かれたりお仕事をされている方もたくさんいます。

その他全体を見回しますと、公立・私立の特別支援学校と学級があります。ただ、とても数が限られたものであるのは確かです。また、全体の認知度がとても低く、彼らの生活の質を保つという事をととても難しい状態にあります。また先ほども言ったように、学歴という事が重視されることと、学費がすごくかかること、それから数が少なくて遠くのところまでは送り届けられないなどの理由から未就学のケースは本当に多くあります。

さて、ここで私の入りました **St. Peter's the Rock** 校という配属先の紹介をさせていただきます。**St. Peter's** は三つの部門をもつ小さな私立学校でした。全体の生徒数は 80 名ほどで、うち 30 名ほどが何らかのハンディキャップをもっています。

私が入ったのは特別支援クラスと書いてある **Special Unit** と呼ばれるところなんですけど、他のクラスや他の課程の中にもハンデをもった子たちが一緒に在籍していました。**Special Unit** の方では、当時は 18 名から 24 名という大所帯でした。年齢も 6 歳から 23 歳と幅広く、日本では最初に思ったのは日本で信じられない幅が同じクラスにいるなということでした。主障害はダウン症、自閉症、てんかん、知的障害、脳性まひ、猫泣き症候群などで、クラスの教員は 1 名から 3 名、ただ定期の教員は一名でした。

ボランティアの要請内容は、3 代目 **JOCV** として、1 代目の養護担任として活動しました。スペシャルユニットでの日常業務っていうのが基本となっていて、まあスタッフの指導技術の改善ということも挙がってはいたんですけども、なかなか難しい現状もありま

した。

それではここで私のもがきということで少しご紹介したいんですけども、正直にいうと迷う事がとても多くて、何も出来なかったなと思う事も多々ありました。6月末に赴任してから、9月、長期休みに入りましたので任地にはいたんですけども、私の本格的な子どもたちとの対話が、関係が始まったのは9月からだったんですね。そこから毎日の中では上手くいかないっていう事がとても多くて、特にコミュニケーションっていうのもやっぱりもちろんなんですけれども、日本で想像していただけるかもしれないことっていうのはほぼ、ほとんどもう出来ないことの方が多くてどういう方にしたらいいんだろうっていうことをすごく悩む日々が一定の期間続いていました。

その中で、この三つを柱として立てていたんですけども、特に一番上にあるここに应じた学習の促進、それは私が今行く前に感じたこととは違うけれど、そこはどのような形でやるにしても、そのどんなように精選するか、どうアレンジできるかということがとても大事であるけれど、ただ私の柱として大事にしたいことは、そこは譲れないっていうところにも強くして思いました。

抵抗を感じたのは本当にたくさんあったんですけども。やっぱりアフリカ諸国でよく言われることなんですけれども、体罰を多用するようなやり方ですとか、あとはその24名っていう日本では一つのクラスに入ることがない、しかも生活年齢もそれだけ幅がある子が同じクラスにいる状態で一斉授業をやるんですよね。でもそんなの無理だと思っていて、すごく抵抗を感じていました。でもそれをやっぱりコミュニケーションの面ではなかなか伝えることが難しかったですし、特に私がコミュニケーションで一番悲しかったのは子どもたちが英語で学習しているんですけども、英語でもやっぱり難しく、スワヒリ語も難しく、無発語の子ですと単語のレベルの子も沢山いるのでその子たちに何とかやり取りをしてこうってときにせつかく発してくれた一言を、日本だったら絶対拾うようなひと言を、何をいつてるかわからなくて拾ってあげられないんですね。それがすごい悔しくて、コミュニケーションもすごく嫌だったんですけどどうにかしたいと思ったものの一つでした。

後は人も激しく入れ替わりまして、例えば私が活動した1年9カ月の間に担任の先生が3名代わられているんですね。給料の問題とか色々あるんですけども、3名代わられていて何を引き継いでいけるのか、それから基本としての障害児教育っていう日本で知っているようなやっぱり支援教育の分野で持っていてほしいものとか、教諭の資格とかまだまだ沢山あるんですけども、まだまだそれも一本的になっていましてしたので相手にどこまで求められるか、私が伝えられるかっていうことにすごく悩みましたし、経験を長く積まれている支援校で長くやってきた方でも、ダウン症、自閉症っていう名前は知っているけれど、じゃあどんなことが違って、どんな条件で学びやすく、どうしたらいいんだろうっていうことに関してはあまりご存じなかったですね。でもそれをご存じないけれども

沢山経験なさっているし私もそれを上手く伝えきれないってところですごくジレンマに陥るところもありました。

ただ、その中で私が思うことや気付いたことを全部は絶対にできませんし、それに、それがケニアでその人たちにとって必要とされていることではないこともあったんですね。今ここで必要な形、受け入れてもらえる形で私が大事だと思う、個々に応じた学習、その子に応じた形での学習を私なりに進めたいってというのが私の柱になりました。そう思いながら、音楽、ものを使った具体的、具体物を使ったりですとか、前の先輩方から引き継いだものをなるべく個別に使えるような環境の整備ですとか、そういうこともさせていただきまして、子どもたちの動機付けを高めて学習を保てるようなそんな環境、そんな授業っていうのを探し続けている日々でした。

その中で最初にできたことは時間割の整理でした。これは先ほどいった一斉授業をどうにかしたいという思いが強くありましたので、その前の断続的に行われたグループ活動を時間割の中で必ずやるように調整していくことから始めました。その前にあった時間割は今回資料がなくて挙げられていないんですが、あったけれど活用されてないというかランダムにされていたものが多かったので、その時間、トイレタイム、ブレイクタイム、ランチタイムって書いてあるところは全校同じなんですね。そのあと他にもクラスの時間を私と先ほど1~3名とிட்டんですけれど、私がいることで常時2名はその人が入れ替わる瞬間でない限りはいることになっていましたので、何とかしてグループワークをするために行いました。

ここにあるG (A, B, C) って書いてあるところがグループワークの時間になっていて、A、B、Cをグループ分けを同僚と一緒にさせていただきました。学力テストとかはないんですけれども、グループAが言葉によるコミュニケーションの指示理解が比較的可能で、少し複雑なテーマも可能なグループ、グループBの方が簡単なルールの指示や理解はできて、行動や音声の模倣が活発なグループという風に分けさせていただいて、手のマッチングやジェスチャーなどが有効なグループ。グループCの方は言葉による理解が比較的難しく、ルーティーンを作ったりですとか、そういうことが行動の指標となっているようなグループということと同僚と確認して3つのグループに分けました。

それがこの時間整理の手順なんですけれども、日常生活の指導だとか、グループ学習の必要性をたどたどしい中で何とか伝えられてそのあとグループを作り、それから週2回は設定することを前提として組み合わせたり、そのあとの調整を行ったりしました。

この他にやったことと言えば、色々試してみたりもしたけれども、最終的に描画によるスケジュールの掲示、それからサインの活用、歌選択時の絵の活用という風になっています。本当に書きなぐったような絵で恐縮なんですけれども、写真を使うのとかがとても難しく、高価なものなのでボランティアだから出してくれるんでしょみたいなことにどうしてもなってしまうんですね。それで他の教材を作る時のも、じゃあその教材のもととなるものは誰が出してくれるのかということになってしまっていて、ボランティアがある程度入っ

てくる団体だったので、あ、ボランティアだから買えるんだよねみたいにいわれてしまう事がとても嫌で、どうしたら子どもたちにいい形を私がいなくなった後になるべく使ってもらったり、馴染みのある形にできるだろうかということがすごく私の中で悩みでした。

一つだけ、映像を紹介します。授業の中で歌選択をしている場面です。絵を三つだけ書きました。誰が選びますかと聞いています。これはクラスの朝の会のような時間の一つ中で歌を選んで一緒に歌を歌ったり選択したり、それからジェスチャーとかで表したりするような時間でした。その前は全て言葉で聞いていて、何選ぶ、何選ぶってみんなの前で聞くんですけども、言葉で答えられない子は教員が好きそうだなと思うのを提示してうんといったらそれでやるという感じだったんですね。でも絵を描くと選べる子が随分いて、楽しみに自分で迷いながら選べていました。とてもごちゃごちゃした状態ではあるんですけども、こんな感じでいつもの授業が行われていました。

その他最後の方は少し教材を出すことですかシールを使うというのも、またボランティアがといわれることが最初は気になってしまって出せなかったんですけども、図工の授業をちょっと工夫したり、あとはチャートを使うのがケニアの一般的な方法ですのでチャートを利用したり、色んなそのまま置いてあった以前のボランティアが使用していた楽器をみんなで使ったりですとか、ケニアでは幼稚園から絵を使って学習をするので、幼稚園で習うより前の段階をどうやって教えたらいのかということに対してあまり経験をお持ちでなかったのも、絵と絵を結ぶとかもあまりしなかったんですね。それをノートの中でのべき手書きなんですけどみんなを使うようにしていったりとか、そういう変化をさせていただきました。

その他発信をするということもとても大事だなと感じた時期でしたので、色んなことを模索させていただきました。以前の先輩方から続いていたニーズのあった職業訓練としてのビーズ製作がありまして、そちらの販売を以前の JICA オフィスは違う先輩方が手掛けてくださったものに便乗させていただいたりとか、前の先輩、前任の方が橋渡しをしておいてくれたピースボートの乗船者とのやり取りが成立したりということもありました。どれもなかなか限定的なもので私が帰った後につながるということは、今のところビーズ販売に関しては難しかったんですけども、ただ色んな場所につながることによってケニアの特別支援教育を発信することがすごく意味があるという風に、小さな私一人では両パターンに一人だったんですね。それでは何もできないけれど、その中で次の一歩につながることができるのではないかと考えて小さくですがやらせていただきました。本来でしたら一つ一つ反応とか変化をお伝えするべきところなんですけれども、ちょっと時間と資料の都合上割愛させていただきます。

ただ、子どもたちが変わってきてくれたこと、それを例えば校長が無発語の自閉症の男の子がトイレサインをいつも私に必ず伝えてくれるようになったんですけども、それを見て「うわー、フランクリンがトイレっていったの」ってすごく喜んでくださって、そう

いうときですとか、あとは寮母さんたちがトイレ指導をするのに洗濯物が増えるのがすごく嫌がっていて、いつも少し怒鳴り合いのようなやり取りになってしまっていたんですけども、「今日はどういったの、ジョー？」といたりしてそういうことに関しても話しかけてくれたり、生活、日常生活の指導、歯磨きなどの指導を本当は機会型がいいんですけども機会利用型ができませんでしたので、授業でやらせていただいたときも、「あ、じゃあクラハにも教えてあげてよ、ちゃんと磨くのはどうやるか。あの子たち困ってるんだから」と寮母さんからお話しをいただいたりして、そんなことを共有できたことがとてもうれしかったなと思っています。子ども達の変化を共有できることで色んなことが促進されたりしました。

最後に今振り返ってみると、全体としてはやっぱり本当に人に支えられたケニア生活だったなと思っています。スペシャルユニット、先ほどのところの担任の一人として認められたと思えたことは色々私が先に前に出ることだとか、他の担任が変わってしまう事に問題があったんですけども、そのこと自体は自分のエゴなんですけれども、まあ幸せだなあと思う事もありましたし、一方伝えることやつなげることの難しさもとても感じて帰ってきたのも事実でした。何よりも、子どもと築いた関係が一番の宝物だというふうに私は思っています。色んな方に支えられて、色んな方に協力していただいて 2 年間を終えることが出来ました。ありがとうございました。



## ケニア・モンバサの 特別支援学級での実践

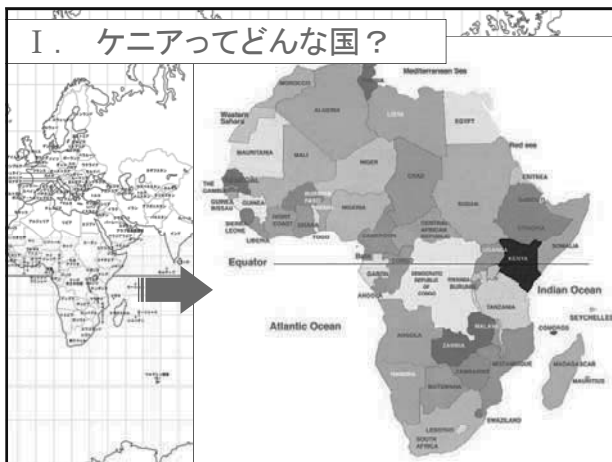
～環境条件に応じた支援を探して～

都立北特別支援学校  
阪本真樹子(20-1ケニア)

## 発表概要

- ケニアって、どんな国？
- ケニアの特別支援教育
- セントピーターズロック校の紹介
- 私のもがき
- 最後に～今振り返って～

## I. ケニアってどんな国？



イギリスから独立後  
東アフリカの  
経済の中心として、  
発展をとげてきた国。

47部族の  
文化・言葉が大切にされ、  
互いに混じり合いながら  
つくられてきた国。



一方で、想像を絶する貧富の差がある。

## 私の暮らしたMombasa



## II. ケニアの特別支援教育

### 《教育制度》

- プライマリー(1～8年生)の学費無償化がすすみ、セカンダリー(1～3年生)の無償化が始まった。
- 8年生、3年生でのケニア共通テストの結果で、進学できる学校が政府から指定される。
- プライマリーでは希望者の爆発的な増加をへたが、寄宿舎代などの負担から、セカンダリー進学には大きな壁がある。
- 貧困のループから抜け出す、ほぼ唯一の道が学歴。

### 《特別支援分野》

- 「障がい者は隠すべき存在」という意識が、まだ強い(特に農村部)。
- 聴覚障がい者・身体障がい者に対しては、その他の障がい種別に比べ、理解がある。



- 公立・私立の特別支援学校と学級がある。  
都市部には複数あるが、ケニア全土でも数は限られているようだ。ただし、ろう学校については、認知度も生徒数も他より多い。
- 特別支援教育の認知度は低く、彼らの生活の質を保つことがとても難しい。
- 経済的な理由(兄弟の学費優先など)、通学の困難性などから、未就学のケースも多々ある。

## III. St. Peter 's the Rock ～私の配属先紹介～



### 《St. Peter 's the Rock校》

- プライマリー部門、ナーサリー部門、特別支援部門の3つをもつ小さな私立学校

- ① 通常教育クラス
- ② 統合教育を理想とする教科学習クラス
- ③ 幼児クラス
- ④ 特別支援クラス

- 児童・生徒数:  
約80名



### 《 Special Unit 》

- 対象児童・生徒: 当時は18～24名。
- 年齢: 6～23歳。大多数は10代前半 までが占める。

- 主障がい: ダウン症、自閉症、てんかん、知的障がい、脳性まひ、猫鳴き症候群など

- クラス教員: 1～3名  
(ボランティア含む)



《 ボランティア要請内容》

- 3代目JOCV、1代目養護隊員として活動。同僚とともにスペシャルユニットで、読み書き、歌、スピーチ、日常生活の指導を担当する。また、スタッフの指導技術の改善を図る。
- ①知的ハンディキャップの児童の支援
- ②授業(特にビーズ作成などの職業訓練)実施
- ③イベント参加の補佐
- ④学習教材の作成(例えば英語のポスター)

IV. 私のもがき ～‘今ここで’を探して～

- 個々に応じた学習の促進  
(学習環境の整備、学習内容の充実)
- プレボケーショナル・トレーニングの充実
- ケニア特別支援教育に関する発信

《抵抗を感じたこと・困難だったこと》

- 罰を多用しながら保つ一斉教授のやり方
  - コミュニケーション
  - 人の激しい入れ替わり
  - 限定的な情報
- etc...

↓

思うこと、気づいたこと全部は絶対にできない。  
「今ここで必要な形、受け入れてもらえる形で、  
個に応じた学習を私なりに進めよう。」



1) 時間割の整理: グループ活動時間の確保

例: 赴任9ヶ月後の修正時間割

\* O: スピーチ、W: 書く活動、G: グループワーク

	8:00-	8:30-	9:30-	10:30-	11:15-	14:00-
月	朝礼	クラス	G(C)/ チャート	数O	G(AB)	ビーズ
火		クラス	G(C)/ チャート	読み聞 かせ	P.E	ビーズ
水	フリー プレイ	クラス	G(C)/ チャート	言W	音楽	ビーズ
木		クラス	クラス	言O	G(AB)	ビーズ
金	PPI	クラス	クラス	数W	図工	ビーズ

《整理の手順》

- ①グループ学習、日常生活の指導のための時間確保の必要性を話し合う。
- ②認識に応じた3つのグループに分ける。
- ③各グループ時間を少なくとも週2回は設定することを前提として、その他の授業と組み合わせる。
- ④実質のクラス運営のため、1回目のグループメンバーを生活年齢・学習態度をふまえて調整。
- ⑤学期ごとに、他クラス時間割との兼ね合いに応じた調整。

## 2) 視覚刺激・教材の活用

- 描画による  
スケジュール提示
- トイレサインの活用
- 歌の選択時の絵の活用



## 3) ケニア特別支援教育に関する発信

- ビーズ商品(職業訓練として作成)の販売を通じた発信
  - ① JICAオフィスでの販売
  - ② ピースボート乗船者への働きかけ
  - ③ ふれあい祭り(日本人学校主催)への参加
- お便りの作成 ~前勤務校に向けて~
- JICA広報を介した発信(活動紹介、クリスマスカード)

## 《子どもの変化・スタッフの反応》

- ボランティアと子どもたちとの関係の成立  
罰を多用しないやりとりの成立  
子どもたちの積極的選択行動や発言の増加  
無発語自閉症児のトイレサインの活用 など
- 子どもたちの変化を、次第にスタッフと共有できることが増えた
  - 新しい取り組み受け入れ促進
  - 活動終盤には、ボランティア活動終了後の授業の流れや教材利用の継続を要望された

## V. 最後に～活動を今振り返って～



子どもたちと築いた関係が一番の宝物



ご清聴ありがとうございました。

## 実験を取り入れた授業の工夫

金林安恵

(平成 20 年度 1 次隊 理数科教師 インドネシア)

よろしくお願ひします。20 年度 1 次隊でインドネシアの方に理数科教師として派遣されておりました、金林安恵と申します。現在はこの 4 月、帰ってきてすぐ転勤だったんですが、山口県の下松市立久保中学校に勤務をしています。では発表を始めさせていただきます。

まず、もう印が出てしまっていますが、インドネシアは皆さんどちらにあるかご存知でしょうか。ちょうど赤道をはさんで沢山の島が並んでいるところがインドネシアになります。散らばっている島の全体の横幅を測ると、約 5,110 キロということで何かの資料を見るとアメリカ合衆国の横幅と同じくらいと何かの資料を見ました。ということで、とても横長い国なので国の中で時差が 3 時間もあるという国になります。そして今言ったようにたくさんの島が集まってできた日本と同じ島国なんですが、島の数が 1 万 8110 個となっていて、正確な数は不明というのを聞きました。東西に長くて、実はあまりインドネシアという国は皆さんには馴染みがないかもしれないんですが、人口は 2 億 3000 万人と言う事で、これも資料が古いので今はもっと増えているのではないかと思います、世界第 4 位で世界最多のイスラム教徒を抱える国になっています。

たくさんの島からできていますので、たくさんの民族と言語にあります。これも 300 以上の民族と 500 以上の言語という風に資料で見たのですが、正確な数は不明という感じでした。たくさんの民族を一つの国としてまとめるということで「多様性の中の統一」というのが国のスローガンになっていました。

では私が住んでいたスラウェシ島はどこにあるかというのと、多分聞き馴染みがない人が多いと思うんですが、以前セレベス島と呼ばれていた島になります。今日たまたま道に迷いながらここに来るときに一緒になった人と話していたんですが、インドネシアというのバリくらいしかわからないといわれました。じゃあスラウェシはどこにあるかというところの K の形、アルファベットの K の形をした島になります。私が活動していたのは K の字の足の一番下になるジェネポント県という県になります。ここがどんな地域かと言いますと、インドネシアの大変広い国で首都ジャカルタのあるジャワ島や、観光で有名なバリは開発が進んでいるんですが、それに比べて東側の地域というのは大変開発が遅れていました。今のスラウェシ島の南の方にある南スラウェシ州の州都のママジュには新しい空港があったりデパートがあったりホテルがあったりして比較的発展していますので、東部地域の発展の拠点にしようということで JICA の関係機関もたくさんありました。

そのママジュから 2 時間南に言ったところにジェネポント県があるんですが、そのマカ

ッサルは全く違って、車で 2 時間移動している間に景色が変わってくるんですが、乾燥がひどくてマカッサルから南に移っていくのにしたがって乾季は段々景色が茶色くなっていきます。乾燥してカサカサの地方でした。

ということで、稲作が年に一回しかできないという事で州の最貧県でしたが、発展していない分昔ながらの生活習慣がよく見られるとてもどかな地域でした。雨季はこちらの写真のように青々としているのですが、乾季はカサカサです。ジェネポンド県は、ちょっとピンポイントで馬が有名な地域でした。

そのような少し開発が遅れている地域で私の要請内容はなんだったかという、国立の普通の一般の中学校において新カリキュラムに対応した理科・化学実験の教授法の指導をしてほしいというのがまず一つ大きくありました。

インドネシアでは 2004 年にカリキュラムの改訂があつて、特にカリキュラムの中に今までにはなかった化学分野が入ってきたという事で、学校の先生たちも自分自身があまりきちんと勉強したことがない、また教えたことがないということで難しい、教えることに困難を感じているという事でそのサポートをして欲しいというのがまず第一にありました。

それから二番目として、学校内や地域の教科研究会、現地の言葉ではエムペーエムペーと言っていたのですが、その活性化に向けた活動、それから三番目、教員と協力しながら新カリキュラムに対応した教材を開発してほしいということが要請内容でありました。

また必要に応じて、もうひとつ私の一つ目の学校、アルゲッケ中学校から車で一時間くらい行ったところにあるんですが、もう一つの中学校、ブンベヤ中学校においても同様な活動が出来ればして欲しいという要請でした。その中で私は配属先教員の理科の指導力の向上のお手伝いが出来ればなということと、学校内や地域の教科研究会の活性化で何かできればなという目標をおいて活動、二つの柱・目標を立てて活動をしていきました。

大体 8 月に赴任したんですが、インドネシアの新学期が 7 月から始まって 12 月までの半年間が前期、1 月から 6 月までが後期ということでしたので、私の活動の任期と対応させやすく、まず 2008 年度の前期に色々な情報を集めたりして準備をして、後期に自分がやってみたいことを試して、それから 2009 年度の前期に少しそれを発展させて、帰る前の 3 カ月で 2009 年度の後期、途中までしかいられなかったんですけど目を通して何か出来ればなと思って最初に計画をたてました。

配属先の学校はどんな様子だったかという、生徒数が約 380 人、各学年が 4 クラスずつの 12 学級で、教員が約 25 人の中規模の学校でした。地域的にもジェネポンド県がほとんどイスラム教徒しか住んでいないような地域でしたので、生徒や教員ともに全てイスラム教徒の学校でした。7:30 から 12:00 まで 40 分授業を 6 時間行う授業の日程が組まれていました。

授業の内容としてはインドネシア語、数学、英語、現地語、理科は物理分野と生物分野、先化学分野もといったんですが、本当は日本と同じように綜合理科というカリキュラムにはなっているんですが私が配属していた学校はそこに対応できていなくて、物理の授業の

時間、生物の授業の時間という風な時間割を組んでその中で少しずつ化学の内容を含みこんでいくというやり方をやっていました。

それから社会や宗教、体育、芸術文化などを学習しています。インドネシアはさっきもいいましたように沢山の民族が集まった学校ですので、地域のことをしっかり学習するという事で現地語の授業があったり、芸術文化の時間に地域の文化、伝統分野を学習したりという事がありました。それから四大宗教、四つの大切な宗教というか四つ国で決められた宗教がありまして、イスラム教、キリスト教、ヒンドゥー教、仏教というのが四つありまして必ずどれかに属していなければいけない、属していた方がよいということで、宗教に関する授業も大変重要視されていました。

ということで学校の中にはイスラム教の生徒がほとんどですので、モスジット、お祈りをする場所がありました。ここでは毎日全員が入ることはできませんので、一日 5 回のお祈りのうちの 2 回目が昼の 12 時なんです、ちょうど帰る頃がそのお祈りの時間ですので、毎日 2 クラスずつくらいが順番で交代してここでお祈りをして帰っていました。その他の子は家に帰ってお祈りをしていました。

それから日本の学校と違って給食がありませんので、早朝から始まって昼には終わるんですが途中でおなか減った生徒は学校の中にあるこういう売店でいろんなものを買って食べていました。主にインスタント麺とか揚げ物が売られていました。

先ほども言いましたように多様性の中の統一と言うことをすごく大切にしていますので、毎週月曜日に全校朝礼があります。学校だけではなくて公的な機関なんかでは必ずこの朝礼があつて、毎週月曜日に国旗を掲揚して国歌を歌って独立宣言文というんですかね、その文章を読みあげていました。この行事はやっぱりすごく重要視していましたので、私が勤務していた学校では毎週この会を進行する当番のクラスが毎週決まっているんですが、この当番になったクラスは前の週の授業をつぶして練習したりということが見られました。

授業の様子ですが、まず上の方なんですけどパソコンの勉強がカリキュラムにも入ってきているんですが、学校の方にまだ設備が整っていませんでしたので、多分技術の先生が誤行錯誤した結果だと思ふんですが、キーボードを生徒に自作させてそれでキータッチの練習をするということをやっていました。生徒は大変楽しそうに取り組んでいました。

それから、南スラウェシ州の踊りを、これも毎年芸術文化の先生が三年生に練習をさせて最後に衣装をつけて発表会をするということをしていました。これはたまたまうちのホームステイ先でとった写真なんですけど、実は私は勤務先の学校のカリキュラム担当教員、日本で言うと教務主任の担当の先生の家ホームステイさせていただいていたんですが、その中学 2 年生の娘も同じ学校に通っていて、その娘が技術の宿題でパソコンの模型を作るという事で一生懸命作っているところの写真です。

やっぱり色んな設備が日本ほど整っていないんですが、そういったときに新しい設備を作るというときは、生徒の大事な労力というかそこで大事な力を発揮する一員として、例



例えばバスケットゴールがやってきたときにはみんなで建ててみたり、ペンキの塗り替えが終わったあとはそのペンキのはみ出したところを生徒がきれいに掃除したりということを生徒が一生懸命やっている、こういう場面も多く見られました。

まず活動、どういうことをやっていたかをお話ししたいんですが、まず初めに 8 月から 12 月、2008 年度の前期なんですが、どんなことをやってるのかなということを情報収集して自分が出来そうなことの準備をしていこうということで、まず一つ目に現地教員の理科の指導力の向上のためにカウンターパートの授業を見学して、どんな授業が行われているのかなという現状把握を行いました。それから学校内や地域の教科研究会の活性化、これについても 12 月に郡の教科研究会が開かれましたので、それに参加して様子を探ろうという事でまずは情報収集を行いました。

実際どうかというと、理科室にまず案内をしてもらったんですが、理科室、写真で見ると大分汚い様子が見れると思いますが、実はこれは私がかかなり掃除をしたあとなんです。机やイスは勿論ガタガタで使えないものも多かったですし、以前実験台に使っていたのではないかと思うんですが真ん中にある三つの台、これも台の上がゆがんだり欠けたりしてちょっと使える状態ではなかったです。電気を使った実験もしたいと思ったんですが、コンセントもここには配線されていなくて、少し離れた位置にある職員室のある棟から延長コードでどンドン引っ張って繋げてつなげてここまで電源を持ってくるという状態でした。とても使っているような様子には見えなかったんですが、現地の先生に聞くと時々使って実験をしているよという風にいわれました。あと実験道具はどんなものがあるのかなということで調べたんですが、道具は結構揃っていました。理科室の後ろの方にちょっとわかりにくいんですが横長に棚があって、棚の中にはピーカーやフラスコやその他いろんな道具がビッチリ入っていて、準備室にも沢山のものがありました。

あと驚いたのが、段ボールが映っている写真があると思うのですが、このように沢山の新品の実験キットが事務室の奥の倉庫に鍵をかけられて保管されていました。何かの支援で届いたらいいのですが、先生たちがちょっと使い方がまだわからないものがあるということと、新しくて高価なものなので盗まれてはいけないからということで大事に倉庫の中に保管されている状況でした。

実際の理科の授業はどうかなということで授業に参加していったんですが、これが私のカウンターパートが授業をしているところなんですが、黒板にみっちり小さな文字を書いていてそれを生徒が一生懸命写すというのが、授業の中では一番時間を割かれていました。なぜかというと生徒は一人一人教科書を持っていません。学校で持っている教科書を授業ごとに配って使っているんですが、それを生徒が自分で持って帰れませんので必要なことは全部写さないといけない、自分が持っているノートに写さなければいけないという事で、理科だけでなく多くの授業でその黒板に書かれたことを写すという事に本当に沢山の時間を割かれていました。それから理科の内容で言うとまだカリキュラムが整理されて

いないこともあったんですが、難しい定義であるとか公式であるとかが沢山教科書にでていましたので、先生たちもそれをまず教えないといけないということで、難しい定義を並べて生徒に写させて、公式を覚えさせるというか公式を書いてそれを使った計算を何度もやらせてということが理科の授業の主な内容でした。生徒たちも理科は覚えることが多くて難しいという風に言っていました。

そのように準備や情報収集をした結果なんですが、まず実験以前の問題が山積みでした。一緒に実験の準備や授業をしていきたいなということをそこで考えたのと、あとはちょうどマカッサルにある JICA のフィールドオフィスというのがあるんですが、そのの所長、新しく赴任される所長さんが私の学校を訪問してくれたり、あとは先輩隊員の学校に出張する機会があったりして、そういう行事を使い一緒にカウンターパートと参加することで少しずつ解決の糸口を探そうと思いました。

それと、学校内や地域の教科研究会の活性化ということで MGMP に参加したのですが、そこで見た結果は結局県の教育庁に提出する書類をみんなで作るだけで、教科の学習をするとか教材研究をするとかいうことは行われていませんでした。でもそこで色々な郡の先生と知り合えましたので、大変やる気のある先生もいましたので、何か勉強会ができたらいいなということをここで考えました。

色々な情報収集をしたりいろんな先生と出会ったことをもとに次の 1 月からの後期では私に 1 年生 2 クラスの授業を担当させてもらいました。私がやる授業を見てカウンターパートに色々考えてもらったり一緒に実験を作ったりということをしたと思って、まずは 2 クラスの授業を担当させてもらいました。それから 3 年生の 4 クラスではカウンターパートの方に授業をしてもらってチーム・ティーチングという形で私が入らせてもらいました。

それから地域の活性化に関しては、ちょうど JICA の他の専門家のプログラムでレッスンスタディ、日本でいう授業研究のプログラムが始まったこともあって、校内でそれをちょっと取り入れてみようという事で、私のカウンターパートが中心になって進めていきましたので一緒にそれに関わっていきました。

それから 4 月には、同じインドネシアにいる理数科隊員と協力して、私の勤務校でワークショップを開催しました。実際にどんなことをやったかということ、とりあえずもうあるものを使って授業に実験を取り入れていきました。日本での中学校の理科教員をしているのですが、日本の常識でいうとこんな道具ではできないだろうなということでも試してみると色々できる実験が多くて、例えばガスバーナーがないとできないかなと思っていたアルコールの蒸留なんかもアルコールランプの火力で十分できましたし、電機関係の授業も電源装置があってもちょっと数が足りなかったりしたので、乾電池でどうにかできるかなと思ってやってみるとうまくいくことがあったりしてどんどん授業に実験を取り入れていきました。

それから、とにかく現地の授業は先生が前で話をして、それを書き写してという事がほ

とんどでしたので、実物を持ちこめるものは実物を持ちこむようにしました。それから私の語学力が不足しているという事もあったので、見てわかるように視覚教材をいろいろと工夫しました。

先ほども言いましたが県内の先生を招いてのワークショップでは、まず模擬授業を先生たちに受けてもらいました。10 県ごとに入れて進めていく授業を理数科教員、他の教員と協力して考えたり、カウンターパートと指導を作ったりして実際に模擬授業をやって、それを任地の先生に見てもらって、その後でいろいろと意見交換を行うということを試してみました。

ということでこの半年間は結構いろいろな活動が発展した時期で、自分がやりたい授業を試してカウンターパートにも実験を紹介することが出来ました。レッスンスタディやワークショップを通して、お互いに勉強し合うということをする第一歩になったんじゃないかなと思います。

その次の半年間でまた色々と発展させようと思っていたんですが、なかなか新年度になって授業が進まなかったり、活動が結構停滞していた時期でした。

ということで最後の三ヶ月間に、もうあまり時間がなかったのですが、やりたいことをできるだけやっていこうということで、実験を取り入れた授業をできるだけ私がやるんじゃなくてカウンターパートが主体になってもらえるように、私が一つのクラスで授業をやってみて、それをカウンターパートに他のクラスでやってもらったり、あとは巡回校の方にも行くことになっていたのですが、レッスンスタディ、授業研究に向けてカウンターパートの先生と一緒に授業づくりをしたりしました。沢山実験を取り入れてきましたので、この頃には随分カウンターパートが実験に慣れてきてくれていました。

それから地域の MGMP の方なんですが、レッスンスタディを校内だけでやっていたものを郡で始めようということになって私のカウンターパートが中心になったのですが、郡内にある 4 つの学校全部でレッスンスタディを行う事が出来ました。始めたばかりでまったく授業研究の形態になっていなかったり、課題も沢山あったんですが、先生たちが一生懸命意見交換をしたり勉強し合おうという体制ができてきていたように感じます。

こういう活動を通じて、別の分のレッスンスタディに突然呼ばれたりしてファシリテーターとして参加することもできたり、それから知り合いの先生が非常に勉強熱心でしたので、個人的に放課後の時間を使って実験の練習会を開いたりということをする事ができました。これがその授業研究の様子です。意欲的な先生と学習会をしていたのですが、その先生が実際に作った道具をすぐに自分の学校で生徒に使わせている様子が見られた時の写真です。私が作った実験装置なんかも真似をしてすぐに作って授業で活用したりという事をしていました。それから、私がいなくなった後でも理科室をしっかりと使ってもらえるようにちょっと片づけをして使いやすいような工夫をして帰ってきました。

色々な活動をしました。これらの活動を通して、配属先校や巡回校の先生たちが実験に

関する知識や技術を身につけてくれたのではないかなと思います。ということで積極的に実験を取り入れてくれるようになりました。今までは苦手意識があったようなんですが、やり方がわかるとどんどん進んで授業に取り入れてくれている様子が見られるようになってきました。それからレッススタディは、私が始めたことではなくてプロジェクトとして始めたことに乗っかっただけなんですけど、先生たちがともに学び合う体制が少しずつ出来始めるという事に参加することが出来ました。ということでもう時間がないのでこの辺で。

で、あと嬉しかったことはカウンターパートが初めは結構授業をおろそかにすることが多かったんですが、時間を大事にしたり、どうしても自分が授業に出られないときには自習課題をしたり、授業を、一時間を大事にすることをやってくれるようになったことです。それからこのカウンターパートが、「私が知ったことを他の先生に伝えていく」といってくれたことが帰る前に非常に嬉しかった言葉です。あと生徒が物理の授業が好きという事で実験に楽しく取り組んでくれていたのが、活動をして少しは何か役に立てたことだったかなと思っています。

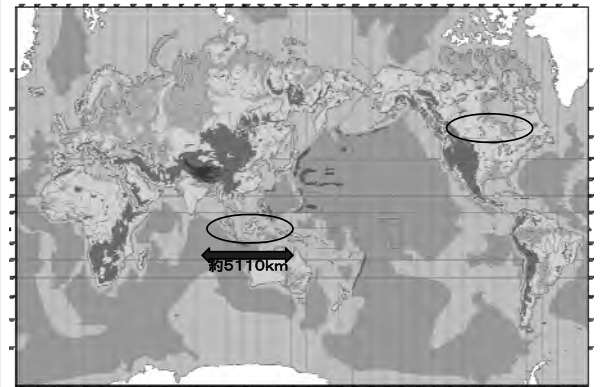
すいません、まとまりのない発表になりましたが、以上で発表終わります。

## 活動報告



20年度1次隊 インドネシア理数科教師  
山口県下松市立久保中学校教諭  
金林安恵

## インドネシアはどこにある？



## インドネシアはどんな国？

- ・1万8110個の島（正確な数は不明）
- ・東西に約5110km
- ・人口2億3000万人（世界第4位）  
→世界最多のイスラム教徒
- ・300以上の民族と500以上の言語  
→「多様性の中の統一」（国のスローガン）



国旗  
(Bendera merah putih)



国章  
(Garuda)

## スラウェシ島とは……



## どんな地域？

- インドネシアの東部地域→開発が遅れている。
- 州都マカッサルは新しい空港があり、デパートやホテルもある。  
→東部地域の開発の拠点
- ジェネポント県はマカッサルから車で約2時間南へ



## ジェネポント県は……

- ☆乾燥がひどく、稲作は年1回。
- 「州の最貧県」
- 発展していないぶん、  
「昔ながらの生活習慣」  
がよく見られる。

馬



雨季



乾季



## 要請内容

SMPN 1 Arungkekelにおいて、

- ①新カリキュラムに対応した理科／化学実験・教授法の指導。
- ②学校内や地域の教科研究会(MGMP)の活性化に向けた活動
- ③教員と協力しながら新カリキュラムに対応した教材開発

必要に応じて SMP 1 Rumbia においても同様の活動を行う。

## 活動目標

- ① 配属先教員の理科の指導能力の向上
  - ・チームティーチングによるC/Pの授業の支援
  - ・C/Pと一緒に実験を取り入れた授業案づくり
- ② 学校内や地域の教科研究会(MGMP)の活性化
  - ・実験技術の向上を目指した学習会開催
  - ・レッスンスタディーの実施

## 活動の流れ

2008年 8月～12月 2008年度前期  
(準備・情報収集期間)  
2009年 1月～6月 2008年度後期  
(試行期間)  
7月～12月 2009年度前期  
(発展期間)  
2010年 1月～3月 2009年度後期  
(まとめ期間)

## 配属先校の様子

- ・生徒約380人、教員約25人の中規模校
- ・生徒、教員ともすべてイスラム教徒
- ・7:30～12:00まで授業  
(40分授業を6時間)
- ・インドネシア語、数学、英語、  
現地語、理科(物理、生物)、  
社会(地理、歴史、公民)  
宗教、体育、芸術文化、  
などを学習



Mosjid

売店



## 毎週月曜日の 全校朝礼





自作のキーボードで  
パソコンの勉強

南スラウェシの踊りを  
練習



宿題で、パソ  
コンの模型を  
作りました。



### 学校は自分達の手で...

バスケットゴールをみんなで立ててい  
ます。



ペンキを塗った教室をきれいに掃除  
しています。

### 2008年 8月～12月(準備・情報収集)

- ① 現地教員の理科の指導能力の向上  
CPの授業を見学し、現状把握
- ② 学校内や地域の教科研究会(MGMP)の活性化  
12月 郡のMGMP(教科研修会)に参加。

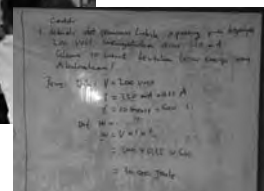
### 理科室は...



実験道具は...



### 現地の先生の理科の授業は...



## 2008年 8月～12月(準備・情報収集)

- ① 現地教員の理科の指導能力の向上
  - 実験以前の問題が山積み  
そこで、
    - ・一緒に実験の準備や、授業。
    - ・所長訪問、先輩隊員の学校へ出張の機会。  
→少しずつ活動の糸口を探す。
- ② 学校内や地域の教科研究会(MGMP)の活性化
  - Dinas提出の書類をみんなで作るだけ...  
でも、  
色々な先生と知り合えた。やる気のある先生も  
→一緒に勉強会ができたら...

## 2009年1月～6月(試行期間)

- ① 現地教員の理科の指導能力の向上
  - ・1年生2クラスの授業を担当。
  - ・3年生4クラスでチーム・ティーチング
- ② 学校内や地域の教科研究会(MGMP)の活性化
  - ・1月～3月 校内レッスンスターディー実施
  - ・4月 ワークショップ開催

### 授業に実験を取り入れよう！



### 実物を持ち込む



### 視覚教材の工夫



### 県内の先生を招いてワークショップ



先生たちが学び合う場をつくってきたい...



## 2009年1月～6月(試行期間)

- ① 現地教員の理科の指導能力の向上

1年生2クラスの授業を担当。

・日本の実践を取り入れるなどし、やりたい授業を試し、C/Pにも紹介できた。

→でも、拙いインドネシア語で、  
本当に伝わっているか不安。  
CPもだんだん来なくなるし...

## 2009年1月～6月(試行期間)

- ②学校内や地域の教科研究会(MGMP)の活性化

1月～3月 校内レッスンスターディー実施

・CPをはじめ、理科教員主導で開催。  
→課題は多いが、お互いに勉強し合うという第一歩に。

4月 ワークショップ開催

・理数科分科会で実施。  
・現状把握、ニーズの把握、  
実施方法に問題あり。  
→やったことに意義が...。  
みんなで勉強する一例になれば。



## 2009年7月～12月(発展)の予定が...

- ① 現地教員の理科の指導能力の向上

アルンケケ:全クラスの物理の授業にTTとして参加。

ルンビア:金、土の2日間通い、同様の活動。  
“あくまでも、CPが主体の授業。”

・新年度の日課が決まらない、  
独立記念日の行事、PUASA休暇などで、  
活動停滞。

・10月ごろからやっと、少しずつ動き出す。  
→新しく組んだ先生方から少しずつ実験の希望。



## 2009年7月～12月(発展)の予定が...

- ②学校内や地域の教科研究会(MGMP)の活性化

他教科の先生にも授業者になってもらい、校内  
レッスンスターディーの実施。

・予算がまだつかない、などの理由で実施できず。  
→自分のモチベーションもあがらず、活動停滞

## 2010年1月～3月(まとめ)

- ① 現地教員の理科の指導能力の向上

引き続き、同様の活動。

アルンケケ:実験を取り入れた

授業もできるだけ、C/P主体で。

ルンビア:LSに向けて、一緒に授業づくり。



C/Pが実験にずいぶん  
慣れてきたのでは...



## 2010年1月～3月(まとめ)

- ②学校内や地域の教科研究会(MGMP)の活性化

郡のMGMPでレッスンスターディー開始。

・始めたばかりで、課題も多いが、  
勉強し合おうという体制ができつつある。

ついでに、  
知り合いの先生を呼んでの実験練習会や、  
他の郡のLSでファシリテーター。

いまさらながら、先生方の「学びたい」という意欲を実感。

## 郡の先生たちと授業研究

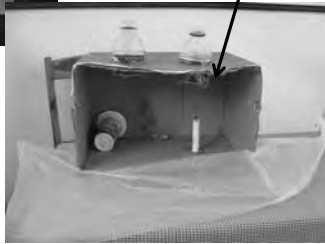


## 意欲的な先生と実験の学習会



私が作った空気の対流  
観察装置

ちょっと焦げてしまいました...



真似して  
作ってくれた！

## 理科室の整備



机の配置



準備室

掲示物



## 活動の成果

- ・配属先校や巡回校の教員たちが、実験に関する知識や技術を身に付けた。
- ・配属先校や巡回校の教員たちが、授業に実験を数多く取り入れるようになった。
- ・レッススタディーを通して、教員が共に学び合う体制ができ始めた。

→しかし、まだ十分とはいえず、継続した支援が必要



課外授業で簡易  
カメラ作り

## 活動を振り返って...

<反省>

- ・自分の考えばかりを押しつけていたのでは。
- ・結局一人でやってしまったことが多かったのでは。
- ・色々な人と交流して情報収集をしておけば、活動に広がりがあったのでは。

<うまくいったこと>

- ・どっぶりつかると、見えてくる時があった。
- ・なかなか計画通りにはいかないが、反面、突然のことにも臨機応変に対応
  - 突然チャンスがやってくるがあるので、思い切ってやってみると、意外と大きな結果が得られた。

## うれしかったこと

☆CPが、

- ・ベルとともに教室に向かうようになった！
- ・学校を休まなくなった！
- ・自習課題を用意するように。
- ・「私が知ったことを、ほかの先生に伝えていく。」



「物理の授業が好き。」



生徒の笑顔が増えれば...



たくさんの人に支えられて、1年9  
カ月、インドネシアでかけがえのない  
経験をすることができました。  
ご清聴ありがとうございました。



Terima kasih banyak!!

## 「グローバル社会で生きていく“日本人”の育成」

清野真輝

(平成 18 年度 1 次隊 小学校教諭 ドミニカ共和国)

新潟県より参りました、附属新潟小学校の清野真輝と申します。貴重な時間を頂きます。発表が四つ目にもなると皆さんは疲れてきていると思います。肩の力を抜いて、リラックスして聞いてください。私からは、簡単に任国でどんな活動をしてきたかということと、現在帰ってきてから取り組んでいることを紹介させていただきます。これから行くことで頭の中がいっぱいなのに、もう帰ってきた話かなんて思われるかもしれませんが、派遣期間は意外にあっという間に過ぎますので、みなさんぜひ聞いてみてください。

私は、平成 18 年度・19 年度にドミニカ共和国に派遣されました。現在は、帰国して 3 年目になります。私の要請内容は、「小学校教員の算数指導力の向上」でした。中南米で行われている「算数プロジェクト」の一つです。ただ、子どもへの指導ではなく、教員への指導だということが大きく異なるところです。

任国には、年間指導計画や教科書、ドリルがありませんでした。つまり、指導する内容は、担任の先生が知っている知識に委ねられていたのです。そのため、2 桁のたし算が終わったら 3 桁のたし算を指導し、3 桁のたし算が終わったら 4 桁のたし算を指導し…、このような驚くべきことが、各学級で様々に行われていました。同一学年にもかかわらず、指導内容が異なるということは、子どもへの教育の機会均等が保障されていないということです。そのため、私は最初の野口先生の発表と似ているのですが、「算数指導のシステム」を作りたいと思い、以下のように取り組みました。

教える内容がバラバラでは機会均等が保障されないので、「①学習プリントの作成」という仕事に挑戦しました。日本の教科書を基にして、1 年生から 4 年生までの毎時間の学習プリントを作りました。学習プリントだけではどのように指導すればよいか先生方には分からないので、「②教師用指導書」も合わせて作りました。しかし、「書いても読まない」というのは、どこの国でも一緒です。そのため、「③学年会で指導内容の確認」、つまり、「こうやって指導してね」と直接伝えることができる話し合いの場を設定しました。「伝えてもやらない」ということもあります。そのため、学習プリントを、必ず私のいるプロジェクトルームに保管してもらいました。すると、こまめにパラパラパラと指導の足跡を見ることができて、「進度が遅れている」とか、「ちゃんと指導しているかな」とすぐに確認することもできます。地道な作業ですが、実はこの「④進度の管理」がとても大事なものとなりました。

また、授業中に使う「⑤教材の作成」にも取り組みました。また、実際にシステム化がうまくいっているかを確認するために、「⑥授業のモニタリング」を行いました。

このようなことを、着任後すぐにうまく始めることができました。その理由の一つは、着任後すぐに新学期のスタートを迎えたからでした。つまり、最初にやらなければ、後からでは変更が難しいと思ったからです。

もう一つの理由は、派遣訓練中に先輩隊員の報告書を読むことができたことです。こういったものを読むと、およそどんな問題点が現地にはあるのかを日本にいる間に把握できるので、心の準備ができていたのです。

1年9か月の活動の成果は、次の二つです。先ほどの御三方の先生の発表と同じように、現地での活動はなかなかうまくはいきません。「会議しようね」と言っても、時間には集まってくれません。「これやってね」と言っても、「アハハ〜」と言ってやってくれません。そんな試行錯誤は必ずあるものですが、私は徹底して「みなさんの仕事が楽になるから」と「負担軽減」をスローガンにし続けました。このことが上手くいったのではないかと思います。どこの国でも負担が減るのは嬉しいことです。結果として、現地の先生方には算数指導のシステム化に慣れていただきました。そして、全15学級のうち13学級のテストの正答率が大幅に上がりました。残り2学級はというと、実は学級崩壊でした。もうどうしようもありませんでした。

もう一つの成果は、指導が計画通りに進むので、年間に教える学習内容が増えました。つまり、今まで教えていなかった学習を指導することがいくつもできるようになったのです。計画通りに指導することができた先生とは、ある程度指導力が向上した教師であると言えるのではないかと勝手にみなしています。以上のことが、私の任地での活動でした。

活動から、私は次のことを学びました。

まず、日本の教育のよさです。いかに考えられ、体系的なカリキュラムが組まれているかを、改めて算数を通して学びました。

そしてもう一つは、教員の研修制度です。日本は非常に研修制度がしっかりしています。研修にどんな気持ちで取り組むかは、人それぞれかもしれませんが、確かな成果を挙げているのは、日本のよさだと思っています。

その一方で、国際社会における日本の認知度がやっぱり低かったということです。ドミニカ共和国は時差マイナス13時間ですので、ほとんど日本の反対側にあります。多くの人は日本を知らなくて、町で歩いていると私たちアジア系は「中国人、中国人」と呼ばれます。蔑称として呼ばれているようです。また、ある人からは、「日本は中国の一部だろう」とも言われました。さらに、日本を知っている方に日本の印象を聞いても、「トヨタ」や「ホンダ」などの車を中心とした科学技術がほとんどで、「日本人の勤勉さ」や「美に対する感覚」、「きめ細やかさ」など、精神面についてはほとんど伝わっていないと感じました。

このような学びから、私は日本の国際貢献のさらなる必要性を実感しました。

それでは、この思いを学校教育現場でどう活かすかという話に移ります。私は、今なお急速に進展するグローバル化社会で生きていける日本人を育成したいと思っていますのです。

そのような思いで、この二年半、取り組んできました。

現場に復帰する場合、前の学校に戻る場合と、新たな学校に勤務する場合があります。私は、現在の学校に新たに赴任しました。そして、そこで依頼されたのが、一つは「外国語活動の研究」、そしてもう一つが、「中国の小学校との交流の推進」です。今までの経験を発揮できる場をすぐに与えていただけというケースはそれほど多いとは聞かないので、私は非常に幸せだと思います。この二つの職務において、先ほどのグローバル化社会で生きていける日本人の育成をどのように実現しようか考え、次のように取り組んできました。

まずは、「外国語活動の研究」についてです。

私が外国語活動で目指す子どもは、「異なる文化をもつ人々、臆せず積極的にコミュニケーションを図ろうとする子ども」です。自分とは異なる文化、つまり、自分にとっては異質に感じるものと触れ合い、そこによさがある、学びがあるということに気付かせたいのです。そのために、次の二点を大切にしました。まず一つ目は、「コミュニケーションへの見方や考え方を変容させる」ことです。もう一つは、「異なる文化をもつ人々と、交流する楽しさに気付かせる」ことです。まず、一つ目の「コミュニケーションへの見方や考え方を変容させる」についてです。みなさんの学校でもそうかもしれませんが、外国の方々とコミュニケーションを図る機会を設定しても、「英語の言葉をたくさん知らないので、私には無理。話せません」と考える子どもが学校には大変多いのです。つまり、語彙や表現に依存している子どもがとても多いのです。このような子どもの見方や考え方を、「外来語や自分が知っている英語を工夫して使えば、結構通じるんだね」という見方や考え方に変容させるのです。つまり、語彙や表現よりも、「コミュニケーション」を成立させることに着目させたいのです。そのために、子どもがもっている力を補足する方法を指導し、会話が通じる経験を体験させることを中心とした取り組みを行ってきました。

もう一つの「異なる文化をもつ人々と、交流する楽しさに気付かせる」についてです。中学校の英語担当の先生方からは、英語は中学一年生くらいまでは好きな教科に入るけれど、その後は次第に嫌いな教科になっていきやすいという話をよく聞きます。いくつか理由があると思うのですが、その理由の一つとして、中学校ではテストや受験を目指した学習になりがちで、何のために英語を学習するのかという目的を見失ってしまうからだ聞いたことがあります。そのため、私は小学校では、異なる文化をもつ人々とのコミュニケーション活動を中心に単元を構成し、「そんな文化があるなんて初めて知った」とか「外国出身の～さんと親しくなれた」という、英語を学習する目的、つまりは交流する楽しさを実感させることを最優先で目指してきました。このような子どもは、外国語を学ぶ目的や大切さに気づき、中学校に進学してもそれらを持続できるのではないかと考えています。

このような指導を一年間も続けてくると、友達と協力しながら、知っている言葉を使って、あの手この手で外国出身の方々と楽しみながら伝える子どもが、ちらほらと成果として見られるようになってきました。

このような授業に興味があったらぜひ見ていただきたい、ということで、二月に当校が研究会を行うことを宣伝させていただきたいと思います。美味しいお酒とお米でお待ちしておりますので、お時間のある方は新潟までお越しいただければ嬉しいです。

もう一つの「中国の小学校との交流の推進」についてです。

中国・北京市にある北京師範大学実験小学校と、2004年から6年、7年間、当校は交流を行ってきています。初めて交流を担当してくれと言われたときは、その重責に不安を感じました。しかし、とてもよい機会であると開き直り、やるしかないかなと覚悟を決めました。

私たちの交流の特色は、①職員や保護者の直接交流と、②子ども同士の直接交流です。よくビデオレターとか図工でかいた絵画を送るという間接的な交流が行われていますが、私たちはそのような間接的な交流はしていません。直接会って、本音で語り合うことに意義があると考えているからです。

①職員や保護者の直接交流とは、次の二点です。

一つ目は、文字通り、お互いの国へ訪問し合うということです。そして、招待される歓迎会や懇親会では、40～50度の白酒（パイシュ）を体力が続く限り飲み、通訳も介せず、勢いで語り合うことです。子どもに国際感覚を高めることを求める前に、大人がまずその身で国際感覚を磨く必要性があると考えているからです。

もう一つは、「日中教育フォーラム」の開催です。日中それぞれが同一の教育問題について、互いに発表を持ち寄って討論を行うのです。現在で4回を数えました。次回の3月が第5回開催となります。私たちは、3月下旬に北京に子どもを連れて訪問する予定なのです。

次は、②子ども同士の直接交流についてです。

子どもにとっては、大人と交流するよりも、子どもたち同士で交流した方が嬉しいし、影響を受けやすいと考えています。現在、交流先の学校から小学5年生が20名ほど、毎年7月に新潟を訪問してくれています。東京から新幹線に乗って来てくれるのです。今年度の7月で2回目の訪問が実現しました。この写真は来てくれたときの様子です。当校で文化交流をしたり、また新潟市内を一緒に観光したりしました。もちろん、言葉のやりとりは少ないのですが、訪問先のレストランで意気投合し、なぜか乾杯をしている姿が見られました。

このような交流から、私は次のことを学びました。

まずは、形式的な交流では長続きはしないということです。外国との交流は、常に新しいことが求められます。みなさんが任国に赴任して、前の隊員がしてきたよい取り組みを継続することはもちろん大事です。さらに、新たなことにも挑戦すると、職場の方々の目はちょっと見開かれるのではないかと思います。

二つ目は、交流の中で子どもが活躍できる場を作ることです。具体的には、中国の子どもと自分が思っていることを語り合う機会を交流の中で作りたいと思うのです。そのときのために、子どもに必要な力をつけさせたい。その場が外国語活動の時間だと、私は思っています。週に1時間、年間35時間という時間を文部科学省が新設してくれました。この時間を、ただ英語の単語や表現を教える時間にだけはしない。先にも述べた通り、知っている言葉でコミュニケーションを図ろうとする力を子どもにつければ、交流がより豊かになるのです。

そして最後は、交流では、相手と対等な関係を築くことが大事だということです。中国は日本より遅れているという見方をする方が一般的にはまだ多いと思います。しかし、私たちが交流する北京師範大学実験小学校は、非常に先進的で、私たちが負けるくらいの取り組みをしているものもあります。そのため、私たちも相手を尊敬し、対等に交流を進めています。その際、面白いと思うのは、こちらの提案は必ず向こうは受け入れてくれるということです。そのため私たちも、向こうの提案をできるだけ受け入れるようにし、お互いに尊重し合いながら交流や教育フォーラムが行えるよう、気を配っています。

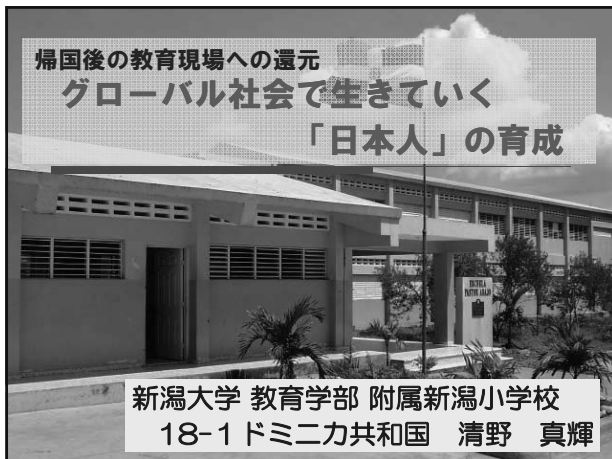
以上が私の報告になります。最後にこれから楽しい時間が待っているみなさんに、二つのメッセージを送ります。

赴任国のみなさんとよい時間を過ごしてほしいということです。日本人同士で過ごすことも精神的には大切ですが、ぜひ任国の方々の時間をたくさん作ってほしいと思います。

もう一つは、日本からの親善大使として、どうぞ日本のよさを存分にアピールしてください。きっと皆さんが自分らしさを出せる一つの場になるのではないかと思っております。

以上です。ありがとうございました。





### 1. 任国での活動について

- 派遣国 … ドミニカ共和国
- 期間 … 平成18・19年度
- 要請内容

「小学校教員の算数指導力向上」

### 1. 任国での活動について

**[課題]**

- ・ 年間指導計画、教科書、ドリル なし。
- 指導内容は、教員の知識や経験任せ

**[取組]** **算数指導のシステム化**

- ① 児童用学習プリント
- ② 教師用指導書
- ③ 学年会で指導内容を確認
- ④ 指導進度の管理
- ⑤ 教材教具の作成と管理
- ⑥ 状況把握のための授業モニタリング

① 児童用学習プリント

② 教師用指導書

③ 学年会で指導内容の確認

④ 指導進度の管理

⑤ 教材・教具の作成と管理

⑥ 状況把握のための授業モニタリング

### 1. 任国での活動について

#### [成果]

- ・ 着任後、すぐに活動に取り組めた。(約1年半)
  - ・ スローガン「負担軽減」が受け入れられた。
- ・ 「算数指導のシステム化」の定着
  - ・ 13/15学級において、正答率UP➤
  - ・ 年間の指導単元数の増加

↑

「教員の算数指導力は、ある程度向上」

### 2. 活動からの学び

#### ○ 日本の教育のよさを再認識

- ・ カリキュラム、教員研修制度

#### ▲ 国際社会における“日本”の認知度の低さ

- ・ 「中国人」、「日本は、中国の領土の一部」
- ・ 「日本」=「TOYOTA」、「HONDA」...のみ

⇒ 日本のさらなる国際貢献の必要性

↓

学校教育において...

グローバル社会で生きていく「日本人」の育成

### 3. 帰国後の教育現場への還元

#### [現場復帰]

- 新たな小学校へ転勤(復帰3年目)
- 校務分掌
- ① 「外国語活動」の研究
- ② 「中国の小学校との交流」の推進

↑

グローバル社会で生きていく「日本人」の育成

### 3. 帰国後の教育現場への還元

#### ① 「外国語活動」の研究

グローバル社会で生きていく「日本人」の育成

↓

小学校で目指す子どもの姿

外国人と臆せず、積極的に  
コミュニケーションを図ろうとする子ども

- (1) 「コミュニケーション」への見方や考え方を変容させる。
- (2) 外国人と交流することの意義に気付かせる。

### 3. 帰国後の教育現場への還元

#### ① 「外国語活動」の研究

外国人と臆せず、積極的に  
コミュニケーションを図ろうとする子ども

- (1) 「コミュニケーション」への見方や考え方を変容させる。

英語を知らないから、私には無理。

語彙や表現のみに依存



知っている英語を工夫して使えば、結構通じるのね!

コミュニケーションの図り方を習得

### 3. 帰国後の教育現場への還元

#### ① 「外国語活動」の研究

外国人と臆せず、積極的に  
コミュニケーションを図ろうとする子ども

- (2) 外国人と交流することの意義に気付かせる。

好きな教科

「初めて知った!」、「親しくなれた!」体験  
⇒ 「交流」や「外国語を学ぶ」意義

テストや受験のための学習

嫌いな教科

### 3. 帰国後の教育現場への還元

#### ①「外国語活動」の研究

外国人と臆せず、積極的に  
コミュニケーションを図ろうとする子ども



平成23年2月9日(水)、10日(木)  
附属新潟小学校 初等教育研究会 開催!

### 3. 帰国後の教育現場への還元

#### ②「中国の小学校との交流」の推進



北京師範大学実験小学校

附属新潟小学校

本交流の特色

- (1) 職員・保護者同士の直接交流
- (2) 子ども同士の直接交流

### 3. 帰国後の教育現場への還元

#### (1) 職員・保護者同士の直接交流



ア. 国際交流への  
理解を深める

イ. 「教育フォーラム」開催  
(教育課題の検討)

### 3. 帰国後の教育現場への還元

#### (2) 子ども同士の直接交流



5年生20名程度 7月：北京→新潟  
3月：新潟→北京

### 3. 帰国後の教育現場への還元

#### ②「中国の小学校との交流」の推進

- ・ 形式的な交流は長続きしない。  
まず、大人が「人と人との国際交流」を知る。
- ・ 子どもが活躍できる場を作る。そのために、  
授業で子どもに必要な力を付けておく。
- ・ 相手と対等な関係を築くこと。  
相手の考えを尊重し、よく話し合うこと。

御清聴、ありがとうございました。

- 赴任国の方々と、よい時間を!
- 日本からの親善大使として、  
「日本のよさ」を存分にアピール!

新潟大学教育学部附属新潟小学校  
清野 真輝  
seino@fusho.ngt.niigata-u.ac.jp

## クロジェクト X～ケニヤン生徒と泣き虫ケニヤイチロー先生

黒明堅一郎

(平成 20 年度 1 次隊 青少年活動 ケニア)

はい、黒明健一朗です。こんにちは、こういう場は苦手なので水を飲ませてください緊張してしまっ。終わる時間が遅くなったので発表時間が短くなると期待していたのですが発表時間は 25 分あるそうなので緊張しています。それでは発表の前にですね、まず 1 番始めにビデオを見ていただこうと思います。

(ビデオ上映)

さっそくパクリから始まっているのですが、それでは発表を始めさせていただきます。まず自己紹介なのですが、本名、黒明健一朗と言います。珍しい名前なのですが年齢は四捨五入をして 30 歳。これは若いと 25 歳、上は 34 歳と幅があるので御想像にお任せします。出身地は倉敷市小島です。家族は妻一人子ども一人、妻はもちろん一人なのですが、2008 年 6 月から青年海外協力隊としてケニアに派遣され 2010 年 3 月まで活動、現在は倉敷市の中学校で働いています。子どもは実はこの 7 月に生まれて無事父親として今活動中なのですが、ここで感じられる方は、「おい黒明さん 3 月まで活動していてどうして 7 月に生まれるんだよ」と、「その子のお父さんは誰だい」と言われるのですがこれはまぎれもなく僕が父親で出してね、9 月 10 月に妻がケニアに遊びに着てですね、いやそういう事はどうでもいいですね、次にいかしてもらいます。

さてケニアと聞いてみなさん思い浮かぶ事はございますか。隣の人と話し合ってみてください。せつかくなので初対面とは思いますが。ケニアと聞いて思い浮かぶ事、何かありますか。それでは一方的な講義形式が私は苦手ですので参加型で行かせてもらおうと思います。何かありますか。

聴講者：槍を持った人が動物と一緒にいる

先生：槍を持った人が動物と一緒にいる。どうぞ

聴講者：ガーナが近くにありそうなイメージ

先生：あ、ガーナが近くにありそうなイメージ、違いますけど。はい

聴講者：マサイ族がいる

先生：よくご存知ですね、マサイ族初めてお聞きになった方おられるかな。どうぞ

聴講者：象とキリンがたくさんいる

先生：象とキリンいいですね、さあ

聴講者：マサイ族

先生：マサイ族

はいありがとうございます。予想通りの答えが来て話しやすくなりました。それでは見ていただきます。さあケニア、サファリの自然と言うことでしてね。ご存知のように動物がものすごくたくさんいます。国立公園という所に入るとですね、もちろん動物はいるんですが国立公園という場所に入らなくても、幹線道路沿いを走っていると横にキリンがいたりですね、シマウマがいたりですねどこに行っても動物が見られます。ラクダの大群がいたりとかですね、すごく自然、動物がいっぱいです。

右側は夕日ですね、日本と比べると大きくてきれいだと思います。次、さきほど言ったマサイ族、原住民マサイ族というのもケニアの代名詞かなと思います。マサイ族、今でこそ商業目的で村とか生活のしかたとかをお金をもらってお見せするというようなマサイ族も増えているのですが、伝統的なマサイ族に関しては成人になったらライオンと戦わないといけないというような話もあって一応ライオンの写真も貼らせてもらっています。

次、あまりご存知ないかもしれませんが山と海、こちらもきれいです。山、これはキリマンジャロという山を聞いたことありますか、ケニアとタンザニアという国に挟まれたというわけじゃないですけどあります。これは私も実際の登山させてもらったのが本当に死ぬ思いですね。結局登頂できませんでしたが、きつい登山でした。

右側は魚。海もきれいでですね、モンバサワーンと言った地域ではきれいな沖縄のような海が広がっています。

次にアフリカ特有なのですが右側。海外途上国とかはよくあるのですがスマイル。よく笑ってくれます。僕のしようもないダジャレでもですね、すごく笑ってくれました。今の日本の中学生の子ども達全然笑ってくれません。すごくうれしかったです。

つぎ、スワヒリ語、せっかくなのでここで皆さんと一緒にスワヒリ語勉強して、これだけ覚えておけばケニア人、タンザニア人とは仲良くなれます。それではみなさんいいですか大丈夫ですか、生徒になった気持ちでやっていってくださいね、ジャンボ

聴講者：ジャンボ

先生：いいですね、うちの生徒もそうだったらいいですけどね、カバリアコ

聴講者：カバリアコ

先生：ウズリ

聴講者：ウズリ

先生：アサンテ

聴講者：アサンテ

先生：ありがとうございますという事ですね、これ 4 つさえ覚えておけばだれとでも仲良くなれます。

次、さて私の活動としてクラス、授業、スポーツ、カンパセーション、会話、インタラクティブ、交流というものがございます。私が行った場所はまたあとで説明させていただきます。

のですがゲタヅル更生学校と言ってますね、ストリートチルドレン、孤児、それから犯罪を犯した少年たち、男の子だけなのですが常時 100 人ほどいまして、そこで授業担当の教員として活動しました。色々お話したいのですがかなり多いので絞ってお話させていただきます。

まず英語、私こう見えて実はですね、ぱっと見ですね体育の先生だろとか技術の先生だろとか言われるのですがこう見えて英語なのです。似合わないですよ、こんなごつい男が。次、数学、美術、体育などを教えていました。

さて、その英語の授業で、今までの日本の授業では考えられないような英作文が出てきました。それがこちらです。ちょっと文法的には間違っているのですが子どもの作文をそのまま書いています。”My father tried to kill me.” 「父が私を殺そうとした。」これは英作文ですね。次、“My mother is don't like me,because I am a thief.” 「母は私を好きではない、何故なら私は泥棒だからだ。」というような英作文を書いてきた生徒がいました。

これを見てその子たちを見て「おいなんだこれは」といった時に、なんだか何も話を言いたがらない、なんか悲しそうな眼をして、静かにしていたのを思い出すのですけれども、実はこれゲタヅル更生学校の生徒が実際に体験した事を、その子たちが書いたものです。実際にその子のお父さんが自分を殺そうとした。殴ったりですとかですね。それから実際にその子のお母さんは私のこと好きじゃない。泥棒したからと。泥棒したから好きではないという英作文がありました。というのがすごい印象的で、ちょっとショックでした。

ここで具体例を出しましたので 私がいたゲタヅル更生学校の子ども達についてちょっとお話をさせてください。まず年齢は 10 歳から 18 歳の男の子達です。平均して 100 名ほどがいます。常に毎日 1 人 2 人ケニア全土から更生学校に送られてきます。私どもの更生学校、まあ日本で言う少年院のような所なのですが、3 ヶ月間過ごしたのち色々リスクレベル、危険レベル、学力、年齢、色々な物を判別しまして、次の更生学校、他の 6 か所ある更生学校へ連れて行きます。そこでも 3 年間生活するという、つまり少年院鑑別所のようなところですかね、判定をしてちゃんとした少年院へ連れて行く、更生学校へ連れていくというような受付の機関になります。対象はストリートチルドレン、孤児、非行少年、犯罪を犯した子、窃盗、麻薬、暴力、などした子、一番重いケースの子で殺人、レイプなどがありました。

さてそこで 1 年 9 カ月ほど生活させていただいたんですが、時がたつにつれて子どもたちの問題点をみる事が出来ました。これに気付いたのは大体活動が始まって半年以上先のことですね、それまではずっと苦勞して全然自分の活動うまくいかなかったんですが、問題点を挙げるとしたらこの 4 つの事かなあと思いました。まず、子どもたちは教育を受けることができません。公用語は英語なのですが英語を話せる子というのは本当にわずか、ごく一部でほとんどの子が話せません。スワヒリ語で話をします。もしくはスワヒリ語も

話せず民族語だけで生活する子もいます。

それからルールを守れない、仲間に対して思いやりがありません。ストリートチルドレンというのは本当に自分が食べるために生きていくというような生活習慣があるのでルールなんか守れません。やっぱり何としても食べ物を得ようとする、お金を得ようとするので。

それから仲間に対しての思いやりがないというのは友達よりも自分が優先なので仲間に対しての思いやりがありません。

それから他人を信じることができません。自分の事を表現する事も出来ません。これは自分の事を言う事で弱みに付け入れられてしまうというのが子ども達にはあるようで、自分の事をなかなか言おうとはしません。

さてここでもう一度、問題なのですがこの少年いったい何をしているのでしょうか、ちょっと隣の人と話し合ってみてくださいどうぞ。ヒントは、下の方にあるものが映っているのですが。さらにわかりやすくちょっとこの写真をどうぞ、さて何をしているでしょう、また発表してもらおうと思います。

聴講者：石をチョークにしている

聴講者：石の数で何かを数えている

聴講者：算数の問題を解いている

先生：算数の問題をやっている

聴講者：石をブロックみたいになっている。

先生：

石をブロックみたいになっている、なるほど、いいですね。この子どもはシルベスタという子です。11歳の子なのですがいつも会うたびにこの言葉を言っていました。「モタビ、ナカカキソマ」「先生、勉強したい」っていつも言っていました。実はこれ石をならべて5×5をしています。掛け算の問題ですね。これは別に私が言った事ではありません。勉強したいっていう子ども達、ケニア人だけじゃなくて開発途上国の子ども達、この子たちは勉強の天才だと思います。自分で、言った事を応用してなんとか自分でわかろうとしてやろうとする。生きる力っていうのももちろんありますし、このように勉強をなんとかしようとしています。いつも図書館に来ては本を読みたい本を読みたいと言ってこの子は一生懸命勉強していました。

さて授業だけではなくてスポーツ、サッカー、バレーボール、キャッチボール、レクリエーションなども私の活動の中でしました。レクリエーションと言っても2人3脚や転がしドッジのようなみんなと仲良く輪が広がるような活動です。これは子どもたちが仲間に対して思いやりがないという事なので。

サッカーに関しても子どもたちはパスをしません。仲間を信じませんからパスをしませ

ん。ひどい子に関してはゴールキーパーが自らドリブルをしてですね、相手のゴールに突っ込むんですよ。ほんとにパスしないんです。ですからそういった仲間意識を植え付けたかったというか学んでほしかったというのがあります。

スポーツを通じてルールを守る仲間意識を育てる、安心して楽しめる時間を作る、それから可能性を広げるというのがあります。

ちょっと駆け足ですいませんが、次に行かせて下さい。カンバセーション、会話ですね。実はこれが一番大事にしていた事です。いきなり日本人が来て外国の人にこうせい、ああせいと言われて素直にきけますか。皆さん、おそらく教員の人が多いと思いますが例えばアメリカの教員が来て数学はこう教えた方がいい、スウェーデンの外国の先生が来て理科はこう教えた方がいいんだよってと言われて素直にみなさんは聞けますか、おそらく自分の持ってた知識やテクニックも大事にしなごらある程度は聞きますがやっぱり自分のものも大事ですよ。私も一緒でした。いきなり日本人が来て、「何を言ってるんだ」というような感じでした。なかなか受け入れられません。そこで一番大事にしてたのが会話です。

スワヒリ語もなかなかわからなかった時期に、会話をとりあえずしようと、たくさんの会話をしようという事でさせていただきました。そうするとちょっとずつ地域の人も、子ども達もいろいろ話をしてくれるようになりました。時にはですね、好きな食べ物の話、好きな女の子の話もそうですね、ちょっとエッチな話とかも男の子は好きなのでそういった話もしながら、僕はちょっとぼっちゃり系が好きだみたいな、ケニア人もそういった話をどんどんすると近づいてきます。様々な場所でしました。食堂に入って一緒に料理をしながら会話をしたり、図書館に行って一緒に本を読みながら会話をしたり、それからイベントを通して会話をしました。

左側は七夕ですね。子どもができますよという一途な思いがかなって無事生まれたのですが、イベントを通して子ども達の短冊も書かせました。その時に子どもたちの願いはやはり更生学校、少年院のようなところへ入ってくる子ども達ですので家に帰りたい、学校に行きたい、家族を大切にしたい、医者になってお金を稼ぎたい等ですね、本当に本音が書けていました。

それから右側はクリスマスのフェイスペインティングですね。クリスマスは一年で一番大きな行事で子どもたちが楽しみにしている日ですね、この時はフェイスペインティングをしたり飾り付けをしたりして楽しむ事が出来ました。

それから文化祭を通して日本人の方にたくさん来ていただいて日本の人と交流してもらおうと、同じように地域のケニアの方も来てもらいました。

カンバセーション、会話の目的はまず一つは他人を信じる心をはぐくむ、信頼関係を築く、子どもたちの不安を取り除くというのがあります。

次に日本文化の体験交流という事で音楽、折り紙、踊りなどをしました。それから日本



との国際交流で日本の学校や地域と手紙の交換をしました。日本文化の体験交流はゲタヅル文化祭という事で、大使館からお手伝いをしてもらって日本の映画を見せたりとか、日清食品、チキンラーメンさんの協力を得て、チキンラーメンを食べさせたりとかしました。折り紙、万華鏡遊びも一緒ですね。日本の映画、日本語、日本の歌、ムービー参照とあるのですが今回これは割愛させていただきます。

日本との国際交流は以下のような学校、岡山県の学校が多いのですが、させていただきました。さてこの交流なのですが自分はただつなげられればいいなと思ったのですが実はケニアの子ども、日本の子どもにとって私が考えてもない良い発展がみられました。ちょっとこれはお聞きする時間がないのでいかせてもらいますね。

交流を通して学んだこと。子どもたちが手紙を書く事で自分の本音をいきなり書くようになりました。今まで当人が何を聞いても自分の過去や、自分の犯罪歴を全然話さなかった子が全く知らない日本の子ども達には色々書くんですね。「実は僕はお金がなくてパンを盗んでこの学校へ来ました。でもこの学校で何とか頑張って次のステップにしたいです」とかですね。今まで僕にも言った事がないような事を平気で書くんです。それから英語で自己表現、あと手紙があります。人から物をもらった事がないので、もらって喜んだというのがあります、手紙をね。

2年間活動を通して、勉強の大切さ、楽しさ、仲間意識、チームワーク、ルールを守る、他人を信じる事、自分を伝える事っていうのを伝える事が出来たかなあと思います。

さて今後の自分達ができる事としてカンバセーション、会話、インタラクションの機会を多くする事、会話、交流ですね、それから長期的展望で子どもたちを見守る事、子どもっていきなりは変わりません。だからやっぱり長期的にゆっくり子どもたちを見守ることが大事なんじゃないかなあと思いました。それでは最後なのですがちょっとムービーがいくつかありますので、このゲタヅルの様子を見てもらいます。

(ムービー上映)

御清聴ありがとうございました。

#### 【質疑応答】

質問：すごく感動しました。素晴らしいなと思いました。この素晴らしい経験を今の現在校においてどのように還元していますか。

先生：正直ここだけの話なんですけど全然還元ででていません。英語の授業でちょっと話したり、写真を見せたり、ムービーを見せたりしますがこれといった活動というのはできていません。最初の半年間は日本の現場に慣れるのが精一杯、国際理解の活動をしようというのが出来ないくらい、日本のペースに合わせるのが大変なのでちょっとづつやろうと思うのですが、今のようなムービーを見せたりというくらいしかできていません。本当は色々したいのですが、ケニア人を呼んで交流したり、国際理解通信とかでやりたいんで

すけどできてないです。なのでそれが今後の課題だなあとします。地域ではいろいろ講演会などさせてもらってますが、学校ではなかなかできていません。すみません期待通りのお答えができなくて。

質問：すごく感動しました。ありがとうございました。いいもの見せられちゃって、自分も来年行くんですが逆にすごい不安が大きくなってきちゃった面もあって、お話の中で会話をすることの重要性を語られていたのですが、逆にすごく悩まれたり苦勞されたことはどんな事があるのでしょうか。

先生：ありがとうございます。今日は25分で短い時間だったので全然説明できない事もあったのですが苦勞もたくさんあって、最初の3か月で授業担当4人いた教員が、ケニア人3人とボランティア僕1人だったんですが、その3人がいきなりいなくなったんですよ。小学校に転勤になったり他の仕事ができ、だからボランティア1人だけで授業をやらなといけないといった時に、自分ひとりでできる事って限られるのすごく葛藤があって、僕がメインでやってケニア人が全然働かなくていいのかとかですね、行ったらわかるんですけど途上国ならではのトラブルに悩みました。いきなり教員がいなくなるとか、いきなりマネージャー、所属長、校長先生みたいな人が「もうお前授業やらなくていいよ」って急に言うんですね。日本人が授業教えるのはおかしいだと急に言い始めてですね、正直本当に帰ろうかと思ったことも何回もあります。もう布団の中にもぐって泣きじゃくる日々もありました。でもみなさん苦勞はあるので苦勞も糧としてやってもらえばいいかと思します。こういう苦勞は見えないですけどすごくあります。

あと1分ほどいいですか。最後に子ども達のそのあとをゲタヅル更生学校の後の様子ですね

(ムービー上映)

このように子どもたちは次の更生学校に行って色々職場訓練したり勉強したりして次に向かって行っているんですが、結局100人に5人くらいしか正当な道には行きません。また犯罪の道に行ってしまうたり。そこが一番の苦勞というかつらかった点です。自分が教えても一生懸命やっても結局は犯罪の道に戻ってしまうというのが一番つらかった事です。



### ケニヤイチローの紹介

- 本名: 黒明 堅一郎
- 年齢: 四捨五入で30歳
- 出身地: 倉敷市児島
- 家族: 妻一人、子供一人
- 2008年6月、青年海外協力隊でケニアに派遣され、2010年3月まで活動。現在は倉敷市の中学校で働いている

「ケニア」と聞いて  
思い浮かぶことは？

### サファリと大自然



### マサイ族



### 山、海



## Smile



## スワヒリ語

**Jambo!** (やあ!)

**Habari yako?**  
(調子はどう?)

**Mzuri!**  
(いいよ)

**Asante!**  
(ありがとう)



## ケニヤイチローの活動

- Class** (授業)
- Sports** (スポーツ)
- Conversation** (会話)
- Interaction** (交流)

## Class (授業)

- 英語
- 数学
- 美術
- 体育
- など



Episode I 信じられない英作文

- “ **My father tryed to kill me.**”  
「父が私を殺そうとした。」
- “ **My mather is dont like me  
bicos i am athif.**”  
• 「母は私が好きではない。なぜなら私は泥棒だからだ。」

### ゲタスル更生学校の子供たち

- 年齢: 10歳から18歳までの男の子
- 人数: 平均して100名ほど。  
毎日ケニア全土から子供が送られてくる。
- 背景: ストリートチルドレン、  
孤児、非行少年  
犯罪を犯した子(窃盗、麻薬、暴力)

### 子供たちの問題点

- 教育を受けることができない。
- ルールを守れない、仲間に対し思いやりがない。
- 他人を信じることができない。
- 自分のことを表現することができない。

### この少年は何をしているのでしょうか？



### さらにわかりやすく...



Mwalimu,  
Nataka kusoma.  
(先生、勉強したい)

### Sports(スポーツ)

- サッカー
- バレーボール
- キャッチボール
- レクリエーション

(二人三脚、  
転がしドッジ)

など



### スポーツを通じて

- ルールを守る
- 仲間意識を育てる
- 安心して楽しめる  
時間を作る
- 可能性を広げる



## Conversation(会話)



## さまざまな場所で



## イベントを通して



## イベントを通して②(文化祭)



## Conversation(会話)の目的

- 他人を信じる心を育む
- 信頼関係を築く
- 子供たちの不安を取り除く



## Interaction(交流)

- 日本文化の体験交流  
(音楽・折り紙・踊りなど)
- 日本との国際交流  
(手紙・絵画交換)



## 日本文化の体験交流

- ゲタスル文化祭
- 折り紙、万華鏡遊び
- 日本の食事  
(日清・チキンラーメン)
- 日本の映画、日本語  
(大使館主催)
- 日本の歌  
→ムービー参照



## 日本との国際交流

- 倉敷市立老松小学校
- 倉敷市立玉島北中学校
- 倉敷市立北中学校  
(別のケニアの中学校と)
- 倉敷児童館の子供たち
- 紙芝居作りの  
倉敷市民のみなさん
- ほかに県内、県外教校  
との交流もあり。



## 交流を通して

交流を通して、子供たちは何を学んだか？

## 交流を通して学んだこと

- 自分のことを正直に  
伝えること
- 英語で自己表現
- 手紙、ビデオの温かさ
- 日本のこと



## 2年間の活動を通して

- 勉強の大切さ、楽しさ  
**(Class)**
- 仲間意識、チームワーク  
ルールを守る  
**(Sports)**
- 他人を信じること  
**(Conversation)**
- 自分を伝えること  
**(interaction)**



## 今後の自分たちができること

- Conversation(会話),  
Interaction(交流)の  
機会を。
- 長期的展望で子供たち  
を見守ること。  
(polepole)







## ベナンの風に吹かれて

山崎有美

(平成 20 年度 1 次隊 青少年活動 ベナン)

それでは健一朗先生の後という事でプレッシャーあるんですけども、黒明先生と同じ 20 年度 1 次隊で青少年活動としてアフリカにあるベナンという国に行ってきました、山崎由美有美と申します。

最初にベナンと聞いた時にえっと思って、どこという感じでペナン島みたいな感じで、みんなにもベナンに行くよというペナン島？といわれてどこかわからない感じだったんですけども、実は私はケニアを希望していたんです。けれどもケニアは男性じゃないとだめという事で、同じアフリカという事でベナンになりましたが何も情報がありませんでした。ちなみに場所はここで西アフリカにあるこの小さな国なんですけれども、情報はゾマホンの出身国だよというのしかインターネットでも出てこなくて、実は協力隊事業が始まったのも 2005 年で私が行った時はちょうど 3 年目でした。ですので先輩隊員もほとんどいないという状況で、もちろん大使館もなくてすべてが初めてという感じだったので、まあスタッフの方はベテランの方が多かったのでわからない事や困ったことは色々教えてもらったんですけどもあまりにも情報がなかったので、行く前から現地のスタッフの方とよく連絡を取ってどういう準備をしたらよいのかといった話をよく聞いていました。

ベナンは人口約 870 万人で面積は日本の約 3 分の 1 です。やはりアフリカなので民族がすごくはっきりしていて民族ごとの色々な物が強い国です。言語もフランスの植民地だったので公用語はフランス語という事で駒ヶ根訓練所ではフランス語をみっちりやったんですけども現地ではほとんどが民族の言葉じゃないと通じないというのが現実でした。ちなみに私も英語の教員なので英語圏をお願いしますといったんですけど、「英語できるんだったらいいでしょ」といわれてフランス語になって駒ヶ根では本当にフランス語で泣きました。もう毎日こんなに勉強したことは今までにないというくらいすごい泣きました。

それで宗教の方も一応イスラム教が多くてそのほかに現地の宗教としてブドゥー教という宗教があるんですけど、やはり宗教の色が強いのでクリスマスとか新年とかってというのは全然日本で想像するようなものではありませんでした。ですので年がら年中各宗教でのお祭はあるけれども大きなイベントがないという感じ、何もメリハリのない、楽しみのない毎日でした。クリスマスも普通に仕事があるしお正月も 1 月 1 日だけお休みで 31 日も仕事 2 日も仕事で、日本の学校って休みが多くていいなとか夏休みがあつていいなとか冬休みがあつていいなとか、そういうことを思いました。

気候は雨季と乾季です。

まず最初にベナンでの生活を簡単に紹介したいと思います。ベナンの洋服はパーニユと呼ばれるカラフルな布を着ます。民族衣装をほとんどの人が着ているのでこういった布屋さんがあって、まず布を買います。そこから自分でデザインした洋服を作ってもら。すべてオートクチュールですね。です。ので既製品のお洋服がなくて、常に自分が着たい布を選んで作ってもらというのが楽しみでした。例えばこんな風に何かイベント、イベントというかお葬式とか結婚式とかがあるとみんなと同じ布を買って自分の好きなデザインで洋服を作ってみんなでそれを着るとというのが習慣なので、本当に毎月のように布を売りに来て、「次誰だれが死んだから買いな」とか、「次誰だれおめでただから買いな」といって布を買わされてそれで洋服を作るというのが習慣でした。子ども達もこんな風に布を買って兄弟みんな一緒に着ています。それでどうしてもお金がない子たちもいるので、そういう子たちは布だけ買って自分の体に巻きつけるという方法で服を着ていました。比較的左端の子どものおうちは裕福なのでこうやって作ってもらえるんですけど、全然お金がないおうちは布だけ買って自分の首にうまく巻きつける方法で着てました。

生活、食事なんですけれども、主食はトウモロコシの粉です。年間 3 回トウモロコシを作るのでトウモロコシを機械に入れて粉にしたものをお湯で溶いたものが主食です。朝なんかはそれをちょっと多めのお湯でといで飲み物状になったものを飲みます。昼夜はそれをちょっと硬くしたものを食べます。ひたすらトウモロコシです。本当に食事については慣れるまで、女性隊員は結構すぐに慣れるんですけど、男性隊員はもう最初の 1 カ月で 5 キロ 6 キロ痩せていく人が多くて見ていてかわいそうでした。女性隊員は 1 週間くらいで現地のものおいしく感じられるようになるんですけども、男性隊員は激やせしていました。出てくる写真はすべて現地食なんですけれども、現地食しかないので、ほんとにトウモロコシトウモロコシ、芋、たまにご飯、たまにいちばん左はマカロニなんですけれども、量を増やすためにご飯もそうなんですけどひたすら茹でるんですね。水の量を多くして茹でて、量を 2 倍にした段階でやっと思われるとい感じなので食事についてはかなり苦労しました。

住まいは基本的にはこういった村の生活は真ん中のようなもので右上が水上集落、左下が伝統的な現地のおうちです。先程世界に飛び出すみんなの先生という DVD で先生のおうちが映ってたと思うんですけど、私も行く前にあの DVD を見て、「あんな綺麗なおうちに住めるんだ」とすごく楽しみにして行ったんですけど私の家はこれでした。左上が私の家なんですけど、自分の住んでいる町では一番いい家だといわれて、しかも JICA が鉄格子をつけてくれたので安全だよといわれたんですけど、反対にこれがついた事でここに日本人が住んでいるというのがばれればで通る人通る人が「ユミユミ」って毎回声をかけてプライバシーも何もなかったです。鉄格子も土壁なのでつけてくれていても重みでだんだん外れてくるので、途中でコンクリートみたいなものを買って自分で落ちないようにつけたりしながら生活していたので、JICA の人にい世界中でこんなおうちに住んでるのはあなたぐらいですって、ここで住めたらどこでも生きていけるよっていわれたので頑張って 2 年

間生活しました。右下が絶対おうちには欠かせない、井戸というか水をためるもので、乾季になると水が全然ないので雨季の段階でここにたまる水を全部ためておきます。これを使って生活をします。もちろん水道、電気は一応あるんですけど、水道は使えた数の方が少ないですし、電気も2年間で使えた数の方が少ないです。

これを見てもらうとわかるんですけど朝は、土壁が落ちてくるので掃き掃除から始まって、昼は水汲みですね、夜は料理をして蚊帳の中でご飯を敷いてそこで寝るという。マラリア汚染国なので1回マラリアになると命にかかわるよといわれていたので日本からすごく大きな蚊帳を、スーツケースの半分が蚊帳でしたのでそれを家の中に張ってそこで生活していました。

左下は髪の毛を編んでいる所なんですけれど、水がないので現地の人は1カ月に1回髪型を変えてこのように編んでいます。これは髪の毛を洗わなくていいという利点があるので、私も何回かトライしたんですが日本人の髪だとやはり持って2週間で、あとはかゆくて耐えられなくなってしまいますので取ってしまいます。

番外編としてアフリカっていろんなイメージがあると思うんですが、基本的に頭の上にも何でも載せます。水汲みもそうですし、野菜を売っている子もそうですし、机なんかを運ぶのもすべて頭の上なので、どんな小さなものでもどんな大きなものでも頭の上に乗せて運びます。左下の水は5リットルくらい入るんですけど私たちは下からでも持ち上がらないのに中学生くらいの子どもたちが頭に載せて毎日朝と昼と夜と水汲みをしているというのが現実です。

ベナンの問題点をまずお話ししたいと思います。

さっきもいった通り水問題が一番の問題で、子どもたちは学校にも行かず朝昼夜は必ず水汲みをしなければいけません。

あとは幼い子供、妹とかの面倒をみななければいけないので学校に行けないという現実があります。左側の写真はじゃあ学校に全員行かせてくださいという事で、大統領が変わってそのような方針を立てたんですね、無料にしましょうって。そうすると何が起こるかという、机も足りないし、椅子も足りないし、学校も足りないという現実です。ですので本当は6人掛けのところすごい数の子どもたちが座っていました。

ゴミ問題です。いままで自給自足の生活をしていたのに外国から色々なものが入ってきて、それを捨てる処理の方法を知らないので、すべて今までと同じように自分の家の横に捨てているのでこういう状況になってます。これをどうするかというと、1カ月に1回誰かが火をつけて燃えたら終わりというような生活でした。

実際の活動に入りたいと思います。職種は青少年活動です。配属先はゾボドメ市役所というところです。要請内容は青少年余暇センターを活用した青少年の余暇活動の充実というものでした。1ヶ月間市役所に勤務する中でどういった事が出来るかなと考えた時に、今

の状況ですので余暇活動なんて誰も考えてないし学校に行くのがやっとなんですね。もちろん学校に行けない子もいっぱいいるのでこれは私が来た意義が全然変わってくるなという事で、結局は社会教育、余暇活動よりも学校教育の方が大切なんじゃないかなという結論に1カ月で達しました。

みなさん要請書というのをもらっていると思うんですが、私は要請書をももらった時にカウンターパートなし、配属先と一緒にやる活動ほぼなしと書いてあったんですね。これでは私は何をしたらいいんだというのが一番の悩みでして、こういう方はなかなかいないと思うんですけど、カウンターパートがないという方はけっこういると思うのでそういう話を中心にしたいと思います。

まず最初に配属先である市役所との関係作りが大切かなと思ったので、ひたすら挨拶を知らない人でもなんでも市役所に出入りしてる人に挨拶をして回りました。

あとはおしゃべり、必要ないなあと思うおしゃべりがすごく大切なので、おしゃべりをしたり、あとは買い食いっていつていろんなものを売りに来る、ピーナッツとか何とか売りに来るんですけど、アフリカの女の人ってひたすらそれを食べるんですね。男の人もそうなんですけど。どんどん太っていくんですけど。一緒になって食べていました。食べたくなくてもこれが会話の最初だなと思いながら地元のものでもなんでも食べるようにしていました。

あとは全然関係ない時にこういう事したいんだよねとか、全然カウンターパートでもなんでもないのに、子どもたちとこういうのをしたいんだけどどう思うとかっていうのをすぐに話すようにしていました。

あとは全然市役所とのつながりがないので、半期に一度自分はこういう活動がしたいんだっていうのを勝手に作って勝手にいろんな人に渡していました。何でおれにこんなの渡すんだといわれながら、いや私はこういう事がしたいんだっていいながら渡していました。

あとは毎週1週間の活動予定を自分の与えられた机の上に、誰も見てないんですけど置くようにして、自分がいなくてもどこに行っても何をしているのかが誰でも見てわかるようにしておきました。遊んでるんじゃないよって、私がいなくても活動してるんだよってことを分かってもらえるようにしました。それはこんな感じで、例えば必ず月曜日は朝、朝礼があるので市役所に行きますよって約束をして、水曜日の午前中も市役所に行きますよって、あとは教会に行ったり、小学校で活動したりっていうのをしているよって、自分が今どこにいるのかっていうのを必ず分かるようにしておきました。

その中でどういう活動をしていったかというところまず一つが識字教室という事でフランス語圏でフランス母語という話もあったんですけど現地の人はフランス語話せないし、書けないしということで、あれだけ駒ヶ根で苦労した私がやってよいのかと思いつつ週に2回、20代の女性たちがほとんど学校に行っていないので、自分の名前も書けない状態でしたから、そこでアルファベットとか簡単な計算とかそういうものを教えました。

さらに学校での授業という事で何がいいかなと考えた時に、先生たち自身が美術や体育の授業を受けてないので子どもたちに教えられないんですね、それをある先生からいわれたので「じゃあ私が教えるよ」といって、市内にある学校を巡回して教える事にしました。主に6年生と書いてあるのは、言葉がやはりフランス語しかできないので、小学校6年生ぐらいになると徐々にフランス語も話せるようになるので、私の指示が通るように6年生を選びました。これが現地の先生なんですけど、ほんとに民族衣装のまま体育っていても外に行って指導所を子どもたちに見せて「こうやってやれ」というのが現実だったので、だったら私の方がまだましかなと思ってやりました。右上は縄跳びを日本から送ってもらったので、それを活用して縄跳びを教えました。

1年目何か成果を残したいなと思って絵画展を開く事にしました。これもどうしようかなと考えたうえで市役所をやはり巻き込みたいと思って、市長さんに市長賞を作るから選んでくれと、市長賞だからあなたが商品を作ってくれ、買ってくれってお願いをして、この人が市長なんですけど、市長さんに選んでもらって表彰式まで行いました。こういう経験を子どもたちはした事無がかったし、市長もなかなか面白いなと思ってもらえたので、この後続けていってくれたらいいなと思っています。

2年目は縄跳び大会を開きました。これは日本の自分の行っていた学校から縄跳びを送ってもらったので、それをもとに縄跳び大会を開きました。ビデオがあったのですが割愛します。

その他余暇活動の充実として最初の目的、要請であった青少年余暇センター、右上のすごい建物があるんですけど誰も使っていないんです。ただ建物があるだけで。中にもいすや机が置いてあるんですけどどう活用していいかわからない。建物はスウェーデンの援助で作ってもらったんですが、作ってもらって終わりで活用ができていないという状態だったので、水曜日の午後は学校が休みなので、その日と毎月1回の土曜日にイベントとして行っていました。

あとは中学校で希望者を集めて日本語教室も行っていました。

あとは日本文化紹介という事で自分の任地やベナン国内について、これは他の同じ国に派遣されている隊員とともに協力して毎月1回文化紹介を行っていました。切絵であったりカンボックリであったり、トイレットペーパーの芯を使った双眼鏡を作ったり、兜を作ったりしました。

一番人気は何といっても空手なんです。空手をやるっていうとこれだけの人がばあーってどこからともなく集まってきて見ようとするので、私も空手は全然できないんですけど「ちょっとやって」とかいわれて構えただけでみんなにおおーとかいわれてさすが！みたいな、それで騙していましたね。「私は空手ができるんだ」といって子どもたちを集めていました。あと習字もちょっとやりました。

日本の中学校に対して派遣中何をしていたかという、毎月「ベナンの風に吹かれて」というベナン通信を送っていました。その成果があったのか、いらなくなったものを集めてベナンに送ろうと子どもたちがいい始めてくれて、その結果としてさっきいった縄跳びが送られてきました。

ベナンは通信がうまくいかず、郵便もダメでベナンから 50 枚ハガキを送ってつくのが 10 枚、日本からベナンに荷物を送っても着かないよといわれていたので、せっかく子どもたちが送ってくれたものが届かないといやだなあと感じていたんですけれど、実際届いてそれをベナンの子どもたちに還元できたのでよかったなあと思います。

活動を終えて思うのは健康第一なので、私はよく食べていました。よく飲んでいました。ベナンにいて一番強くなったのはお酒です。あとよく寝ていました。本当に気がつくとき食べて気がつくとき飲んで気がつくとき寝て本当にベナン人だなあといわれるくらい、最後にちょっと動くくらいの感じで、本当に健康が一番です。皆さんも気にせずやってください。

最後に帰ってくる時に残っている隊員達に、やはり語り合った方がいいよって話をしました。隊員同士もそうだし自分の配属先の人ともそうなんです、こんなに色々な人たちと話せるチャンスってないんですね。私も教員をずっとしていたので教員以外の人たちと話すこともなかなかないですし、私は四捨五入をして何十歳になる年です。しなかなかな若い人と話す機会も少なくなってきたんですけど、大学卒業してすぐの私にとっては子どものような年の人と一緒に活動をしていると、私は先生が嫌いだという隊員もいて「こんなところで先生と一緒に働くなんで」、とかいわれながら、「まあねそういう事もあるんだよ」なんていいながらお互いにいろんな話をしていく中で、ああそっか先生はそんな時そういう気持ちだったんだといわれたり、反対に「生徒はそういう時そういう気持ちだったんだ」なんていいながら隊員ともいろいろ話をすることで見えてくるものがたくさんありました。

さっきもいった通り楽しむことが一番だと思うので、活動もそうです。プライベートもそうだと思うので、楽しんだもの勝ちです。私も悩みがあつて最初のころは職場でも発狂して泣き喚いたことが一度あつて無理とか思って、私がこんなに頑張っているのにどうしてとかがあって、それでちょっとすっきりして次から心を入れ替えて頑張ろうという気持ちになれたりしたので、思ったように生きるのが一番いいかなと思います。やるときにはやって遊ぶ時には遊ぶ、それが一番だと思います。

最後にさっきもいった通り自分らしくいる事が一番いいと思うので、楽しかったら笑うし、悲しかったら泣くし、許せない時は怒るし、疲れたら休むっていう、それが活動を長続きさせるコツなのかなという風に思います。納得いかない事もいっぱいあるし、嫌な事もいっぱいあるんですけどそれ以上に楽しい事もいっぱいあるので、常に自分がその感情

に素直に生きていけばいいのかなと思います。

最後に帰国後の活動として、私は帰ってきた時に異動になりました。勤務校が変わったのでどうしようかなと悩んだんですが、たまたま前任校の方から帰ってすぐに「せっかく子どもたちにも色々なもの送ったし講演会を開いてよ」っていわれて、最初に前任校で講演会をやらせてもらいました。「みんなが送った縄跳びがこういう風にして使われたよ」とか、「みんなが送ってくれたクレヨンで絵画展やったんだよ」という話をしたら子どもたちはすごく喜んでくれて、もっともっと自分たちにできる事はないかななんて風に考えてくれる子も多かったです。

あとは新しい学校では、やはり先生達も私が協力隊から帰ってきて、何この人という目で見ていて事がすごくよくわかったので、なかなか表だっているような事が出来なくて最初は自分のクラスで学活とか道徳を使って色々な話をしていた中で、今度は学年主任が「じゃあ学年朝会で話しなよ」といってくれて学年朝会で話したら、今度は他の先生が興味を持ってきて「じゃあ職員研修で話しなよ」といわれて職員研修で話させてもらって、先週最後に「保護者会で話しな」といわれて保護者会でも自分の経験を少し話させてもらいました。

今、力を入れているのが図書室に特別コーナーを開設してベナンについて学ぼう、協力隊とはなんなのみたいな事をやらせてもらっています。

私を感じた事や経験した事を、どうやって子どもたちに伝えていったらいいのかという悩みがすごくあったんですけども、やはり伝える事、何でもいいから自分が感じた事や思ったことを素直に日本の子どもたちに伝えていくことが大切なのかなと思っています。

今日の話聞いても思ったんですが、これから本当の意味で自分達、現職教員の協力隊活動が始まるんだなあと感じています。任国での2年間は本当に無我夢中で目の前のことばかり一生懸命やってきましたけど、帰ってきていろんな生徒達を見た時に、ここから初めて日本の子ども達に還元して行けるのかなと感じているところです。早口になりましたが御清聴ありがとうございました。

#### 【質疑応答】

質問：お話ありがとうございました。すごくおもしろかったです。色々お伺いしたい事あるのですが、最初の方で男性隊員はこうだった、女性隊員はこうだったというのが私はすごく気になっていて、やはり衛生面とか日本とは絶対違う国ばかりだと思うんですが、現地で女性特有の悩みがあったら何かお伺いできればと思います。

先生：女は強いんです。女の体は子どもを産むようにできているから本当に強いので、真っ先に男どもがどんどんやられていってどんどん病気になってええーとかっていってる間に、女の人はずいぶん現地の物を食べて、おいしいねとかっていいながらどんどん太って

いって、本当に3ヶ月間、ベナンでは現地に行ってから3ヶ月間自分の任地を離れちゃいけないっていうルールがあってそこから出られないんですけど、私なんかすごい村に住んでいたんで食べ物何にもないんですね。「どうすんだろ」ってみんなに「大変だよ」っていわれたんですが、私は全然平気でどんどん太って行っちゃうのを心配していた位なんですけど、男の人に3カ月後に会ったら激やせしてて、「何があったの？」ってきいたら「食べ物が食べられない」とか「水が合わない」といって男の人の方が苦労していました。最後の方になってくるとだんだん落ち着いてきて男の人も戻ってくる人多かったんですけど、全般的に女の人の方がやはり強かったですね。

あとはトイレが無いので、私が行った時にはトイレをするときに女性の方はかなり苦労をしていましたね、どこに行っても本当にトイレは無いのでそういう心配をしている人が多かったです。

あとは病気については早め早めに無理をしない事だと思うので、特にアフリカに行かれる方も多いと思うんですがベナンも病院がないので、何かあった時にはフランスに行かない方がいいですね。ですから病気をしちゃうと活動もできないまま終わっちゃうので、病気にだけはならないように、そのためには早めに休息を取って、早めに薬を飲んでという事前の予防をしていました。

質問：お話ありがとうございました。お薬をお持ちになったという事なんですけど、あらかじめこれは持って行ってよかったなと思うものとか、これがあったから命拾いをしたとかそういうものはありますか。

先生：私は実は一度も病気をしていないんですね。多分それだからアフリカに行けたんだと思うんですが、本当に一度も病気もせずに病院にもかからずに行ってこられました。訓練中に薬がもらえます。一人一袋、その薬だけをもっていけば十分に賄える量のものが、風邪をひいたとき用とか、怪我をしたとき用とか、湿布とかそういう細かいものが入っているのでそれで充分だと思いますが、病気を多くしている人はそれでも足りなくなって私は最後の方にはあげてましたね。足りなくなった人たちに「私余ってるからあげるよ」って。あとはマラリア汚染国に行く人たちはマラリアの予防薬を飲み続けなければいけないので、私が行った時には毎日飲むものだったので、毎朝その薬を飲まなきゃいけない、それを習慣づけなきゃなんかの時に駄目だよっていわれたので、途中から1週間で1回飲めばいい薬にJICAが推薦する薬が変わったのでそこからは1週間に1度飲めばよくなったんですけど、そういうのもあるのでJICAがいう事をきちんと信じて守っていけば大丈夫だと思います。体にだけは気をつけてください。



## 青年海外協力隊活動報告



20年度 1次隊  
ベナン・青少年活動  
山崎 有美

- 派遣国：  
アフリカ ベナン

ソマホン出身国



人口	約8,700,000人
面積	約115,000km <sup>2</sup> （日本の約3分の1）
時差	日本との時差はマイナス8時間
人種	フォン民族、ヨルバ民族、アジャ民族、など40以上の民族
言語	公用語はフランス語、その他フォン語、ヨルバ語など各民族の言語
宗教	ヴードゥー教約65%、キリスト教約20%、イスラム教約15%
主要産業	農業（綿花、パームオイル）、サービス業（港湾業）
気候	雨季と乾季

## ベナンの生活 ～ 衣編～

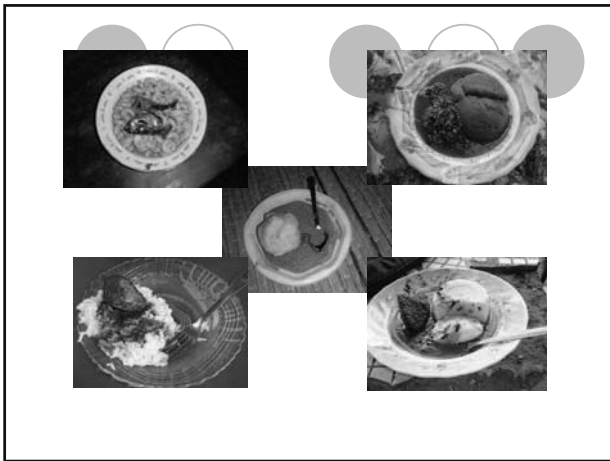
- パーニュと呼ばれるカラフルな布



## ベナンの生活 ～ 食事編～

- 主食：トウモロコシの粉





### 私の活動

- 職種：青少年活動
- 配属先：ソボドメ市役所
- 要請内容
  - ・ Centre de Jeunes et de Loisirs  
 (青少年余暇センター)  
 を活用した青少年の余暇活動の充実

↓ 1ヶ月の市役所勤務

見えてきた課題&ニーズ  
**社会教育 < 学校教育**

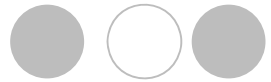


- カウンターパート：なし
- 配属先と一緒に活動  
：ほぼなし



どうする??

### 市役所の関係作り



- あいさつ
- おしゃべり(雑談)+買い食い
- 活動についての話し(相談)
- 半期ごとに活動計画書を提出
- 毎週、1週間の活動予定表を提出

### ☆一週間の流れ



lundi	mardi	mercredi	jeudi	vendredi	samedi
mairie	école	mairie	école	école	école (1fois chaque mois)
église	↓	CEG école	↓	église	

### 識字教室



- 週2日(月曜、木曜の夕方)
- 非識字者(主に20代女性)
- アルファベット、日常会話、簡単な計算、文法全般
- 近所の教会



### 学校で美術・体育の授業



- 市内の公立小学校での巡回授業
- 主にCM2(6年生)



### 絵画展の実施(1年目)



## なわとび大会（2年目）



## 余暇活動の充実

- 青少年余暇センターの活用  
毎週水曜日の午後、自由開放  
毎月1回土曜日のイベント  
年1回の大イベント



- 中学校での日本語教室

## 日本文化紹介（毎月1回土曜日午前中）

- 任地ソボドメで
- ベナン国内あちこち（体育隊員とともに）



## 日本の中学校に

- 毎月ベナン通信を発行



入らなくなった物を  
集め、ベナンへ  
（紙、クレヨン、鉛筆  
なわとび、ボール）



## 活動を終えて...（健康第一！！）

よく食べ、



よく寝て、



よく飲み、



そして、  
よく動く



## 老婆心ながら・・・

- 語り合おう  
さまざまな人たちと話せるチャンス
- 楽しもう  
活動も、プライベートも・・・  
『やる時にはやる！遊ぶ時には遊ぶ！』

最後に・・・

常に自分らしく。

楽しかったら笑う、  
悲しかったら泣く。  
許せないときは怒る！  
そして、  
疲れたら休む。



帰国後の活動

- 前任校で講演
- 教室で（学活、道徳）
- 学年朝会で
- 職員研修で



帰国後の活動2

- 図書室で特別コーナー開設



私を感じたこと、  
経験したことを

日本の子供たちに伝えていきたい



これから、  
本当の意味での  
私たち現職教員の  
協力隊活動が  
始まるのかもしれませんが・・・

ご静聴ありがとうございました...

## 南の島の養護学校

村松渚

(平成 20 年度 1 次隊 養護 フィジー)

---

海外に行きたいとか国際協力をしたいとか色々な思いがあると思うんですけど、私も自分の学んできた事が世界の人々のためになるのならという気持ちがありました。でも本当に自分の中で大きいのは 2 番目の方で、先生という仕事に小さいころからなりたくてすごくその仕事が好きなので、もっと魅力的な先生になって、自分が世界に出て見聞を広げて自分自身が豊かになる事で、さらに日本でよい意味で面白い教育ができるようになるんじゃないかという気持ちで私は協力隊に参加しました。

今日の発表内容はこんな感じになっています。まくしたてると思うんですけど分からない事があったらあとで聞いていただいて、せっくなのでいろんな風景とか話がしたいなと思って。

派遣前訓練は 4 月から始まると思うんですけど、65 日間の訓練があって長野県駒ヶ根市と福島県二本松というところでやります。これは国別とか話す言葉によって分かれていると思うんですけど私は長野県の方ですね、駒ヶ根訓練所というところで訓練を行いました。やることはここに書いてある通りでメインは語学なんですけど、他にも途上国の生活に必要な知識なども学びます。あとはあいている時間に自分達でグループを作って勉強し合ったりとかスポーツをしたりという活動もできます。ここで同じ国に行く仲間や同じ協力隊として高い志を持った仲間に出会える事が出来ました。

これがその様子です。これ英語のクラスですね。書道をやっているんですけどこれは日本語教育、隊員が英語で書道を教えるっていう模擬授業をした様子です。

これが生活班の仲間なんですけど、生活班の仲間はすごく仲良くなってみんなで誕生日を祝ったりだとかずっと生活を共にした仲間です。教員という仕事をやっているとしても普段接する人が教員が多いと思うんですけど、こういうところで教員以外のいろんな分野で活躍してる人に会ってすごく良い刺激を受けました。これが私がバレーボールが専門なものでバレーボールの練習をみんなですて最後にみんなで大会をやろうという事でやりました。

あとは課外活動というので、これは近所の農家に行ってこういう農業のお手伝いをしたりとか近所の高齢者施設に行ったりだとか、地域との交流もありました。

これは卒業式、修了式なんですけど、これは自慢なのですが最後の言葉を述べさせてもらって、これで仲間と一緒に 65 日間本当に学生のような青春の日々を送ったなど今では思っていますがどうですか高橋さん。

高橋さん：青春ですね、もう一回行きたいですね

先生：もう一回行きたいですね。では派遣先での活動についてです。私が行った国はフィジーという国です。場所なんですけどこれが日本です、これがフィジーです。この辺にトンガとかサモワとか南太平洋にある小さな島国がいっぱいあって、フィジーというのはその島国の中でも一番発展しているのではないかとされている国です。

基本情報は以下の通りなんですけど面白いのが、フィジーなのになぜかインド人がいるんですね、その理由は、イギリスの植民地だった時があって、フィジーっていうと沖縄のような気候をイメージしてもらえればいいと思うんですが、サトウキビの産業をやるために、フィジー人は南の国の人だからやはり働かなかったんですね。困ったイギリス人が同じイギリスの植民地であったインドからインド人を連れてきてという歴史があります。フィジー人としては自分たちの国にインド人が来て、インド人は比較的働くので経済的に豊かになっていって、やはりフィジー人とインド人、表面上は仲良くしているんですけどもその根深い確執というのはあるなと感じました。

任地についてなんですけど私はラオトカという町で首都に次ぐ 2 番目に大きな町にいました。基本情報はこんな感じです。

これが東京でいう銀座 4 丁目のような交差点なんですけど、こんな感じであと市場ですね、マーケットがあって野菜がありました。比較的大きな都市だという事もあってスーパーマーケットもあって日本と同じようなものが手に入りました。

ラグビーをしているのは大体フィジー人です。サッカーをしているのはインド人というのがあるんですけど、夕方になると大人が集まってきてグラウンドで運動をしたりとか、右側のところで、顔で分かるんですけどこれインド人の子どもたちなんですね、インド人の子どもたちが夕涼みをしたりとかしておりました。

配属先についてです。ラオトカ **school for special education** というラオトカ養護学校で生徒は 50 名ぐらい。日本では知的障害の学校、聴覚障害の学校と別れていると思うんですけどやはり養護学校の数が少ないという事があって、色々な障害者の子が通っている学校でした。年齢が 4 歳の幼稚部から 22 歳と書いてあるのですけれども、卒業というものがとくになかったんですね。私がいた時点で一番年上の子が 22 歳という事で、はっきりしたカリキュラムがないので、自然とモチベーションが落ちて学校に来なくなったら終わりというようなところがありました。これが学校の様子です。

これが子ども達で、この青いのは制服ですね。

これが生徒の様子でクラス 1, 2 の小さい子の感じで、(スライドを見ながら) これはフィジー人です、インド人です、先生はフィジー人です、見分け方はフィジー人は頭がアフロです、でこの子はインド人です、ちょっとストレートな髪の毛の感じでここで見分けます。子どもたちは結構仲良くやっています。彼女もインド人ですね、頭がアフロなのはフ

イジー人、簡単な見分け方です。

クラスは色々分かれているんですけども、すごく問題だなと思ったのは、クラス分けは先生たちの主観でやっていて、またその先生たちというのも一応、教育大学の特別支援教育を専攻していたというんですけども、やはり知識や技術は日本に比べるとあまりない所で、全然アセスメントが正確でない中で色々なレベルの子と一緒にいると、後ろに計算が書いてあるのですが、このクラスでこういう計算をやっているけどこのクラスの中でこういう計算ができる人は本当に一人二人とか、やはり生徒の実態と教育内容があっけない授業をしていました。

私の要請内容は年齢の高い女子生徒、知的な発達に富んだ女子生徒に対する家庭科、洋裁や料理や図工の指導という事で、学校側の意図としては年齢の高い生徒に手に職をつけるという教育をして、学校を卒業して経済的に安定させたいという内容でした。

びっくりしたのが、行ったら「日本から来たんだから何でもできるんだから」といわれて4人の女子生徒と教室を任せられ「いきなり担任をしろ」と初日にいわれたので、「それは無理なのでとりあえず1週間学校を見せてください」といって、1週間見学をしました。

カウンターパートという一緒に協力してくれる教員は一応いるんですけど、特にかまってもらえませんでした。日本人っていうのは結構知っているんですけど、評判も良くて、日本人という事に対しては優しくしてくれるんですけど、「何しに来たの」という感じで、日本で学校にそういう協力隊のような人が来るんだったら、いつからいつこういう期間でこういう事をしに来ますというのがあると思うんですけど、そういう情報共有が全然なかったの「何しに来たの」といわれながら最初の方は小さく、立場なく暮らしていました。

家庭科的な内容という事だったのですが、最初あったのはさびた針と糸が数本という中で、「何もないけどそこに生徒はいる。まずはできる事をやっつけよう」という気持ちで活動を始めました。学校側の意図としてはもっともな事をいっているの、自分が実際に生徒を見て彼女たちに必要なものは読み書き計算の力、自分が学校を卒業した時、自分が作ったものを売る時もやはりこういう力はあるだろうというので、基本的な学力を上げる事、というのと実際に製品を作る力かなというので、午前中は英語や数学などの基礎的な勉強をして、午後に物づくり的なプログラムをしました。

これが英語の様子でこんな感じでやっていました。数学は毎回簡単なテストをやっつけ、そうすると彼女達もわかるとか、できるとかという自信がついて、いい顔で授業を受けてくれるようになりました。では動画を。これは定規の使い方をやっているところで、私が黒板に8cmと7cmの四角を書いてくださいというので彼女はやっていたという感じですね、でも向こうの先生はこういう風に教えてくれないんですね。定規使えっていったらそれだけで具体的にどうやって使うとかこれが1でここから8まで引くんだよってという説明なくやっているので、彼女たちはちゃんと教えたならわかるのに実際は教えられていないという



のがありました。

これは耳が聞こえないんですけど掛け算九九を覚えていました。手話を使っているんですけど、カードがあつてこういう風に3×10はとかってやって自分で数えて30だつて答えをひっくり返して合つたという感じでやっていました。日本だったら何でもないカードを使った学習だと思うんですけど、彼女たちにとっては新鮮でモチベーション高く一生懸命勉強してくれました。

午後の物づくりでは図工で折り紙をやったり、書道をやったり、日本文化紹介的な事もやりました。

あと絵を書いてプロフィールを作ろうとあって、日本では何でもない事が彼女たちにとっては新鮮で、みんなそうすると他の生徒達も私のクラスに来たくなるんですよ。

午後の家庭科の授業はモノがないのがちょっと大きいんですけど、立場ない中でこれを買ってくれあれを買ってくれとはまだいえなかったのも、本当になくであるものを使って簡単な針刺しを作ったりとか、きんちゃく袋を作ったりして、でも彼女たちはそれでも学んで、学ぶ姿勢は良くて自分で自分のお裁縫箱を作って、これを使ってこれからはもっと学んでいこうみたいな感じでやっていました。

後はこれは同じフィジーの隊員なんですけど、同じような活動をしている隊員と協力して、各滞在先に行ってワークショップのような事をやりました。やはり一人ではできない事も他の隊員が集まるとすごく勇気づけられるし、いろんなアイデアが出てとてもいい活動になったと思っています。

これは生徒の進路って書いてあるんですけど、日本の生徒が養護学校を卒業したあとどういう進路をたどるのかという事も現地の先生のお話をしたりしました。

フィジーの教育というのは先生が教科書を黒板に写す、生徒がそれをノートに写す、先生が練習問題を黒板に写す、生徒がそれをノートに写して解く、1時間の授業でも15分たつたら終わってしまうという授業をやっていました。やはり「解き方や考え方の説明は無いの」、とか間違つたら何故間違えたとかどうやって正しい答えを導き出すかっていう事ではなく、正しい答えを書いたら終わり、先生は終わつたら終わつたで後ろで本を読んでいて、生徒は怒られないようにおしゃべりをしているという実態でした。日本から来た先生としてできることは、わからなかつたらわかる解き方を教える、間違えてもいいからそこからどう学ぶか、「わからなくていい」と、「わからない事を教えるのが私たちの仕事だよ」といいました。あと自分らしい表現をしよう、時間いっぱい授業をする、というような事を気をつけてやりました。

自分らしい表現をするという事なんですけど、やはり小さいころから情操教育というものを受けていないので絵が書けないんですよ。写してつていうと何とかできたりするんですけど、すごくそれに自信がなくて合つてる間違つてるつていうのを気にしちゃつて、でもこういう表現は自分らしくていいんだよとつて、ちょっと書いたら「これすごいま

い！」という生徒も自信をつけて徐々にかかるようになりました。

生徒達の変化で、日本は比較的學校は休まないのが当たり前だと思うんですけど、南の國でありますので雨が降ったら休むし、ちょっと具合が悪かったら休むんですけど、學校が楽しいみたいで休まなくなりました。あとはすごく学びたい気持ちというのがあって宿題ちょうだい、とかもっとやりたい、とかっていう気持ちが出て自信をつけていったようです。あとは自分らしい表現もできるようになってきました。

先生達の変化としては私がやってくれるなら任せちゃおうということでお茶をしたり、おしゃべりをしたり自分の書類を作ったりで、やはりあまりいい変化は見られませんでした。向こうの先生達も技術は持っているんですけども、わかっていることはわかっているんですけどそれを生徒に伝える技術がないなというのが感想で、後半はそこをやって行こうかと思っていたんですけど、後半戦、校長先生が変わったら私の要請もコロッと変わって専門の体育を教えるようになって、私はそれはそれですごくうれしかったんですけど。

体育を教えるにあたってフィジーの子ども達にはどんな体力が必要かというのを考えまして、これは私が筑波大学体育専門学群で学んだこういう表などを元に、こんな感じでフィジーの子ども達に必要なのは持久力や柔軟性や、その時何をしなければならぬという判断力なのではないかという事で、それを育てられるような授業内容を作って行きました。

いろんな障害を持った子がいるんですけど、この風船のは真ん中の子が足が不自由なので座ってできる風船バレーをしてみたりとか、あとは英語ってスポーツも遊びも play なんですよね、日本と違ってそこが分けられてないところがあって、体育じゃなくて遊びになっちゃうところを、これは体育だからちゃんと授業の流れをつくって始めは集まりをしたら体操、ランニングメインのプログラムをやって、片づけという流れを作って行きました。いろんなグループでやる時間を作って、クラスでやる時間、グループで活動する時間、あとは全校でレクリエーション的にやる時間というのをやってやっていました。授業で徹底してやったことは「bring your change」と書いてあるんですが、「着替えをもって来い」と「ちゃんと着替えて授業をやろう、動ける格好でやろう」という事、あとは「making a line」日本だと授業の最初に列になるのは当たり前なんですけど全然並べないんですよね、並べないのが悪いとかっていうのじゃなくて、やはり全然それはならってないからできない事であって、まずは始め並ぼうって言ってそこから私が生徒の名前を呼んで、何故呼ぶかって行ったら日本でいう健康観察とかの意味もあると思うんですけど、呼んだ時にハイタッチをして、私はここが生徒一人一人が目立てる場面かなと思って、いろんな障害を持った子がいて車いすの子もいるけど、ハイタッチはできたというところでここを一つその子に焦点が行く場面を作ろうと思ってやってみました。こんな事を気にして後半の体育はやっていました。

こんな事を5カ月やっていたら「national game in Suba」っていうのがあるんですけど、フィジーというパラリンピックみたいのがあって、生徒達がすごく頑張ってくれてなんと38個のメダルを取ってくれて前年度は5個くらいだったんですけど、やはりやれば結果は出るんだなという事がわかりました。

こんな感じでみんな一人ひとりの写真を撮ってあげたんですけどすごくいい顔をして、見ていてくれた人に聞いても、去年と気持ちが違うよねって言って、一生懸命やる事がカッコいい事なんだよと伝えたかった事が伝えられたんじゃないかなと思える瞬間でした。

勝ちの原因というのは授業をつくることで基礎体力や姿勢が向上したという事と、適切なエントリーというのがあります。

あと頑張れという言葉を教えたんですけど頑張れというのは「fallen heart」とか「do your best」という言葉で、それを合言葉にして頑張れ頑張れって生徒達も応援してたんですけど、この大会に行く時に、リボンに自分の出場種目と頑張れっていう言葉を書いて一人ひとり結んで、ランタカ養護学校のきずなみたいな感じでみんなでこれをして大会に臨んだらいい結果を収めたという事でした。

地区大会では何とメダルを1個しかとれなくてこの差は何だといったらパラリンピックの方は「athletic」といって陸上競技がメインなんです、個人種目だと生徒達はすごくいい成績を収められるようになった。で地区大会はサッカーやネットボールやバレーボールってチームスポーツだったんですね。チームスポーツだと彼らはまだ自分だけじゃなくて、仲間と協力してというところまでは私の任期では育てる事が不十分であったという事で、今回後任が行っていますのでそっちに託したいと思います。

こういう感じで体育の授業をやって来たよというワークショップを先生たちにしたりしました。

メインの活動の総括としては生徒との関係や体育授業の基礎づくりとしては、自分でもやれるだけやったというのがいえると思います。でも授業に関する先生との協力という点では正直、なかなか連携が取れなかったという反省があります。

原因としては生徒達の今の時間を大切にできなかった、自分の先生という仕事への誇りをフィジーの先生にも求めてしまったというのがあります。

これがみんな悩む事だと思うんですけど、隊員と生徒の信頼関係を作るのは結構簡単だと思うんですよね。一生懸命やったら、変化は実感できると思います。でもやっぱり隊員がいなくなった後もその教育を持続してほしいと思うと、現地の教員に教えることが必要なんですけど、そこがなかなか、大人はなかなか変わらないんですよね。大人が変わらなくて、指導もなかなか変わらない、でもやはり隊員の任期も生徒の学校生活の時間も限られているというのが教育系の隊員にあるみんなの葛藤ではないかと思っています。あなたならどうしますか。行ったら絶対ぶつかると思うんですけど、私が出した選択肢としては、両方大切にしようといいながらも結構私は生徒よりになってしまったかなと思っています。

どう考えたかなという生徒達の今の時間を大切にすると、もしかしたらそれで生徒達が素敵な先生になってくれるかもしれないと、先生じゃなくても素晴らしいフィジー社会を作るために貢献してくれる人になってくれるかもしれないという、自分なりに理由づけをしてしまったのかもしれないんですけど、こういうところでとりあえず両方大切にしつつも最後の方は生徒達の時間を大切にしました。あとはうちの学校に限っていったら先生たちの定年が近かったので、ここに力をかけても将来つながらないんじゃないかなと思いました。あとは先生たちのアプローチも続けていくという事です。

これを見て「what you see?」どう見ますか、ってこれ最後の方なんですけどほぼみんなが着替えをもってきてるんですね、こういう状況になりました。これも同じで彼女、彼らが一応列になって走ろうとしていると、これは一応結果が出せたのではないかと思っています。あとここにいるこの先生が体育の先生なんですけどこんなよっかかっているんですけど、一応ちょっとやる気を出して指導をする気になってくれているというところで、完全ではないんですけどできたのかなと思っています。

あとは活動が終わって他のフィジー隊員との連携というところで「matsuri Japan festival」ということでフィジーのみんなに日本文化を紹介するイベントをしたりしました。あとこれはフィジーの腰に巻くスルというスカートのようなものなんですけど、このイベントで使ったグッズでこれはうちの学校に受注をさせてもらって、生徒と教員とか町の人とか校長先生とかみんなで一生涯懸命作ってくれて、こういうイベントで日本人が買ってこっちにお金を落としたという感じでした。あとは同じようなミニバンを自分の学校でもやりました。

日本の学校とのつながりというところでは通信、フィジーよりみんなへというのを出していました。あとはクロスロードというのがあるんですけど、日本の生徒への手紙という事で日本の生徒が私に手紙を書いてくれて、私が返事をするみたいな事も取り上げていただいたりしました。

あとはブログをやっている日々の活動をネット上でみんなに見えるようにしていました。

これは最後に私の冒険なんですけど、フィジーのこれいちばん大きな島で、500キロあるんですけど道で通じているのでこれを歩こうと思って、これはJICA的には完全にアウトなんですけど、しがたない公務員の最後の冒険という事で最後にこんな旅をして、日本の「田舎に泊まろう」みたいな感じで一日8時間40キロ弱を歩きながら、最後にフィジーをかみしめながらこんな感じで、ノーポイントメントで泊まる場所とか全然決めずに行っただんですけど、わたしは都市にいたのでほんとのフィジーの地元の人たちに会えたというのがすごくいい経験になりました。こんな感じですよ。

こうやってボロボロになりながらもなんとか一周をして2週間かけてゴールをしました。こんなこともやっちゃいました。何のために歩くのかって思った時に自分で笑ってもしようがないので、100歩を5セントとして寄付をしようと思ってフィジードルで約300ドルぐらいにしてこっちにユニセフの方の支援制度があったので寄付をして、自分なりにこの旅を締めました。

これは私ってアメリカの協力隊と一緒に住んでいたんですけど、最初はやはり文化の違いで大変だったんですけど後半戦では仲良く二人で行きました。

帰国後、今なんですけど帰国と職場異動のダブルパンチで非常に厳しい日々を過ごしました。先生たちは目の前の仕事がやはり忙しいのでそんなに相手にはしてくれません。協力隊行って来たの？という話さえもそんなに興味はないような気がしています。日本で必要な細かい配慮は完全に無理ってというのは自分でもすごく感じています。1学期はそれでいっぱいいっぱい、2学期になってやっと取り戻せたかなと感じています。やはり忙しいです。あつという間に1日13時間労働の復活が始まっています。

生徒に話してもわからないっていうのは、私は知的に障害がある、特に今は重い生徒のクラスにいるのでそれを話せる機会がないと。寒い、体が環境に不適合です。10月からこれで4回目の風邪をひいて完全に体調が悪いです。

あとは晴れていても日本の空は水色だ。こんな青空のもとにいたのがちょっと日本の空は足りないなと思っています。

でもいい事として本当に色々な価値観を認められるようになったなと思っています。あとは人間関係の広がりという事で、教員だけじゃなくて本当に全国各地にいろんな特徴、得意分野をもった仲間が広がりました。

あとは、世界や政治への興味、世界の平和の事とか、やはり目の前の仕事でそんなにアンテナを張ってはいなかったんですけど帰ってきてからはすごく気になりますね。

あとは政治への興味で、いま大分JICAが仕分けられていますけど、仕分けられちゃうと困るんですね。仕分けられちゃうとフィジーの町、私のいた学校に協力隊が送られなくなると、そこで待っていてくれる子ども達がいるから。そういう意味でも政治への興味というのもし出てきました。

あとは家族を大切にしようになったんじゃないかなと、2年間心配をかけ、2年間大目に見てくれた家族の事を、帰ってきたらやはり2年前より大切にしたいという気持ちも大きくなったし、実際にできているんじゃないかと思います。以上で終わります。ありがとうございました。

#### 【質疑応答】

質問：お話ありがとうございました。家庭科の準備はされていたんですか

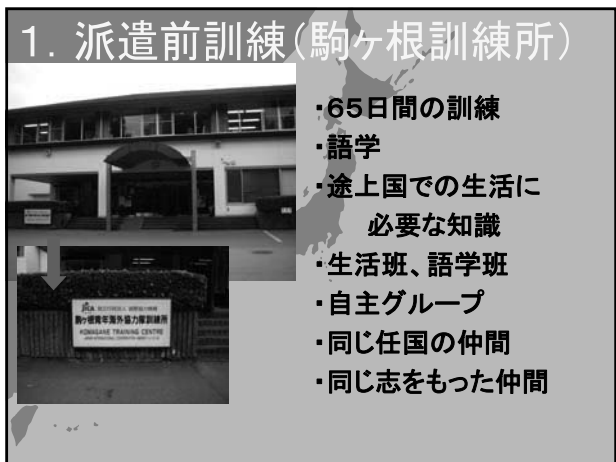
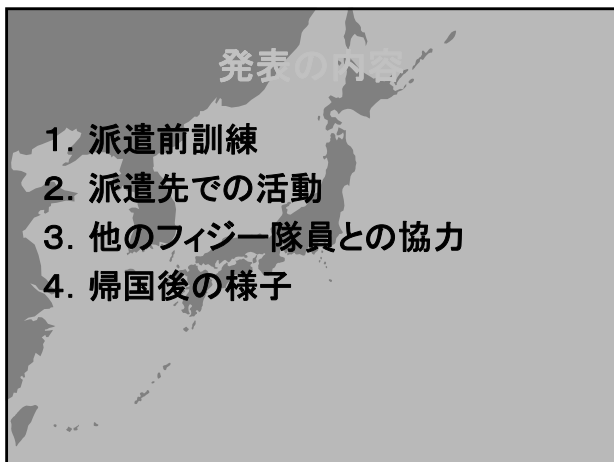
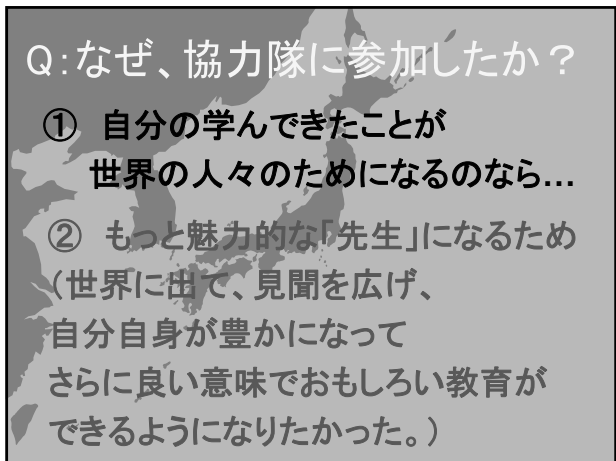
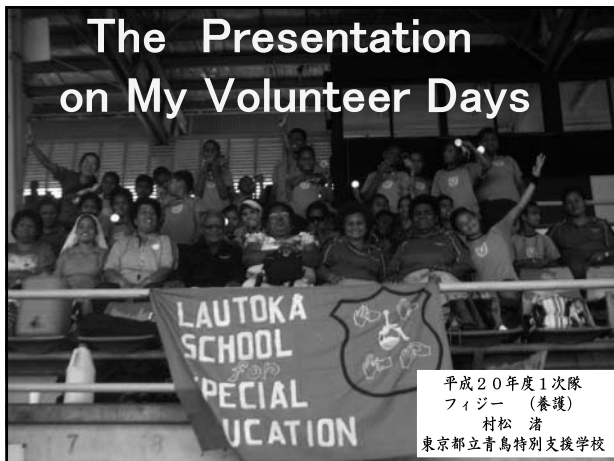
先生：教員免許は体育の教員なんですけど、自分で学べる範囲で訓練前と、フィジーに行ってから家政隊員でいった隊員もいたのものでその人に教わりながら自分なりにできる準備はしました。

質問：針と糸は？

先生：針と糸はさびたのがあって、後は自費で買ったりとか、JICAの方で活動支援経費という制度があってこういう事をしたいので、こういう予算をくださいという申請ができますのでそれがちゃんと理由の通っているものだったら予算が通るのでそれで買っていただいたりとか、あとミシンを購入していただいたりとか、その辺はJICAのサポートがあると思います。

質問：私は家政でいくんですが、現地でその場に応じた要請だったりとか臨機応変な対応をされていて、本当にできるのかなという不安が募ってきまして、日本でこういう事をした方が良かったという事があったら教えてください。

先生：多分協力隊に行こうという気持ちがある人だったらたいていの人は現地でも大丈夫だと思うんですけど、やはり行ってみないと要請もどう変わるかわからないし環境もわからないところがあるので、もう日本では日本の日々を楽しんで一生懸命やって、その一生懸命やった自信を持って任地国に行くのが一番じゃないかと思います。



## 2. 派遣先での活動



- 正式国名:  
フィジー諸島共和国  
(Republic of the Fiji Islands)
- 国の大きさ:  
四国とほぼ同じ大きさ  
(約330の島からなる)
- 天気:夏が1年中
- 首都:スバ(Suva)
- 人口:85万人
- 言葉:英語 フィジー語  
ヒンズー語
- 人:フィジーの人と  
インドの人が多い。

## ◎ 任地(Lautoka)、配属先について

### ①Lautokaの町について

- ・首都Suvaに次ぐ第2の都市
- ・人口 約4万2000人  
日本でいうと...東京都千代田区、石垣島
- ・気候:とても暖かく、晴れの日が多い
- ・ナンディー空港から、車で約30分



### ②配属先について

- ・Lautoka School for Special Education  
(L.S.S.E) ⇒ ラウトカ養護学校
- ・生徒数: 約 50名
- ・障がい種:知的障がい 聴覚障がい 身体障がい
- ・年齢: 4歳(幼稚園) ~ 22歳(プレホケーショナル)







<要請内容>  
年齢の高い女子生徒、知的な発達のゆっくりな女子生徒に対する家庭科(洋裁、料理など)や図工の指導。

学校側の意図

年齢の高い生徒や知的にゆっくりな生徒には、教科学習(英語や数学など)をするよりも、卒業後を意識した「手に職をつける」的な教育を目指したい。

いきなりのビックリ(>\_<)

- ・いきなり、4人の女子生徒と教室を任せられ一人で担任...!
- ・カウンターパート(CP)らしきはいるけど...かまってくれない。
- ・日本人? 誰? 何しにきたの?  
⇒校内の情報共有なんてない...
- ・錆びた針と糸、数本...

何も無いけど... そこに生徒はいる!  
⇒まずは、できることをやっとうごう!!

学校側の意図

- ・卒業後に役立つ教育
- ・手に職をつける

実際に生徒を見て... 彼女たちに必要なものは??

↓

・基本的な読み書き計算の力 + ものづくりの力

AM: 英語 数学  
PM: 家庭科(洋裁) 図工


< 英語 >

- ・アルファベット
- ・簡単な単語(スペル)
- ・簡単な文法



< 数学 >

- ・たし算 ・ひき算 ・かけ算 ・わり算
- ・図形 (布を裁つときに必要になる)



毎回10問のミニテストを実施

↓

「わかる」  
「できる」  
自信

Olive learned how to use ruler.



Monita tried to remember timestable.



< 図工 >

- ・プロフィール
- ・折り紙
- ・切り絵
- ・書道






日本では何でもないことが  
彼女たちには新鮮♪

< 家庭科 >

- ・基本的な縫い方の練習
- ・ピンクッション
- ・ブックカバー
- ・ランチバッグ



< 『家政・養護の会』 発足 >

- ・同期 猿田さん (ランバサ養護学校)
- 19-2 柴田さん (国立青年訓練所)

・3施設が協力して  
Fijiのお土産になるような  
製品を作っていこう。

ラウトカ養護: ペンケース作り

国立青年訓練所:  
スルのポケットのつけ方

## ランバサ養護学校： 生徒の進路 風呂敷 刺繍



### < フィジーの教育 >

- ・先生が教科書を黒板に写す。
- ・生徒がそれをノートに写す。
- ・先生が練習問題を黒板に写す。
- ・生徒がそれをノートに写して、解く。
- ・授業が1時間でも...  
あれ？ 始めの15分で終わり??

- 「解き方」「考え方」の説明がない??
- 間違えたら、新しい答えを書いて、終わっちゃった...  
あれ？ 正しい答えの導き方とかは?
- 先生、後ろで本読んでる...生徒は静かにおしゃべり...

### < 「先生」 From JAPAN として >

- ・わからなかったら、わかる解き方を教える。
- ・「まちがえていい」⇒ そこから、どう学ぶか
- ・「わからなくていい」⇒ わからなかったら、質問  
...わからないことを教えるのが、先生の仕事
- ・(絵など) 自分らしい表現をしよう!
- ・時間いっぱい授業をする。
- ・いいことは、たくさんほめる。悪いことは、悪い!

### < 生徒の変化 >

- ・学校を休まなくなった。
- ・学習意欲の向上  
⇒ 学びたい気持ち、宿題
- ・「がんばっている」「できる」という自信
- ・自分らしい表現ができるように



### < 先生の変化?? >

- ・Teacher Nagisaがやってくれるなら  
まかせちゃおう...  
お茶、おしゃべり、ノート作り...  
⇒ 大人はなかなか変わらない...↓
- ・自分の洋裁の技術はある  
...が、それを生徒に伝える技術がない

## 2. 活動(後半:体育)

### < 体育指導を始めるにあたって >

- Q: フィジーの子どもたちには、  
どんな体力が必要か?

<b>&lt;後半:体育&gt;</b>	
身体的要素 (physical factor)	形態 (structure) 体格 (physique) 姿勢 (posture) 筋力 (muscle strength) 敏捷性・スピード (agility, speed) 機能 (function) 平衡性・協応性 (balance, coordination) 持久性 (endurance) 柔軟性 (flexibility)
体力 (fitness)	構造 …… 器官・組織の構造 防衛体力 (fitness for protection) 機能 (function) 温度調節 (temperature regulation) 免疫 (immunity) 適応 (adaptation) 意志 (will)
精神的要素 (mental factor)	行動体力 (fitness for performance) 判断 (judgement) 意欲 (motivation) 防衛体力 (fitness for protection) …… 精神的ストレスに対する抵抗力 (capacity preventing mental stress)

## 2. 活動(後半:体育)

< 体育指導を始めるにあたって >

Q: フィジーの子どもたちには、どんな体力が必要か?

A: 柔軟性 持久力 協応性 判断力

Q: フィジーの子どもたちに、何を伝えたいか?

A: ・ルールを守って運動すると、みんなが楽しめ活躍できる。  
・自分のことだけでなく、仲間のことも思う  
そして楽しく体を動かし、「心」と「体」を鍛える。

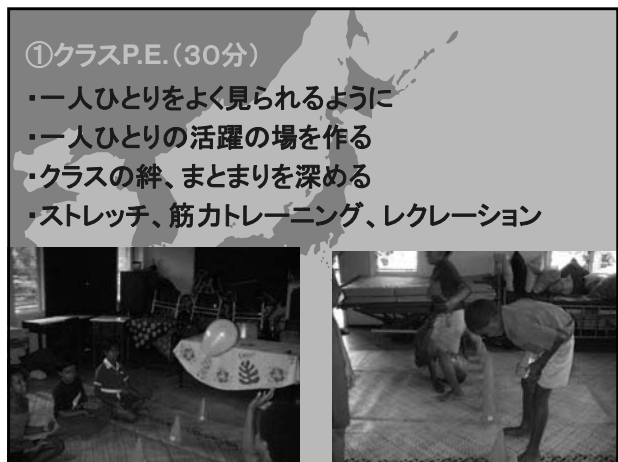
いろいろな障がいをもった生徒が楽しめる授業作りを目指す



Play, Play, 楽しい、わ〜♪で終わっていた授業を始め⇒体操⇒ランニング⇒メイン⇒片付け

### ①クラスP.E.(30分)

- 一人ひとりをよく見られるように
- 一人ひとりの活躍の場を作る
- クラスの絆、まとまりを深める
- ストレッチ、筋力トレーニング、レクリエーション



### ②グループP.E.(60分)

- グループでできるスポーツ、ゲーム
- 少し長めのランニング ⇒ 持久力の向上
- 集団性の意識 (リレー、レースなど)



### ③全校SPORTS (90分)

- 全校生徒を縦割りグループにして行う。
- みんなが楽しめる、レクリエーション的なスポーツ
- 全校の絆、高学年の自覚、リーダーシップ



## <授業での徹底>

1. Bring your change
2. Making a line
3. Calling students name
4. Exercise and Training
5. Running



☆一人ひとりが活躍できる場を作る。  
⇒授業はじめの出欠 体操

☆運動が苦手な生徒には、やさしい課題  
⇒ できる達成感

☆結果より  
一生懸命やる  
ことの大切さ

☆みんなが楽しめる授業  
⇒ルールや順番を守る大切さ



Term II 2009 for 5months  
Everyone tried hard of P.E.

National Game  
in SUVA

38 medals



## <大勝の原因>

- ① 基礎体力・姿勢の向上
- ② 適切なエントリー

- ・年齢
  - ・パラリンピック(身体障がい)
  - ・デフリンピック(聴覚障がい)
  - ・スペシャルリンピック(知的障がい)
- ・一人 走る系:1つ 投・跳系:1つ
- ・生徒の意向を取り入れた。

## ② GANBAREミサンガ

Simelfi 50m Long-Jump GANBARE! ☆ミ



- ・GANNBARE!(がんばれ!)
- ⇒Try hard! Do your BEST!
- ・自分の出場種目を自分でわかるように。
- ・ラウトカ養護の絆



**But...**

WESCOSE Game  
in Nadi

1 medal

**Why??**

SUVA: Athletics

**Set!**

NADI: Soccer, Netball  
Volleyball ...

⇒ with your friends

**Teamwork!!**

< Workshop about P.E. lesson >

1. Bring your change
2. Making a line
3. Calling students name
4. Exercise and Training
5. Running

**The Basis of P.E.**

< メインの活動の総括 >

- ・生徒との関係
- ・体育の授業の基礎作り

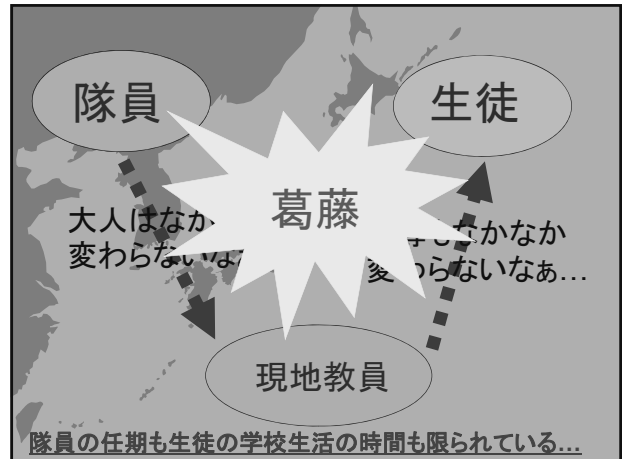
やるだけ  
やりました◎

- ・授業に関する先生との協力

なかなか連携がとれなかった (>\_<)

原因...

- ・生徒たちの「今」の時間を大切にできなかった。
- ・自分の「先生」という仕事への誇りをフィジーの先生にも求めてしまった...
- ・時間で動くのは難しい。
- ・生徒と向かい合うことより、自分の仕事、休憩が優先になる。

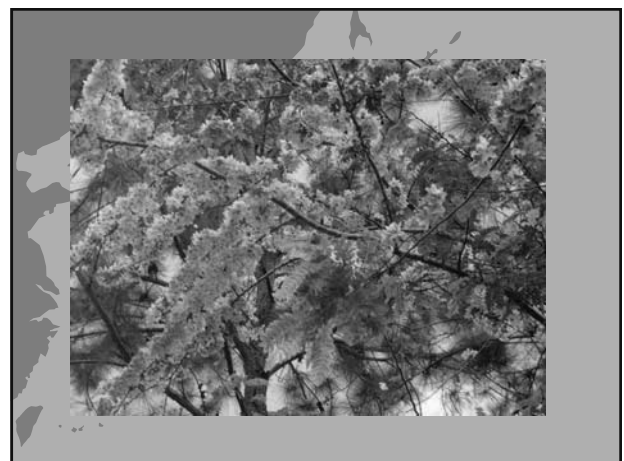
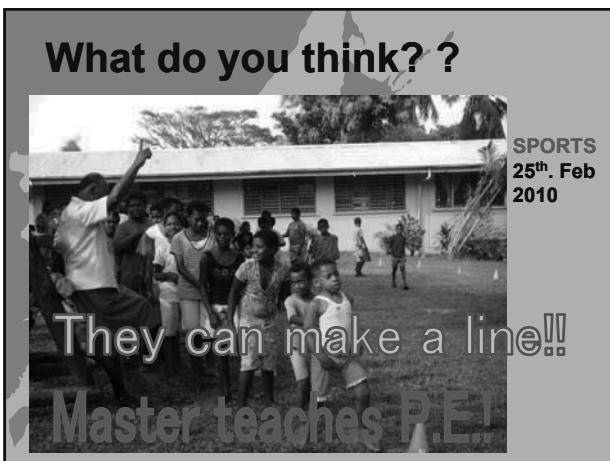


あなたなら、どうしますか？

★両方、大切にします！

⇒生徒たちの「今」の時間を大切にする。  
→その子たちが、素敵な先生になってくれるかもしれない  
→先生にならなくても、素晴らしいフィジー社会を作るために貢献できる人になるかもしれない  
(→先生たちの定年も近い...)

⇒先生たちへのアプローチも続けていく。





3. 他のフィジー隊員との連携  
<祭-JAPAN FESTIVAL>



Making 祭 sulu



製品を作るということ... きれいに ていねいに





<Mini JAPAN FESTIVAL  
in Lautoka Special>

- ・ファッションショー
- ・きらきら星 (英語、フィジー手話  
日本語、日本手話)
- ・盆踊り 炭坑節



3. 現職参加として  
日本の学校とのつながり

①通信「フィジーよりみんなへ」

3. 現職参加として  
日本の学校とのつながり

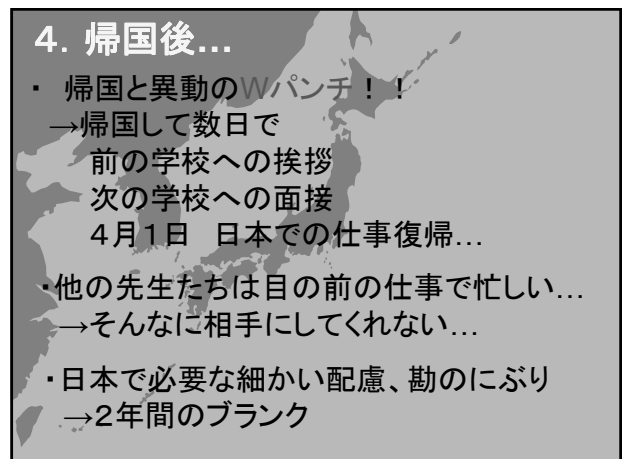
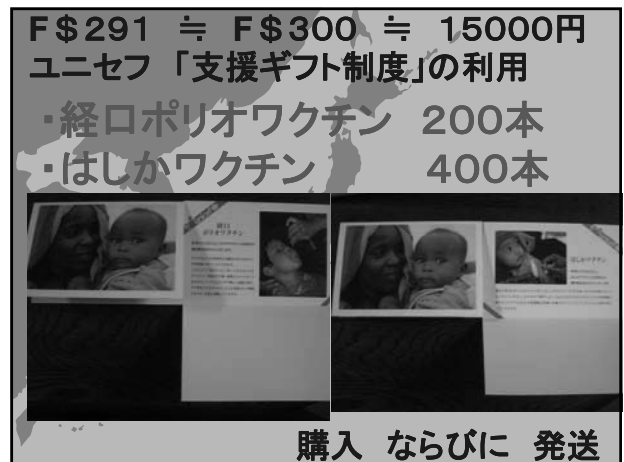
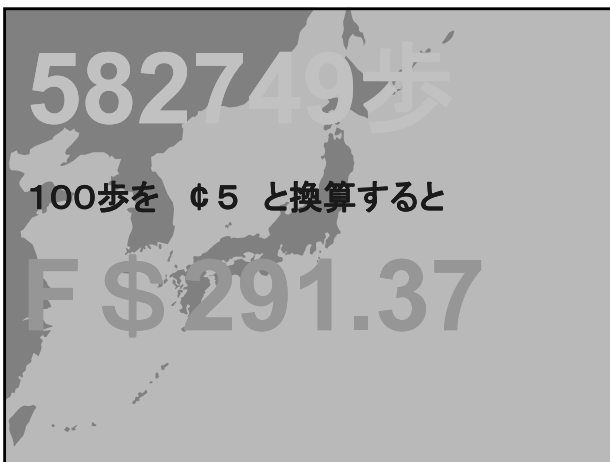
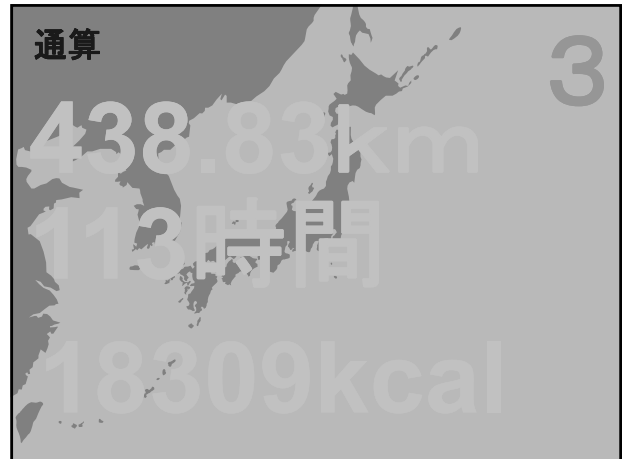
②クロスロード 6月号  
「日本の生徒への手紙」 掲載

③卒業生、保護者との普段からの連絡  
(メール、手紙、クリスマスカード、年賀状など)

3. 現職参加として  
日本の学校とのつながり

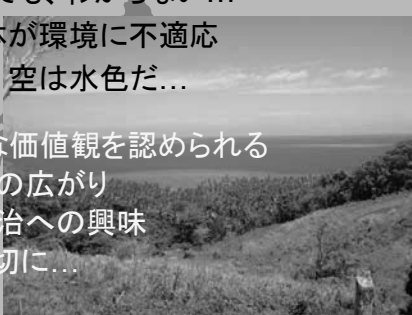
④ブログ「つれづれGTN☆ミ」  
フィジーの生活や活動の様子を紹介





- ・仕事量、拘束時間の長さ...  
→あっという間に1日13時間労働の復活
- ・生徒に話しても、わからない...
- ・寒い... 体が環境に不適應
- ・晴れてても、空は水色だ...

- いろいろな価値観を認められる
- 人間関係の広がり
- 世界や政治への興味
- 家族を大切に...




**<ビチレブ島1周500km歩く旅>**

**2日目 Naiborebere⇒Natovi**  
**35.23km 7時間40分**  
**45417歩 1544kcal**




**<ビチレブ島1周500km歩く旅>**

**3日目 Natovi⇒Nabukadra**  
**37.92km 8時間45分**  
**49887歩 1631kcal**



①自分のお裁縫箱を作る  
(アイスのコンテナ)

②自分のピンクッションを作る






### イベント概要

- ・日時: 2009年 8月29日(土)  
8:00~15:00(準備・片付け含む)
- ・場所: Suva スクナパーク
- ・来場者: 約 1500 人
- ・13ブース
- ・メインステージ:  
12プログラム
- ・企画スタッフ

A black and white photograph showing a group of people, likely event staff and participants, gathered around a table. One person is holding a sign that says "JICA FID ONI". The group appears to be engaged in a discussion or activity. A faint map of the Pacific region is visible in the background.

## 派遣経験を教育現場や地域にどういかすのか

生田佳澄

(平成 14 年度 1 次隊 小学校教諭 ホンジュラス)

みなさんこんにちは。発表を始めさせていただきたいと思います。今までの先生方が平成 20 年度の先生と言う事で体験もすごく色鮮やかで楽しい体験がたくさんだったと思うのですが、私は帰国してから 6 年目になるので大分色あせてしまったところもあると思うのですが、帰国後にどういう事をしているのかという事を中心に今回お伝えさせていただきたいと思います。

先生方黄色い資料を、お持ちでしょうか。この資料の関連したところとしては 160 ページ、(個人情報保護のため) 写真がぼやけてほとんど見えないこのページなのですが、そこから辺を参考にご覧いただきながら進めていきたいと思います。

私としては、何をしてきたかという事よりも、何をこれからして行くのかという事を常に日々考えながら実践しています。派遣させていただいたことは、とても貴重な経験になっていますので、それをどのように還元していくのか、学校の教員として、教育現場として、地域に生きるものとして、それぞれの関係の機関と連携しながらそれぞれを結び付けつなげて、それが子どもの今というものにどのように関わっていくのかというその視線でとらえています。私自身はホンジュラスで小学校教員としてこのような活動をしてきました。

また、協力隊活動の中では、算数のプロジェクトと言う事を 1 年目は主に、2 年目は首都の小学校なのですが、算数の研修に関わる一方、ほぼ半日間学校のすべての学年のすべてのいろんな教科に関わる場所も見させていただきました。現地の教育を知る大きなきっかけになりました。

当時、日本の大使館の方が提携して長岡市が舞台になった「米百俵」という劇がありまして、それをちょうど開催するというと時でした。たまたまホンジュラスに 200 人ぐらいいる日本人の中で、(私が) 琴が演奏できるということがあったのでそこで日本大使館(竹元大使からの依頼を受ける形で) Honduras 文化庁主催の教育の重要性を伝える事業に関わらせていただきました。国立演劇学校学校の教師や学生が演じる関係で、日本の所作を伝えたり、琴の演奏を Honduras 人学生に伝えたり等、そこ(国立演劇学校)との関連性を持ちながら活動を進めていきました。日本文化を知っているという事は大きな強みなんだという事、改めて日本文化を知るきっかけ、広めていかななくてはいけないなという事を知るきっかけにもなりました。

国内にたった二畳しかない仮設用の畳を使いながら間(はざま)組という企業が Honduras に入っていたのですが、そこが無償で劇「米百俵」の大舞台を作ってくれました。

その間組との関連の中で協力をいただき効果のあった例についてお話しします。

当時活動していた小学校（ラス・アメリカス校）でカウンターパートナーがいたのですが、そのパートナーが子どもたちに示すための大きな三角定規を集めの画用紙で作っていたんです。毎回使うごとにペラペラはがれてきてしまうし、何かいい方法ないかななんて、なんとかしたいんだっていつてきました。その気持ちを受ける形で、「それならば」ってことで、「日本では、例えばこんなものを使ってるよ。」と、いうものを示しました。その実物については、その時機を見計らいながら、サポートをしてくれる学校の方にも連絡を入れて、もう廃棄する処分するという学校で皆さんご存知のような「算数ぼっくす」のような教具も、とにかく全部送ってもらってました。それを元にこの間組の方とも話をし、現地にある材料で現地の学校で必要数という事で、13から15なんですけど、大きな三角定規と分度器もそこで制作してもらってそれを活用したという経緯がありました。

活動して行く中で心掛けたのは、こういういいものがあるからどうぞという事ではなくて、現地の方々がこういう事で困って、何かいいアイデアないかと求められていたときに、たくさんあるアイデアの中の一つとして私たち日本の小学校ではこんなようなやり方をしていただけどうかという、そのアイデアの出し合いってというような形でニーズにこたえるっていう形でやっておりました。

1年目は、首都から大分離れたところなんですけど、その国境近い所でやっていたときの例もお話しします。

現地の学校で立体の模型を紙で作っていたのですが正確に示すことができないという事がありました。現地のニーズにこたえる形で、例えばという事で、日本では木などを使った立体模型があるんだよ、例えばこういうようなものだよというような提示をしました。だったら近くの大工さんと一緒にこういうのだったら作れるよと、現地の教師がアイデアを出し、（プロメタムの授業で紹介しあう場を設けたり、現地の教師と一緒に自主講習を開き一般の先生方にも情報を受けていただいたりしました。そういう形で一回ぼっきりで終わるのではなく何回も何年も使えるものを（現地の方のアイデアと融合させながら）考えたというものもありました。

派遣中に行った交流活動という事でこのようなものを挙げましたが、日本の新聞に掲載させていただいた記事というものもとても大きな反響がありまして、全国単位での支援を得られたという事、財政機構だけではなくサポーターとの連携が取れたというのがとても大きな力になりました。

派遣に際して必要だったものというのはサポート体制、マンパワーではなく自分を通しての多くのサポーターがどれだけいるかという事が、どれだけ活動の幅を広げるのかというところに関わるものなのかなと感じました。

日本の現職教員でなければ得られないものというのを今のうちから用意しておく事も大事かなと。今の段階だとまだあいまいだと思いがちな日本の学校での日常風景とか、子ど



もの描く絵とかそのようなものについてはデータ化して持っておくと、向こうの先生たちが必要とする時にそういう質問に答えてあげられる何かになるかもしれないと思いました。

また日本人の描く絵とそれぞれの国の子どもたちが描いた絵は、それぞれの国の先生たちにとってとても新鮮なものに映るケースもあるらしいので、そういうものも大事にしつつ、また日本の子どもたちにとって直に交流する機会になるのでそういうものも一つの手段かなと思います。

帰国後に生きる派遣経験という事でまず人脈という事を挙げていきたいと思います。たくさんいらっしゃるのですが例えば育てる会の菊池先生は、自分が帰国後の活動の中で人脈的に困っているケースに対して糸口を与えてくれたり、その次の還元活動につながる（兵庫教員 OV 会 丸山先生）を紹介してもらったりとか、また筑波大の磯田先生のところに関しては算数教育という事で、帰国後の算数教育との関連性というところではとても大きな力を受ける事が出来ました。また佐藤先生、冊子にあるように自分達が活動した事を振り返りや自分の活動以外でも、他の先生方のアプローチの仕方や専門家の方を知る機会になったなと思います。

あとはここで書いてあるように 0 から作り出す能力というのが派遣で得たものではないかと思っています。例えば 10 番目にあるような支援の体制作りというのも派遣から得た大きなものだと思うのですが、例えば外国人派遣教員というのがいるところであれば、外国籍の児童の学習指導なり適応指導がうまくいくだろうと考えがちなんですけど、なかなか予算的なものとか設備面の事とかいろいろ含めるとそういう体制ができる学校ばかりではないと思います。もしそういう学校があったとしても、予算の関係上打ち切られるケースもあると思うんですが、それならばないならないのやり方、または理解者を増やす方法などその中でやり方があるだろうと、その中で時期を見ていく事、時期を見ていく中でその学校の体制を、ちょっと見方を変えることでまた作り上げていくことができるんじゃないかと。

そういうものもここ 6 年たってようやくというところもあるんですけど反映することができるようになってきました。例えば朝読書の時間を使いながら、その時間外国籍の子で日本語の指導が必要だという子たちの朝の勉強の時間と言うのを同じ階の近くのところで開催するなど。もちろん、学校長はじめ、関連の教師と話し合い生まれた本校独自の体制ですが、そういう事も方法の一つかと感じています。

教育現場として 1 年目でした事と 2~4 年目にした事、それぞれ可能性もあれば、限界もあります。1 年目でできた事はほんのわずかでした。その中でも私はたまたま派遣前にいた学校に戻る事が出来たので、そこでのつながりという事もすごくラッキーだったと思っています。

また市内でも国際理解の担当というのがおありまして、また外国籍の指導もやってきた経緯があるので、学校内だけでなく市という単位での還元活動の機会を得られるケース（現

職教員派遣 帰国報告講演会等) もありました。

また 1 年目で米百俵の関連で、長岡市にも行く機会がありました。ちょうど中越地震があった直後だったのでチャリティーコンサートもしました。(長岡市役所、市民課と連携) 一番被災が激しかった学校の、総合学習の一環として、ホンジュラス人が文科省の関係で来日していたので、その人たちやアフリカで活動していたメンバーの旦那さんがアフリカの方だったので、その方たちの踊りとかを合わせた形で展開しました。また静岡県沼津市で邦楽祭がありました。そこでも米百俵の主演ホンジュラス人 (Jose Luis Recinos 氏) と合同でオペレッタ風の演奏をしました。

やろうと思えばいろんなところに機会はあると思うので、それを自分が選択するか、過ぎてしまうかという事もあるのかもしれないので、いろんなところにアンテナを張りながら機会を見つけながら活動して行くことが必要なのかなと実感しました。2~4 年目についてはこのような形です。

学校の中でできる事というのは、6 年目にして感じるのは、いろんなところいろんな教育活動全般に対して、多学年に対して還元する事が可能だなと感じています。(写真提示) これは 2~4 年目なんですけど、6 年目の今になって、学校のホームページも活用しながら発信する事も出来るなと感じています。

これは帰国後 3 年目ぐらいの話なのですが、外国籍児童に対して、(当時勤務校は、ペルーの子どもたちが多い学校でした。) 4 月、実施した授業の様子です。

ペルーで外国人児童として過ごした日本人青年を招き、外国人児童に向けたペルーを学ぶ授業を実施しました。自分がペルーで外国籍として過ごした学校生活と、こちらに帰ってきてのふるさと学習も含めてのメッセージを伝えていました。写真右側の方の真ん中にいる女性の先生が当時の学校長でした。

在籍クラスで子どもに紹介する事も担任の先生方との連携の中で可能だし、また在籍クラスの子が国際クラスに来て学ぶことも教科によっては可能な事です。

また静岡大学の方で学生ボランティアの活動があるのですが、矢崎先生という方が中心になってやっているんですけど、そことの関連も持たせてという事も可能でした。

色々なところでの連携や人脈をつなげていくと、子ども達への教育効果もさらに上げられるかなと感じました。

帰国後 6~7 年目を見ていくと、だいぶ還元活動が増えていると思います。

特別支援教育というのは一見関係ないように感じるかもしれないんですけど、外国籍の人の特別支援教育も入っている現状があったり、特別支援教育でのアプローチの仕方、そ

れとの関連づけることもできたり、また家庭科、言語、読解の授業というところもとても大きいとお思います。

5 番目に書かせていただいたのは算数の教材開発ということです。APEBEMO と言うのは、ペルー人でいろんな医者が文科省の奨学金を受ける形で日本の研究機関で研修を受けた人たちが作っている OB 会なのですが、その方たちと一緒にペルーに行った折に授業参観したり、文化紹介したり、そういう活動をしたなかでペルーの公立の小学校の教員たちと「TANOSHIKAI」という算数のプロジェクトをたちあげました。一昨年度までは、研究生として一人、昨年度、JICA の事業でたまたま「南米算数」で TANOSHIKAI のペルーメンバーの一人もお目見えしたのですが、そういうものを作り、算数を中心にした活動をしている状況もあります。

翻訳物について、先生方もこれから色々な言語をやられると思いますが帰った時にどういう風にといった時に、例えば私たちの学校のように翻訳文書を作って、その学校だけで使うのではなくてデータを市の教育委員会の管轄の中に入れて、必要な学校が取り出せる状況を作るといった事もできると思います。

地域の活動としては、外国人の活動支援が必要です。それで学習支援を今日もやっています。外国籍の学校の図書もペルーに行った折に買ってきて図書館に寄贈して、寄贈するだけではなくてワークショップを開いています。

地域の祭りに参加する中で、地域の人たちもいろんな人たちがいる、いろんな文化があるという理解から子の理解につながり親の理解につながるという経緯がありました。地域防災課というところからも話があって、地震を知ろうということで翻訳物の作成にかかわっていたり FM のラジオの教育番組をやったりしました。

医療関係について、医療スタッフが言葉の関係でなかなかいない状況があつてとても大変だというのがありました。

活動の中で必要とするものについては例えばペルーの子ども達の教科書どうなっているのかなと言う事で、銀行なんですけど企業経営研究所というのがあって、そこで海外研修の募集があったので、そこでこんな事をやってみたいという事をいってペルーの教育省の方にもつないでもらいながら会議を行って始め、1冊だけもらえてたんですけど教育面の方も理解を示してくれて全国で全教科もらってきました。それをもとに問題集を作って、2回目に行った時に開いたりしていました。日本の教科書を使った翻訳を作ってみたり、自作の問題集を作ったり、それを貼ったりするなどの作業でお母さん達が手伝ってくれました。

ペルーに行った時に自発的にした活動や、依頼を受けてした活動も、JICA でやってきたからこそできる事なのだろうと、感じています。

例えばセミナーの開催にしても、公開授業にしても、ワークショップにしてもやり方については派遣の時に学んできた方法が一番のベースになってます。また、食べてきたものも学校の家庭科の授業で使えたり、防災教育も向こう（ペルー）でもやる事が出来たり、中国との交流も、今年は難しい面があったのですが、市役所市民協働課や、国際交流協会（Nice：岳陽部会）との連携を受けて実施できた例などもありました。

今年だからこそできた事は、小中連携事業です。（写真提示）この子たちは中学生です。中に小学生がいます。小中で一緒に国際集会を開催しました。

ただ見るだけではなくて自分達ができることは何というところから始まりました。

例えば日本の文化を紹介したいんだということで、しゃぎりをやる子たちもいたり、剣道をやったり、ヒップホップをやったり、ラテンダンスをやったりしました。

日本人とラテン子たちと一緒におどって、最後に挨拶をラテン式にしていました。ほっぺのあたりにチュッとやるのですけど、その中で、子どもたちは、いろんな国を知るきっかけになりました。南米の生活に触れてそれぞれの違いに意識しました。

教科指導の中では、家庭科では、いろんな還元活動との関連があると感じました。

それらの事を含めて、国際理解教育では、人理解を通して、「優しい。」「仲良しになった。」「インドネシアを近くに感じるようになった。」と、子どもたちの意識の変化が生まれたものもあります。

学校のホームページもありますが、還元活動を通して子ども達のかげがえのない笑顔を大切にしていきたいと感じています。

「今沢小学校」と検索していただければ、そこに本校のホームページがあります。

先生方の学校にホームページもあると思うんですが、その中に「国際」というフォルダを作っておいて、国際理解教育として各学校でこういう事を行っているという発信というのも、派遣経験のある先生方だからこそできる事じゃないかと思うので、それらの活動も必要だと感じています。

## 派遣経験を教育現場や地域に どう生かしているのか (事例発表)

平成22年12月26日(日) JICA研究所にて  
派遣現職教員帰国報告会  
～国際協力と帰国後の社会貢献～

静岡県沼津市立今沢小学校教諭 生田佳澄  
(IKUTA Kasumi)

14-1 Honduras 小学校教諭

## Honduras 小学校教員としての活動

- ▶ 1 算数プロジェクト: PROMETAM
  - ▶ ① 現職の小学校教員対象にした
  - ▶ 教育大学(オコテペケ県)での講習と授業観察
  - ▶ 小学校2年生の指導書と問題集の活用方法
- ▶ 2 首都の小学校LAS AMERICAS校の算数研修
  - ▶ その他 (体育館・保健室・特別支援・PC室)
- ▶ その他: 日本大使館と連携して劇「米百俵」参加
  - ▶ (竹元大使 文化庁 Honduras大統領 長岡市長
  - ▶ 国立演劇学校 間組)
  - ▶ 日本語講師(教育大学)(日本語補習校)
  - ▶ 教育大学 特別支援学校における数概念形成に関する講義
  - ▶ 日本大使公邸での晩餐会での箏曲演奏
  - ▶ 私大にて 箏曲と詩人コロボ コンサート
  - ▶ Honduras TV ラジオ出演

## 派遣中に日本間との交流活動

- ▶ 1 手紙・ML 新聞記事掲載(朝日新聞等)
- ▶ 2 記事を読んだ方からの協力が得られた
- ▶ (全国単位で算数BOXの応援が得られた)
- ▶ 3 在籍校のみならず、サポート校との連携

## 派遣に際して必要だったもの

- ▶ 1 サポート体制 (必要に応じて得られる体制)
- ▶ 2 日本でなければ得られないこと
- ▶ (コンパス・分度器・三角定規・琴のつめ・着物等)
- ▶ 3 日本の現職教員でなければ得られないもの
- ▶ (日本の学校の日常風景・日本の児童の絵
- ▶ 教科書 教材教具 備品の大きさや形
- ▶ 使用方法のわかるテープ)

## 帰国後に生きる派遣経験とは？

- ▶ ① 人脈と語学力  
(育てる会菊池氏・筑波大磯田先生・都市大佐藤先生)
- ▶ ② 現地の生活・教育現場への理解
- ▶ ③ 外国人児童・生徒、特別支援教育に対する理解
- ▶ ④ 開発教育、多文化協働教育への教材活用力
- ▶ ⑤ 関係諸機関との連携
- ▶ ⑥ 安全危機管理能力
- ▶ ⑦ 0から創り出す力
- ▶ ⑧ ハブニングへの対応力
- ▶ ⑨ マイノリティーの経験を生かした生徒指導
- ▶ ⑩ 支援の体制作り  
(朝の外国人児童の学習:本年度実施)

## 教育現場

- ▶ 帰国後1年目
  - ▶ ①総合学習で国際理解を関連づけた。
  - ▶ ②国際理解担当として市内の担当者対象の報告会
- ▶ 帰国後2～4年目
  - ▶ ①外国人加配教員として外国人児童適応・学習指導
  - ▶ ②国際理解担当として市内の担当者と外国人交流会
- ▶ 算数・国語・社会・家庭科・音楽・体育・外国語・読解
- ▶ 生活科・クラブ・道徳・総合・集会・昼の放送・掲示

## ペルーで育った日本人の青年を招き

- ▶ ペルーについての勉強



## 在籍クラスで、国紹介(外国人児童)

- ▶ 国際教室と
- ▶ 在籍クラス
- ▶ との連携



## 教育現場

- ▶ 帰国後5年目
  - ▶ ①国際教室経営
  - ▶ ②国際理解担当 在籍学級と国際教室との交流
- ▶ 帰国後6～7年目
  - ▶ ①小中連携事業 国際交流集会を立案・計算・実施
  - ▶ ②市内の国際理解担当者と外国人交流会
  - ▶ ③家庭科・言語(読解)の授業で多文化協働教育
  - ▶ ④特別支援教育
  - ▶ ⑤算数教材開発(APEBEMO ペルー公立小教諭とTANOSHIKAI)発足、活動
  - ▶ ⑥情報主任の立場から、学校HPIによる情報発信

## 翻訳物作成

- ▶ 青年海外協力隊静岡県OB会、沼津市市民協働課、保護者等の協力を得ながら学校生活に必要なプリントを翻訳(データ:市教育委員会管内での共有化)



## 地域

- ▶ 1. 外国人児童学習支援団体「Latinはら」発足
  - ▶ ① 週末学習支援
  - ▶ ② 外国語の図書の寄贈と読み聞かせ会の実施
  - ▶ ③ 原地区センターの文化祭等地域の祭りに参加
  - ▶ ④ 静岡県地域防災課に協力し、「地震を知ろう」講座では、スペイン語との2カ国語で資料作成
  - ▶ ⑤FMぬまづ:スペイン語との2カ国語による教育番組
  - ▶ 救急医療の2カ国語放送
  - ▶ ⑥夜間救急医療センターのスタッフとの会議
  - ▶ ⑦医療通訳・翻訳ボランティア

## 関連諸機関との連携 ペルー大使館



- ▶ ① ペルー日本間を行き来する児童が多い。
- ▶ ② ペルーの公立小学校の教科書を使った学習支援
- ▶ ③ ペルー大使館からペルー教育省へ連絡・会合アポ
- ▶ ④ 企業経営研究所による海外研修 帰国後の報告
- ▶ ⑤ 2008年3月ペルー大統領訪日の際、資料提出依頼

## 関連諸機関との連携

- ▶ 算数技官との会合 5回
- ① 寄贈された教科書  
準拠 自作問題集  
の提供
- ② 教材・教具について  
教科書のどの場面で  
どのように活用するか
- ③ 学校訪問・公開授業  
セミナーの打合せ

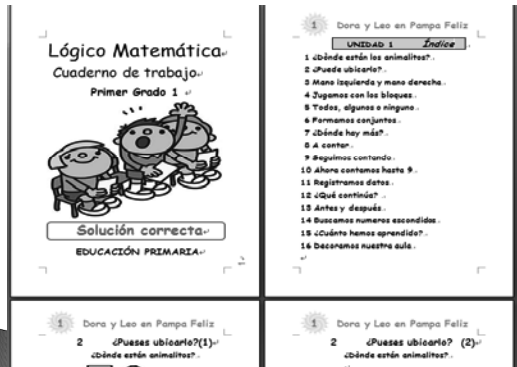
## ペルー教育省



## 翻訳教科書を使った算数の授業



## ペルー算数教科書準拠 自作問題集



## 外国人保護者の協力

- ▶ 教科書の翻訳本作り



## ペルーの附属小学校での公開授業

- ▶ 分数トランプ  
田中博史先生作  
(文溪堂)を使い  
分数の授業を  
4年と6年で実施。

教員向けセミナー  
依頼を受け  
同日開催



## TANOSHIKAI発足 教材開発と授業研究

- ▶ 2007年 APEBEMOのメンバーとペルーに帰国した  
保護者と一緒に発足。
- ▶ 2007年 算数教材開発開始 授業研究開始
- ▶ 2008年 日本の算数の教科書の翻訳
- ▶ 2009年 ペルーTANOSHIKAIメンバーが多く勤務  
するEDUCADORES校にて合同授業研究(公開授業)
- ▶ 教育省にて算数会議に招かれ、出席
- ▶ 2009年 JICA南米算数にTANOSHIKAIメンバーも  
研修のため来日し、自主研修を南米算数参加者対象  
に共同開催 ペルー公立小教科書準拠問題集作成

## ペルー 軽食・昼食



## ペルー小中学校にて防災教育

静岡県東部地域防災課と連携し資料提供を受け実施  
(ペルー 地震直後)



## 本年度の実践:中国 友好都市 岳陽市 研修生による中国文化紹介

- ▶ 沼津市市民協働課との連携事業
- ▶ Nice(沼津市国際交流協会 岳陽部会との連携)
- ▶ 家庭科の授業で交流のあった陳先生と、林先生通訳
- ▶ ①朝会で全校児童に紹介(2名の先生のあいさつ・児童による中国語・英語・日本語によるあいさつ)
- ▶ ALTに英語のチェックをいれてもらう姿もあった。
- ▶ ②中国の先生の水書デモ(ニハオ)
- ▶ ③2年5年のクラスで授業 英語音楽等の授業公開
- ▶ ④給食 昼の放送(多国語で) 昼休み一緒に遊ぶ会

## 小中連携

今年12月9日(木)  
国際交流集会実施



- ①スタッフ・出演者公募
- ②看板・プログラム  
6年生全員の協力
- ③ラオスからの転入生
- ④中学の教師の協力
- ⑤相互文化交流

## 小中連携 交流集会

- ▶ ① 小中で司会
- ▶ ② 地域に伝わるしゃぎりで入退場  
(子ども会の協力)
- ▶ ③ 剣道の演舞
- ▶ ④ 日本6年生 HIP★HOP
- ▶ ⑤ ペルー・コロンビア(中学生) ラテンダンス
- ▶ ⑥ ④と⑤のメンバーによる即興ダンスコラボ
- ▶ ⑦ ラテンのあいさつ
- ▶ ⑧ ラオスのおどり・あいさつ



## 小中連携 交流集会 しゃぎり

日本文化紹介

三本松  
今沢

子ども会の  
協力

(6年)





小中連携 交流集会 **剣道の演武**

日本文化紹介

小学校  
2、3、4、6年

「剣道を通して  
師を敬い、  
相手を思う心  
を学んでいます。」



小中連携 交流集会 **HIP★HOP**

日 本  
小学生6年

英語でも司会



小中連携 交流集会 **ラテンダンス**

ペルー  
コロンビア  
中学生

プーも参加

司会：  
ブラジル 中学生  
ペルー・日本 小学生



小中連携 交流集会  
**ラテンメンバーと夢のコラボ実現！**

日 本小学生6年  
ラテン中学生3年

ラテンメンバーと  
即興コラボ

英語でも司会

あいさつの身振り  
実演



小中連携 交流集会 **ラオスのおどり**

▶ ラオス  
小中学生

民族衣装  
「シン」  
着用



小中連携 交流集会 **校長先生の話**

- ▶ いろいろな
- ▶ 国の文化を
- ▶ 知る機会に
- ▶ しましょう。



## 新聞記事より

- ▶ 子供たちは、南米の習慣や気質の一端にふれ、日常の中に存在するお国柄の違いを認識したようだ。
- ▶ (沼津朝日新聞 12月16日 記事より)

## 家庭科 衣服のはたらき

- ▶ Mくんの国の民族衣装から気づいたこと (児童の感想)
  - ・暑さ/寒さ/日差しから身を守る。
  - ・鮮やかな色は、着る楽しみや誇りにもつながる。



## 家庭科 1食分の食事作り



- ▶ 目玉焼きができる子どもたちが、地域在住のインドネシアのアイニー先生を招き、本場物のナシゴレンを作って食べた。給食に出るナシゴレンとは、辛さが違うなど、気づいた。
- ▶ ★沼津産のたまご、野菜、駿河湾でとれた桜エビを使ってインドネシアの香辛料を使うと、食の国際交流が簡単にできた。 (児童の感想)



★アイニー先生たちと料理を通して仲良くなれたら、遠いインドネシアが近くなった。  
写真:児童撮影 (児童の感想)

## 家庭科 食の国際交流

がんばる学校応援事業



## パパは、じゃがいも！？

- ▶ 沼津産のじゃがいもで家庭科調理実習
- ▶ ペルーのRくんのママに教えてもらった  
パパ・ア・ラ・ワンカイ
- ▶ インドネシアのクエ・ルンプールというお菓子
- ▶ ALTの先生オーストラリアのニョッキとポテトサラダ
- ▶ 児童の感想
  - ・インドネシアの唐辛子は、はんぱじゃない辛さだ！
  - ・給食のナシゴレンと、本当のナシゴレンじゃ、味も色も全然違うぞ！
  - ・食の国際交流ってそのまま、家族や知り合いに伝えられる。

## 国理解は、人理解

- ▶ 児童感想より
  - ・やさしいアイニー先生となかよしになったら、遠いインドネシアが、近くなったみたいに思ったよ。
  - ・中国って漁船とか、いろいろ悪いイメージがいっぱいだったけど、陳先生や、しょうよう先生たちと一緒にいるうちに、中国ってすごい国なんだな、いつか、いつかみたいになって思うようになった。
  - ・漢字が苦手だったけど、あのすごい字を見て、漢字に興味があった。

## 学校HPによる発信

- ▶ [http://swa.numazu-szo.ed.jp/weblog/index.php?id=numazu022&type=2&category\\_id=1691](http://swa.numazu-szo.ed.jp/weblog/index.php?id=numazu022&type=2&category_id=1691)

## 国際協力と帰国後の社会貢献

- ▶ ① 派遣前に帰国後の活動も視野に取り入れたら・・・
- ▶ ② 帰国後の社会貢献は、長い目で、みんなで・・・
- ▶ ③ 学校現場と地域と国をつなぐ・・・

- ▶ かけがえのない  
子どもたちの笑顔



## 国立公園と市民をつないだ 2 年間

建元喜寿

(平成 20 年度 1 次隊 環境教育 インドネシア)

---

お配りした資料と変わっていますが、基本的な内容ほとんどは変わっていませんので、ご了承ください。すいませんが、座って発表させていただきます。失礼します。

まず本校の、自分の学校の場所だけちょっと説明させてください。

筑波大の附属なのですが、東京教育大があった時からの附属として、他の国際会議の時に使ったものなので。東京と埼玉の位置がこのへんで、だいたい市ヶ谷にくるまで一時間くらいです。つくばとも 1 時間くらい離れていますが、付属です。それで、創立は 1946 年に、地域の農業高校としてできたのですが、平成 6 年から日本で最初の総合学科高校としてたちあがりました。総合学科というのはご存じない方もいらっしゃるかもしれませんが、生徒が自分で学びたい科目を選択して、自分の時間割を作る高校です。だいたいこれ学校の、このへんに官舎、教員の住宅があるのですが、その 4 階からとった写真がこれで、大体こういう感じです。うちにダチョウがいて、ふじこという名前なんですけども、生徒が卒業研究で自分で飼いたいといって、勝手に飼い始めたという。最初はいやだったんですけど、学校の先生たちも。地域のマスコットになったので、今は使ってます。いつも。

私はですねもともと岡山県の教員を 2 年やってから異動したのですが、協力隊に行こうと思ったのはですね、10 年くらい教員をやっていたのですが、学生時代にワーキングホリデーでカナダに行ったりしてですね、ずっと教員やってても、もう一回しっかりと長期で海外の経験をつんでから国際教育に携わりたいなという思いが強かったので、管理職のほうに相談して、行ってもいいということになりました。これ二本松の訓練所の様子ですけども、二本松のちょうどいい季節に訓練に入れますので、これから行かれる先生方はとてもいい時期だと思います。桜が満開でとてもきれいな時期です。

訓練中は語学の学習が朝 8 時半くらいから長い時は 5 時くらいまでやっていますので、時間割のイメージでいくと、1 限目から 6 限目までインドネシア語なので、ずっとイ イ イ イ と時間割は全部「イ」って書いてある、毎日そんな感じですけども、自分で授業の準備をしなくていいっていうことに 4 年ぶりに気がついて、毎日聞いてれば、聞いてればいいっていうか積極的に聞いてますけど、聞いてればいいので、とても充実した訓練ができたと思います。

私はインドネシアに行く前に、正直、インドネシアがどこかよくわかってなくて、バリ

島、ここバリ島なんですけども、バリ島がインドネシアだったということも知らないくらいまったく知りませんでした。それで、行くことになったので調べてみたら、島が 1 万 7 千もあって、人口が世界第 4 位で、30 年ほどしたら日本の GDP も越してしまうくらい経済発展もしてるっていう国だっという事がわかりました。

インドネシア語を勉強してみて面白かったのは、英語だと複数形が S を足したものですけど、たとえばイカ、イカってチュミっていうんです。2 匹以上だったらチュミチュミっていいます。で、無料はチュマチュマ、だいたい、英語でアバウトってというのがキラキラ、オスとか男はラキラキ。なので、こんな日本語はないんですけど、「無料のイカはだいたいオスです。」インドネシア語だと、「チュミチュミチュマチュマキラキララキラキ」っていうようなものなので、生徒もよくここにチュミチュミがいるとか、よく弁当箱の中みて、イカとかみると、地道に今、うちの学校にインドネシア語が広がっているので、英語が苦手でも、インドネシア語は好きだっという子がちょっとずつ増えてます。あと、インドネシアの特徴で、「ティダアパアパ」の精神という、英語だとノープロブレムとか大丈夫とか、問題ないっていう意味なんですけど、インドネシアだと、自分が悪いとか失敗して、まず日本人の感覚でいうと「ごめんなさい」っていうんですけど、インドネシアだと失敗した人が「まあいいよね」っていう。それはこっちのセリフだろう、みたいなことが満載の国なんですけど、そういう雰囲気は自分にもあって、2 年間楽しく過ごすことができました。

配属先は、学校ではなくて首都から 2 時間くらいの国立公園でした。2 時間から 8 時間と書いてあるのは渋滞がひどくてですね、首都圏から人がよく遊びに来る高原の避暑地みたいなところで、軽井沢みたいなところをイメージしてもらえればいいんですけど、ひどい時は 8 時間かかってバスにゆられて帰ったので、まあそういう場所です。ジャカルタがここで、ほんとに近くです。このあたりで活動していました。ジャワ島の西部で活動していました。それです、配属されてわかったんですが、行く前に家あるから大丈夫って言われて、行ってみたんですけど、まだ改装中で、水がなくて、その日まず困って、行くときは必ず JICA のボランティア調整員という人が一緒に行ってくれるので心配はないんですけど、いきなり行けとは言われないので、そのへんは大丈夫なんですけど、行ってみたら家がまだ住めないってことでお客さん用の客間にとりあえず住んどいてって言われて、と思ったら今日はあっちにとかって段ボール 4 つくらい持っていたんですけど、段ボールを毎日こうやって移動して、落ち着かない日々が最初は続きました。

本来の要請はですね、地域の学校に出前授業に行ってくれ、となんか環境に関する出前授業に行ってくれっていう要請だったんですけども、その出前授業はどうも年に数回しかやってないということがわかって、さらに僕が行った時は、もう終わっていて、今年はない、みたいな状況で、あと国立公園の本部と支部っていうのがあるんですけども、私は

本部付きだったんですけれども、その環境教育がどうも支部でやってるみたいな話しを行ってから知って、最初はとにかく私は何をしに学校を 2 年、日本の学校を休んでまでインドネシアに行ったんだと思いました。

これが自宅です。最終的には公務員の、国立公園の職員は公務員ですので、その住宅をひとつ借りて住みました。

中は、トイレがこんな感じで、インドネシアは、シャワーは浴びなくて、水がためてあって、これでパシャパシャかけるだけです。これには日本人だとつかりたいんですけど、水をためるところで浴びるだけです。ただ私がいたところは 1300m で 10 度位まで下がるので、毎日水だけだと行のようになるので、汗が出てきたりするので、僕はこっちにためて、お湯をたしてぬるま湯にして入ってました。トイレは基本的に、インドネシアではイスラム教で、左手は不浄の手としてこっちで洗ったりするので、だめなんですけど、僕右利きなので、右手で洗ってたので、僕の不浄の手は右手だったんですけど、インドネシアの人はわからないので、インドネシアの人には右手で渡してました。トイレの後でも。余計なことを言いました。

移動はアンコタっていうのに乗って、これ 20 円か 30 円で、30 分くらい乗れるので、これで移動しました。こういうところに住んで、基本的には一人で住んでいたんですけど、地域の人があたまに誘ってくれて、基本的に手づかみで食べますので、手でとって一緒に食べる。

暮らしていてわかったんですけど、最初は何のためにインドネシア行ったのかと思ったんですけど、日本でも例えば校長先生が変わったりしたら学校の仕事が変わったりだとかいうことはよく起こりうることで、言葉も違うインドネシアではなおさらはっきりしたニーズが最初から決まってあるわけではないということに気づいて、言葉ができるのに合わせて、現地のニーズチェックを行いながら、進めていきました。

最終的にどんな仕事をしたかっていうと、地域や学校での環境教育を何とかやって、後国立公園のプロモーションをエコツーリズムや CSR 活動との連携という形でやりました。インドネシアは特にゴミがひどいんですけども、インドネシアだけでなくいろんな地域であると思いますが、よく考えると日本でも、私が小さい時は、母親にたとえば「このビンどこに捨てたらいい？」って聞いたら、「川に投げとけ」とかって言われたこともあってですね、昔は多分プラスチックの文化もなくてですね、草でできたものとか、木でできたものって投げとけば土にかえったと思うんですけど、そこに急速にプラスチック文化が入ってしまって、その変化に人間の文化の違いっていうか、自分たちの生活様式の違いが反映されなくて、プラスチックが入ってきちゃったから、しょうがないかなっていう部分は感じていました。

最初は仕事がなく困ったんですけど、行って半年くらいして、国立公園の29周年記念というなんか半端な、なんで30年じゃないんだろう、と思うんですけど、そこでまあ、ヨシと、ヨシカズって名前なのでヨシって呼ばれていたの、「ヨシ、なんかやってくれ」といわれて、じゃあ3Rっていうゴミのリユース・リサイクル、リデュースっていうゴミの展示をやりました。この時はJICAの専門家として日本の環境省からインドネシアの関係省に派遣されている方と共同してやりました。協力隊は基本的に物を買ったりする予算は、隊員支援経費ということで案件ごとにJICA事務所の方にお問い合わせするんですけど、それを必要な場所はすばいと思うんですけど、私の場合、たとえば私が支援経費を要請して、物を買っちゃうと、「ヨシがいつでも買ってくれる」みたいに思われるのが嫌だったので、なるべく支援経費は使わずにやりました。これが地域での活動で、国立公園の職員の制服が与えられるので、職員と同じ格好をして、地域の学校に行き、分別したらゴミは資源になるよ、というような簡単な授業をしていきました。自分だけでやるとどうしても言葉が少ないので、帽子をかぶっている彼も国立公園の若手職員なんですけど、彼と一緒に僕がインドネシア語でしゃべっているのにまたそのあとでインドネシア語で言い直してくれるという。大丈夫かな、と思いながら、そういうコンビネーションでやりました。

よく国立公園には、山歩きだけで来たりするので、そういうところに合わせて、山歩きとゴミの問題をやったりということを国立公園のスタッフと考えてやりました。それで、色々仕事をしていると、色々な方から声がかかってくるようになって、JICAのさっきも言った環境省の専門家の方からの依頼で、ゴミのワークショップを首都のジャカルタでやりたいからぜひ手伝ってくれないかといわれたので、インドネシアで散らばっている協力隊員を集めて、環境問題っていうのは環境教育の職種じゃないとできないって思われがちなんですけど、たとえば青少年活動だとか、手法は同じで、ちょっと目的が違うだけで、色々協力できる場所があると思ったので私が行ってから、環境教育分科会っていうのを協力隊員で作って、その分科会で参加したものです。

公園のプロモーションの方は、最初、海外に行ったんだから日本人と関わるのはやめようと思っていて、わざと日本人社会と関わらないようにしていたんですけど、途中冷静に考えたら、自分が日本人であるっていうことを活かした方がいいなと思いました。

それから、ジャカルタに1万人くらい日本人の方がいらして、非常に日系社会が厚いということと、環境、エコツーリズムとかにお金を払ってまで参加するっていうインドネシアの人がそんなに多くないので、国立公園のプロモーションのターゲットとしては、首都圏の日本人にした方がいいかなってことで、日系社会とのつながりを大切にしました。それから企業でもCSRの場所を探しているんですけど、なかなか現場とコンタクトがとりにくいってことで、協力隊員が2年間現地に張り付いていますので、企業CSRとの連携と

いうこともやりました。

これがひとつ、シャープインドネシアが主催してやった植樹なんですけど、ここにいらっしゃる方がシャープインドネシアの社長さんなんですけど、たまたま元協力隊員の方で、1回目の植樹の時は、こういう人がいるって知らずにとにかく国立公園の他の職員が「ヨシ、ちょっと日本人が来るらしいから山へ行ってきて」って言われて、行ったんですよ。行ってみたら、そのサングラスをした社長さんが「お前協力隊員か」みたいなことを言われて、「あ、そうです」って言って、それから仲良くなって、「うち何回か植樹をするからここでやるよ」って言って、僕がいる間にもう1回、2回くらいしてくださいました。植樹の様子です。

あと現地、ジャカルタに日本人向けのフリーペーパーがあるので、その編集長さんと連携して、いろんなエコツーリズムの企画とかもやったり、自分も色んな国立公園を見たかったので休みを利用して、インドネシアのいろんな国立公園に行って、その様子をフリーペーパーに寄稿したりってこともしました。

それから、これが自分でいうのも何なんですけど、画期的な商品でして、働いているところの国立公園のマークです。前はマーク書いてなかったんですけど、たまたまうちの国立公園を水源とするミネラルウォーターを作っている会社が日系、日本トリムという会社とあちらのシナルマテスっている大きな会社の合弁会社で、そういうお水があるっていうことを知って、これは何かできないかなと考えました。

このころは、まだいつも仕事がなく、最初はほんとうに。言葉も上達しないので、ジャカルタにある日本食のスーパーをさみしく一人でぶらぶらしていました。で、その頃、商品棚に偶然自分の仕事場の国立公園を水源とするクリステルというお水あることを知りまして、これは何かできると思って、アドレスがあったので、メールをしてみて、こんなことを一緒に、環境の保護活動とか協力してもらえませんか、って企画書を持っていったら、なんと社長さんが、日本人で、私と同年で、私今37ですけど、たまたま岡山出身だったということがあって、偶然がおこりまして、インドネシア初の国立公園のマーク入り商品を開発して、今インドネシアの全土で生まれています。国立公園は、自分の国立公園のプロモーションにもなりますし、企業も企業イメージのアップにつながりますし、色んな面で win-win の関係を作れるような商品になったと思います。よくインドネシアの国立公園でも支援慣れしているところがあって「なんかないかな」って言われるんですけど、そういうものよりも企業もいい面もあるし国立公園にも利益があるっていうようなそういう関係を作りたかったので、ひとつのいい形になったかなとは思っています。

具体的には、最初行った、私が当初出前授業をやれと言われていて、年に1回か2回しかなかった出前授業、を予算の関係でできなかったのもあったので、企業からの支援で毎月出前授業に行けるようになったというのもありました。



それから年に1回か2回、一緒に地域の子ども達を集めて、ゴミ拾いをするようなことも継続的にやっています。これがあちらの校長先生で、企業の方で国立公園の職員という形でこういう連携をあちらで作ることができました。

出前授業ということでお水の大切さとかいうことも企業の方に直接地域の子ども達へ授業してもらいました。私はあまり授業でしゃべりませんでした。というのは、インドネシア語が最後までたいして上達しなかっていうのもあるんですが、インドネシア人の手によって、インドネシアの人に伝えてもらうっていう形がいいかなと思ったので、そうしました。彼が私と一緒によく仕事をしてくれたアデさんという人なんですけど、彼はJICAのエコツーリズムの研修で沖縄に3カ月くらい来てくれて、とても日本びいきの彼で、とても陽気で面白くて勤勉な彼で、先月くらいに彼が写真を送ってきてくれて、まだあの活動毎月やっていますよ、と報告してくれました。

こういう形で、最初は私と日本人の社長さんとの考えで始まった企画が、今ではちゃんと根付いて、インドネシア人としてやっているの、これはちょっと今うれしい報告をもらいました。そのあとも色々やりました。

配属先の仕事以外にも、国際協力イニシアティブ事業、文部科学省のお手伝いもしました。これは筑波大と向こうの学校が協定校だったので、その関係で、インドネシアでも汎用性の高い環境教育教材を開発するというので、当初3年の計画が1年になってしまったんですけど、筑波大から何回か先生方が来られたので、そのお手伝いをしました。こういう形で、左側が筑波大からの訪問団で、右側がインドネシアの先生で、そのつなぎのお手伝いもしました。

この関係があったもので、高校の教員としては、大学同士のつながりよりも生徒同士のつながりを作っていきたいということで、JICA ネットのお世話になって、これJICA インドネシア事務所ですけど、ここと地球広場にうちの生徒に行ってもらって、テレビ会議をしました。こういうような形でテレビ会議をして交流を図っています。こんな感じです。

これが3兄弟とって、校長先生で、教頭先生で、私で、なんかだんだん一緒にいると似てくるっていう。日本に帰国して9カ月くらいたち、もうすでにインドネシアが遠い昔に感じます、と書いたんですけど、昨日帰ってきたばかりなので、ちょっとまた蘇ってきています。

よく日本にいと新しいか古いかで判断基準にされることが最近多いんですけど、そういうことじゃなくて大切か大切じゃないかみたいなことを中心にこれから学校でもがんばっていききたいなと思っています。行って良かったなと思います。終わりそうですけども、もうちょっとあるんですね、あと3分くらい。

帰ってからのいろんなところで学校への還元を考えてやっていますが、色んな授業の中

でもやるんですけども、ひとつ、実はトヨタ財団がアジア隣人プログラムっていうプログラムを持ってまして、日本の子をインドネシアにつれてったり、インドネシアの子を日本に連れてきたりっていうのはお金がかかるので、なかなかやりにくいところなんですけど、大学からのそういう支援とか、予算が厳しいので、外部資金を取るってことで、こういうプログラムがあるよって教えてもらって、応募したら通りまして、500万いただけることになりまして、先ほども手嶋先生の話の中で共通の目標を持って何かやっていくというものがいいというお話があったんですけど、日本とインドネシアの高校生が取り組む共同プロジェクトっていうのを立ち上げました。

これは、2年間やるんですけども最初、2年の間に、それぞれの高校生が3往復します。5人ずつくらいしか行けませんけども。最初はお互いの国の理解とゴミ問題を知るってことで、日本もゴミ問題あってですね、たとえば分別して分けてもそれがどこにいつてるのかとか、ほんとにこのリサイクルはリサイクルになっているのかとか、かえってエネルギー使ってるんじゃないかとか、最近思うんですけど、駅前で結構ポイ捨てしているのも増えているような気がしますし、必ずしも日本はマナーがいいとは限らないと思っています、最近。

そういうことも含めて、まずは知ってもらって次は3ヶ国語、インドネシア語と日本語と英語で、ゴミ問題に関する本を作って、最後はその本を持って地域の学校に、たとえばインドネシアの学校や地域の学校にうちの生徒とインドネシアの高校生とがいて、ゴミの授業をするというようなことを考えています。

この前行ってきたところですけど、こういうゴミの現場は、学校に行けない子どもたちもいたりして。こういうところにも日本とインドネシアの高校生で行って、自分たちで将来何ができるかなってことを考えたりしてもらおうと思っています。比較的インターネットがインドネシアでも使えるもので、22日にスカイプをつないでやりました。プロジェクターを使って見せました。

やってわかったんですけど、これうちの生徒なんです。これがインドネシアの生徒で顔が似てるっていう非常に盛り上がって、趣味がサッカーで、今度行ったらサッカーしようっていう非常に盛り上がって、彼が実は英語がとても苦手で、大っきらいだと言ってたのに、インドネシア語を今一生懸命勉強し始めているので、目的をもつと子どもががらりと変わるっていう瞬間に出会えたので、これからの高校生の成長をすごく楽しみにしています。

ということでばたばたとした25分でしたが、これで終わります。どうもありがとうございました。

【質疑応答】

質問：私は 23 年度にインドネシアに派遣です。環境教育で前に行った人はいなかったのかというのが 1 点と、引き継ぎというかもしそういうのがあるんでしたら、もうちょっと苦労されなかったのではないかと思ったんですが。

先生：私は三代目でした。初代と二代目とあって、入ったんですけど、私のいる間に所長が、国立公園の所長が変わってまして、組織が変わってるんです。人も変わってるので、所長ごとに政策ががらっと変わってしまったので、三代目ではあったんですけど、もうまた、初代でここまであげて、またちょっと間があいて二代目があげて、こんな感じで。

引き継ぎは JICA で正式にはないので、報告書で、それ読むしかないんですけど、二代目の人と私が直接会うってことは、公式には設定されません。私は事前に連絡が取れたので、国内で一回と、前任の方がジュニア専門家になられて、その関係でインドネシアに来られたので、派遣中も 1 回、インドネシアであいました。相談には乗っていただきました。

私の後任が決まっています、1 月 6 日に出発されるんですけど、独自に会ってやってきたことはすべて引き継いで、国立公園での活動もトヨタ財団のプロジェクトをやるので、一緒に連携しながらやっていこうと言っています。彼も環境教育です。

質問：高校生で、今度から大学生になります。現地の子どもたちは環境教育を通して、どういう反応をしているのか興味があるんですが

先生：環境だけじゃなくて、結構インドネシアの人たちは日本のこと大好きで、なにかするととっても喜んでくれます。

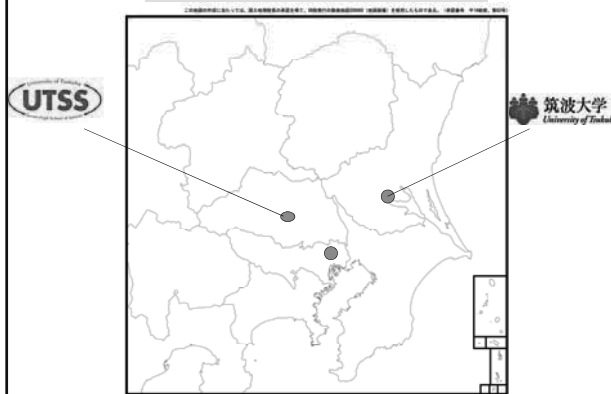
僕はどうしてもポイ捨てだけはやめてほしかったので、日本語でポイ捨て禁止って、習字やってたので毛筆で禁止って書いて、覚えろって、子ども達にいったら、誰かが捨てたらポイ捨て禁止って言えって、言ったら、みんなでポイ捨て禁止、ポイ捨て禁止って言って、それが広まった。そうやって地道にやっていったら効果があるかな、って結構いい反応してくれたので楽しかったです。ただ言った後に 1 時間くらいしたらゴミを捨てているので、言い続けないと。継続が必要だな、と思いました。

## 国立公園と市民をつないだ2年間



筑波大学附属坂戸高等学校  
農業科 穂元喜寿  
(平成20年度1次隊インドネシア環境教育)

## 日本の勤務校



## 学校の概要



創立:1946 (1994年 平成6年より日本初発の総合学科)  
生徒数 480人(定員 各学年160名)

## 学校農場



22,230km<sup>2</sup>

## 事前訓練の様子 (JICA二本松訓練所)



## インドネシアはどこ?



## インドネシアはどこ？

1万7,500もの大小の島により構成される。また2億4千万人が住む現在世界第4位の人口である。



インドネシア



## インドネシア語はかわいい

Cumi-cumi cuma-cuma kira-kira laki-laki

(イカ 無料 だいたい オス です。)

無料のイカは、だいたいオスです。

こんな文はまずつかいませんが、文法的にはOKです

## Tidak apa-apa



## 配属先: グヌングデパンランゴ国立公園



首都ジャカルタから2~8時間(約100KM)

## 配属されてわかったこと

- ・家は、まだ住めない(水がない)
- ・出前授業は、年に数回しかない。
- ・さらに、本部では行っていない。

私は何をしにインドネシアへ??

## 日常生活(自宅)



## 日常生活(トイレ)



## 日常生活(移動・食事)



## 協力隊の仕事

- ・必ずしも、はっきりした仕事があるわけではない。
- ・現地のニーズチェックを行いながらすすめる。
- ・協力隊自身が主人公ではない。

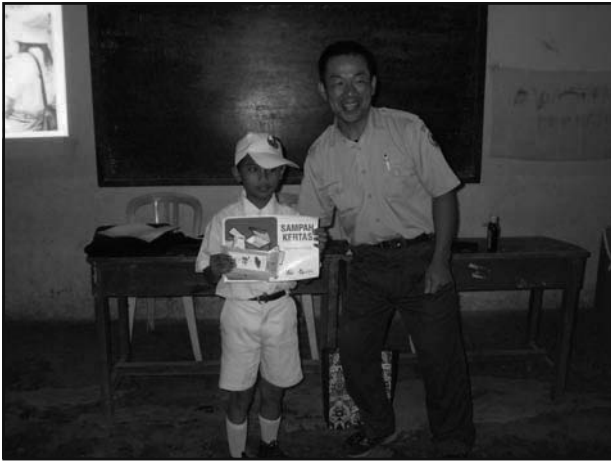
## Kegiatan 1 : Pendidikan lingkungan hidup tentang sampah



## どんな仕事を国立公園で行ったか

- 1 地域や学校での環境教育 (とくに廃棄物中心)
- 2 国立公園のプロモーション (エコツーリズム、CSR)





### 国立公園のプロモーション

- ・ジャカルタの日系社会とのつながりを大切に(海外にいるのだから、日本人とのつながりはさげるとかいろいろ拘らない)。
- ・企業CSR活動を呼び込む

### SHARPインドネシアの植樹





### 現地のフリーペーパーとの連携



編集長とのスマトラ取材と原稿執筆。  
配属先でのエコツールの共同企画

### 国立公園ロゴ入り製品の開発



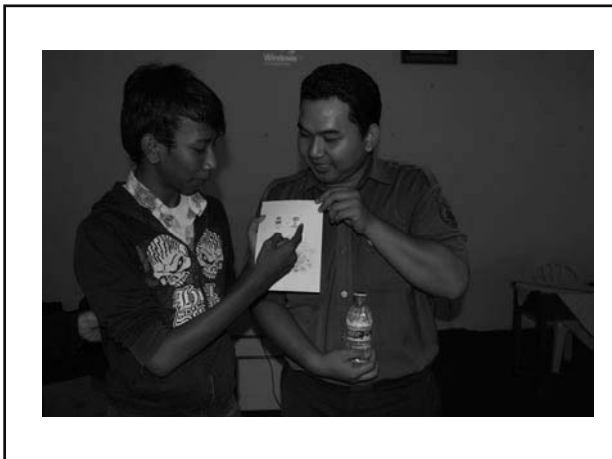
インドネシア初の製品

### この製品販売までの道

- ・仕事はなく、言葉も上達しないので、寂しく日本食スーパーをぶらついてた。
- ・偶然、仕事場の国立公園を水源とする唯一のミネラルウォーターがあること知る。
- ・早速、その会社にメールしてみる。
- ・アポを取って企画書を提出
- ・なんと社長さんが同い年で、岡山出身！







## その他

- ・ジャカルタージャパン祭り
- ・インドネシアでのお花見会とゴミ拾い  
(日本大使館、日本人会、国立公園、地元民)
- ・滝や登山の案内  
(雑誌との提携、企業との提携)
- ・JICAプロと企業の橋渡し

## 国際協カイニシアチブ事業





国際協カイニシアチブ以外で

- ・JICAヤングリーダープログラムでの派遣
- ・JFのJENESISプログラムでの派遣
- ・国際エコプロダクツ展(ジャカルタ)への参加





## 日本に帰国して

- ・すでに、インドネシアの2年が遠い昔に感じます。
- ・「新しいか、古い」から「大切か、大切にないか」「必要か不必要か」を基準にしていこうと思っています。

## 2年間を振り返って

場所や、環境を変えても人は変わらないというひともいますが、

私は、環境は人を変えたいと思います。  
また、人が環境を変えることもあると思います。

今、間違いなく言えることは、2年間、協力隊に参加できて本当に良かった！ということです。



## 国際への提案

- ・内なる国際化(これは農業科の仕事、これはI系の仕事という考え方はやめる)
- ・行事の仕分け(校外学習とのドッキング)
- ・インドネシアの可能性  
(世界でも有数の親日国、Bricsに続く国、被支援国から消費国へ、勉強の熱心さ)

## 生徒や学校への還元

- ・まずは、いつもの授業を大切に
- ・産業などの授業で
- ・総合学科研究大会で「国際」をテーマに
- ・学校と外部機関との連携役  
(ユネスコスクールとESD)
- ・外部資金の獲得  
(H22年度TOYOTA財団アジア隣人プログラム)
- ・外部への発信

Terima kasih (ありがとう！)



Sampai jumpa lagi (また会いましょう！)

## エチオピアで学んだこと

坂下幹弘

(平成 20 年度 1 次隊 PC インストラクター エチオピア)

みなさんこんにちは。よろしくお願いします。埼玉県立坂戸西高校からまいりました坂下幹弘です。今日は、特別な発表の資料を作れなかったのですが、総合学習で用いた生徒向けの資料になってしまうんですが、25 分間お付き合いいただければと思います。よろしくお願いします。恐縮ですが座って私も進めさせていただきたいと思います。失礼します。

それではまず初めに、お聞きしたいんですが、教員の研修ということで先生方いらっしゃると思うんですが、高校籍の先生いらっしゃいますか。あ、3 人、ありがとうございます。次に、コンピューター関係、PC 関係の方いらっしゃいますか。あ、いらっしゃいますね。次に、エチオピアに派遣される予定だという方いらっしゃいますか。エチオピアはいない、と。アフリカに行くという先生、いらっしゃいますか。いらっしゃいますね。既婚でお子さんもいらっしゃるという方、いらっしゃいませんね。あと、埼玉県からいらっしゃった先生いらっしゃいますか。いませんね。どうもありがとうございました。

それでは始めさせていただきます。後ろの写真ですが、ゴンダール城とってエチオピア、アフリカにあるんですけど、世界遺産というのがやっぱりいくつかありました。先ほど、十字架の建物がやはりラリベラといいまして、世界遺産になっています。内容ですが、1 から 8 まであるんですけど、もう皆さん方、派遣される予定だということで、途中、省略しながら進めさせていただきたいと思います。

まず、自己紹介ですが、この写真は私がエチオピアにいる時に撮った写真です。当時はひげをはやしておりました。教員生活 15 年目で参加しました。それから、コンピューターの隊員ですが、私はもともと英語の教員でコンピューターの専門家ではありません。コンピューターの知識は 15 年間の仕事を通して独学で学びました。それから英語の教員なので海外での生活を長年夢見ていました。

卒業と同時に教員になってしまいましたので、なかなか長期間、海外で生活する方法がなかったため、協力隊へ最後の最後で挑戦したということになります。エチオピア着任当時は私より年配の隊員がいたのですが、1 年過ぎたころに帰国され、私が 38 歳で当時、隊員最年長でした。

それから、私は結婚していて、妻と子供を残しての単身赴任でした。現在は、任国外旅行の行き先の 1 つとして、日本に帰国可能な制度がありますが、私が派遣されていた当時は日本には帰国できなかったのが 2 年間妻と子供とまったく会えませんでした。それから、ご存知の通り、派遣希望国を 3 つ書けますが、エチオピアは希望外でした。エチオピアの

「エ」の字も書いてなかったので、覚悟していない場所に行ったわけです。ですから、とても不安がありました。次の、「協力隊についての説明」は省略したいと思います。

このスライド写真は、20年度1次隊で、埼玉県から一緒に隊員として派遣されたメンバーです。とても女性が多いのに驚きました。男性が6人しかいないということで、女性の方が積極的に世界に出て行っているんだな、途上国に行っているんだな、と驚きました。「JOCVについての説明」も省略させていただきます。

次の写真ですが、「技術補完研修」というものが、派遣前にあり、コンピュータ系の隊員は銀座の内田人材開発センターさんにお世話になりました。次の報告で、エルサルバドルに行かれた中村先生も発表されるのですが、中村先生もこちらに一緒にいます。一緒に技術補完研修というのを受けました。「参加への道」という説明も、これは生徒向けの資料ですので、「健康第一」ということで、省略します。

次に、エチオピアという国の紹介をしたいと思います。エチオピアってどこってことですね。日本がこのへんにあると、ここが、東アフリカという地域です。拡大しますと、いくつか国があるんですが、このあたりです。この写真はエチオピアで一番歴史があるアディスアベバ大学です。ここにぼろぼろの洋服を着た少年がいて、靴磨きをしていますが、一方で、この様ないい格好をして大学の卒業式をリッチにやっている、非常にギャップを感じました。

エチオピアの紹介ですが、首都はアディスアベバ、面積は、日本の3倍、人口はナイジェリアに次いで2番目で、わりと大きい国です。国土のほとんどが高地、標高2000mくらいになります。気候はとても快適でした。暑くもなく寒くもなく。公用語はアムハラ語、英語になります。

それから、エチオピアには、こういう場所もあります。「シェラトンホテル」という場所ですが、外国要人等が泊まるホテルです。こういう立派な建物もあります。続いて、首都アディスアベバの様子です。そうかと思えば、南部の方に行くと部族もいます。これは「ムルシ族」といい、唇を切ってお皿を入れる部族ですが、この様な人々も住んでいるという写真です。

マーケットでは、こういう場所でも貨幣経済が成立しています。

エチオピア人について簡単に説明をしたいと思います。まずエチオピアという国ですが、歴史が長いです。紀元前2000年くらいから、国家が存在したといわれています。アフリカ唯一の独立国で、植民地経験がない、短期間イタリアに侵略を受けたことがあります。その関係でエチオピアは第二次世界大戦の戦勝国であると人々は思っています。人々のプライドが高いです。「おれたちは他のアフリカ人と違う」と、多くの人々は思っています。この辺りは省略したいと思います。

次に、エチオピアで驚いたことを何点か紹介したいと思います。まず「時間の概念」が全く違うということです。これは2年間生活していて、最後まで慣れませんでした。エチオピアには「エチオピア歴」という独自のカレンダーがあり、1年が13か月あります。1月1日が9月11日になります。「エチオピア時間」というのもあり、現在の時刻、午後3時20分くらいですが、エチオピアでは9時20分とまったく違った言い方をします。日本との時差がちょうど6時間なので、日本時間を想像すると「エチオピア時間」が出てきます。

あとは停電・断水・電話断線ということで、インフラが非常に貧弱で、コンピュータ隊員だったため、とくに停電には苦しめられました。

それからマラリア・感染症・ノミ・ダニなど、衛生的な問題もありました。病院もあまりあてにならないと思います。病院に行くと悪化してしまうことがあるかもしれません。それから挨拶がとても長く、間違い電話がかかっても5分くらい話していることもあり、驚きました。20分くらい「最近どうした」「何やってるの」という形で挨拶が続くことがあります。

もう少し驚いたことを。人々がとても信心深いです。宗教の力だと思いました。でも嘘をつく人もいました。それから文化的に日本と似ているものもありました。たとえばお辞儀とか、年長者への配慮、気遣い等ということです。日本人はかなり若く見られるようで、私は当時37歳でしたが、28歳に見えたそうです。なので、初めは同僚教員とかが、ラフな形で話しかけてきたのですが、私が、「37歳で妻も子供もいるぞ」、と言ったら、「何だお前のが年上なのか」と、急に態度が変わり、驚きました。

独自の文字ですが、こういう文字を使っています。「アムハラ語」では、まったく何が書いてあるかわからない、こういう文字を使っています。これなんて書いてあるかという、英語訳がこうなります。英語だとすごくわかるなって、思いますよね。

慣れてしまったことですが、エチオピアではバスによく乗りました。満員のバスの中はすごく暑いです。なので、窓を開けると、「閉めろ」って、周りのお客さんから言われます。「なぜだ?」、と聞くと、「風邪をひくからだ」と、言われ、「おかしいんじゃないか?」と、もう理解できませんでした。

ただ、実体験から学ぶと、エチオピアの季節は、雨季、乾季、小雨季の3つがあり、雨季は雨がたくさん降るのですが、乾季はすごく乾燥します。自分自身、乾季の時、風邪で一週間寝込みました。のどがすごく痛くなったのです。マラリアと思ったんですけど、蚊に刺されていない。「なんでだろう?」と、思ったら、この写真が道路の状況なんですけど、エチオピア人の考えによると、未舗装路が多く、家畜の糞がたくさんあります。糞のなかには細菌がたくさん含まれ、乾燥すると土埃が立ち、それを吸い込んでしまう。だからバスで土埃を立てながら窓をあけて走るとそれを吸い込んで、「風邪をひく」と、そういう考えに基づいているようです。

同任地に、風邪ひき、肺炎になった隊員もいました。やはり、同じ症状でしたが、埃を吸い込んだためではないでしょうか。こういう道路でヤギとか普通にいて、ヤギくんが「糞」をそこら中に、写真後ろには、「牛」も見えますけど、そういうことで、現地の人々の考え方というのも一理あるのかな、と納得できました。この写真はアワサ高校の同僚教員です。

もう1つ、エチオピア人は、学校とか仕事を休むことが多いです。「どうして休む？」って言うと、「I was sick」と、答えます。また休んで、「I was sick」と、答えます。この写真は、私が住んでいた家です。ある日、借りていた家の大家さんが約束破りました。「どうしてだ？」と、聞いたら、「I was sick」と、答えました。大家さんは英語がわかったので「何でだ。仮病なのか？」と、聞きました。この写真は、雨季の様子ですが、雨がもうものすごく降っています。エチオピア人の実状ですが、雨季はすごく雨が降り、水たまりができます。水たまりは蚊の大量発生につながり、その結果、マラリア感染の可能性が高まるということです。マラリアというのは、恐ろしく、感染すると、急激な体力消耗が起こり、死んでしまう場合もあります。実状は医療技術が未発達、高額な医療費ということで、最善策は、「休養」ということです。「疑わしきは休め」ということで、エチオピア人はマラリアの可能性もあるため、何か体調不良があるとすぐ休むことがあります。このことも、現地の人々の考え方で、私はマラリアにはならなかったんですけど、アフリカへ行く方がいて、マラリア感染の可能性のある方は、「休むのが一番」です。ということで、現地の人々の考え方の紹介でした。

活動の紹介です。この写真が私が活動していたアワサ高校の入り口になります。活動についてですが、概要を話すとこういう風になります。「IT 教員としての実践的な授業の担当、PC・環境整備、同僚教員の育成」が、要請内容でした。対象はグレード 11 から 12、ちょうど日本の 17 歳から 18 歳で、高校 2 年生から 3 年生です。全校生徒は約 6000 人、教職員数 200 人というとても大きな学校でした。次の写真ですが、これがコンピュータの実習教室です。私が行った直後、ではないですね。行ってしばらくたってからですね。後ろに私が作ったものが貼ってあるので。こういう環境です。ごみが散らばってイスがばらばらになっています。こういう使い方をしているところでした。

この写真は、任地アワサの様子です。次は、授業の様子です。ひとクラス 80 人いました。80 人でコンピュータが 15 台くらいでしたので、80 人のクラスを半分に分けて、40 人で 15 台を使ったので、大体 2 人から 3 人くらいで 1 台を使いました。こんな形で授業の方を進めて行きました。

これは図書館です。これは座学の授業です。着任当初は、コンピュータがまったく動かず、とりあえず、「ネットワークに関して座学をやってくれ」と、言われました。生徒は、一応英語がわかるというレベルなんですが、私は、英語の教員なので、彼らがどれくらい英語をわかるかっていうのが、あやしかったです。ですから、黒板に書くのも時間かかるので、当初はプロジェクターを使って能率良く授業を進めて行きました。この写真の様な



生徒たちと一緒に。次は、また実習室の写真ですね。

活動上の問題ですが、こんなことがありました。まずひとつは、何かコンピュータの技術を移転して行こうとしました。一生懸命やったのですが、熱心なエチオピア人 IT 教員が、一人いたんですが、結局いろいろメンテナンスのこととかを彼に教えたのですが、結局そういう意欲のある先生は転職してしまいました。「せっかく教えたのにやめちゃったのか」と、がっかりしました。

あと、予定通り進みません。エチオピアでは「教職」というのがすごく人気がありません。日本だと学校の先生は「聖職」、「Holly Job」と、言うんですかね、「聖職者」ということで評価が高いのですが、エチオピアで、「おれ日本で先生やってんだぜ」と、言う、「なんだ、お前教員にしかねれないのか」と、そういう評価を受けます。現地の教員は学校にこないことも多いです。

それから 2 年という限られた期間でした。現職の先生方多いので、ご承知だと思いますが、「じゃあ、学校にある様々な課題を先進国日本で、二年間でどれくらい解決できるか」と、言う、なかなか解決できないっていうのが実状ですよ。ですから、さらに過酷な環境の途上国で「2年で結果を」と、いうのはすごく短い期間だと思います。

それから、エチオピアでは、教職がすごく人気がないので、教員不足が深刻でした。私は、英語が普通にしゃべれたので、「これはいい、ただで働く先生が来た」ということで、いきなり着任直後からエチオピア人の教員と同じ授業をやって欲しいと、言われて、すごく忙しかったです。コンピュータも直しながら授業もやらなくちゃいけないということで、時間に追われる補充教員という立場でした。そのため、IT 教員としての自分の活動に疑問を感じる時期がありました。それはなぜかと言うと、カウンターパートが遊んでいるんですよ。私が一生懸命授業やったり、ティームティーチングで授業やると、もう一人は「ちょっと、おれ用事あるから出ていく」と、どっかで友達と話して遊んでいたりました。「俺、本当にここでやっていていいのかな」と、思う時期がありました。

ただ、「希望の光」も見えました。活動 2 年目くらいから考え方を換え、「何かをやってやろう」という気持ちを捨てました。一緒に働く時に、「本当は能率悪いのだけど、でもまあちょっと付き合っただけやるか」、みたいな感じで、時には、彼らのやり方でやってみることもありました。それも大事なんだなと思いました。

あと、教員とかカウンターパートをあてにしないで、生徒の方に期待をするように考え方を変えました。そうしたら、少しエチオピア人の方も、私に気を遣ってくれるようになったのか、少し意識が変わってきました。掃除をするようになったり、新しい技術を使いだしたりとかが、ありました。離任の時に送別会をやってくれて、本当に涙が出てきました。たとえば、私が着任した時、まず、実習室の掃除を一所懸命やっていたのですが、そういう活動をはじめは「やれよ」という態度で、言っていました、それを言わないよう

にしたら、この写真の様に、掃除をやってくれるようになりました。

プロジェクターを活用して発表するのも、私がやって「これ良いからやれよ」と言っても、なかなか真似してくれなかったんですが、2年目になって、「まあいっか。彼らは使えないんだよな」と思っていたら、少しITの先生がそういうことを真似してくれるようになりました。あと最後に、送別会をやってくれて、こんな形で「ありがとう」と、いうことで送り出してきて、忙しい中、先生方が集まってくれ、すごく感動しました。

エチオピアで学んだことですが、途上国にも課題があるように、日本にもたくさん課題があると思います。その日本が抱える教育の問題、例えば、「誇りが無い」、「不登校」、「いじめ」ですとか、こういう問題が、実は、私が活動していたアワサ高校には、あまり見られませんでした。エチオピアに、そういう課題の答えがあるのかな、と感じました。ですから、ここにいる先生方には、日本から何かを伝えるだけでなく、現地に行かれた時に、日本の教育課題の答えになるようなものがあるはずなので、それらを見つけてきてくれればと思います。

協力隊の経験ですが、辛かったことは、「二年間家族と離れ離れになったこと」です。楽しかったことは、「色々な人々に出会えたこと」です。協力隊での経験はとても素晴らしいものになると思います。帰国して感じたことですが、途上国で2年間やれたので、「日本でも絶対やれる」、という自信ができました。それと健康面も含めて自分の「しぶとさ」も発見できました。「何とかなる」という気持ちですね。あと、「家族の大切さ」、さらに、「色々な人々の支え」を実感しました。つらく大変なこともありましたが、それ以上に楽しいことも、本当に多かったです。この写真は、坂戸西高校、私の所属先の学校の先生方が送ってくれた救援物資ですけど、色々と食べ物以外にも、古くなったサッカーボールですとか、バスケットボールですとか、そういったものも配属先であるアワサ高校へ送ってくれました。

最後ですけど、日本という国は「人材」が大切なんだな、「すごいんだな」と、感じて帰ってきました。

協力隊の任期は二年間、二年後は日本に帰ってきて仕事するので、協力隊事業というのは、人材に対する投資で、国益に結びつくものだと思います。広い視野を持ってくれということで、生徒には話をし、最後に、活動をしていく上で10個の「あ」ということを伝えました。これはエチオピアにいた調整員から教わった言葉ですが、配布資料に同じものが載っているので、確認していただければと、思います。それから、最後の言葉ですけど、これも現地の調整員から教わった言葉です。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」と。やはり、「教えてやる」という気持ちで活動するのではなく、「現地で何かを教わってくる」という、謙虚な気持ちを持って活動をされると上手くいくのではないかと思います。

ちょっとまとまりませんが、言いたいことが、いくつかあるので、最後もう少し言わせてください。まず、現職教員の先生方の待遇面を確認してください。待遇面と言うのは日本での待遇面です。例えば、私は、住宅ローン等がありましたが、日本に居住していないと、「住宅ローン控除」が受けられないとか、「定期昇給」が停止されるとか、「期末勤勉手当」が減額になるとか、各自治体によって違うと思いますが、職場の待遇面を確認した方がいいということです。二点目として、派遣国と「スクールイヤー」が違います。日本は4月から始まって、3月に終わりますが、外国はほとんど9月から始まって4月に終わるということです。なので、何か所属校と交流事業をやるときには、「スクールイヤー」のギャップを確認しておくといいかと思います。長くなりましたが以上で終わります。

#### 【質疑応答】

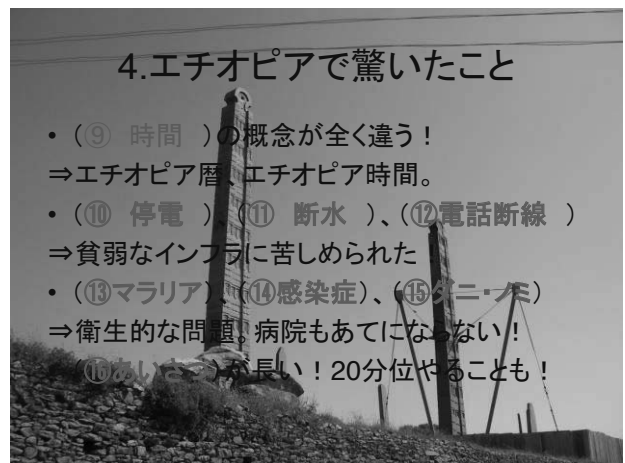
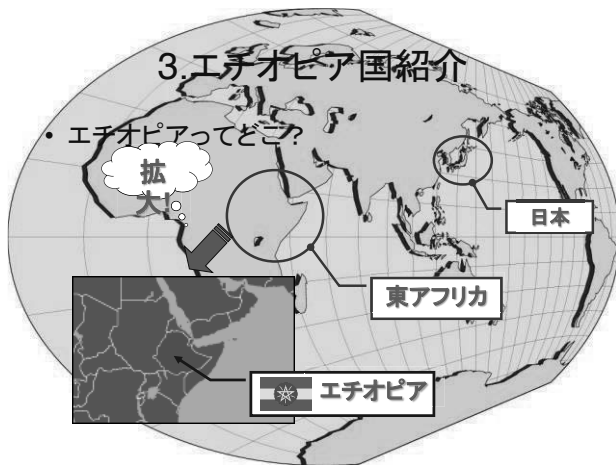
質問：私も来年度 PC インストラクターとしてウズベキスタンに派遣される予定です。派遣にあたって、技術指導というのが行われるということですが、その具体的な中身とか期間というのは人によって違うものなんですか。

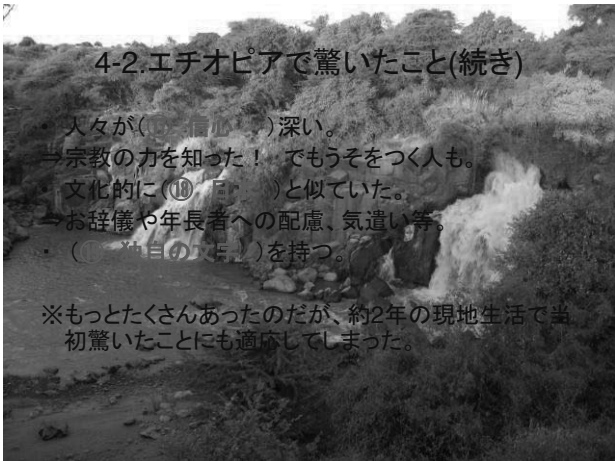
先生：技術補完研修では、コンピュータ系の隊員であれば、同じ内容の補完研修を受けることになります。配属先の要請内容によっては、研修後半の内容が免除されることもあります。基本的に同じ内容で同じ期間研修を受けることになります。



- ・教員生活15年目で参加。
- ・PCの知識は独学で習得。
- ・海外での生活を長年夢見ていた。
- ・最後の挑戦(?)
- ・エチオピア隊員最年長!
- ・単身赴任
- ・希望外のエチオピア。







4-2. エチオピアで驚いたこと(続き)

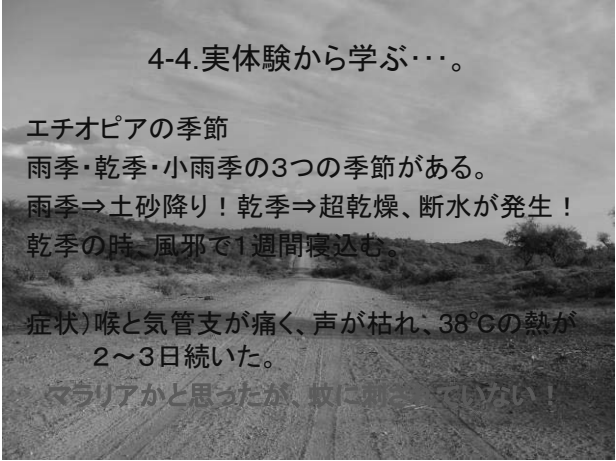
人々が( )深い。  
 ⇒宗教の力を知った! でもうそをつく人も。  
 文化的に( )と似ていた。  
 ⇒お辞儀や年長者への配慮、気遣い等。  
 ・( )を持つ。  
 ※もったたくさんあったのだが、約2年の現地生活で当初驚いたことにも適応してしまった。

ማስጠንቀቂያ  
**አቶት:** አባዳፊ ተቅማጥና ትውከት /አተት/ ወረርሽኝ  
 አባዳፊ ተቅማጥና ትውከት በሽታ ምልክት ደንገተኛና አባዳፊ ውሃ መሰል ተቅማጥ ሲሆን:  
 1. ያስተምጣል  
 2. በተቅማጥ ምክንያት ድርቀት ያመጣል  
 3. አልፎ አልፎ ትኩሳትና የሆድ ሕመምን ያስከትላል::  
 በሽታው የሚታወቅበት ጊዜ - በሽታው ወደሰውነት በጣ ከ1 - 3 ቀን ውስጥ ስመም ይጀምራል::  
**የመከላከያ ዘዴዎች**  
 • ሽንት ስት ከተጠቀሙ በኋላ: ከመባለትም በፊት: ምንጣ በሚያበሰሰበትና በሚያቀርቡበት ጊዜ ስድምን በደንብ ይታጠቡ::  
 • ጥሬና ያልተቀሱ ምግቦችንና መጠጦችን ያስወግዱ::  
 • ንጹህ ውሃና ምግቦችን ብቻ ይመጡ::  
 ከአይ የተጠቀሰው የበሽታ ምልክት በሰውነት ላይ ሲታይ በአስቸኳይ በአካባቢዎ ወደ አላው የጤና ተቋም ይሂዱ::



4-3. 慣れてしまったこと①

貝の殻を剥く⇒暑ハ!  
 窓を開ける⇒暑ハ!  
 「何時だ」⇒「何時もかくらば」  
 ほとんど理解不能



4-4. 実体験から学ぶ・・・

エチオピアの季節  
 雨季・乾季・小雨季の3つの季節がある。  
 雨季⇒土砂降り! 乾季⇒超乾燥、断水が発生!  
 乾季の時、風邪で1週間寝込む。  
 症状)喉と気管支が痛く、声が枯れ、38°Cの熱が2~3日続いた。  
 マラリアかと思ったが、蚊に刺さる事なかった!



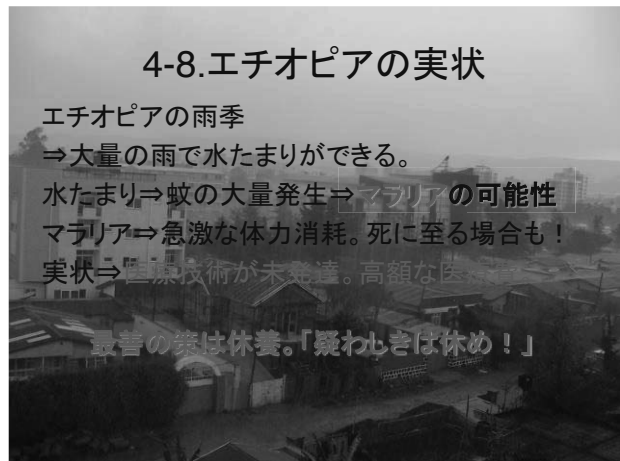
4-5. 慣れてしまったこと②

エチオピアの人々、仕事や学校を休むことが多い。  
 病をいって「I was sick」  
 また「木が枯れた」  
 なせ「I was sick」



### 4-7 エチオピア人の実状

ある日、  
信頼していた大家さんが約束を破る。  
なぜ？⇒「I was sick」  
…  
英語が理解できる人だったので  
「仮病なのか？」と聞いてみた。



### 4-8.エチオピアの実状

エチオピアの雨季  
⇒大量の雨で水たまりができる。  
水たまり⇒蚊の大量発生⇒マラリアの可能性  
マラリア⇒急激な体力消耗。死に至る場合も！  
実状⇒医療技術が未発達。高額な医療費。  
最善の策は休養。「疑わしきは休め！」



### 5-1 活動について

配属先は、高級中学校  
Senior secondary and preparatory school  
活動内容：理科教員として実務的な授業の担当、PC  
授業準備、副教員の育成が要請内容だった。  
担当学年：Grade 11～12 (17才～18才)  
勤務時間：6:00～18:00  
職員数：約200人



### 5-2 活動上の問題

- 優秀な教員は(② 転職)してしまう。
- 予定通り進まない。
- 教員の意識が低い(学校に来ない)。
- 2年と長く限られた期間。
- 時間と労力と補償が足りない。
- 配属先での目的が不明(① 疑問)を感じる時期が長かった。
- 配属先を変えてもらおうかと思った事もあった。



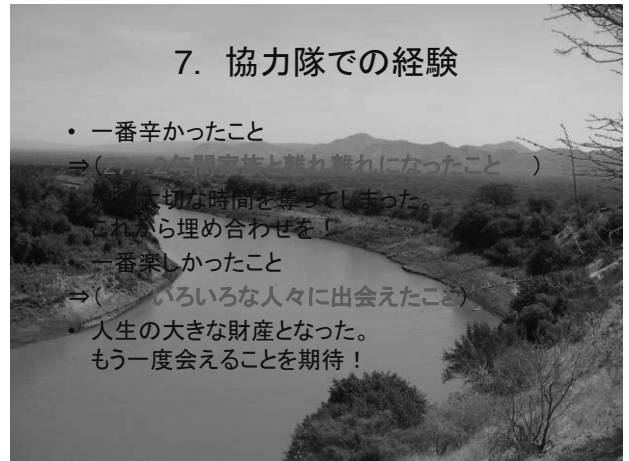
### 5-3 希望の光

「何かをやってやるう」といって、授業を捨てた。  
最終に動く⇒時には休むの  
22. 将来の生徒への期待  
「さあエチオピア人の意識が  
変わっていくようになった。新しい技術を  
導入する。配属先での目的が不明(① 疑問)を感じる時期が長かった。  
配属先を変えてもらおうかと思った事もあった。



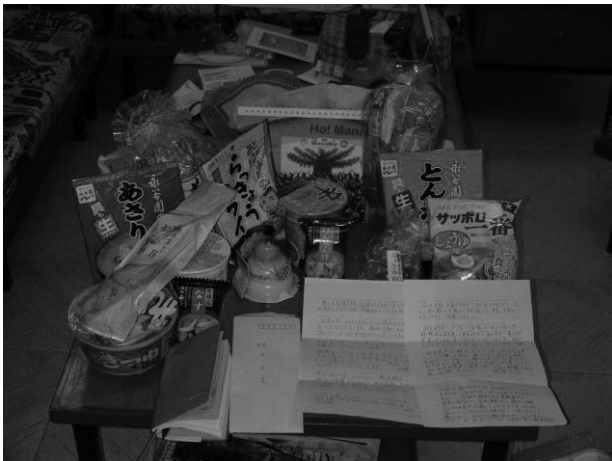
## 7. エチオピアで学んだこと

- ・先進国、日本が抱える教育問題  
(26. 補習の誇り)、(24. 不登校)、  
(25. いじめ) など。
- ⇒ 途上国、エチオピアは 26 (それらの答え)  
があるのではな



## 7. 協力隊での経験

- ・一番辛かったこと  
⇒ ( ) 年間家族と離れ離れになったこと )  
大切な時間を奪ってしまった。  
これから埋め合わせを!
- ・一番楽しかったこと  
⇒ ( ) いろいろな人々に出会えたこと )
- ・人生の大きな財産となった。  
もう一度会えることを期待!



## 7.3 日本という国

- 日本の資源は ( ) ( ) である。
- ⇒ 日本人の質は世界一!
- ・協力隊の任期は2年。
- ⇒ 2年後には、日本で働く事になる。
- ・協力隊事業は人材に対する投資でやがて  
は国益に結びつく。



## 7-5 広い視野を!

- ・進路を悩む学生に「英語」が不可欠なツールとなる!
- ・海外で学んだ経験は、日本にいては決して得られない。
- ・海外で学んだ経験は、日本の研究を深めるための視野を広げることは、世界中の国の状況に関心を持って欲しい。
- ・青年海外協力隊に参加も考えて!



## 8 最後に

- ・活動をしていく上で大切にしたい10個の「あ」
- ・①あせらない
- ・②あわてない
- ・③あたまにこない
- ・④あきらめない
- ・⑤あきらむ
- ・⑥あなどらない
- ・⑦あかるく
- ・⑧あいそよく
- ・⑨あいさつ
- ・⑩あいしましょう!





## エルサルバドルにおける「ものづくり」教育の現状

中村晋太郎

(平成 20 年度 1 次隊 コンピューター技術 エルサルバドル)

みなさんこんにちは。平成 20 年度一次隊、コンピューター隊員として中米エルサルバドルに派遣をしておりました山口県立岩国工業高等学校の中村晋太郎と申します。本日はエルサルバドルにおけるものづくり教育における現状ということで、ちょっと堅めな文章書いておりますが、ざっくばらんにどういうことをやってきたかということをお話しできたらと思います。

まず、任国としてエルサルバドルはどのような国か、ということで若干の数字をご紹介しますと思います。人口ですが、616 万人です。山口県と比較しますと山口県 145 万人ですので、約 3 倍、山口県の人口にして約 3 倍の国です。面積は 21,040 km<sup>2</sup>、山口県 6113 km<sup>2</sup> ということでこれも約 3 倍、ということになります。気候ですが、熱帯気候です。雨季と乾季、ということで雨季になりますと毎日 2 時間から 3 時間集中豪雨というかざーっというスコールが降りまして、後はカラッと晴れるという。乾季になりますとまったく雨が降らないという状態になります。ちょこっと出ていますけど火山多数ということで出ています。中米ですけど、このへんに確かプレートがあったと思うんですけど、火山大国のひとつになります。温泉などもありまして、非常に火山の多い国ということです。

一つエピソードといえますか、テグジュペリの星の王子様ご存じですよ。星の王子様を書いたテグジュペリですけども、実はフランスの飛行機乗りでして、奥さん実はエルサルバドル人です。あそこのテグジュペリの星の王子様に出てくるバラは奥さんだと、エルサルバドルの奥さんだと。火山が出てまいります、エルサルバドルの火山をモチーフにしたというようなふう聞いております。

平均寿命です。男性 68 歳女性 74 歳ということでやはり女性強いなあと思います。人口の 90%がメスティーソと呼ばれる人たちです。白人です。いわゆるスペインの移民の人たちとインディオ、原住民の方ですけど、その混血が人口の 90%を占めているというような国です。同僚と話しをしていた時があるんですけど、100 年前くらいは黒人排斥の動きもあったみたいで、若干黒人の方もいらっしやったような話しをしています。ただ、エルサルバドルに関してはその排斥の流れがずいぶんすんでいたので、今エルサルバドル内にはあまり黒人の方がいないとも聞きました。

こちらですけどエスクードとって、国旗、オフィシャルなんですけれども、オフィシャル国旗あと回しますけど、真ん中にエスクードと呼ばれる中米をモチーフにした柄が

埋め込んであります。この旗が中米 5 カ国ということでグアテマラ、エルサルバドル、ホンデュラス、コスタリカ、ニカラグアということで、これが 5 カ国。あと雰囲気を感じてほしいということで、今日あちらで買った切手がありますので、回してみただけなら、どのような国でどのような色を使っているか感じていただけたらと思います。

働いていたところでした。エルサルバドル国立工業高等学校というところで働いておりました。学習期間ですけれど、生徒の学習期間ですが、3 年間ということです。生徒は 16 歳から 20 歳までの年齢層の子が学びに来ていました。科としては電子科、電気科、機械科、自動車科の四科、私は電子科の方で働いておりました。

在籍者数ですけれど 1 年生約 350 人、350 人入学して来まして、2 年生はその半分の 170 人になって、3 年生はそのさらに半分の 80 人になっていくということで、学費はただなんですけれど、学校の生活にかかわるところのお金、靴を買うとか筆記用具を買うとか交通費が賄えないという理由もあったりしまして、そういう風に生徒数が残念ながら減っていくという状況下にあった学校です。

先ほどご紹介もあったんですけど、先ほどからあちらの大講堂の方で司会をされてた一瀬さん、実は私の前任者でして、同僚たちと働いているといつも「小夜は 小夜は」って言ってらっしゃったんで、あの方が小夜さんなんだと思って、お会いできて嬉しかったです。CRICED の一瀬さんということです、前任者は。彼女といいますか、彼女という言い方失礼なんですけれども、一瀬さんは僕の前にコンピューターのソフトをオペレーティングシステムというんですけど、その「ubuntu」という普及に非常に尽力をされていました。私が行った時にはこれはもうかなり定着しておりまして、さすがだなあ、この学校進んでるよ、と行った時には感じたものです。一瀬さんから指導うけた学校の先生も、その時彼女から学ばれたことを自分の中で消化されて、大学院を卒業されて、2 人いたんですけど、2 人とも大学院を卒業されるくらい勉強をしっかりされておられました。

これが校章になります。エレクトロニカ、エレクトロテクニカ、オートモトレス、メカニカヘネラルということで、電子科、電気科、機械科、自動車科、の 4 科のステッカーになります。

現地の活動としまして、三つの柱として、三つの柱という言い方をするとなんか堅いんですが、三つのことをやってまいりました。第一に、基礎計算力の強化、ということです。第二ですが、自動制御教材の整備、第三にですが、各種ロボットの製作、ということです。

それではまず第 1 番目、基礎計算力の強化、ということです。現地に行ってみて、まず感じたことが一つあって、工業高校なのに計算力が弱い、生徒たち計算全然できないじゃない、と思ったんです。実は。これはまずいということで、あとはどういう取り組みをし

たかということをお話ししたいと思います。

まず一つ問題を考えていただきたい。なぜ計算力が工業において必要かということをやっと考えていただきたいことが一つございます。ということで問題を一つやりたいんですが、長さ 100cm、1m の木材があります。この 1m の木材を何か本棚か何かを作るんでしょう、20cm に切り分けます。100cm のものを 20cm に切り分けます。じゃあそうしたら、何本の材料取れますか、ということなんです。何本だと思いませんか。「(会場)5 本です…」ひっかけだと警戒されているんだと思うんですが、そうですね、単純に考えると 5 本なんです。5 本で、簡単簡単って、100 割る 20 で 5 本だと考えるんです。物を作る人間にしてみれば、これはちょっと待てよ、ということになるんです。なぜか。じゃあ木を切ります。木を切るのは何、ってことになると丸のこなんです。丸のこってどういう構造しているっていったら、大体刃が、この前実習場にあった丸のこ調べてみたら 3mm くらいあるんです。そうすると、その 3mm の刃で切った分を引き算しとかなないといけない。厳密な 20cm を 5 本つくるってことはできないんです。厳密な 20cm を作ろうと思うとやはり 4 本しか取れない。じゃあ材料から考えて行かないといけない、っていうのを直感的にもものを作る人たちは考えている。だから、計算力、ほんとに足し算とか引き算のレベルなんですけども、そのレベルっていうのはほんとに大切なんだよ、ということをおわかってもらいたかったという思いが私の中にもありまして、計算力の強化ということで取り組みをしました。

じゃあ具体的にどういう風な取り組みをしてきたか、ということをお話しします。簡単な計算でも電卓を利用していると。まあ 20 ドル 30 ドルくらいで関数電卓を売っておりましたので、それを生徒たちは持って、ほんとに 5 たす 3 は、とかいう計算を電卓でたたいる状態にして、これはまずいと思って。

まず暗算の習慣化を図りたいということで、簡単な計算をして、それぐらいは頭の中でさっとできるようにしてほしいということで、思いました。教材の収集を始めます。実は計算ドリルを私のひとつ前の先生、現職教員で派遣されていらっしゃった先生がすごくいいドリルを作ってらっしゃって、「ちょっとください」ということでもらってきて、人のふんどしで相撲をとる状態でやらせていただきました。

あとその教材を使いまして 1 年生の実習の初め、15 分間で毎回毎回練習をしていくということです。練習をしていきまして、年 4 回の小テストを実施いたしました。まずこれが一つ目、エルサルバドルでの取り組みの様子です。写真ですけれど、コンピューター教室なんですけれど、こういう風に実習が始まるまえにちょっとこれやってよ、ということで、この二人、これが大学院出られたすごく優秀な先生なんですが、ちょっとやらせて、ということでやらせていただいたことです。

二点目ですが、自動制御教材の整備ということで、これをいうとちょっと怒られるかもしれないんですけど、工業の勉強ということはやはり何かしらの機械がいます。コンピ

ュータを教えるには、やはりコンピュータがないとできないので、ちょっと JICA さんの方  
に買っていただきまして、教材を買っていただいて、自動制御の教材、という整備を行  
いました。

自動制御、自動制御といってるけれど、どういう装置なの、ということですが、簡単  
モデルとしまして出しておきますと、温室があります。花があるような温室です。寒くな  
ったら暑くしないといけないですし、暑くなったら冷やさないといけない、ということで、  
温度のコントロールによって温度の変化によってこのファンをコントロールする、とい  
うようなことができる装置ができて、その装置をどうにか子どもたちに教えることが  
できないかと思いました。というのも、エルサルバドルですが、農業国でもあります。こ  
ういう装置がありますと、ある程度自動的な製作効率も上がってまいりますので、学校の方  
でもぜひ勉強したいという要請がありまして、ボランティアの身ですけれども、どう  
にかその勉強できるものがないかなと色々奔走、といひますか、色々やってみました。

まず自動制御教材ということが中心にありまして、色々それを、教材を作るためにや  
ったことを列記しております。

まずドキュメントの収集、ということで、日本語、英語のドキュメントはあるんですが、  
スペイン語のドキュメントがなかなかないんです。で、どうしようかな、翻訳してやろ  
うかっていつきは思ったんですが、渡りに船で、同僚の先生がこんなあるよって  
いって、スペイン語の教材を僕にくれまして、ラッキーって思って、そういうふう  
にドキュメントを収集したり、あと、ちょっと言葉がたりないところは自分なりに  
言葉を付け加えたりということはやりました。

あと、演習ボードの製作ということで、それを勉強するためのキットみたいなもの  
を作りました。後は教員の研修ということで、先生方にそれをどうやって使うのか  
ということと一緒に勉強しました。私自身もこの教材を日本で勉強していったわけ  
ではなくて、現地に入って、インターネットでマニュアル片手に読みながら自分  
で勉強したものですから、まあ一緒に勉強しようよというスタンスでスタート  
しました。あとサンプルプログラムを書いてみたり、教室確保もやりました。

教室の確保なんですけれど、初めは自分で持ち歩いて、倉庫に入れて必要な  
時だけ教室に出すっていうスタンスでやろうとしていたんですけど、カウン  
ターパートの方がそれまでやるなら教室を準備しようじゃない、という風  
になってくれまして、物事は回り始めるということはそうなんだなあと。  
教室の準備は、現地の人たちが逆に積極的にやってく  
ださったという状況があります。

あと、配属先からの機材供与ということで、機材全部は買えませんので、  
機材を若干買っていただいて、後はそれに付随する UPS だとか停電した  
ときに停止するような装置であるとかは、配属先であるエルサルバドル  
の工業高等学校の方が買って設置しましたし、配線なんかも設置して  
もらいました。

コンピュータですけれども、JICAの事務所の中に眠ってた壊れたコンピューター2,30台をばらして、組み直しまして準備したというような状況があります。JICAの機材と、自分の研修ということで自分も勉強しました。

これが写真です。左上が教員が研修会をしている時の写真です。下のこの斜め三つが教室です。教室の準備ですけれども、これができたときの教室の写真です。これがボードなんですけど、これらが教材のトレーニングボードになります。あとは配線が全然きてなかったものですから、110Vの交流電源の、コンセントがきてないものですから全部配線を彼らが、社会貢献、社会学習の時間に一生懸命やってくれました。「ほんとにきてるの」っていったら、「来てる。大丈夫」っていうから、電球を手元に持っていましたから電球をさしてみても、「ほんとにきてるね」っていうことを確認した写真です。

あとはボードですけれど、このトレーニングボード、ここにあるトレーニングボードも彼らに作ってもらいました。1個は私がサンプルを作ったんですけれど、あと残りのボードについては生徒たちが一生懸命作ってくれました。

最後です。各種ロボットの製作、ということで最後話したいと思います。

私が工業の教員を始めた時に、大恩師になる先生が一言言われたことなんですけど、「おもちゃおもしろいよね」と。「おもちゃって非常におもしろい。じゃあおもちゃってどういう要素を持ってるか知ってるかい？」とその先生が僕に言われました。「なに」って思ったんですけれど、その先生言われるには、「おもちゃって動きあるでしょ」と。うごきますよね。ラジコンなら車輪がついて動きますよね。あとびかびか光りますよね。あと音がしますよね。っていうことで、その三要素があるものって、やはりものを作る人間にとってわくわくするというので、それらを使って何か教材みたいなものがないかな、と思ってましたら、じゃあ実はロボットできるんじゃない、と思いました。それでロボットの製作を開始した、ということです。

左、大体三台のロボット製作にかかわりました。左端ですけれど、この子たちなんですけど、年に一回の生徒の発表会、製作発表会みたいなのがあってですね、その時にこのベルトコンベアで来た物をつかむっていうロボットがあったんですが、そのギアが壊れてて、直せないかと持ちこんできて、半ベそやばいよ、やばいよ、という状態で来て、じゃあ自分たちで作ったら、ということで作り始めたのがこのロボットになります。

ロボットなんですけれど、コンパスでつくって、腕部分はスーパーで売ってるジュースのカップとかで作って、まあ色々とごちゃごちゃやりながら、出来る限り作ってみようということで作り始めて、ロボットです。そうするとだんだん形ができてくると彼らもやっぱり嬉しいんでしょうね、彼らもどんだん話が進んで行って。初めはもうほんとにこれ終わるのか、って感じでやっていたんですが、形がこういう風に見えてくると目も生き返って来まして、個人的な手助けをしてしまうことはいけないことなんだろうけど、やってよかったのかな、とおもいました。

二台目のロボットアームですけれど、二台目の方はちょっと本格的に、これはサーボモーターというちょっと制御が難しいモーターを使って作ってみました。そうしますと今度これ作ってみたんですが、これをこちこちこちこち暇な時間に作ってましたら、生徒たちが触発されたみたいで、自分も作りたいということで自分たちでおこづかいをためたりして、ちょっと高いモーターなんですけど、モーターを買ってきては自分たちで作り始めたと。これはアイコの外枠をとってきて自分なりに改造をした、というようなロボットも帰る間際の学生発表会の時には見せてもらいました。

最後ですが、蜘蛛型ロボットということで、ロボットを作っています。このロボットについてはちょっと映像があるので、見ていただければと思います。

これは12関節のロボットで、12関節のモーターを制御しているロボットということです。これもやっぱりエルサルバドル人の特徴なのかもしれないんですけど、二週間前に僕のところに真っ青な顔で来るんですよ。まあ作っているのは知っていて、サーボモーターでこの形を一生懸命のこぎりでアルミを切ったりどうのこうの色々してたのは知ってたんですけど、できるかな、と思って見てたら、案の定仏作って魂いれず状態で、外身は作れるんですが、中身のプログラムが書けないっていう。どうにか動かそうよ、ということで土日返上で作って、どうにか動くようになって、生徒たちもよかったかな、とほっとしてました。嬉しかったのはそのあとで、何日かたったあとに「先生、先生」ってぼくのところにやってきてくれて、「先生知ってます？」って言って「何を」って聞いたら「あのロボットがエキスポの、生徒発表会の中で1位とったんだよ」ってめちゃめちゃ嬉しそうな顔で僕のところに言いに来てくれてですね、よかったなあと思っております。結構しんどかったりもするんですけどいい思いもさせていただきました。

現在どういうことに関わっているかというところで最後お話しさせていただきたいと思いますが、高校生ロボット競技大会、生徒と参加しております。ありがたいことに今年は県大会1,2フィニッシュできまして、全国大会に駒を進めました。135、150台中15位と16位で、私一人が作れるわけじゃなくて、他に先生もいらっしやったり生徒もいますけれど、関わったことについてはよかったかなと。結構しんどいんです。弓道部をやっていますけれど、部活が終わった後から勉強はじめて、9時10時までずっと作り続けますので、これを作ってる時期は家帰ったらくたくたでばたんきゅー状態でやっております。

それと机の上に、時間が五分前ということで最後にクイズだけ質問の時間にやっていたきたいんですけど、ものづくりということでひとつ岩国工業で錦帯橋というところがございます。錦帯橋なんですけれど橋をかけるんですね。ある対岸があつて、ここに川が通っている。その対岸に橋をかけたい。その長さが違う割りばし3つを使って橋をかけられますか、というのが問題です。もう一回いうと、岸と岸があつて川が流れる。ここに橋をかけます。それで橋の長さ、この割りばしより長い橋を三本使ってどのようにかけますか、という問題です。実はできます。できるんですけど、わかっておられると思うんですけ

ど、じゃあどのようにやるか、ということなんです。多分先生方で行かれると色々な教材を持ってらっしゃると思うんです。解答はここに置いておきますけれど、先生方の持っている教材の中で驚きを与えるような教材を見せてあげてください。これ、くだらない教材かなと思われるかもしれませんがあちらの世界にいったらものすごくいい教材になっている時がありますので、出し惜しみすることなくしっかり見せてくれたらなということです。

最後に、私が大好きな技術者の一人を紹介します。西堀栄三郎という方がいらっしゃいます。第1次南極観測隊の時の越冬隊の隊長をされて、雪山、チベットの登山家でも有名ですし、あとは日本で初めて、日本初の真空管を作られた天才技術者という方です。その方がこんなことを言われています。「石橋をたたいては渡れない」石橋を叩いて渡るという言葉がありますけれど、叩いたら渡れないっていつているんですね。どういうことかっていうと、何か新しいことをするときには、まずそれをやるかやらないかを定めることが必要になってきます。新しいことにはリスク、危険があるに決まっています。リスクというのは危険ということだけではなく、上手くいかないというリスク、不成功というリスクも入ってきます。そしてやるかやらないかを定める前に十分調査しておかないからリスクがあるんだ、あるいは失敗するんだという考え方です。しかし私はそんな考え方では到底新しいことはできないと思います。やるかやらないかを決心する前に、こまごまと調査すれば調査するほど、やめといたほうがいいんじゃないかということになりますよ、と。石橋を叩いて渡るとか渡らないとかいうけれども石橋を完全に叩いてから決心しようなどと思っていたらおそらく永久に石橋は渡れないということになると思います。やると決めてどうしたらできるかを調査せよと言われてしますので、チャレンジ精神を持って来年の活動に向かっただけいたら、ということでメッセージとし、最後にしたいと思います。



## エルサルバドルにおける 「ものづくり」教育の現状

2010年12月26日(日)  
平成22年度 青年海外協力隊  
派遣現職教員帰国報告会

派遣国 エルサルバドル  
職種 コンピュータ技術  
山口県立岩国工業高等学校  
機械科 中村 晋太郎

- 人口 616万人 (山口県 145万人)  
面積 21,040km<sup>2</sup> (山口県 6,113 km<sup>2</sup>)  
気候 熱帯気候 (雨期と乾期)  
火山多数  
平均寿命 男性 68歳 女性 74歳  
人口の90%がメスティーソ (白人とインディオの混血)



## 中米エルサルバドル

注: 出典はウキペディアです

エルサルバドル国立工業高等学校

学習期間: 3年

- 電子科・電気科・機械科・自動車科の4科

在籍者数

(1年生 約350人→2年生 約170人→3年生 約80人)

学費: 無料

- 前任者は、CRICEDの一瀬さん。 <http://www.inti.edu.sv/>  
(UBUNTUの普及)



派遣先

1. 基礎計算力の強化
2. 自動制御教材の整備
3. 各種ロボットの製作

現地で行ったこと。

## 1. 基礎計算力の強化

## 問題

長さ100cmの木材がある。20cmに切り分けるとして何本の木材を切り出すことができる?



答  
簡単! 簡単!  
100cm ÷ 20cm = 5本  
でも。。。  
ものづくり的に本当?

## 1. 基礎計算力の強化

簡単な計算でも、電卓を利用している  
 ↓  
 暗算の習慣化を計りたい  
 ↓  
 教材の収集  
 ↓  
 1年生の実習始めの15分で毎回演習  
 ↓  
 年4回の小テストの実施

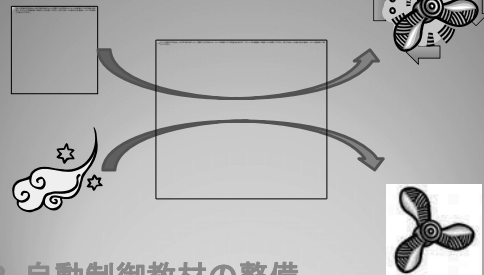
1.基礎計算力の強化



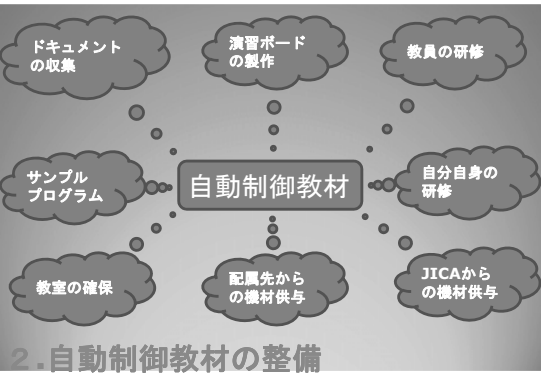
1.基礎計算力の強化

2.自動制御教材の整備

例えば



2.自動制御教材の整備



2.自動制御教材の整備



2.自動制御教材の整備

### 3.各種ロボットの製作

「おもちゃ」は面白い

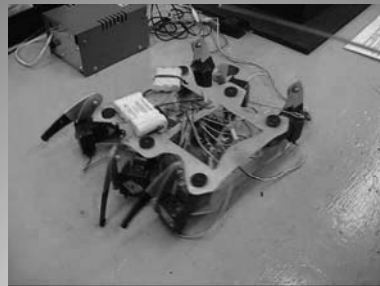


### 3.各種ロボットの製作

ロボットアーム製作1 (セニョールINTII)  
ロボットアーム製作2 (セニョールINTII)  
蜘蛛型ロボットの製作 (生徒課題研究)



### 3.各種ロボットの製作



### 3.各種ロボットの製作

高校生ロボット競技大会へ生徒と参加



現在

石橋を叩けば渡れない

何か新しいことをする時には、まずそれを、やるかやらないかを決めることが必要になってきます。**新しいことには、リスク(危険)があるに決まっています。**リスクというのは、危険ということだけでなく、うまくいかないというリスク、不成功というリスクも入っています。そこで、やるかやらないかを決心する前に十分調査しておかないからリスクがあるんだ、あるいは失敗があるんだ、という考え方は、しかし私は、**そんな考え方は到底新しいことは出来ないと思います。**やるかやらないかを決心する前に、こまごまと調査すればするほど、やめておいた方がいいやなかという事になる。"石橋を叩いて渡る"とか"渡らん"とかいうけれども、石橋を完全に叩いてから渡るか渡らんか決心しようなんて思っていたら、おそらく永久に石橋は渡らんことになるだろうと思います。**やると決めて、どうしたらできるかを調査せよ。**

言 技術者 西堀 栄三郎

メッセージ

## 協力隊経験を生かした国際理解教育実践例

小澤明子

(平成 15 年度 1 次隊 音楽 パラグアイ)

---

Hola, me llamo Akiko. soy una profesora de primaria. ということで、子ども達にもこんな感じで自己紹介をしていきます。そうすると、子ども達は目を丸くして、「これから何が始まるんだろう」というような顔をしています。わからないことをいいことに適当に間違ったことをしゃべったりもしているような何ちゃって先生をやっております、15 年度一次隊パラグアイ音楽派遣の上溝小学校という神奈川県相模原市から来ました小澤明子と申します。どうぞよろしくお願ひします。

今までのみなさんの発表と違って、私はもう 7 年前に行ってまいりまして、現地での活動よりこれからどのように日本で還元していくかということに重点を置いて発表したいと思います。といいましてもパラグアイってどこだろうと思われる方もいると思いますので紹介します。じつは今年かなりパラグアイは有名になったんですね。ご存じの方もいらっしゃるでしょうか？ FIFA ワールドカップで日本と戦いまして、パラグアイ勝ったんですね。そういったことでかなりパラグアイもメジャーになってきて嬉しく思っています。この真ん中です。ど真ん中にある、南米のコラソン、心臓といわれる場所なんですけれど、日本と大体面積が同じくらいで、1.1 倍です。でも人口は 700 万人弱くらいです。どんな感じかといいますと、牛が人口よりも多くいて、これは野良牛ですかね、ちょっとわかんないんですけど、野良牛とか野良馬とか色々いるんですが、こういう風にいっぱい道端にしているようなのかな国です。

そんなところで何をしてきたかといいますと、教員養成校という大学生にあたる、これから先生になる方たちに音楽の教え方を教えました。これは日本から持ってきたトランペットを生徒たちに吹かせて見ていることなんですけど、ちょっと楽器に口付けるのは抵抗あるかなと思ったんですけど、パラグアイは回し飲み文化、お茶の回し飲みする文化がありまして、みんな違和感なく、男の子の後でもどンドン口をつけて楽器を吹いてくれました。そしてこれは幼稚園と小学校中学校にも出前授業みたいな感じで行ったんですけど、この方がカウンターパートのナンシーさん、って行って、この方に私の教え方を教える、というような技術移転をしました。これ幼稚園の子ども達なんですけど、カメラが珍しくてすごいやらせ写真になっているんですけど、デジカメを持って行ったんですが、ここに画面に映っているのにデジカメをとるパラグアイ人の方が知らなくて、一生懸命のぞいてとってくれました。

JICA のプロジェクトがあって、日本の高校と私の行っている小学校とで楽器を送ってもらって、それに対してお礼の手紙を送ったりという活動をしました。これは 5 年生で、この人は先生なんですけどもカスタネット初めてさわったってような感じですね。楽器はほとんどない状況です。これがお礼の手紙でこの子が書いたんですけど写真をつけて、その子の直筆に私が日本語で訳をして、日本の小学校、高校に送るといようなことをしました。向こうからも日本語のお手紙が来て、それをまたスペイン語に訳して子ども達に紹介をしました。

そんな経験をして日本に戻ってきたんですけども、まず同じ学校に戻れたというのがとてもラッキーなことで、担任、音楽専科で 4 年生を持ちました。そのあとも 5 年生とかいろいろな学年を持って今は 6 年生なんですけども、まず朝の挨拶、帰りの挨拶を各国語でしました。ここにプリントにあるんですけど、こんな感じで 1 年分こんな言葉でやってきて、たとえば中国語だったら朝「おはようございます」ってやる時にみんな「ニイハオ、ニイハオ」っていう感じでやります。健康観察って小学校でやるんですけど、一人ずつ名前を読んで行って、たとえば「あきばえりさん」だったら「はい元気です」って日本語でほんとはいうんですが、たそこでたとえば中国だったら「ヘンハオ」って。「何々さん」「ハイセンシンバ」って言ったりして、その言葉で健康観察をしたり、あと給食の時に配られたらありがたいというようにしてるんですけど、そこで「シェイシェイ」とか「グラッチェ」とか言ったりしながらとってさようならも「アウフヴィーダーゼン」「チューズ」とか言いながら帰っていくというのを、1 週間同じ言語でずーっとやっていくと 1 年間でこれくらいの言語のあいさつを覚えるというようになっていきます。さきほど出たグアラニー語もここにちゃんとありまして、これはパラグアイだけで使われている言葉なので、これを知っているとパラグアイ人とっても喜びます。

授業の中での紹介もしてきました。さっそく旗のクイズなんですけど、これが先ほどのエルサルバドルでしたっけ、とてもきれいな旗なんですけど、パラグアイも負けず劣らずカラフルな旗なんですけど、やっぱり先ほどの中米と同じように真ん中にこういうのがありますね。実はパラグアイは世界で唯一の裏表のある旗なんです。裏には違う真ん中の部分がデザインされているんですけど、さてなんでしょうということで、1 番ライオン、2 番ワシ、3 番ネズミ。じゃあ 1 番のライオンだと思う人、あ、答え見ないでくださいね今。2 番のワシ。3 番のネズミ。みなさん答えを見ないでいただいてありがとうございます。じゃじゃーん。(旗を見せる) ということで実はライオンなんです。これは正義の味方のライオンということでここに描かれています。というのを子どもたちの前でもやったりしました。

後はニャンドゥティドレスとかパラグアイハーブを紹介したいと思います。ニャンドゥ

ティドレスですね。(動画を流す)これは二年生に行った授業です。(パワーポイントは)同じものを使っております。そうすれば自分が失敗することが少なくなるので。これは二年生の担任の先生がとってくれたものです。後は(動画)これがパラグアイハーブ。千と千尋のテーマです。こんな感じだったりとか。今も来ている服がニャンドゥティドレスというものです。これを聞く前にこれもまたクイズ形式で小学生向けにしているんですけど、パラグアイのこのハーブを使った曲って色々な音を模した曲が多いんですね。動物の泣き声だったりとか、自然の現象、滝とか風とかそういうものが多いんですけど、次の聞いていただく曲は、ある乗り物を模している曲なんです。ではどんな乗り物でしょうというのがクイズで子どもたちに出すんですが、1 番車、2 番飛行機、3 番汽車なんですね。じゃあどれかなと思いがながら聞いてください。(動画) わかりました？先ほどの汽車の方、正解です。この時5年生の担任だったので、5年生の教室にハーブ置きっぱなしにして、休み時間に自由に触れるようにしておきました。中にはふるさとをひいてみたり、キラキラ星をひいてみたりしている子もいました。

そして、その先なんですけれど、運動会でパラグアイとドミニカ共和国、これはJICAの研修員の方と友達になりまして、紹介をしました。学校に招待しました。そうすると早速子どもたちは取り囲んでブエノスディアス！とか言ってスペイン語であいさつしてみたり、大きな体で黒い肌のドミニカ共和国人の手を握って興味深そうにしていました。

また4年生で音楽祭りというのが地域でありまして、その中で南米スペシャルというのを企画しました。南米スペシャルというのはどういうものかといいますと、次のページに載っているんですけど、下の方ですね。町の音楽祭りでの企画で、メロディアスデアメリカというアメリカの色々な国、南米中米アメリカの国をうたった歌がありまして、その歌を中心に、1組はボリビアの花祭、2組はパラグアイのクリスマス、3組はコンドルは飛んでいく、ペルーですね、あとは全員でラバンバ・メヒコ、メキシコの歌をスペイン語で歌うというような活動を持ちました。子ども達はその国のチームに分かれて、その国の特産物などを調べてこう、名前のカードを作って、その周りに特産物を書くというような活動をしました。これはボリビアチームで、ボリビアに行っていた隊員からボンボという牛の皮でできている楽器だったり、チャフチャスという羊の爪で作った楽器などを借りてきて演奏しました。

(動画)次はラバンバです。(動画)この曲を子どもたちがすごく気に入って、CMでもよく流れる有名な曲なので、学校だけじゃなくおうちの風呂場で歌っていますとか、この曲が流れたときに一緒にスペイン語で歌っているんですけどか、おうちからの嬉しい報告もいただきました。その感想として4年生の子が書いてくれたんですけど、最初は歌が難しくてスペイン語難しくて、また振付をつけながら歌うっていうのが難しいんですね。でもやっていくうちに覚えられたからよかったというような感想を持ってくれました。

全校児童に対しても朝会、全校生徒集まるところで同じようなハーブを弾いたり、ちょこっとしたクイズをしたりして紹介しました。同じですね。これは1年生でやった時です。そしたら1年生の子たちがお礼の手紙を書いてくれてかわいいね、とか、衣装も上手でした、また聞きたいですって言うてくれました。

そのほかにも筑波大付属の小学校でゲストティーチャーとして招かれまして、4年生の子ども達の前で同じようにパラグアイの紹介をしました。さすがよく総合として練られた授業の中にぼんと入れさせてもらったんですけど、子どもたちはパラグアイのことをよく調べていまして、移民についてだったりとか歴史についてだったりとか聞かれて、私の方が困ってしまうくらい、すごく意欲的な子どもたちでした。これは先ほどの2年生でやったやつです。

また教職員との温度差を感じる部分も多かったので教職員にも無理やり押し付けになるんですけど、時間をもらってやらせてもらいました。これは私はもともと津久井郡、今は相模原市に合併してなったんですけど、津久井郡の小学校音楽研究会で二時間かな、時間をいただきまして、大きなきれいなホールでパラグアイを紹介する時間をいただきました。文化のことやら、教育の事やら、ハーブのこと、今と同じことをやっていますが、こんな感じですね。職員の中でも研修会を開いて、希望の方に来てもらったりしました。なかなか先生方は校務で忙しくて集まって下さらないんですけど、数をこなして「また小澤先生なんかやってるよ」みたいな感じでちょっとは周知させていきたいなと思いました。

そのほかにも色々アンテナを張っていまして、これはJICAの研修員さんたちに横浜を紹介するというような語学ボランティアで行ったんですね。英語だったのでちょっと四苦八苦だったんですけど、バヌアツの方とかいろんな方と組んでやりました。そういうことをまた子どもたちに「昨日ね、先生ね」とか話しをしたりしました。文部科学省の方のグローバルフェスタでブースがありまして、そこにも呼んでいただいて、パラグアイについて紹介しました。

これから派遣される先生方が多いという事で、どういうものを持って帰ってくれば一番日本で役に立つかなあというのを自分なりにまとめたんですけど、今ご覧になっていたように写真、できればビデオで、ビデオもそんなに長くとるとあとあと編集がめんどくさいので、細切れのものをたくさん撮っておくといいのかな、と思います。今さっきのラバンバだったりメロディアスデアメリカだったりも、撮っというてよかったなあと思いました。あと実物ですね。今日はお持ちできなかったんですけど、楽器だったり衣装だったり特産物の何か、お面とかかぶり物は子ども達面白がってかぶるので、あるとわーっていうそこから、何だろう、知りたいっていう思いが来ると思います。

後は時間がいくらでもとれる方も、忙しい方もいると思うんですが、とれたらダンスや料理、民族楽器を習ってみると畑違いだわ、っていう方もいると思うんですけど、ちょっとやっくと日本に来てから、戻ってからはすごく楽しかだと思います。私ももうちょっとダンスをやれば、せっかくドレスがあったので子どもたちに踊って見せたりとかできたのかなと思います。ただ料理をやる時は、材料が日本にない場合も多いので、日本で代用できるような料理を考えておくといいと思います。

後はいろいろなボランティアということで、八王子市の語学ボランティアにも登録しているんですが、日本に戻ってからのアンテナを張って、友達を作ってその人からの情報だったり、直接学校に来てもらって子ども達にふれあってもらおうというのが一番いいのかなと思います。そんな感じで私から、これは子どもたちに日本から笛がおくられてきて大喜びで持っているところなんですけれど、1年目がやっぱり勝負だと思いますので、私はもう協力隊でやってきたんだから、という何ですかね、押し売りじゃないですけど、多少うるさがられながらもやっていいと思いますので、やらないまま1年すぎると多分2年目もできなくなってしまうと思いますので、やらせてください、ちょっと時間くださいっていうふうにして飛び込んでいっていただきたいなと思います。また向こうにいつてらっしゃる間に、こんなことだったら日本に紹介できそうなものを集めておいて、活動されるとさらに有意義な活動になるんじゃないかと思います。それでは行かれる方、また今日聞きに来て下さった方、どうもありがとうございました。

#### 【質疑応答】

質問：楽器はどうやって持って帰ってきたんですか

先生：郵便で持ってきました。それも2台も持って帰っちゃったんですけど、日本に届いて大きさにびっくりしました。棺桶みたいなこんなでっかい木の箱で届きまして。人がすっぽり2人くらい入るくらい。でも2万円くらいで送れました。

質問：こちらの各国の挨拶っていうスペイン語以外の言葉、あとグアラニー語以外の挨拶はどうやって調べたんですか。

先生：協力隊仲間と連絡をとったり、あとはインターネットでもこれぐらいだったらありますので。まあちょっとない隙間のところ、ルーマニア語とかタイ語とかありますが。調べればあると思います。



# 帰国後の還元活動について

相模原市立上溝小学校 小澤明子（パラグアイ・音楽派遣 15年度1次隊）

## 1 国際理解教育の実践

### (1) 帰国後実践してきたこと

#### ①日頃の朝や帰りの挨拶を各国語で（一週間同じ言語で）

朝の挨拶や、健康観察で「元気です、まあまです」、給食をもらうときに「ありがとう」などの各国語を自然に覚えることができ、テレビやまんがなどで出てきたときに「知ってる!」と興味を持つことができた。また、「パラグアイ語を教えて!」と言ってきたときに、「パラグアイやそのほかブラジル以外の南米、中米は全部スペイン語なんだよ。」と答えることで、南米についての知識も広げることになったであろう。

資料1 学級通信（3月12日号）

### どれくらい覚えているかな!?書いてみよう!

今回は一年間に覚えたいろいろな国のあいさつのおさらいです!

日本語	おはよう(こんにちは)	(はい、) 元気で	まあまあ元気	ありがとう	さようなら またね
英語	グッ	グレ	ファ	サ	グッ
中国語	ニイ	ヘン	ハイスウエ	シェ	サイ
ドイツ語	グーテ	ゼア	グ	ダ	アウ チュ
スペイン語 (中南米)	フエ	ムイ	アシ	グラ	アディ チャ
イタリア語	ボン	モル	コジ	グラッ	アッリ チャ
フランス語	ボン	トレ ウィ、	ビ	メル	オッ
ロシア語	ズド	オーチ	ハラ	スパ	ダッス
ポルトガル語(ブラ ジル)	ボン	ムイ	ベ	オブリ	アテ
ルーマニア語	ブナ	ダ、スン	?	ムル	ラ レベ
タイ語	サワッ	サバ	?	コー	ラー
タガログ語 (フィリピン)	マガン	マブ	イリ	サラ	アバ
ミャンマー語	ミン	ホデ、	?	チュー	ミン
グアラニー語(パラ グアイ)	ンバエイ	オーマル	イボ	アグイ	ジャジョ

#### ②授業・朝会での紹介（旗のクイズ、ハンドウティドレス、パラグアイハーブ体験）

- ・17年度 川尻小4年生3クラス（約120名）各1時間  
川尻小朝会、全校児童（約600名）20分間
- ・18年度 上溝小4年生1クラス（32名）1時間



一年生は興味津々

1年生4クラス(約120名)各20分間

- ・19年度 上溝小5年生4クラス(約130名)各1時間  
筑波大付属小4年生1クラス(約40名)40分間  
上溝小朝会、全校児童(約800名)15分間
- ・20年度 上溝小1年生4クラス(約120名)20分間  
上溝小3年生3クラス(約110名)20分間
- ・21年度 上溝小2年生4クラス(約130名)40分間

**旗のクイズとは・・・**

パラグアイの旗は世界で唯一の裏表のある旗です。(図参照)  
裏にはある動物がかかれています。さて何でしょう。

- 1, ライオン
- 2, ワシ
- 3, ねずみ (答えは下図)



筑波大付属小4年生への授業



パラグアイの旗(表)

**③運動会でパラグアイ人、ドミニカ共和国の人(JICA 研修員)を紹介**

日本の文化にふれる機会として運動会に招待した。大きなパラグアイ人と肌の黒いドミニカ共和国の人に子どもたちは興味津々で取り囲み、「プエノス ディアス!(おはよう)」、「アディオス!(さようなら)」と早速スペイン語で挨拶していた。

**④町の音楽祭りでの企画(総合を利用して「南米スペシャル」を展開)**

「南米スペシャル」

- 曲目1「メロディアス デ アメリカ」4年全クラス(108名)国旗や国の名物などを調べて作ったプラカードを上げながら歌う(写真1, 2)
- 2「花祭り(ポリビア)」1組(35名)ポリビアの楽器を使って(写真3)
- 3「パラグアイのクリスマス」2組(36名)
- 4「コンドルは飛んでいく(ペルー)」3組(37名)
- 5「ラバンバ(メキシコ)」4年全(108名)スペイン語で、振り付けもつけて



写真1 国名を書いているところ



写真2 歌いながらプラカードをあげる練習。うまくできました。



写真3「花祭り」(ポリビア)を演奏  
左端がボンボ、次がチャフチャス、マトラカ(ポリビア隊員に借りました)



旗のクイズの答え: 1ライオン  
ライオンは正義のシンボルです

**ハーブのクイズとは・・・**

パラグアイハーブ(アルパ)の曲には動物や自然の音を模したものが多いのですが、次の曲は何の音を表した曲でしょう。(写真4)

1. ピリリータの最初の部分を演奏する  
 答え：鳥（ピリリータという鳥の鳴き声を表している）
2. カスカーダの最初の部分  
 答え：滝（カスカーダはスペイン語で滝）
3. トレンレチェロの最初の部分  
 答え：列車（トレンレチェロは牛乳列車という意味）



写真4 ハープの演奏

## (2) 教職員に対して

- ①津久井郡小学校音楽部研究会においてパラグアイの教育事情、スペイン語の簡単な挨拶、文化（食べ物、国民性など）、ハープ演奏と体験の講座を持つ・1時間半
- ②職員研修会4回（配属校教員対象15分、湘北地区教員対象45分（写真5）、神奈川県教員対象25分、新採用へ国際理解教育模擬授業30分）でパラグアイの配属校の子どもたちと日本の教え子たちの「笑顔のために」のプロジェクトによる交流とパラグアイの教育事情、文化（食べ物、国民性など）、ハープを紹介



写真5 湘北地区教員研究会

## 2 まとめ ～これから派遣される方たちへ

現職教員派遣では現地での活躍はもちろんのこと、帰国後の活動にも焦点が置かれているだろう。そこで、これから派遣される方に現地ですべての物を集めておけば帰国後すぐに役に立つかまとめたいと思う。

### ・写真（できればビデオ）

現地の様子・・・自分が授業をしている様子、現地の先生が授業をしている様子、子どもたちから日本へのビデオメッセージ、よく食べる料理、珍しい料理、祭りの様子、貧しい家、貧しい人々（撮るのがなかなか難しいが）、裕福な家、きれいな町並みなど。

### ・実物

ハープ等の現地の楽器、打楽器（誰でも音が出せるので子どもたちがさわりやすい）衣装、特産物（置物のような物）、日本でパラグアイ人の友達を作って子どもたちに紹介するなど。やはり子どもたち（大人でも）には100話をするより1見せ、ふれさせるのが一番。

### ・衣装があるといい（ダンス、祭りの衣装など）お面やかぶり物も楽しい

ニャンドウティドレスは高かったので（日本円で2万円）買うのを迷ったが買って良かった。派手なぐらいでも楽しい。任地にいる間も祭りの時など着て交流を図るといいだろう。

### ・ダンスや現地の楽器の演奏、現地の料理などを習ってみては

専門外でも、何かできると紹介しやすい。料理の場合、日本で手に入る材料でできるかも重要になる。実際に現地で何回か作ってみるとよい。

### ・日本に戻ってから地域の国際行事にアンテナを張ろう

地域の国際行事に目を向け、参加してみよう。市役所、駅などの公共の建物に行事の宣伝があるときがある。私はそれでJICAの研修員（パラグアイ人、ドミニカ共和国人、ペルー人）と友達になり、そのつながりで創価大学の留学生（ボリビア人、キューバ人、イスラエル人、アメリカ人）とも友達になった。また、八王子市では通訳ボランティアを募集していたので登録した。人の輪を広げることで、子どもたちにも紹介できる機会が増えるかもしれない。

**帰国後1年目が勝負なのでがんばって下さい！！**

帰国後の還元活動について

## 子どもたちに海外への 興味を持たせよう！

～パラグアイを中心に広がる南米音楽の世界～

15-1 パラグアイ・音楽

小澤 明子

## 1. パラグアイでの活動



## 世界の笑顔のためにプロジェクト



## 2. 派遣経験を生かして

### ① 担任を持った4、5年生に対して

- 朝の挨拶、帰りの挨拶を各国語で  
(英語、スペイン語、イタリア語、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、グアラニー語など)
- 授業の中での紹介(旗のクイズ、ニャンドウティドレス、パラグアイハーブ体験)
- 運動会でパラグアイ人、ドミニカ共和国の人(JICA研修員)を紹介
- 総合で「南米スペシャル」を企画

## 南米スペシャルの様子

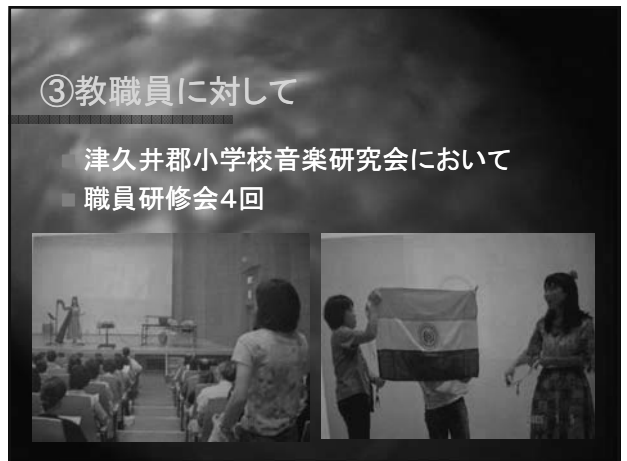
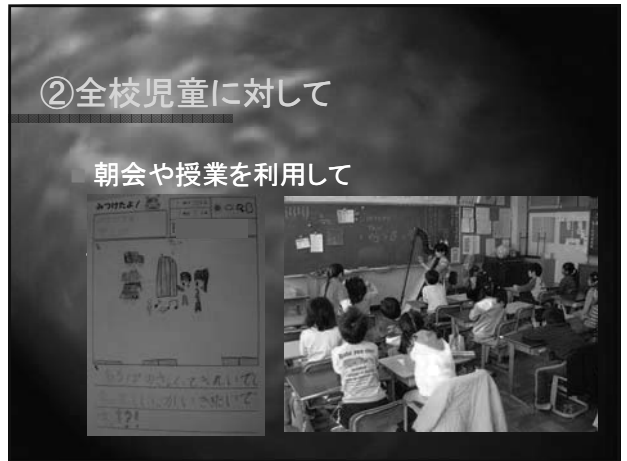
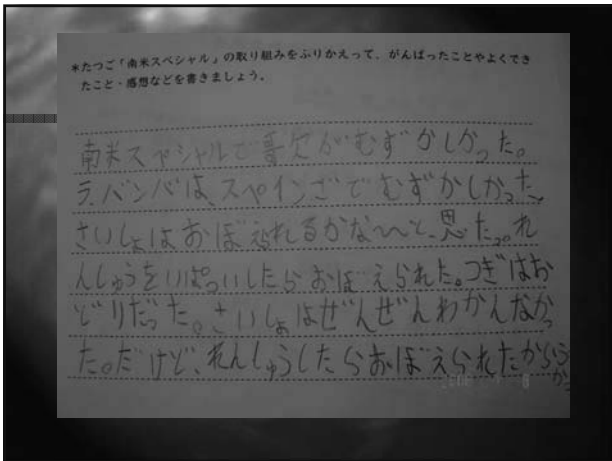




メロディアス デ アメリカ



ラ バンバ





## まとめ

- 1, 写真(できればビデオ)
- 2, 実物(楽器、衣装、特産物、お面やかぶり物)
- 3, ダンスや料理、民族楽器を習う
- 4, 日本に戻ってからアンテナを張ろう



# プログラム 6

## JICA の教育協力と JOCV の現地活動の連携

佐久間潤

(JICA 人間開発部次長兼基礎教育グループ長)





主な内容 —

1. 途上国の教育の現状
2. JICAの基礎教育協力
3. JICAボランティア活動との連携

# 1. 途上国の教育の現状

1990年以降の、国際社会が一丸となったEducation for All (EFA)の取り組みにより、  
開発途上諸国の基礎教育は近年急速に拡大

世界全体の初等教育の純就学率は  
1991年の79%から2007年には86%へ

サブサハラアフリカにおいても91年の48%から07年には73%へ

しかし…

セネガル

開発途上諸国ではなお…

- 小学校に通っていない学齡児童数は72百万人、アフリカに32百万人、南西アジアに18百万人
- 途上国の学校在籍年数は10.4年（先進国では15.8年）
- 小学校を卒業できるのは、入学児童の4人に3人
- 最貧国では、小学1年生の3分の2がドロップアウト
- 15歳以上人口の7.59億人は非識字者。その3分の2は女性

ニジェール

学校に行けない、行かない、卒業できない、  
その背景には…

- 紛争
- 貧困
- 児童労働
- HIV/AIDS
- 多言語、多文化、多民族
- 女子教育への無理解
- アクセス
- 教育の質
- 教師の不足と無資格教員
- カリキュラムの不備
- 教科書や教材の不足
- 教員の給与と社会的地位
- 学校施設の不足
- 不十分な教育行政
- 財政難

ニジェール

### 学校の状況① ニジェール



### 学校の状況② セネガル



### 学校の状況③ スリランカ



### 学校の状況④ マラウイ



・木以外何もない学校。コミュニティからの支援も一切なし。現在、校舎の基礎を造っている。



### 理科実験室の様子 ケニア



## 3. JICAの基礎教育協力

### 3-1. どんな方針に基づいているか

- 初中等教育の就学率の向上(学校建設)
- 初中等教育の質の向上(教師教育)
- 教育におけるマネジメントの改善(学校運営改善)を中心に、ノンフォーマル教育や格差是正のための協力等にも取り組む。
- 地域的にはアフリカを重点
- 相手国の計画に基づき支援
- 現場から始めて、制度構築をめざす(点から面へ)

### ■ 初中等教育の就学率向上

#### <アプローチ>

- 無償資金協力による小中学校建設
- 教員の養成・確保、教材の整備・配布、コミュニティや家庭の理解促進
- ノンフォーマル教育



### ■ 初中等教育の質の向上

#### <アプローチ>

- 現職教員研修(INSET; in-service training)
- 教員養成(PRESET; pre-service training)
- 理数科教育を中心とした教授法の改善
- 教材や指導書、カリキュラムの開発
- 授業研究、授業観察



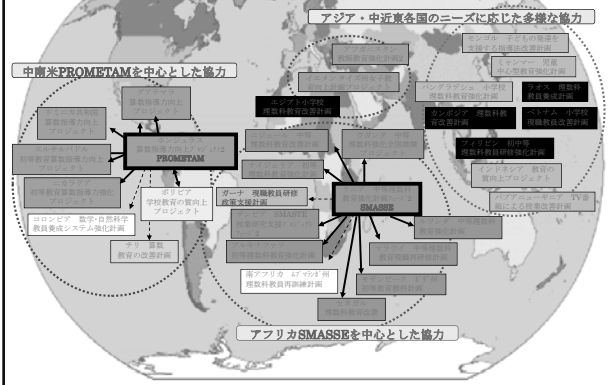
### ■ 教育におけるマネジメントの改善

#### <アプローチ>

- 学校運営委員会の強化
- 住民参加の学校運営改善
- 地方教育行政強化

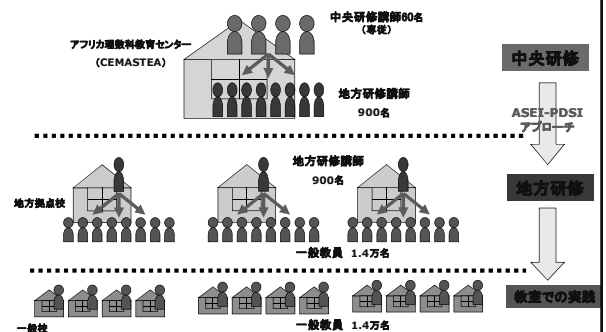


### 事例1. 理数科教育改善プロジェクトの展開



### 事例1-1. 現職教員研修(INSET)制度の構築

#### <ケニアSMASSEの例>





### 事例1-2. ASEI-PDSIアプローチによる授業改善 (SMASSE)

＜教員が変わり、授業が変わり、生徒が変わる！＞

#### ● ASEI-PDSI アプローチ

Activity 活動に基づいて知識を得る授業

Student 教師中心の授業から生徒中心の授業

Experiment 講義中心から実験や教育方法を工夫した授業

Improvisation 身近な教材を使った小さな実験のある授業

#### ● Plan-Do-See-Improvement

計画、実施、評価、改善というサイクル

例) 授業計画作成から評価、フィードバック・改善を行う

### 事例1-2. 授業研究を探り入れているプロジェクト例

- ザンビア SMASTE授業研究支援プロジェクト
- モザンビーク ガザ州初等教育強化計画
- ボリビア 学校教育の質向上プロジェクト
- チリ 算数教育の改善
- モンゴル 子どもの発達を支援する指導法改善計画
- バングラデシュ 小学校理数科教育強化
- インドネシア 教育の質向上プロジェクト



### 事例1-3. 教師用指導書や学習教材の作成支援

- 中米カリブ広域算数教育協力  
(ホンジュラス、エルサルバドル、ニカラグア、グアテマラ、  
ドミニカ共和国「算数大好き！プロジェクト」)
- アフガニスタン 教師教育強化
- ミャンマー 児童中心型教育強化
- バングラデシュ小学校理数科教育強化計画
- モンゴル 子どもの発達を支援する指導法改善
- パプアニューギニア TV番組による授業改善計画





## 事例2. 日本の教育経験を伝える

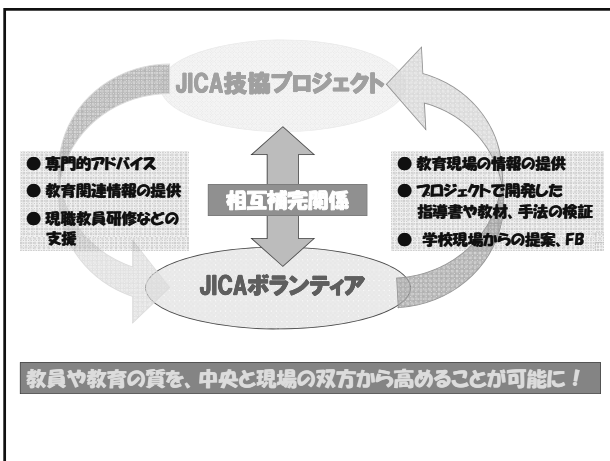
＜本邦への研修員受入れ～課題別研修コースの例～＞

研修コース名	協力機関	サブセクター
仏語圏アフリカ「教育行政」	広島大学高等教育研究開発センター	教育マシナリ
中等教育開発Ⅱ	名古屋大学大学院教育発達科学研究科	教育マシナリ
中等科学教育実践Ⅱ	広島大学教育学部	教員研修
学校評価	あいち小児発達医療センター	教員研修
女性の教育推進セミナーⅡ	国立女性教育会館	女子教育
障害児教育(中・南米)	筑波大学教育開発国際協力センター	特殊教育
初等中等教育・数学教育向上(南太平洋)	専門教育大学	教員研修
小学校における理科実践教育(南アジア)	帯広市教育委員会	教員研修
幼児教育(中・西アフリカ)	お茶の水女子大学	ECD
日本の教育経験(中米)	筑波大学教育開発国際協力センター	教育マシナリ
サブ・サハラアフリカ地域における学校運営改善	金沢大学教育学部	教育マシナリ
アフリカ紛争後復興期における教育開発	大阪大学大学院人間科学研究科	教育マシナリ
基礎教育における教育格差是正	沖縄県教育委員会、琉球大学	教育マシナリ
初等理科教授法	北海道教育大学	教員研修
地方教育強化(GMASSE-WECSA)	札幌市教育センター	教育マシナリ
中・南米地域学校運営改善	筑波大学	教育マシナリ
小学校理数科教育改善(中東諸国)	専門教育大学	教員研修
ノンフォーマル教育拡充	広島大学	NFE

### 3. JICAボランティア活動との連携

#### 3-1. 技術協力とJICAボランティア

- JICA技術協力はー
  - ・相手国の政策や方針に基づき
  - ・様々な関係者と共に明確な目標や成果を想定し
  - ・達成のための方法論やフレームを定めた上で
  - ・計画的に活動を行う
- JICAボランティアはー
  - ・ボランティア自身の意志に基づき
  - ・これまでに培った知識・技術、経験を活かしつつ
  - ・現場の仲間、同僚と共に出来る限りの範囲で
  - ・現場のニーズや課題に創意工夫をもって取り組む



#### 3-2. 連携事例: バングラデシュ小学校理数科教育計画



### 3-3. 連携事例:

#### ニジェール中等理数科教育強化計画



### 3-4. 連携事例:

#### 他にも多くの事例が!

- ニジェール住民参加型学校運営改善計画(「みんなの学校」)
- ケニア中等理数科教育強化計画他(SMASSE)
- 中米カリブ広域算数教育協力(「算数大好き!」)
- ボリビア学校教育の質向上プロジェクト(PROMECA)
- パプアニューギニアTV番組による授業改善(EQUITV)

……などなど

## 最後に・・・

- 途上国の人々は能力がないのではなく、機会を奪われているだけ。
- 単にモノや金をあげることは支援の本質ではない。途上国支援とは、人々に機会を提供し、行動変容を起こすこと。
- それ故に、日本の価値観の押し付けであってもいけない。現地の人々の価値観や考えを尊重し、行動することが重要。

## <基礎教育協力についてさらに詳しく知りたい方は>

### ■ JICAの教育協力について:

JICA HP>事業案内>課題別取組み>教育

<http://www.jica.go.jp/activities/issues/education/index.html>

### ■ 外務省の教育協力政策

外務省HP>外交政策>ODA

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/bunya/education/initiative.html>



# プログラム 7

## 派遣現職教員支援事業の活動事例

国際協カイニシアティブアーカイブス：  
派遣中に役立つコンテンツの紹介

磯田正美

(筑波大学 教育開発国際協力研究センター 准教授)



文部科学省 拠点システム構築事業「国際教育協力イニシアティブ」  
<http://www.criced.tsukuba.ac.jp/jocv/>

ならでは      皆さんのため      他の人のため

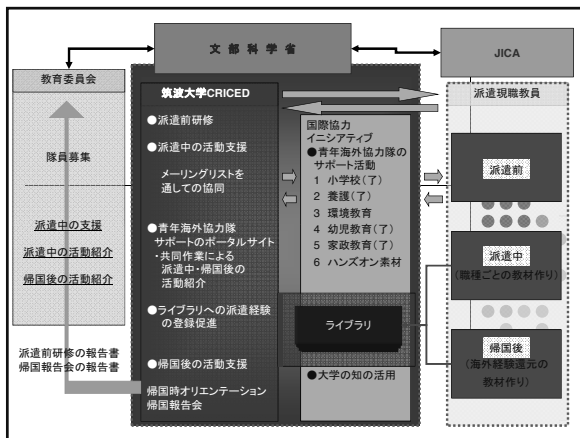
## 青年海外協力隊派遣現職教員のサポート



筑波大学教育開発国際協力研究センター(CRICED)

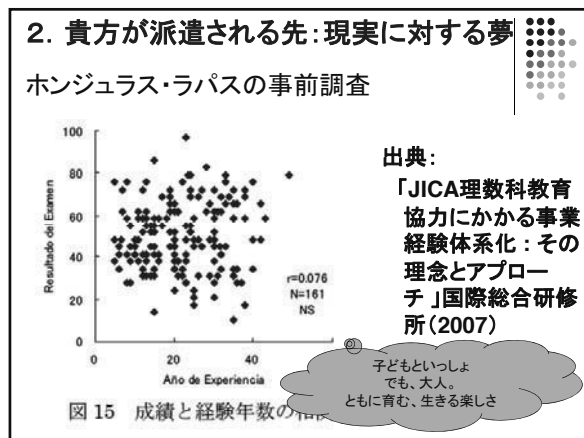
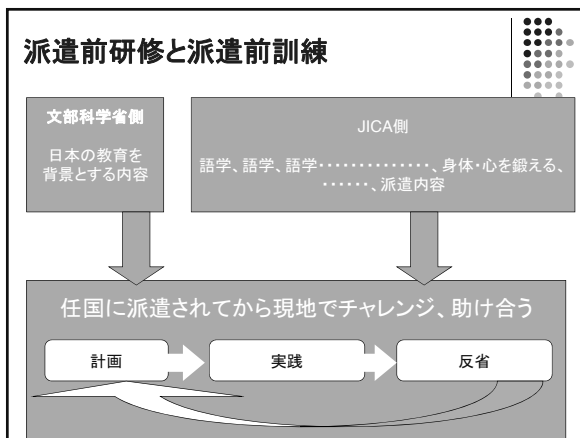
話題にしたいこと：  
**貴方のチャレンジ、チャレンジする先生が、その背中で子どもを育てる**

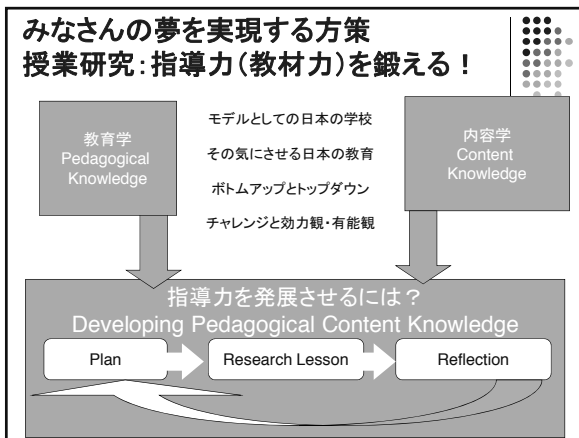
- CRICEDの役割
- 心の準備
- 楽しみなこと
- Visibleにすることの重要性



目的  
 派遣前、派遣中、帰国後における派遣現職教員の活動への継続的な支援体制を築くとともに、支援に関わるリソースならびにモデル事例の開発を行う。加えて、各採択課題による支援の実施を調整する。

- 派遣現職教員ならではの活動をいかに支援するか？
- その活躍の意義をいかに伝え、広め、活かす場作りを応援するか？
- 各課題といかに連携するか？
- 現職教員に限らず、広く国際教育協力で役立つ情報をいかに提供するか？





- 日本の学校、学習指導を知る 貴方しかできないこと**
- 現職教員ならずとも誰にも大切なこと
- チャレンジ、人のつながり、心の交流・・・
- 現職教員ならではの
- 大切な日本での教育経験/日本の学術/現場力/教材力
  - 逆転の発想で、相手の立場で認める海外の教育
  - 任地での協力隊員の要としての現職教員
    - 現職教員のノウハウを一般隊員へ
    - 現職教員のノウハウを任地で
  - 帰国後の還元



### 4. メーリングリストでの協同

海外でご活躍の先生方へ

ケニアの教科書は普通に書店で購入可能です。「何年生の何の科目の教科書」が必要なのか指定いただければ、購入は可  
**JICA経由** あるいは **タンザニアの理数教科書**です。  
**タンザニアの教科書**は、書店で購入できます。また、**タンザニアの小学校の教科書**は、スワヒリ語です。  
**10000円** 程度です。  
**Suzuki Yuji** (suzuki@nifty.com) 宛にメールしてください。

日本は寒くなってまいりましたが、さて、今日は、海外の小学校教科書をお尋ねします。国によって教科書が異なるので、入手できるかどうか、費用は著払いで可能でしょうか？

田中純哉 (Toji Tanaka) 〒305-8572 つばき南天  
 Tel: 03(3946)11392-4(月-金)  
 携帯: 03(3946)11392-4(月-金)  
 Fax: 03(3946)5746(月-金)

From: whhel@hotmail.co.jp  
 Subject: [ejcv-m]0353] Re: 貴校大御所からお願いです。  
 Date: 2006年11月27日 7:27:03 JST  
 To: ejcv-m@criced.tsukuba.ac.jp  
 Reply-To: ejcv-m@criced.tsukuba.ac.jp

15年1次版、パナマ共和国、小学校教諭の渡邊です。パラグアイでは、公立に関しては指定書がありますが複数の出版社から出版されているため、数種類でもよいものが手に入ります。また、日本語に1冊の値段がそれほど安くないので送料と合わせて費用負担の問題さえクリアできればご協力できると思います。

### 5. 役立つ情報を登録し、共有する。

「国際協カインシアティブ」ライブラリ

国際協カインシアティブの成果を共有するための国際協カインシアティブのライブラリです。国際協カインシアティブの成果を共有するための国際協カインシアティブのライブラリです。国際協カインシアティブの成果を共有するための国際協カインシアティブのライブラリです。

http://e-archives.criced.tsukuba.ac.jp/

「国際協カインシアティブ」ライブラリ

国際協カインシアティブの成果を共有するための国際協カインシアティブのライブラリです。国際協カインシアティブの成果を共有するための国際協カインシアティブのライブラリです。国際協カインシアティブの成果を共有するための国際協カインシアティブのライブラリです。

Elementary School and Lower Secondary School Teaching Guide for the Japanese Course of Study: Arithmetic and Mathematics (Grade 1-9)

2006年2月

代表者: 嶋田正実 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)

Chapter 1. General Review

1. Background of This Revision

This revision is based on the background of the current curriculum, which has been revised to reflect the latest educational trends and the needs of the 21st century. The revision aims to provide a comprehensive and up-to-date teaching guide for the Japanese course of study in arithmetic and mathematics for elementary and lower secondary schools.

### 役立つ情報が、先輩から次世代の貴方に届く！

#### ボール運び

1. 目的: ボール運びの練習。  
 2. 準備: ボール、マット。  
 3. 手順: 全員で協力してボールを運ぶ。ボールが落ちたら、みんなで協力して拾い上げる。  
 4. 感想: ボール運びは、チームワークが大切だと感じた。みんな協力して頑張ることができた。

4. Vở bài học: **Tên bài học:** **Tên môn học:** **Thời gian học:** **Địa điểm học:**

5. Quy định: **Quy định:** **Quy định:** **Quy định:**

6. Mục đích: **Mục đích:** **Mục đích:** **Mục đích:**

7. Nội dung: **Nội dung:** **Nội dung:** **Nội dung:**

Objective: Make their body stronger. Run over weak points.

Activities/Questions: **Activities/Questions:** **Activities/Questions:** **Activities/Questions:**

Equipment: **Equipment:** **Equipment:** **Equipment:**

金子由里 2004 ペリーズ

工藤昭征2005 バングラデシュ

বিকাশন ডিজিটিক খেলা ও খেলনা ইত্যদি

উদ্দেশ্য: শিশু, ছোট শিশু, প্রবোধক, প্রেরণাদায়ক, সঙ্গীত(সংগীত)

কর্মসূচী: ১) গাছের ডাল কাটতে: ২) দুটি খিলি মিলিয়ে খিলি মিলিয়ে

৩) কাগজ কাটতে: ৪) মোড়ানো খিলি দিয়ে খেলনাগুলো তৈরি করা (খিলি দিয়ে খিলি মিলিয়ে খিলি মিলিয়ে)

身近な素材で実験

কিনয়: খিলি দিয়ে খিলি মিলিয়ে খিলি মিলিয়ে খিলি মিলিয়ে খিলি মিলিয়ে

মন্তব্য: খিলি কাটতে খিলি কাটতে খিলি কাটতে খিলি কাটতে খিলি কাটতে

২

---

বঙ্গালী!

নৌকা

1 2 3

৪ ৫ ৬

৭ ৮ ৯

১০

৩

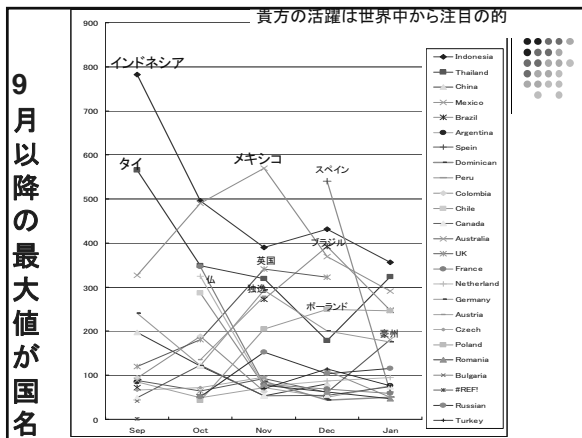
田代芳恵 2003

ぐに器せるようになるそうですよ。

では、北条門小学校の皆さん、4月に会いましょう。

住所 Apartado Postal #185 Dush, El Paraiso, Honduras, C.A.

ホンジュラスより 田代芳恵先生



Top 50 of 1639 Total URLs

#	Site	Visits	URL
1	14878	890877	www.dailymail.com
2	8690	180483	www.dailymail.com
3	8191	96384	www.dailymail.com
4	1083	1797	www.dailymail.com
5	1399	7469	www.dailymail.com
6	1286	91497	www.dailymail.com
7	1150	1763	www.dailymail.com
8	863	15980	www.dailymail.com
9	860	808	www.dailymail.com
10	770	1891	www.dailymail.com
11	770	1747	www.dailymail.com
12	678	16979	www.dailymail.com
13	682	476	www.dailymail.com
14	609	184716	www.dailymail.com
15	470	98685	www.dailymail.com
16	439	131876	www.dailymail.com
17	344	6660	www.dailymail.com
18	307	464	www.dailymail.com
19	371	100	www.dailymail.com
20	370	88100	www.dailymail.com
21	351	10881	www.dailymail.com
22	340	2888	www.dailymail.com
23	308	4181	www.dailymail.com
24	348	988187	www.dailymail.com
25	348	3074	www.dailymail.com
26	309	4181	www.dailymail.com
27	300	4894	www.dailymail.com

Vamos a hacer una pila de combustible. Experimento de cómo construir una pila de combustible, cómo se relaciona con el concepto de hidrógeno.

Los gases pueden ser utilizados para hacer una pila de combustible.

Para hacer una pila de combustible se necesitan los gases. Después de esto, se pueden utilizar para hacer una pila de combustible.

Para hacer una pila de combustible de tamaño pequeño y ligero.

1. Limpiar la superficie de la pila de combustible y asegurarla. 2. Dejarla en una habitación oscura y húmeda.

順位	情報名	ヒット数	種別	掲載
1	住民参加型学校運営に関する教育協力についての調査研究	617	論文	教育
2	子どもたちの「居場所」と対人世界の現在	606	論文	教育
3	ニジェール共和国での教育活動とその課題	583	口情報	JVOV支援
4	途上国の教員を対象とした環境教育研修とその国際教育協力 物語集	549	○書集	環境教育(学芸)
5	Community-based Basic Education Improvement Project	508	▽報告	ライフスキル教育
6	フレーベルとモンテッソーリの保育思想、保育構造、内容、方法の比較研究	477	●論文	幼児教育
7	幼児の生活における感情と感性の育成	441	●論文	幼児教育
8	4年生授業記録(算数)	437	◎実践	JVOV支援
9	(ビデオ配信日本語)インドネシアの特別支援教育開発に関する教育協力研究-	432	◎実践	障害児教育
10	保育における身体知の獲得の過程	417	●論文	幼児教育
11	エルサルバドルでの数学グラフィックエアGRAPEの活用	412	◎実践	JVOV支援
12	障害のある子どもの教育相談ガイドブック	407	◎書集	障害児教育
13	幼稚園教育の在り方についての実践的調査研究	406	●論文	幼児教育
14	教育課程編成と実践一研修のためのヴィジュアル教材(日本語版スライド集)	389	◎書集	教育経営・研修
15	1年生授業記録(算数)	385	◎実践	JVOV支援
16	日本の学校制度の概要一研修のためのヴィジュアル教材(日本語版スライド集)	377	◎書集	教育経営・研修
17	3年生授業記録(算数)	375	◎実践	JVOV支援
18	文部科学省 幼保小連携調査研究開発事業(H12-14)	364	◎実践	幼児教育
19	小・中学校教員の現状と資質向上政策	347	●論文	算数・数学教育
20	サンピアにおける教員養成学校での数学教材(内容の体系的最大値)	342	◎実践	JVOV支援
21	バハマ国ウラカ高校へ数学授業への GRAPE の導入	328	◎実践	JVOV支援
22	Japanese Course of Study-算数指導要領英訳訳(Grade 1-6)Part 5	325	▽資料	JVOV支援
23	できごこの協同形成過程における幼児の進歩的行動の認知制-社会的役割に関する研究	321	●論文	幼児教育
24	2年生授業記録(算数)	320	◎実践	JVOV支援
25	マーシャル人の計算能力について	315	口情報	JVOV支援

6. 派遣中・帰国後の活動 平成18年11月11日

「国際理解教育」モデル事例 朝日新聞神奈川

● 派遣現職教員であればこそ実現する「国際理解教育」モデルの提案

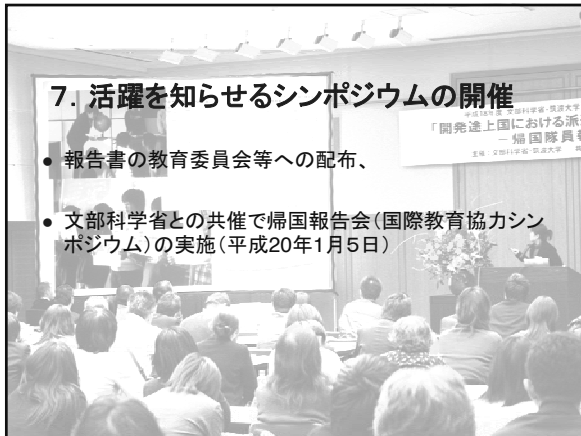
● インターネットを利用した国際交流授業を2カ国で実施

● 制約のあるインターネット環境に準じた指導計画や日本側と相手国側の協働を促す人的ネットワーク作りを経て、「国際教育」のモデル事例を開発

【インターネットライブ授業】  
バヌアツ: サントイースト小学校(17次: 秋山喜代)  
日本側横浜: サツ沢小学校(16次: 追田陽子)  
ベトナム: ニンソン小学校(17次: 真田昇)  
日本側平塚: 松原小学校(16次: 清水大祐)

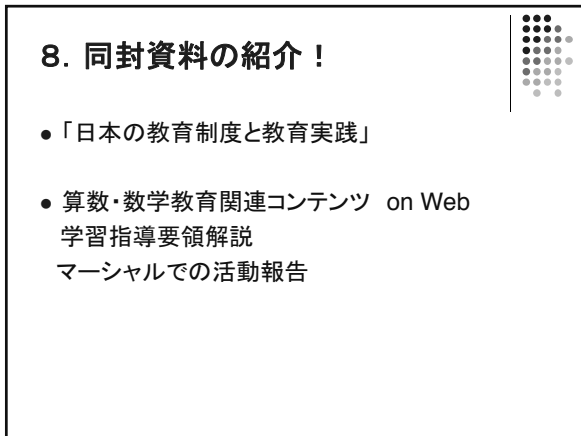
ネットで交流授業

4年生同士、文化や習慣紹介



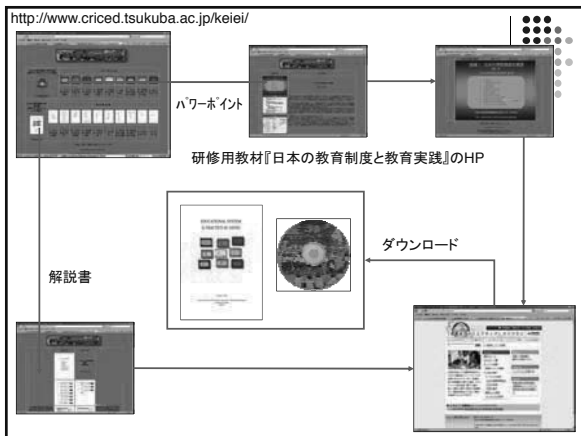
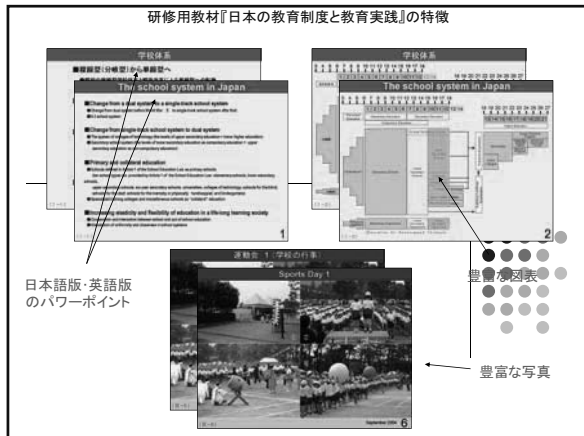
### 7. 活躍を知らせるシンポジウムの開催

- 報告書の教育委員会等への配布、
- 文部科学省との共催で帰国報告会(国際教育協力シンポジウム)の実施(平成20年1月5日)



### 8. 同封資料の紹介！

- 「日本の教育制度と教育実践」
- 算数・数学教育関連コンテンツ on Web  
学習指導要領解説  
マーシャルでの活動報告



### 用途別の資料の使い方

用途	参考資料 NO.
・授業研究について紹介する、実践の参考にする	1. 4. 5. 6
・日本の特別支援学校の教育(視覚障害、聴覚障害、知的障害)を紹介する、実践の参考にする	2. 3. 6
・通常学校での特別支援教育、インクルージョン教育(特別支援学級、幼稚園)を紹介する、実践の参考にする	4. 5
・途上国における教育実践を紹介する、実践の参考にする	1
・さまざまな障害のある子ども達の図画工作作品等を紹介する、実践の参考にする	7. 8.

## 算数・数学教育、情報教育関連コンテンツ

冊子「途上国と日本の算数・数学教育」pp.96-100

<http://math-info.criced.tsukuba.ac.jp/>



## 役立つコンテンツ: その一部

◎モデル授業を紹介する。

筑波大学附属小学校算数授業ビデオ多数、配信中(英語、スペイン語字幕入り)

<http://www.criced.tsukuba.ac.jp/math/video>

◎コンピュータを教室で使う。

無料で、マックでも、ウインドウズでも、ユニックスでも使えるソフト(作図ツール、グラフツール)を、どこからでもダウンロードできる!

小学校でも使えるe教科書ができる。

<http://math-info.criced.tsukuba.ac.jp/software/>

◎世界に通用する。

海外出版され、海外で手に入る日本の授業研究教科書:

日本語版、英語版(ビデオ付き)、スペイン語版(さらに増補)

## 話題にしたこと

- 私達の役割: つなぐこと
- 心の準備: 問い「派遣現職教員ならでは」
- 楽しみなこと: チャレンジ
- 内容の改善の重要性  
派遣前 所在を調べて、存在を知って、でかけてほしい!  
派遣中 発信、財産

# プログラム 8

ユネスコスクール  
持続可能な発展のための教育(ESD)について

浅井孝司  
(文部科学省 大臣官房国際課 国際協力政策室長)



## 持続発展教育(ESD)と ユネスコスクールの活用について

ユネスコスクール研修会 in 島根  
2011年1月6日

文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室長(日本ユネスコ国内委員会事務局次長)  
浅井 孝司



- ◆ 持続発展教育(ESD)について
- ◆ ESDIに関する我が国の取組
- ◆ ユネスコスクールとは
- ◆ 今後の展開

2

### 持続発展教育 (ESD)について(1/3)

Sustainable Development (持続可能な発展)とは…

「将来の世代が自らのニーズを充足する能力を損なうこと  
なく、今日の世代のニーズを満たすこと」

※ 国連「環境と開発に関する世界委員会(ブルントラント委員会)」  
報告書『我ら共通の未来(Our Common Future)』(1987年)  
における定義

持続発展教育(ESD)とは…

「持続可能な社会の担い手を育む教育」

⇒ 持続可能な社会を構築するための人づくり

3

### 持続発展教育 (ESD)について(2/3)

**国連持続可能な発展のための教育の10年**  
(United Nations Decade of Education for  
Sustainable Development)

- 2002年 ヨハネスブルクサミットで我が国が提案
- 2002年 国連決議(第57回総会)
  - ・ 2005～2014年の10年
  - ・ ユネスコを主導機関に指名
- 2005年 DESD国際実施計画をユネスコにて策定

全体目標：持続可能な開発の原則、価値観、実践を、教育と学習  
のあらゆる側面に組み込んでいくこと

4

### 持続発展教育 (ESD)について(3/3)

#### 国際実施計画

(IIS: International Implementation Scheme)

※ ユネスコがとりまとめたDESDの戦略文書

- 全体目標：持続可能な開発の原則、価値観、実践を、  
教育と学習のあらゆる側面に組み込んでいくこと
- 基本的ビジョン：誰にとっても教育から恩恵を受ける機  
会、持続可能な未来の構築と現実的な社会転換のため  
に必要な価値観、行動やライフスタイルを学習する機会  
がある世界

5

### なぜ、ESDが必要なのか — 教育におけるESDの必要性

～ Education for Sustainable Development ～

**【ESDの教育的意義】～体験とつながりの再構築**

- 環境問題～温暖化、酸性雨、生態系危機の解決
- 国際理解～多文化理解、国際協調、平和の構築
- 学力問題から～生きる力、PISA型学力の育成
- 心の問題から～不登校、いじめ等の解決、発達
- 社会問題から～社会秩序の回復と地域の再生

宮城県気仙沼市立中井小学校養頭  
及川幸彦氏プレゼン資料を一部改  
変

## ESDで育む生きる力

- ・ 人格の発達や自律心、判断力、責任感などの人間性を育む
- ・ 他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「つながり」を尊重できる個人を育む

↑  
自ら課題を見つけ、主体的に判断し、行動し、  
よりよく問題を解決する資質や能力を養う

(銭谷前文部科学事務次官の講演より)

7

- ◆ 持続発展教育(ESD)について
- ◆ ESDに関する我が国の取組
- ◆ ユネスコスクール
- ◆ 今後の展開

8

## ESDに関する我が国の取組

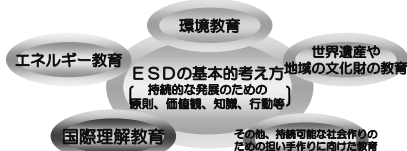
- 2005年 内閣官房に関係省庁連絡会を設置
- 2006年 DESD国内実施計画を策定

### 基本的考え方(国内実施計画)

ESDは、持続可能な社会づくりの担い手となるよう個人を育成する教育。

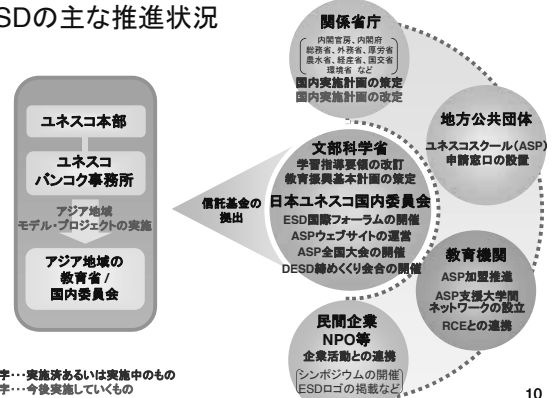
特に、

- ・ 人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと。
- ・ 個人が他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性の中で生きており、「関わり」、「つながり」を尊重できる個人を育むこと。



9

## ESDの主な推進状況



10

## ESDに関する文部科学省の取組 (1/4)

### 日本ユネスコ国内委員会

- 2003年 「国連持続可能な開発のための教育の10年」に関してユネスコが策定する国際実施計画への提言
- 2007年 「持続可能な開発のための教育の10年」の更なる推進に向けたユネスコへの提言
- → 同年第34回ユネスコ総会でESD推進のための決議へ
- 2008年 持続発展教育(ESD)の普及促進のためのユネスコスクール活用について(提言)

※ 2008年までESDは「持続可能な開発のための教育」を多用してきたが、より一層の普及のため、「持続発展教育」と改め

11

## ESDに関する文部科学省の取組 (2/4)

### 「持続発展教育(ESD)の普及促進のためのユネスコスクール活用について(提言)」

- ◆ ユネスコスクール参加のメリット
  - ・ ユネスコスクールへの支援の充実
  - ・ 事務局機能の強化による支援体制の充実
- ◆ わかりやすい登録システム
- ◆ 活動資金等の充実

12

### ESDに関する文部科学省の取組(3/4) 学習指導要領の改訂(2008年3月公示)

- ▶ 中央教育審議会答申「学習指導要領等の改善について」(2008年1月)  
「持続可能な発展」、「持続可能な社会の構築」が求められている状況に鑑みた改善の実施
  - 一 教科等を横断して改善(環境教育、ものづくり教育)
  - 一 各教科・科目等の内容の改善(社会、地理歴史、公民、理科、技術・家庭)等
- ▶ 新学習指導要領(2008年3月、2009年3月)  
小学校学習指導要領の総則や理科、社会、中学校学習指導要領の理科、公民、地理、高校学習指導要領の地理歴史、公民などに持続可能な社会の構築の観点が盛り込まれている※  
※ユネスコスクールHP参照([http://www.unesco-school.jp/?page\\_id=637](http://www.unesco-school.jp/?page_id=637))

### ESDに関する文部科学省の取組(4/4)

#### 教育振興基本計画の策定(2008年7月)

- ▶ 今後5年間に総合的かつ計画的に取り組むべき施策  
いつでもどこでも学べる環境をつくる  
持続可能な社会の構築に向けた教育に関する取組の推進
  - ・ 一人一人が地球上の資源・エネルギーの有限性や環境破壊、貧困問題等自らの問題として認識し、将来にわたって安心して生活できる持続可能な社会の実現に向けて取り組むための教育(ESD)の重要性について、広く啓発活動を行う・・・。
  - ・ 特に、ESDを主導するユネスコの世界的な学校ネットワークであるユネスコスクール加盟校の増加を目指し、支援する。

- ◆ 持続発展教育(ESD)について
- ◆ ESDに関する我が国の取組
- ◆ ユネスコスクール
- ◆ 今後の展開

### ユネスコスクールとは

ユネスコ憲章に示されたユネスコの理想を実現するため、平和や国際的な連携を实践する学校

#### ◆ 参加資格

- ▶ 就学前教育・小学校・中学校・高等学校・技術学校・職業学校、教員養成学校、特別支援学校等(国公立を問わず)
- ▶ ユネスコの理念に沿った取組を継続的に実施していることが必要

### ユネスコスクールとESD

#### ESDのテーマ

- ・ 環境教育
- ・ 国際理解教育
- ・ エネルギー教育
- ・ 世界遺産・地域の文化財等に関する教育
- ・ その他、持続可能な社会づくりのための担い手づくりのための教育

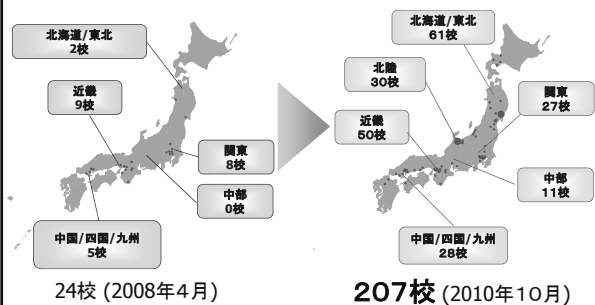
テーマが一致

ユネスコスクールとESDの一体的推進

#### ユネスコスクールの研究テーマ

- ・ 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- ・ 人権、民主主義の理解と促進
- ・ 国際理解教育
- ・ 環境教育
- ・ その他、ユネスコの理念に沿ったテーマ

### ユネスコスクール加盟校数の現況



## ESD/ユネスコスクール支援体制の充実

### ユネスコスクール支援大学間ネットワーク (ASP UnivNet)

- ▶ ユネスコスクールの活動支援等を目的とした大学間ネットワーク
- ▶ 宮城教育大学の呼びかけにより、2008年12月に発足
- ▶ 北海道教育大、岩手大、東北大、宮城教育大、玉川大、金沢大、三重大、奈良教育大、大阪府立大、鳴門教育大、岡山大、九州大の12大学が参加
- ▶ 今後、各大学が連携しつつユネスコ・スクールの活動支援を実施



19

## ユネスコスクールへの支援

### ユネスコスクール ウェブサイトの設置

ユネスコスクール加盟校増加やネットワーク強化、ESDの理解増進を図ることを目的に、ウェブサイトを設置 (平成21年3月～)

### コンテンツ

- ▶ ESDやユネスコスクールに関する基本情報の発信
- ▶ ユネスコスクール間の情報交換等の場の提供
- ▶ 優良事例や教材等の紹介 等



ユネスコスクールウェブサイト  
<http://www.unesco-school.jp/>

20

## ユネスコスクール加盟のメリット

- ▶ 世界のユネスコスクールの活動情報の提供
- ▶ 世界のユネスコスクールと交流する機会の増加
- ▶ 米国、韓国、中国等海外との教員交流
- ▶ 世界の教育事情、国連機関の活動の把握
- ▶ ESDのための教材、情報の提供
- ▶ ユネスコスクールHPを通じた情報交換
- ▶ ワークショップ、研修会への参加
- ▶ 国内の関係機関との連携強化

国際交流の機会の増大

国内の連携強化

事業例: ユネスコスクールESDアシストプロジェクト助成金  
日本ユネスコ・パートナーシップ事業  
ESD日米教員交流プログラム

21

## 企業におけるユネスコスクールへの支援

### ▶ ユネスコスクールへのプレートの寄贈



(「ユネスコスクール」の表記変更に伴い、プレートの表記も今後変更予定)

ユネスコスクール加盟校に対してプレートを贈呈

### ▶ ESD関連の教材提供

環境教育用教材や国際理解教育用教材など様々な教材が企業により作成され学校に配布されている。



小学生向けに編集した環境教育用教材「kids X change」(キッズ・エクステンション)

### ▶ ユネスコスクールへの支援事業

ユネスコスクールESDアシストプロジェクト助成金

助成の対象: 国内全てのユネスコスクール加盟校  
助成金額: 1校あたり10万円を上限

<http://www.unesco.jp/contents/help/esd.html>

### ▶ ESDロゴマークのホームページなどへの掲載



私たちはESDを応援しています。  
ESDは持続可能な社会づくりを目指す活動です  
(ESD: Education for Sustainable Development)

ESDロゴマーク (ESDに賛同いただける企業が広告、冊子、パンフレット及びホームページへの掲載をおこなっている。)

22

- ◆ 持続発展教育(ESD)について
- ◆ ESDに関する我が国の取組
- ◆ ユネスコスクール
- ◆ 今後の展開

23

- ・ユネスコスクールの拡充を通じて、現場レベルでの持続発展教育(ESD)の取組を促進し、優良事例を蓄積
- ・持続発展教育(ESD)の世界的取組を促進

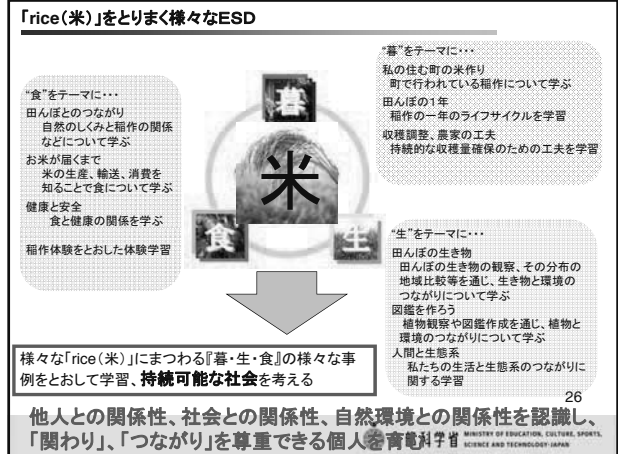
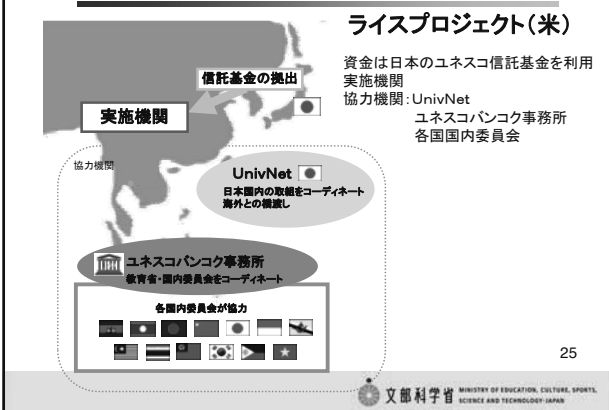


世界  
・世界的なパートナーシップの構築促進  
・持続発展教育(ESD)の世界的取組の促進

日本から世界のネットワークへの発信

国内  
・教材・カリキュラムの集積  
・優良事例の蓄積  
・パートナーシップの構築促進

## アジア地域ESDグッドプラクティス構築プロジェクト(案)



### お問合せ先

文部科学省国際統括官庁  
 (日本ユネスコ国内委員会事務局)  
 TEL:03-5253-4111(代表)  
 FAX:03-6734-3679  
 E-mail: [jpnatcom@mext.go.jp](mailto:jpnatcom@mext.go.jp)  
 URL: <http://www.mext.go.jp/unesco/index.htm>

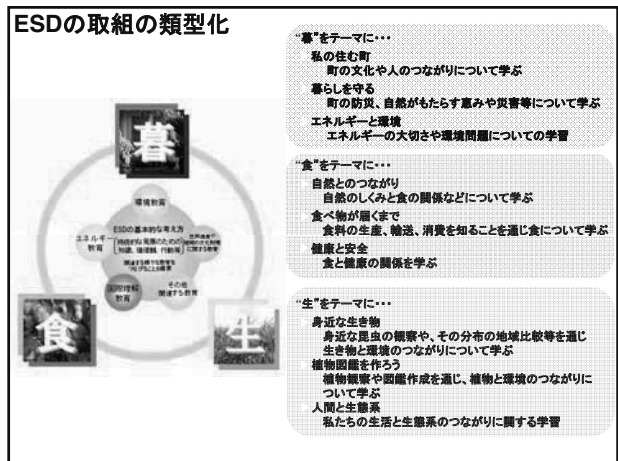
28

文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN

### 参考

29

文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN



ESDカレンダー 東京都江東区 東雲小学校

【小学4年生】 学年、年間計画・行事にあった内容を一緒に作っていくのがベスト

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
国語	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
算数	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
理科	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
社会	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
道徳	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
総合	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
体育	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
音楽	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
美術	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
外国語	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
特別活動	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
学校行事	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
その他	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

ESDカレンダー 奈良県 奈良教育大学付属中学校

奈良教育大学附属中学校ESDカレンダー

学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
国語	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
算数	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
理科	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
社会	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
道徳	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
総合	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
体育	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
音楽	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
美術	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
外国語	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
特別活動	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
学校行事	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
その他	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

ESDの取組例 宮城県 気仙沼市立面瀬小学校

海外との「共同学習」による地球的視野の育成

国際交流としての取り組みの一例

日米の水辺環境と人々の生活(マスターティーチャープログラム)

【目標】地球的視野を育むとともに、積極的な環境行動への基礎を養う。  
【活動】日米両地域の環境をテーマに観察、調査、採集、飼育などの体験をし、ICTを活用して米國小学校と学習交流を展開。

気仙沼市立面瀬小学校	(米国)ウイコンシンリケン小学校
自然と祭プロジェクト	Halloween & Moon Festival
野菜栽培プロジェクト	School Lunch & Food systems
BUGSマッププロジェクト	Muir woods soil & Insect Study
面瀬サンクチュアリ	Water Study (Creek Project)
海のミュージアム	Pathole Study & Fast Plants
環境未来都市	Box city - Terrace town 2004

Act Locally

(日本) 気仙沼市立面瀬小学校

Think Globally

インターネットテレビ会議

Think Globally

Act Locally

(米国) Callisburg Elementary School

文部科学時報

○平成21年度1月号(2010年1月)  
特集:ユネスコが創る未来  
～持続発展教育(ESD)～

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shuppan/jihou/detail/1287866.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/jihou/detail/1287866.htm)

○平成22年度5月号～3月号  
(2010年5月～2011年3月)

ユネスコスクールへようこそ

ユネスコスクールとは何か  
持続可能な開発教育(ESD)の推進

平成22年度5月号から全国のユネスコスクールを紹介記事が連載されています!

教材紹介

【参考教材】

- 「KidsXChange ～子どもが変われば、地球は変わる～」  
種類: 小学生用教材、指導用教材  
作成: ユネスコ/国連環境計画(UNEP)、協賛: 日本通運
- 「メビウス ～持続可能な循環～」  
種類: 取組事例集 <http://www1.miyako-u.ac.jp/renkei/mobius.pdf>  
作成: 気仙沼市教育委員会、宮城教育大学
- 環境教育指導資料[小学校編]  
種類: 取組事例集  
作成: 国立教育政策研究所  
作成: 気仙沼市教育委員会、宮城教育大学
- ESD教材活用ガイドー持続可能は未来への希望  
種類: 取組事例集・解説  
作成: ユネスコアジア文化センター

【筆者となる素材があるウェブサイト】

- 環境教育関係
  - ・環境教育・環境学習データベース: <http://www.eeel.jp/index.html>
  - ・子どもエコクラブ: <http://www.ecoclub.go.jp/>
  - ・えるえ 環境教育ライブラリー: <http://elife.miyako-u.ac.jp/>
- エネルギー環境教育関係
  - ・全国地球温暖化防止活動推進センター: <http://www.jccca.org/>
- 国際理解教育
  - ・国際協力クラブ: <http://www.apic.or.jp/plaza/odakyouzai.html>

【その他参考教材があるウェブサイト】

- 環境教育関係
  - ・自然大好きクラブ: <http://www.enw.go.jp/nature/nats/>
  - エネルギー環境教育関係
    - ・エネルギー環境教育情報センター: <http://www.icee.gr.jp/kyouza/index.html>
  - 国際理解教育関係
    - ・日本国際理解教育学会: <http://www.kokusarikai.com/3535>

# プログラム 9

派遣は2年。教師は一生。帰国後いかに活かすか

丸山一則

(豊岡市立港中学校 校長)



## 派遣は2年。教師は一生。帰国後いかに活かすか

丸山一則

(豊岡市立港中学校 校長)

---

豊岡市立港小学校から来ました丸山と言います。今年から校長にさせていただきました。教員生活 32 年、その中で最初は中学校に赴任になって、四年経過したところで日本人学校に行きました。香港の日本人学校です。結婚して 1 週間後で香港に行きましたが 3 年間の新婚旅行だなんてよくいわれたものです。40 階建てのマンションの 39 階に住んで、目の前にヴィクトリアハーバーをみながら。アパート代が 35 万円、夢のような日本人学校生活。これじゃいかんよ、思って、32 歳の時に嫁さんと二人の子どもを置いてホンデュラスに行きました。2 年間。でもこの 2 年間は確かに 10 年以上の価値があったと思っています。

そして帰ってきて小学校の先生になって、17 年中学校現場から離れていて、この春にまさかの中学校の校長。おいこんなんで大丈夫かな、と思いながらばたばたしながらこの 1 学期 2 学期が過ぎました。

校長って大変なんですよ。暇そうにしてるでしょ。校長室で。急に電話がかかってくるんですよ。今日も朝、電車に乗ろうとしたら電話が鳴って、「校長先生、すいません。交通事故です。」どっきりしました。「けがはありません」でほっとしたんですが。こないだは職員がくも膜下出血で倒れるしね。そんなことになったら辞職だと思いながらまあ子ども達は暴れないしね。案外いいなあと思いました。先生方の学校でははっちゃめちゃんな学校たくさんあったと思います。ご苦労様です。

話に入る時には必ずどんな人たちかっていうことを市場調査してから入った方がよくわかる話しができるので、学校ではありませんがちょっと市場調査をしたいと思います。この中で 4 月から訓練に入って、そして途上国に行くんだ！っていうのはこの中でどのくらいいるんですか。ちょっと手を挙げてください。つまり、現職派遣教員です。はいありがとうございます。その中で男性の方手をあげてください。はい、おろしてください。女性どうぞ。ずっと多いというのは昨日からわかっていますが。じゃあその中で現職で小学校だって言う方どのくらいいますか。小学校。やっぱり多いですね。中学校。はい。高等学校、幼稚園。幼稚園の先生はいいですよ。兵庫にもとってもいい幼稚園の先生いますけれど。

出身県を聞きましょう。兵庫県から。すばらしいですね。はいおろしてください。大阪。4, 5 人か。京都。はい。この人たちは仲間ですから、このまま一緒にやりましょうね。帰ってから。それ以外の関西。奈良、和歌山。はいどうぞ。鳥取県いますか。いませんね。困ったな。私兵庫から来ていますが、家は鳥取のすぐそばなんですよ。神戸に行くのに四時間かかります。

それからもう一つ。経験年数を聞いてみましょう。教師になって、正式に採用されて3年がこの三月で終わるよっていう人。恵まれてますね。3年で行かせてくれる所。はい4年か5年。これはいっぱいいますね。はい6年から9年。10年以上経験していますって人。はいご苦労さまです。体に気をつけましょうね。大体わかりました。

私は、日本人学校も協力隊もそして小学校も中学校も経験していますが、やっぱり協力隊活動が一番活かせるのは、はっきり言いましょ。小学校です。小学校が一番活かせる。最初にいっておきます。帰ってきてから高校や中学校の先生、小学校に移りたいと思います。それも一つの手だなと思っていますが、長い教員生活ですから、そんなことも人生の視野に入れながらちょっと話を聞いてください。

私はホンデュラスから帰ってきた時に、自分が田舎出身だということをとっても武器にしてみました。東京から来た隊員が自分の故郷は東京です。っていうとね、ホンデュラスの人間でも知ってますよ東京は。兵庫県浜坂ですっていうと誰も知らない。知らなくて当たり前なんです。あと3ヶ月間で、自分がいる町の自慢を10個、胸に秘めて、俺がいた所はこんなすばらしいところなんだぞ、っていえるようにしてから行ってくださいね。これは絶対必要です。協力隊に行くっていう時に、こういうことはよくいわれます。協力隊の先生って熱いんですよ。

でね、以前ロンドンの新聞広告にこんなのが出ました。「求む男子。至難の旅。わずかな報酬、極寒、暗黒の長い日々、耐えざる危険、生還の保証なし。」こんな新聞広告が出ると多分ここにいる人は血が騒ぐでしょ。そして、成功の暁には名誉と称賛を得る！なんて新聞広告が出たらですなぁ…これ誰が出したかっていうと、1934年に南極探検に向けて、出したのがサー・アメスト・シャクルトンという人です。アムンセンが南極点到達して、そのあとに南極を横断しようって探検に向かった奴ですね。志願者5000人集まったそうです。多分この人たちはみんな手を挙げる人です。エンデュランスゴ漂流なんていう本がありますが、これみるとわくわくすると思います。17か月、2年間にわたって南極の冬も乗り切って、そして27人全員が生きて帰ったっていう話ですね。帰った時にはですね、名誉と称賛を得たわけです。彼らは。2年間にわたって帰ったってね。

あなたたちにはどうでしょうか。名誉と称賛は人によります。いろんな隊員のOBをみてきました。あとあとになってやっとなる。隊員だったことを隠している先生って周りに多分いますよ。もう隊員であることを忘れたい。逆に、前面に出しすぎて浮いている先生っていませんか。これはもったいない話です。2年間の経験というのは本当に他では得難いものだっていうのが今日、昨日からずーっと聞いている事だと思います。

ところが実際にいるんですよ、病気になっちゃう人。それからほんとにやめちゃう人。私の同じ町でいましたよ。5年生担任をしていて、兵庫の人はわかると思いますが、自然学校が終わって7月1日に消えた人がいます。親もわからないどこにいったか。教育委員会校長大変。アフリカに戻ったそうです。絶対にやめてくださいね。こんなことは。こんな

ところの校長になったら生きた心地がしません私は。これはほんとの話です。一匹狼的なんですよね。で、組織の一員となることを嫌がる傾向がみなさんにはあります。あります。こうやって同じ教室にいますが、あまり隣の人と話さなかったり、俺は俺だ、私は私よーなんて人が実際多いのも事実。熱すぎるんですね。ところが、学校っていうのは組織じゃないですか、組織の中で生きていかなきゃいけない。私が一人で何かできないかなと思ってはいたけど、なかなかできない。じゃあ熱すぎるメンバーを集める組織がいるなあと思って、ずーっと思っていました。

そしてこういう会ができて、皆さんがここに集まっているのはとってもいい事だと思います。すばらしい。もう恵まれています。僕はこういう会ができないかなできないかなできないかなと思って、隊員から帰ってきて20年になります。ずーっと思っていました。で、自分で兵庫OB教員研究会というのを作りました。なかったから。こういう機会がなかったから。私達の教育現場を、活動経験を教育現場で活かそうと。一人でできることもありますが、一人じゃなくて横のつながりを持とうよ、ということで、協力隊やボランティアのメンバーやなんかを研究会を作ろうよと。

大体1年間に派遣される人数は80人、100人ですよね。で、あなたたち以外に、それから大学卒業してすぐ、教員になって帰ったらすぐ先生になるんだっていう人もいますよね。そういう人も含めて100人はいるだろうと思っています。で、私たちは年に3回兵庫OB教員研究会というのをやっています。

これ昨日やった佐藤先生が講演してくれた時の様子です。まあ30人くらい集まってね、自分達の活動や実践を報告しあっているんですよ。一昨日、25日の土曜日もJICA兵庫でやりました。とってもいい会で、みんなが1時半から6時まで休憩なし。がんがんにってやりましたよ。でもね、一人一人が意見を出し合って、私の実践はこうだ、ここからこんな風を感じた、こういうふうにやったらどうだろう。っていうことをやっていく中で、やっぱり元気になれるんですね。

ネットワークを作ったり、交流したり、今度は今からさっき手を挙げてくれた7人に先生達の支援をしようと思っています。それから帰国隊員で、帰国したら教員になろうという人にはどうしたら先生になりやすいの、なんてことをJICA兵庫や大阪のカウンセラーと一緒にこうやったらいいよ、逆にこんな人は先生にしない方がいいよ、っていうのもいわなきゃいけないなと思っています。協力隊員だからいい先生になると思ったら大間違いだ！ということも我々は思っています。

組織を作らなきゃいけないかなって思ったのは私が香港の日本人学校に行っていたからです。先生方ね、周りに日本人学校に行っていた先生っているでしょう。同じ学校にいる人、どのくらいいますか。いますよね。これは香港の日本人学校で3年生持った時の写真です。52人いました。賢いんですね。英語の実力テスト平均の偏差値、平均の偏差値ですよ、70ありますからね。一番悪い子が55でした。そんなメンバーです。でもね、確かに、外国

に行って先生をする、同じのように思います。ところが全く違うんだっていうことを今日はここではっきりさせていただきたい。日本人学校の先生が行くところは、大都会です。何の不自由もない。それどころか、まず学校組織がちがいますよね。日本と同じ教科書を使って、日本の教育プログラムの中で、学校教育の中でやっていきます。すべては日本と同じです。東京のどこかの附属中学校の教員をしているみたいだと思っていました。ただ周りの景色が違って日本じゃない。親が求めてきているのは高い大学に行く学力をつけてほしい。そういうのが日本人学校です。

ところが皆さんは違います。相手にするのは日本人ではない。教科書もないようなところに行きますよね。全然違うんだ。よく協力隊を選んでくれました。50万円給料をもらえるところと3万円しかもらえないところ。でも3万円を選んでいるあなた達がやっぱり偉いんです。

ただね、日本人学校は組織ができています。私も必ず参加するようにしていますが、兵庫県も帰国報告会や派遣の壮行会や前は月1回の研修会をやっていましたよ。行く人がね、こんないろんなことを学んだらいいよ、と今日のようなものを兵庫県でやっていたんです。毎月毎月やっていたことがあるんです。全国組織もできています。なんで、日本人学校にあって、協力隊にはないのかなと思いつつこの会に出ていたんですが、日本人学校の先生ってね、ぬるいんですよ。この間も一緒に飲んでいたら隊員のOBと日本人学校のドイツのデュッセルドルフから帰った先生がこんなことをいってました。「いや～ライン川のほとりで、緑の芝生の上で飲むドイツビールっておいしんですよ～」って。でこっちの方では、「メコン川のきたな～い水を見ながら、でもベトナムのビールも行ったもんですよ」なんていう話がかみ合わないんですよ、やっぱり。ねえ。でもまあ、熱いものを持ってるのは事実なんですけどね、でもね協力隊出身者は熱すぎる。

協力隊には横のつながりが今回ようにはなかった。だからなんとかしてあげなきゃいけないと思って、広島でそんなことがあったので、今と同じようなことが広島でやっていたんですね。だから、こう研究員なんとかしてよ、とか、JICA兵庫でなんとかしようよ、っていうことを10年ほど前からいってきました。私がね。でもなかなかしてくれないんですよ。今回みたいなのは、2002年以降でしょ報告会をやるようになったのは。個人情報があるからできないよーなんていうんですよ。仕方ない、自分でやるかって思って、10年ほど前にやろうと思いました。兵庫県がやっている自主研究グループで5万円もらったので、5万円で、前はこんな本があったんですよ、協力隊員の冊子っていうのが。郵便、電話帳より分厚いやつが。帰国隊員の個人情報全部載っているような本があったんです。これを見て、これを1ページ目からずーっと見続けてですね、兵庫県の先生たちを見つけて、手紙をだしました。34人に。賛同者は8人。で、2007年の12月27日に、JICA兵庫で、第1回をやりました。参加者は私を含め6人です。1人はJICAの職員。

先生達もね、帰ったら県の組織作ってください。兵庫や大阪や京都はできていますが、関東もできていますが、できていないところがいっぱいある。作る方法は、まず自分がやろうと思う。で、同期や近所で先生をしてる人を3人呼ぶ。そして、県庁があるところに行って、JICAの職員を1人連れてきてください。そうでないと場所が借りられないから。学校では続かないんですよ。港中学校でやってもいいけど、港中学校に僕が100年いるわけじゃないから。JICAの施設でやるんです。集める。それで第1回をやるんです。次は5人になりますから、必ず。で3回やって10人になったら、僕が動き出します。10人になったら動き出す。まあいろんなことをやってきました。13回やりましたからね。

例えば、私が小学校でやってたことですが、隊員1人1人に、25人の私のクラスの子ども達をあてて、メールで交流する。するとね、何が起きるかっていうと、一人が一人ずつ途上国に友達ができると、子ども達は途上国に何かしようといひだします。何かしようといひた時に、すぐ出てくるのは募金なんですよ。募金しよう。ところがね。募金しようといひたそのあとに子どもたちは、お金は失礼だろうといひだします。お金送っていいのって、ほんとに大丈夫って。次に何が出てくるかっていうと、じゃあノートや鉛筆を送ろうよ。引き出し開いたらあるじゃんっていつたら、そしたら子ども達は何をいうかっていうとですね、それっていらぬものだよ。と。いらぬものを、つまり自分にとってゴミを送るのって失礼だよ。これぐらい子どもが育ちますよ。育ちます。そうなるくと何ができるかっていうと真剣に考え出します。それでこんな実践をしてください。帰ってきてから。

修学旅行で平和公園で *Are you free now?*なんていひて、平和公園にいる外国人に声をかける。おいおいどうだった、どこかの外国人と話しができたか。先生、豚汁の国と話ししました。豚汁？ブラジルでした。楽しいですよ。こんなやりながらやっていると楽しい。平和公園の写真を撮ってこい、みたいなんてやると、セントラルパークみたいに感じますよ。

さっきいつたスカイプだったらね、いろんなことができます。スカイプがなかつたので、ヤフーメッセージャーでやりましたが、音声はさっぱり通じませんでした。言葉は通じなくても心は通じる。村岡でしたから、兵庫県でも雪があつて、その時2mくらい雪が積もつていたんです。パソコン教室からすぐ外に出れたので、よしみんな雪の中につっこめ！っていつて、クラスの子ども達に雪の上におわーって飛び込ませたんです。そしたら、ホンデュラスの小学生は何の事かわからなかつた。あたりまえですよ。隊員がやけに喜んだ。一緒にいたホンデュラス隊員はすごい喜んだんです。うわっ雪だ！って。でも何の交流にもならなかつた。でもね子ども達はいつてました。どんな国にもカメラを向けると目の前に来てピースする奴がいるんだなって。それだけは、ああ、おんなじなんだって。このねえ異質なものをおんのは大事だけど、もっと大事なのはおんなじなんだって伝える瞬間。とっても大事ですよ。それは必ずおんないでください。

もう一つ、兵庫県はクリスマスカードプロジェクトってやっていますよ。みなさんね、任国に行くとか兵庫県の隊員の人にはクリスマスカードが届きますよ。必ず。そのクリスマスカードには小学生や中学生のメッセージが入っているんです。がんばってください。私達の町は松坂牛で有名です。向こうでは食べられますか。食べられるわけないだろうって感じですが、OB会はお金を持っていますから、派遣の先生達にカードを送るくらいの切手代は持ってるんですよ。ところが学校にはお金がないでしょう。学校には。だからそのOB会に火をつけて、そんなことをしましょうって言って、そこに子ども達のメッセージカードを入れさせるんです。ただです。兵庫県から115人、途上国にいます。その115人に子ども達のメッセージカードが来るんです。みんなにです。もらうとね、涙を流して隊員たちは喜ぶんですよ。メールやインターネットをしてもほんものの手紙が持つ力はすごいんです。だから、隊員は返事を書いてくれるんです。書いてきます。半分くらいは返ってくるかな。途上国の郵便事情があるから届かないこともあるし、送っても返ってこないこともあるんだよって子ども達に言います。返ってくると、30人のクラスで、はい、ホンジュラスから返ってきました、ベナンから返ってきました、フィリピンから返ってきました。それはねえみんなもうすごい教材です。小学校の社会科なんて五カ国しか勉強しませんからね。だけど、一瞬のうちに途上国がそのクラスに入り込むんです。ぼんって。匂いを嗅ぎますよ。切手なんてみるだけでもすばらしい。こんなことを帰ってからやったらいいと思う。で、OB会に要請をしてください。なまけん。って言って。兵庫のようにやれって言って。これ簡単なことですからほんとに。

OB教員研究会をやったことによって、メンバーは100名を超えました。年3回定期的にやっています。春夏冬の休業中に23年の3月まで決めました。あ、24年か。24年の3月まで日にちは決まっています。JICA兵庫でします。仕分けでつぶれんことを祈っています。よろしくお願いしますね。JICA兵庫だけは守ってください。夏は関西合同でやろうと思っています。やったんですけどね、まあいいや。研究内容がね、研究会メンバーではとまっているんだけど、会費は集めていません。集めるだけで会計報告しなきゃいけないので、我々には似合わない。来たい時に来る。自由に参加できる。これがいいんです。予算がない。それはしぼりがないうことです。ぴったりでしょう。

研究会があると私は協力隊に行ったんだ、途上国に行ったんだっていうのをいえるんです。その会ではね。年に3回。同じ立場を持つ同士で自らの活動を振り返り、その活動はいいとか悪いとか、どう活かすかの道筋を発見する場がね。一人で悶々としていてもだめなんだ。やっぱり一緒に語れる仲間が、目を見て話せる仲間を作るべきです。それで元気になれるんです。日頃思いつきりいえないこともここでいえる。学校現場ではいえませんよ。ねえ。僕がホンジュラスの話をするるとみんなひきます。ホンジュラス。いやあ水がなくてねえ…って。やあでも星空は綺麗だったんだ。なんて。でもね、外国で好きな事やってきた人でしょうあんたはって。実際そうですねみなさんは。手をあげていったんだから、行きたくて行ってるんですよ。いわれるとその通りです。だからこそ、仲間が大事。

で、今後の展望としてはもっともっとメンバーを増やしたいなと思っています。共同でやろう、全国的なものも時には必要なのかな、全国ネットワークにするのが必要な、とも思うんですが。これはね、夏にやった時の会場図ですよ。まあこんな感じです。こんな感じでやったんです。前見てね。兵庫と京都と大阪の先生にすっごい自信を重くしてもらえました。だけど、昨日の実習もそうだけど、このおっきい会場でやると意見がいえないでしょ。質問があっても手をあげにくいじゃないですか。やっぱりねえ大きくすると自分の思いが出せないんですよ。やはりこじんまりときちっとやる中で、元気になれる空気を作らなきゃいけないなあとと思っています。これも必要、だけど、小さな場面も必要だと思っています。さあこれからが伝えねばならないことです。

日本人学校ではなく協力隊の2年間で身につけたもの。これはねえずーっと僕思っていました。何を身につけたのかなと思っています。これはねえ、教えてあげないとわからないだろうなと思っています。自分だけが身につけたと思っていますから。で、それを語れる場がなかったから。で、そして気付くのに時間がかかるんです。私は10年以上かかりました。これが僕が協力隊から得た事なんだって気付いたのがね。それは、言葉だけでは絶対ありません。スペイン語がしゃべれるようになった事だけでは絶対ない。確かにスペイン語はしゃべれるようになって帰ってきました。

まずね、第一にみなさんが二年後身につけて帰ってくる事の一番はこれです。困難な環境の中で自分で課題を見つけて、周りの人の協力を得ながら課題解決に向けて努力することです。まったく自分しかいないところに行きますね。言葉も通じない。協力隊活動なんてね、こうしなさい、ああしなさいなんてJICAの事務所はいいませんよ。自分で要請がありますが、自分でこの国のこの教室の、この学校の課題はなんなのか、じゃあその中で自分ができることはなんなのか。自分で見つけるしかないんです。見つけても、自分ひとりじゃできませんから、カウンターパートなり校長なり周りの人の協力を得ないとできないでしょう。昨日、聞いた話はみんなそうですよ。そして、何らかの形で成果を持って帰ってくるんです。

でもね、振り返って考えてみたら、実は今の学校だっておんなじでしょ。自分のクラス。自分の教科で授業をしている。でもここからこんな子がいる。わからない子がいる。こんな壁を持っている子がいる。でも一人じゃできないから、みんなでやろうよ。私はこんな風にしたらいいと思うっていう提案をする。これはね、明日からやれることです。学校に帰って。それがもっと厳しい所で自分はやってきたぞっていう自信を持って帰れるんです。そのことをね、帰ってくる管理職は知っとかなきゃいけないと思います。うちの学校に来たら、「あんたは途上国でこんな厳しいところでやってきたんだろ。うちの学校で課題を見つけて先生らに協力してもらって、解決しろよ」って言ってやる。そんな管理職をたくさん作らなきゃいけないと思っています。

そして、日本人が当たり前だと思っているけど、世界で通用するのかな、とか自分だけの常識なのかな、と思っている事。例えば、約束を守るとか。ね。誠実に物事に当たると

か。ね。こんなことは日本では当たり前だけど、これは世界のどこにいても当たり前のことなんだということです。日本の常識は世界の常識だって気付くことたくさんありますよ。日本人が持っている大事なことは世界でも大事なんだっていうことを教えてもらえるんです。外国に行くと。それを堂々と日本に帰ってきてから子どもに伝える。

じゃあ丸山は何をしてるの。こんなことをOB教員研究会で披露しましたよ。そうしたら、OB教員研究会でこうなりました。そうだ、胸を張って子ども達に大きな声でさわやかに挨拶しよう。そうになりました。ね。挨拶をきちんとできる、これは世界どこに行っても大事なことだぞ。と。こういうのを研究会で確認できるんですよ。確認できる。愛想笑いは世界では通用しないことも確認できますけどね。はい。そして、マイノリティーのことです。私達は途上国に行くと支援される側になります。マイノリティーになった時に何が大切か。やっぱり仲間を作らなきゃいけない。理解者を作らなきゃいけない。クラスにも教室にも学校にもいるでしょう。それが、多分先生方は帰ったら外国に親しい友人を持つ。ほんとに少数派の人の友人を持つと思います。でも実はそれだけじゃない。今の現場には、障害のある人、性的な嗜好で違う人。今、性同一障害で悩んでいる子ども達いますよね。そういうマイノリティーの側に立てる人間になれるんです。そういう認識をもって、帰ってきてください。

そして何よりも世界に広がるネットワークです。これは活かさなきゃいけない。みなさんは協力隊に行く事だけを今は目的にしていたかもしれない。協力隊に行きたいっていうのは、多分途上国の厳しい現実の中で自分がどこまでできるか試したい。だけど、帰国後の方がずっと長いんです。ずっと長い。60歳まであと何年あるんですか皆さん。出発前から帰国してから教員生活にこの2年間をいかに活かすかってことを肝に銘じて出ていってください。これが私達の仕事です。そのために昨日のような先輩の例をいっぱい示しておいてもらう。ああ、帰ったらあんなこともできるんだ、こんなこともできるんだ。だからこんなことをしよう、それは今ずっと紹介がありました。この2年間を教員とその人生の財産にする、それは、任せないで、組織としてこんな風にやっぺいこう、青年海外協力隊っていうのは、任国での技術支援が主目的ですが、体験してきてくださいよ。体験隊でいいんだって思っています。教員は特にね。はい。

これで終わりにしますが、協力隊出身を隠す先生がいます。逆に浮いてしまっている先生がいます。一匹狼です。組織の一員になることが苦手、気持ちが熱すぎる。だから今日は先生方に水をぶっかけに来ました。冷静になれ。協力隊経験を元に意気揚々として帰ってくる教員。でも現実には厳しいです。こんなはずじゃなかったっていう風に必ず思います。間違いなく思う。1年目2年目はとっても大変です。向こうに行ったカルチャーショックよりも帰ってきた逆カルチャー。特に学校ががらっと変わっていて、逆カルチャーショックに愕然としますよ、間違いなく。そして、2年はおとなしくしてなさい。4年後からです。仕事ができるのは。帰国後の先生方の価値は、言葉ができますよー、とか任国の活動を語



ることじゃない。ニューカマーの指導や異文化理解の指導ができる先生っていうんじゃないんです。そうじゃなくて、さっきいったようなことができる人なんです。

子ども達っていうのはね、先生の事が大好きでしょ。多分先生方が行く時には泣く子もいるでしょう。大好きな先生のことは知りたいんです。ちょっとでも知りたいの。それはね、先生たちががんがんしゃべったり、伝えなくても必ず伝わるんです。おでんに大根があるでしょう。おでんの大根がずーっと置いておくとしみるように、どんどんどんどんじわじわじわじわしみていくんです。これも我々の研究会でずいぶん話をしました。これを大事にしてください。

そして、やっぱりね、自信を持って故郷を語れるような、誇りを持てるような子ども達を育ててください。来年度から新学習指導要領が変わります。帰った時には学校がらっと変わっていますよ。まあ、変わっている。でもそんな中でみなさんの前途有望な皆さんを待っていますから。両手を広げて待っていますから。元気に帰ってきてください。終わります。

派遣は2年、教師は一生。帰国後いかに生きるか！？

～4年後を見据えて～

兵庫OV教員研究会から

兵庫県豊岡市立港中学校 校長 丸山一則  
(63/3 ホンデュラス 技術科教師)

## 協力隊に行くということ

### ロンドンの新聞広告

求む男子。  
至難の旅。  
僅かな報酬。  
極寒。  
暗黒の長い日々。  
絶えざる危険。  
生還の保障なし。



成功の暁には名誉と賞賛を得る。

1914年、南極大陸横断に向け

サー・アーネスト・シャクルトン 志願者 5000人以上

## が、しかし、 帰国後に待っていること

協力隊出身であることを隠す教師  
// 忘れたい教師

協力隊を前面に出しすぎて浮いてしまっている教師

もったいない！  
2年間の経験は、ほかでは得難いかけがえのないもの。

一匹狼的。  
組織の一員となることをいやがる傾向。

➡ 学校は組織体、協力隊出身者の組織が必要

## 「兵庫OV教員研究会」とは ①

### 目的

途上国での活動経験を、教育現場にいかす。

- ・ 青年海外協力隊
- ・ 日系社会青年ボランティア
- ・ シニア(海外・日系)ボランティア
- ・ 専門家(短期・長期)
- ・ その他



1年間に派遣される教師は100人程度

## 「兵庫OV教員研究会」とは ②

### 活動内容

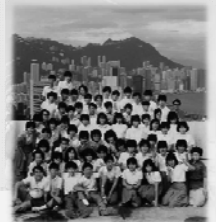
- ・ 現職OV教師のネットワークづくり
- ・ 互いの教育実践を交流と共有
- ・ 派遣中の現職参加教師の支援
- ・ 教員を目指す帰国隊員等の支援
- ・ 隊員等を目指す現職教員の支援
- ・ その他...



## 「兵庫OV教員研究会」発足までの経緯 ①

日本人学校の先生方の集まり  
兵海研(兵庫県海外子女教育研究会)からの学び

- ・ 帰国報告会、派遣社行会
- ・ 月一回の派遣研修会
- ・ 海外派遣中の情報提供
- ・ 家族を交えての交流
- ・ 他団体も巻き込んだ研修体制
- ・ 各地区組織と全県レベルとの関連
- ・ 全国組織(全海研)との強いつながり



➡ しかし  
年間1200人☆ なんかぬるい、日本人学校の先生  
年間100人☆ 熱すぎる、協力隊出身者

## 「兵庫OV教員研究会」発足までの経緯 ②

### 協力隊に横のつながりのないことのジレンマ

- ・ 兵庫県但馬地域には二人だけ(日本人学校21人)
- ・ 平成17年2月広島にて  
海外派遣事前研修(青年海外協力隊)に参加
- ・ 兵庫県では行われていなかった。
- ・ 県教委、JICA兵庫ともに働きかけてみた。  
→ 先に進まない
- ・ 個人情報保護の高い壁

→ 自分でやるしかない!

## 「兵庫OV教員研究会」発足までの経緯 ③

### 県教委「自主研究グループ」の活用

- ・ 1グループ 二人の賛同者 5万円の研究費
- ・ 帰国隊員住所録(H12年度版)をもとに、兵庫県内のOV教員34名(小・中)に手紙を出す

→ 賛同者は8人

→ 第1回兵庫OV教員研究会へ  
2007年12月27日  
JICA兵庫にて



## これまでの研究内容

- 1 アフリカ発・保護者とともに考える国際理解教育  
～派遣教員発行「ガーナ便り」を通じて～  
(ガーナ理科教師、専門家 三田市小学校教諭)
- 2 外国籍児童生徒の課題と支援の現状  
(ニカラグアSE 兵庫教育大学院生)
- 3 小学校英語の課題と展望  
(ガーナ短期専門家 姫路市小学校教諭)
- 4 2度のブラジルから学んだ「日本人の本質」  
(日系シニア 加西市中学校教頭)
- 5 ひとりがひとり世界の友だち・ホンデュラステレビ会議  
(ホンデュラス技術科教師 香美町小学校教師)



等

## 5 ひとりがひとり世界の友だち・ホンデュラステレビ会議

(ホンデュラス技術科教師 香美町小学校教師)

- ・ 学校に来ると、毎朝メールチェックをする小学生  
→ 「〇〇ちゃん、〇〇国からメール来たよ！」
- ・ 25人の6年生、ひとりひとりが隊員とメール交流、  
ここから、現地の子どもたちと手紙の交流へ。  
→ 途上国への見方の変化  
汚い、貧しい → 家族の仲がいい  
→ 本当の幸せ
- ・ 修学旅行で、国際交流  
→ 広島平和公園で「あーゆーふりーなう？」
- ・ ホンデュラスとテレビ会議  
→ 音声はさっぱり通じなかった。  
→ 言葉は通じなくても、心は通じ合える。
- ・ グリーティングカードプロジェクト  
→ 協力隊OB会とのコラボ  
→ 予算ゼロで世界と直接つながる  
おもしろさ



## 「兵庫OV教員研究会」成果と課題

(成果)

- ・ 現在、構成メンバーは100名以上
  - ☆ 兵庫県在住者以外に、大阪府、京都府、広島県、東京からも賛同者が集まってきた。また、現隊員も11名。
  - ☆ 年3回の研究会を定期的実施。  
→ 春、夏、冬の休業中 → 1年前には、期日を決定
  - ☆ 13回の研究会で、実践報告が35本以上
  - ☆ 夏には、関西合同OV研究会を実施

(課題)

- ★ 研究内容が研究会メンバーのみで止まっている。
- ★ 会費を集めていない。→ メンバーとしての意識が低い  
→ 自由に気楽に参加できる
- ★ 予算がない → 縛りがない
- ★ 組織化されていない

## 存在意義と今後の展望

### 研究会の存在意義

- ☆ 自らの存在意義を確認する場  
→ 同じ立場を持つもの同士で、  
自らの活動をふりかえり、  
評価され、どう活かすかの道筋を発見する場
- ☆ 元気になれる場  
→ 思いっきり話し、日頃出せない思いを吐露できる
- ★ 学校現場では、なかなか話せない。  
→ 外国で好きなことをやってきた人？

### 今後の展望

- 夏の研究会では、大阪・京都とともに共同開催  
→ 関西から全国ネットワークへ  
→ 大きくすることへの弊害も



### 伝えねばならぬこと ①

- ☆ 日本人学校ではなく、協力隊の2年間で身につけたものを教え、活用させる。
  - 教えてあげないとわからない
  - 気づくのに時間がかかる → **言語だけではない**
- ① 困難な環境の中で、自ら課題を見つけ、周りの協力を得ながら、課題解決に努力したこと。
- ② 「約束を守る」「誠実に物事に当たる」といった、日本で当たり前のことは、世界のどこに行っても大切なこと。
- ③ マイノリティ（少数派）となったとき、支援される側となったとき、何が大切であるかわかる。
  - 多文化の意味（外国に親しい友人を持つ？）
  - 障害のある人、性的志向、性同一性障害、等々
- ④ 世界に広がる友達ネットワークを持つ。

### 伝えねばならぬこと ②

- ☆ **協力隊に行くことだけを目的とさせない**
  - 「協力隊に行きたい」
  - 途上国の厳しい現実の中で自分がどれだけチャレンジできるか試したい。しかし
  - 帰国後の方がずっと長い（60歳まで、後何年？）
- 出発前から、帰国してからの教員生活に、この2年間でいかに活かすかが、大きな目的であることを肝に銘じさせて送り出す。
  - 帰国後の実践例を出発前にたくさん示しておく。
- この2年間で、教員としての人生の大きな財産とさせる。
  - 個人任せにしない。
  - 支援・協力し、指示も出せる組織が必要。
- 青年海外協力隊→任国での技術支援を主目的**  
**青年海外体験隊→帰国後、その体験を現職で活かすのを主目的**

### おわりに

- ★ 協力隊出身を隠す教師
- ★ 前面に出しすぎて、浮いてしまっている教師 **水をぶっかけに**
  - 一匹狼
  - 組織の一員になることが苦手
  - 気持ちが熟すぎる
- ★ 途上国での経験をもとに、学校現場に意気揚々と帰国するOV教員
  - 学校の現実が厳しい → こんなはずではなかった
  - 戻るのに2年はかかる → つまり4年後を見据えて。
- ★ システムが必要  
「協力隊経験は教師としての力量を育てるよき研修期間である」  
教育委員会、管理職が確実に認識。
  - 彼らの生きる環境作りを → どこが一番輝けるか？
- ★ 来年から新学習指導要領が本格実施。2年後には、日本の教育も大きく変化。 → 大きくなって、現場で活躍している姿を楽しみに！

閉 会 挨 拶

## 閉会挨拶

磯田正美

(筑波大学 教育開発国際協力研究センター 准教授)

2日間の研修はいかがでしたか。そして、みなさん、次にお会いするのはいつかご存じですか。次に一つお会いするのは、メーリングリスト上なんです。ここでは私どもが今後、みなさんとどう関わっていくかということも含めてお話しします。

筑波大学教育開発国際協力研究センターは、過去8年間、派遣前研修を実施しています。最初の3年間は、各協力隊の研修所に伺って、2コマの研修をさせていただきました。その時代を経て、このように組織的に行えるようになりました。その経験からお話させていただきます。本会は、筑波大学が実施母体で、文部科学省の下、JICAの皆さんの協力を得て企画をしています。今回の研修会は今までと大きく違いました。今回は、東京都市大学の佐藤先生、兵庫の丸山先生が外の立場から非常に明確なメッセージをいただくことができました。佐藤先生のお話から分かった事は、文部科学省で私どもがこれまでしてきた事業を評価して下さったことです。最初の3年間、文部科学省の拠点システム事業では、みなさんの輝くモデル事例をいかに作っていくかということが私どもの業務の中心でした。それが、その後、いかに発展してきたかを佐藤先生がよく調べてまとめてくださいました。実際、佐藤先生の報告書にある皆さんは、かつて私たちが一緒に仕事をさせていただいた皆さんであり、そうであればこそ、私どもの活動記録をたどって、みなさんに佐藤先生が行きつけたわけです。帰国報告会や派遣前研修を組織的に行うまでには、乗り越えるべき壁がいくつもあり、その時に関わった先生方のその後の活躍を佐藤先生がよくまとめて下さいました。その後の活躍と申しますのも、その後、役割分担の切り分けがあり、私どもの分担は主として派遣前研修と帰国報告会の実施と言うことになり、派遣中は、それぞれ委託を受けた大学が、JOCVの皆さんと共同するという事業枠組みになったこと、私どもが派遣中に個別具体的に実施してきたことはしないようにという仕組みになりました。例えば、佐藤先生が、このようにとりまとめをして下さったのも評価は実施者には容易にできないことによるという判断があるものと思っています。そのような経過から、佐藤先生から皆様のその後の活躍を伺うことができ、非常に嬉しく思いました。

話はかわりますが、皆様のためにご尽力下さっている文部科学省、協力隊事務局、そして、文部科学省の下でこの事業に携わっている関係者、実は、数年で変わります。私どものセンター内でも、担当者が変わります。それは先生方が学校を変わられるのと同じことなのですが、結果として、最初から今日まで皆さんと具体的なコンタクトがあり、メーリングリストなどを通して皆様から名前を記憶していただいているのは、今日なお、この仕事を継続している、定点観測をしている私一人となりました。私は、この先まだ随分あり

ます。ですので、皆様にこの場で私のことを記憶に留めていただくことは、この先、皆様にとっても、私にとっても非常に重要です。派遣中も、メーリングリストを通して、皆さんの活躍を是非共有できれば幸いです。

さて、私どもが 8 年前から取り組んでいますことは、一つ一つはみなさんの先輩が、今の丸山先生の熱いお言葉の中にあらわれていたようにいろんな活躍をしながら、なさってきたことを形に残す、**visible** にするにはどうしていったらいいかというようなことでした。当初は、教育委員会、そして皆様の学校でも、皆様の活動は、ほとんど知られていなかったわけです。便利なメディアもありませんでした。それをどう視覚化するか、日本にいる先生方や子どもにも意味のある活動をどう実現するか、など、私どもにとっても未知の段階から手探りではじめた時期がありました。そういったモデル作りの段階から携わってきて今回の会ではっきりしたことは、この会も自立発展の段階に入ったということです。

自立発展は日本の教育や JICA のポリシーでもあるわけですが、その自立発展段階に入ってきたことを感じました。丸山先生のお話を伺いながら、感慨深くですね。もちろん丸山先生は私どものこれに携わる以前からずっとご苦勞をしながらそのことを訴えてきてらした方ですけれども。

私どもが担い手として文部科学省の下で協力隊事務局と協議し、その都度、時間をかけて計画して、先ほどの丸山先生のお話にも類似した活動、そういった形のことも含めて広くあちらこちらにわかっていたできるようにしながら実施してきました。今、この場にいらっしゃる関係者はもちろんなのですが、この場にはいらっしゃらない当時の文部科学省の国際協力室、協力隊事務局の多くの関係者と個別具体的に苦心したことが、今形になって現れています。何年も前に一緒に仕事をして下さった皆様がここにおいでになって新しく派遣される皆様に将来を語る、その皆様の姿を次は別の方が語る、その木霊に、まさに自立発展です。そのスタイルが今回、随所にありました。そのような感慨めいた言葉は、今この場にいらっしゃる派遣される皆様には直接関係ないことかもしれません。それでも、これまでに尽力下さった国際協力室や青年海外協力隊事務局の関係者に改めて御礼申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。

さて、先程、丸山先生のお話の中でネットワークを作っていく組織の大切さというお話をしていただきました。私ども、閉会後にメーリングリストの手続きについて話をさせていただきますが、私どもではメーリングリストを作りますので、自由に活用していただければありがたいなと思っています。

実際、丸山先生の話の中に小さな輪や大きな輪というのがありました。で、それは、確実に毎年年に 1 回私たちが行うことで広がっています。先程次にお会いするのはいつですか、とお尋ねしました。メーリングリスト上はもちろんです、必ず、皆さんが帰国した 3 年後にまたお会いしましょうということも含んでいます。次は、皆様が話し手として、皆様のチャレンジ、経験を、次の世代の先生方に伝えていく会が、できればいいなと思っていますし、その組織化ということも実現できれば大変良いと思っています。

皆様は、今回、何を学ばれましたか。先ほど国際協力政策室の浅井室長からユネスコ・スクール、ネットワークの拡大が話題になりました。ユネスコ・スクール、持続発展教育は、日本が国際社会でリードしている主題であり、是非、皆さんと共同したいというお話でした。室長のお話にも、丸山先生のお話にも、課題を見つけて、主体的に判断する能力のある子どもを育てる、問題解決能力のある子どもを育てる、というお話もありました。よろしいですか。浅井室長が、自分で判断する能力のある問題解決能力のある子どもを育てるというお話をしてくださいました。これは皆様ご存じの学習指導要領の基本理念。先生たちが普段のご指導の中でされていること。今日浅井室長、丸山先生のお話があったことはこれからみなさん自身が体験されることということでお話してくださいました。その言葉を胸に、皆様が取り組まれようとしているチャレンジを楽しみにして、今日の会を終わりにしたいと思います。

いってらっしゃい。元気で帰ってきてください。



平成 22 年度青年海外協力隊等派遣現職教員  
特別研修・帰国報告会  
報告書

発行：平成 23 年 3 月

発行者：筑波大学教育開発国際協力研究センター（CRICED）

〒305-8572 茨城県つくば市天王台 1-1-1

電話 029-853-7287 FAX 029-853-7288

E-mail [jocv@criced.tsukuba.ac.jp](mailto:jocv@criced.tsukuba.ac.jp)

<http://www.criced.tsukuba.ac.jp>

編集：佐藤真理子、一瀬小夜(CRICED)

印刷：前田印刷株式会社 筑波支店

